

板付10

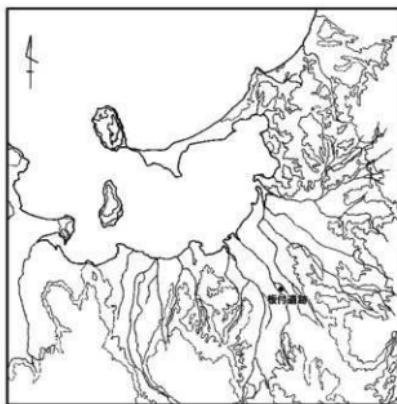
環境整備遺構確認調査－環濠の調査－

2010

福岡市教育委員会

板付 10

環境整備遺構確認調査－環濠の調査－



調査番号 8866・8990
遺跡番号 ITZ-54・59

2010

福岡市教育委員会

序

アジアの拠点都市を目指して都市づくりを進んでいる福岡市には、日本における稻作農耕文化の発祥の地である板付遺跡や古代の迎賓館である鴻臚館などに代表されるように、海外との盛んな交流を示す遺跡や文化財に恵まれています。

板付遺跡は、大正6年、中山平次郎博士によってはじめて学会に紹介されました。昭和26年には日本考古学協会の手によって発掘調査が行われました。その後、明治大学・九州大学、福岡県教育委員会、福岡市教育委員会へ発掘調査が引き継かれ、教科書を塗り替えるような数々の発見が相次ぎました。中でも「繩文水田」の発掘は、これまでの学説の再検討を迫るばかりでなく、時代区分の問題にも変更を迫るものでした。

昭和51年には、国史跡に指定され、昭和63年には史跡の環境整備に先立って考古学や造園学などの専門家で構成した「板付遺跡調査整備委員会」（委員長 横山浩一九州大学名誉教授）を設置し、遺構確認調査や基本計画の検討を重ねました。

本書は、環境整備の基本的な資料を揃えて遺構復元を正確に行うために実施した史跡地内の確認調査、特に環濠についての報告書です。

本書が、文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また弥生時代研究の資料として活用していただければ幸いです。

最後となりましたが、昭和26年の発掘調査以来、発掘作業や用地買収、そして整備工事にご協力いただいた地元の皆様方には、心から謝意を表します。

平成22年3月23日

福岡市教育委員会
教育長 山田裕嗣

本文目次

第1章 序説	1
1. はじめに	1
2. 調査体制	2
3. 遺跡の立地と歴史的環境	2
(1) 遺跡の立地	2
(2) 歴史的環境	6
第2章 調査の概要	9
1. 環濠の調査	9
2. 環濠以外の遺構の調査	11
第3章 環濠第1区の調査	13
1. 調査区の設定	13
2. 遺構	14
(1) 環濠	14
(2) 北壁の土層	15
(3) 南壁の土層	16
3. 出土遺物	17
(1) 井戸出土土器	17
(2) 刻目突帯文土器出土状況	19
(3) 刻目突帯文土器	20
(4) 浅鉢・高杯・鉢形土器出土状況	21
(5) 浅鉢・高杯・鉢形土器	22
(6) 壺形土器出土状況	25
(7) 壺形土器	26
(8) 齢形土器出土状況	31
(9) 齢形土器	32
第4章 環濠第2区の調査	38
1. 遺構	38
(1) 環濠	38
(2) 北壁の土層	38
(3) 南壁の土層	40
(4) 明治大学第10区トレンチ南壁土層	41
2. 出土遺物	41
(1) 刻目突帯文土器出土状況	41
(2) 刻目突帯文土器	43
(3) 浅鉢・高杯・鉢形土器出土状況	52
(4) 浅鉢・高杯・鉢形土器	52

(5) 沈線文をもつ壺形土器出土状況	61
(6) 沈線文様をもつ壺形土器	62
(7) 壺形土器出土状況	69
(8) 壺形土器	70
(9) 齢形土器出土状況	100
(10) 齢形土器	102
(11) 明治大学第10区トレンチ出土土器	127
第5章 環濠第3区の調査	130
1. 遺構	130
(1) 環濠	130
(2) 東壁の土層	131
2. 出土遺物	132
(1) 遺物出土状況	132
(2) 出土遺物	132
第6章 弦状濠の調査	139
1. 遺構	139
(1) 弦状濠	139
(2) 南壁の土層	139
2. 出土遺物	141
(1) 刻目突帯文土器	141
(2) 第1層の土器	143
(3) 第2層の土器	143
(4) 第3層の土器	147
(5) 第4層の土器	149
(6) 第5層以下の土器	151
第7章 土製品、その他	154
1. 土製品	154
(1) 土器片利用の刃器	154
(2) 円盤形土製品	154
(3) 投弾	157
2. その他の遺物	162
第8章 板付遺跡をめぐる諸問題	165
1. 土器圧痕について	165
(1) 圧痕の諸例	165
(2) 若干の検討	170
2. 貝層について	171
3. 板付遺跡出土の焼成失敗品からみた弥生時代初頭の土器生産	175
第9章 まとめ	187

挿図目次

第1図 遺跡の位置	3
第2図 遺跡の地形	5
第3図 遺跡全体図	7
第4図 調査区全体図	10
第5図 環濠調査区の位置	14
第6図 環濠第1区土層断面実測図	15
第7図 環濠第1区・井戸出土土器	18
第8図 環濠第1区刻目突帯文土器出土状況	19
第9図 環濠第1区出土刻目突帯文土器実測図	20
第10図 環濠第1区浅鉢・高杯・鉢形土器出土状況	22
第11図 環濠第1区出土浅鉢・高杯・鉢形土器実測図	23
第12図 環濠第1区壺形土器出土状況	25
第13図 環濠第1区出土壺形土器実測図Ⅰ	27
第14図 環濠第1区出土壺形土器実測図Ⅱ	29
第15図 環濠第1区出土壺形土器実測図Ⅲ	30
第16図 環濠第1区甕形土器出土状況	31
第17図 環濠第1区出土甕形土器実測図Ⅰ	33
第18図 環濠第1区出土甕形土器実測図Ⅱ	35
第19図 環濠第2区土層断面実測図	39
第20図 環濠第2区刻目突帯文土器出土状況	42
第21図 環濠第2区出土刻目突帯文土器実測図Ⅰ	44
第22図 環濠第2区出土刻目突帯文土器実測図Ⅱ	46
第23図 環濠第2区出土刻目突帯文土器実測図Ⅲ	48
第24図 環濠第2区出土刻目突帯文土器実測図Ⅳ	49
第25図 環濠第2区浅鉢・高杯・鉢形土器出土状況	51
第26図 環濠第2区出土浅鉢・高杯・鉢形土器実測図Ⅰ	53
第27図 環濠第2区出土浅鉢・高杯・鉢形土器実測図Ⅱ	57
第28図 環濠第2区出土浅鉢・高杯・鉢形土器実測図Ⅲ	59
第29図 環濠第2区出土浅鉢・高杯・鉢形土器実測図Ⅳ	60
第30図 環濠第2区（沈線文様）壺形土器出土状況	61
第31図 環濠第2区出土（沈線文様）壺形土器実測図Ⅰ	63
第32図 環濠第2区出土（沈線文様）壺形土器実測図Ⅱ	64
第33図 環濠第2区出土（沈線文様）壺形土器実測図Ⅲ	68
第34図 環濠第2区壺形土器出土状況	70
第35図 環濠第2区出土壺形土器実測図Ⅰ	72
第36図 環濠第2区出土壺形土器実測図Ⅱ	74

第37図	環濠第2区出土壺形土器実測図Ⅲ	77
第38図	環濠第2区出土壺形土器実測図Ⅳ	79
第39図	環濠第2区出土壺形土器実測図Ⅴ	83
第40図	環濠第2区出土壺形土器実測図Ⅵ	86
第41図	環濠第2区出土壺形土器実測図Ⅶ	88
第42図	環濠第2区出土壺形土器実測図Ⅷ	90
第43図	環濠第2区出土壺形土器実測図Ⅸ	92
第44図	環濠第2区出土壺形土器実測図Ⅹ	96
第45図	環濠第2区出土壺形土器実測図Ⅺ	97
第46図	環濠第2区出土壺形土器実測図Ⅻ	99
第47図	環濠第2区甕形土器出土状況Ⅰ	100
第48図	環濠第2区甕形土器出土状況Ⅱ	101
第49図	環濠第2区出土甕形土器実測図Ⅰ	103
第50図	環濠第2区出土甕形土器実測図Ⅱ	105
第51図	環濠第2区出土甕形土器実測図Ⅲ	108
第52図	環濠第2区出土甕形土器実測図Ⅳ	111
第53図	環濠第2区出土甕形土器実測図Ⅴ	113
第54図	環濠第2区出土甕形土器実測図Ⅵ	116
第55図	環濠第2区出土甕形土器実測図Ⅶ	118
第56図	環濠第2区出土甕形土器実測図Ⅷ	121
第57図	環濠第2区出土甕形土器実測図Ⅸ	123
第58図	環濠第2区出土甕形土器実測図Ⅹ	124
第59図	環濠第2区出土甕形土器実測図Ⅺ	126
第60図	環濠第2区出土甕形土器実測図Ⅻ	127
第61図	明治大学第10区トレーナー出土土器実測図	128
第62図	環濠第3区の位置	130
第63図	環濠第3区の遺物出土状況と土層断面実測図	131
第64図	環濠第3区出土土器実測図Ⅰ	133
第65図	環濠第3区出土土器実測図Ⅱ	135
第66図	環濠第3区出土土器実測図Ⅲ	137
第67図	弦状濠調査区の位置	140
第68図	弦状濠土層断面実測図	141
第69図	弦状濠出土土器実測図Ⅰ	142
第70図	弦状濠出土土器実測図Ⅱ	144
第71図	弦状濠出土土器実測図Ⅲ	146
第72図	弦状濠出土土器実測図Ⅳ	148
第73図	弦状濠出土土器実測図Ⅴ	150
第74図	弦状濠出土土器実測図Ⅵ	152

第75図 弦状濠出土土器実測図VII	153
第76図 土製品実測図I	154
第77図 土製品実測図II	155
第78図 環濠第2区投弾出土状況	157
第79図 投弾実測図	158
第80図 その他の遺物実測図	163
第81図 圧痕土器実測図I	166
第82図 圧痕土器実測図II	167
第83図 圧痕土器実測図III	168
第84図 環濠第2区出土壺形土器と層位	188
第85図 環濠第2区出土壺形土器と層位	189

例言

- 1、本書は史跡・板付遺跡（福岡市博多区板付2・3丁目）の環境整備のための事前調査として、昭和63年度・平成元年度に実施した造構確認および一部の内容確認調査の内、環濠と弦状濠の土器・土製品についての報告書である。石器については次報告収録する予定である。
- 2、本書の執筆は山崎純男がおこなった。
- 3、愛媛大学田崎博之教授には土器生産について玉稿をいただき掲載することができた。
- 4、本書に使用した図の作成は山崎があたり、一部、所一男、松尾奈緒子、板倉佳代子氏の助力を得た。
- 5、本書の図の製図は山崎があたり、松尾の助力を得た。
- 6、本書の遺物実測図は、突帯文土器、文様を持つ壺形土器の拓影が三分の一、その他の土器は三分の一で示した。
- 7、本書に示した方位は全て磁北である。
- 8、本書の編集は山崎がこれにあたった。

遺跡調査番号	8866・8990	遺跡略号	ITZ-54・59
地番	博多区板付2丁目	分布地図番号	板付24
開発面積		調査対象面積	調査面積 9300 m ²
調査期間	1988.12.1~1989.3.31、1989.4.1~1989.10.31		

第1章 序説

1. はじめに

板付遺跡は福岡市博多区板付2丁目～5丁目にかけて存在する弥生時代の大規模な集落遺跡である。江戸時代の終わり頃の慶応三年一月五日、集落の中央部にある通津寺の境内から広形銅矛と見られる銅矛五口が出土したことか過去報に記されている。現物は現在行方不明である。また、大正5年（1916）には通津寺の南東に隣接した田端の地、ここに円墳状の高まりがあり、その上には板状の大石が立てられていたと言う。ここが土取りに会い、甕棺数基が出土し、そのうちの数基の甕棺から細形銅劍・銅矛各3口が出土し、翌年、九州大学医学部教授の中山平次郎氏が調査、学会に報告している。この時採集された綠青の付着した甕棺片は、前期末の金海式甕棺であることからこの墓地は前期に属することが明らかになった。円墳状の高まりは現在の知見からすると墳丘墓であった可能性が極めて高い。出土した銅劍・銅矛は現在東京国立博物館の所蔵となっている。このように、板付遺跡の重要性は古くから認識されていた。

板付遺跡の本格的な調査の始まりは昭和25年（1950）、中原志外顧氏が刻目突帶文土器と遠賀川式土器の共伴関係を確認したことか契機となった。昭和26年から開始された日本考古学協会・明治大学・九州大学を中心とした発掘調査は、縄文時代から弥生時代への移行過程を解明することを意図したものであった。調査の成果は意図した諸問題を解明するに充分なものであった。先ず、第1の成果は集落を大規模なV字濠で囲んだ、最古の環濠集落が明らかにされたことである。第2の成果は炭化米、石包丁等の大蔭系磨製石器によって稲作農耕の存在を証明したことである。日本考古学協会を中心とした調査以後、しばらくは発掘調査は無いが、昭和40年代後半から始まる開発ラッシュは板付遺跡の周辺地域にも迫ってきた。それらへの対応は福岡市教育委員会が主体となって進めてきた。福岡市教育委員会の調査は、環濠集落をのせる南北に細長い台地の西側の広大な沖積地に計画された県営、市営住宅である板付団地建設に伴う発掘調査をはじめとして、台地上の下水道建設に伴う調査や個人住宅の建設に伴う調査など、宅地造成に伴う緊急調査であった。しかしながら、その成果は極めて重要なものであった。台地の東側、西側の沖積地に水田遺構が存在することが明らかにされた。特に西側の沖積地では広大な面積が調査され、弥生時代の全期間にわたる水田遺構が確認され、木製農耕具をはじめとした多量の木製品が出土し、弥生時代の姿を如実に示すこととなった。また、遺跡の範囲はさらに拡大し、遺跡の価値はますます高まることとなつた。

昭和51年6月21日には、最古の農村として日本歴史の解明に欠くことのできない重要な遺跡として、環濠集落とその西側の水田を含む遺跡の中心地27796m²が国の史跡として指定されることとなつた。

昭和48年から始められた遺跡中心部の公有化は、長年にわたる交渉の結果、ようやく昭和61年度に終了した。しかし、公有化に伴う個人住宅の移転地が指定地周辺に求められたために、これに対応する調査は、遺跡の保存を意図しながらも周縁部の遺構を破壊すると言う矛盾も抱えることになつた。周縁部は遺跡の中心部に近いため重要な遺構が数多く確認された。環濠のすぐ南側に建設された県道からは貯蔵穴群が検出され、集落の一部を構成していることが判明した。また、この県道の台地西側の沖積地、G-7a・7b調査区からは板付I式土器段階の水田遺構が検出され、さらにその下部から刻目突帶文土器単純期の水田遺構が検出された。今まで70次におよぶ発掘調査が実施され、日本列島における弥生時代開始期の代表的な遺跡として周知されている。

昭和48年に始められた遺跡中心部の公有化は、長期にわたる移転交渉を経て、ようやく買収が終了したのは昭和61年度である。史跡指定地内の公有化終了後は地元や多くの市民から、早期の整備が強く

要望された。教育委員会文化課管理係では、要望に答えるべく整備案の策定に先立つて指定地内の遺構確認調査を実施する必要があることから、その実施を具体化するために予算化を急ぎ、昭和63年度から整備に先立つ指定地内の遺構確認調査が認められ、昭和63・64年の二ヶ年にわたって指定地内の調査を実施することとなった。調査は表土層を除去し、遺構を確認することを主体に、一部についてはその内容を確認すべく最低限の発掘調査を実施した。

2. 調査体制

文化課から遺構確認調査の依頼を受けた埋蔵文化財課では、増加の一途にある緊急調査で調査人員の確保に苦慮したもの、史跡整備の関連から関係の深い鴻臚館跡調査担当が、これにあたることになった。鴻臚館跡調査担当では、鴻臚館跡の調査終了後の12月から板付遺跡の指定地内の遺構確認調査に着手したが、翌年度には鴻臚館跡と板付遺跡の両遺跡を同時に調査することになり、調査員を二分してあたる事になった。ただし、6月以降は文化課が文化財整備課として組織変更になり、新たに史跡整備担当主査が新設された。これによって、板付遺跡の確認調査は同主査に引継ぎ、10月31日に板付遺跡の指定地内の調査を終了した。調査体制は以下のとくである。

調査地区	福岡市博多区板付二丁目（史跡指定地内）
調査期間	第54次調査 1988年12月1日～1989年3月31日 第59次調査 1989年4月1日～10月31日
調査主体	福岡市教育委員会文化部文化課（文化財整備課） 教育長 佐藤善郎（当時） 山田裕嗣（現） 教育次長 尾花剛（当時） 文化部長 川崎賛次（当時） 文化課長 於保清登（当時） 管理係長 岩下拓二（当時）
庶務・会計	管理係長 岩下拓二（当時） 主任 緒方裕之（当時）
調査担当	第54次調査 山崎純男（鴻臚館跡調査担当主査） 吉武 学（鴻臚館跡調査担当） 第59次調査 山崎純男・吉武 学・二宮忠司（史跡整備担当主査）・浜石哲也・菅波正人
調査補助員	川端正夫（現・甘木市教育委員会）白木英敏（現・宗像市教育委員会）
整理作業員	久賀登世子、藤アイ子、矢川みどり、大塚俊二郎、手嶋純子、宮本典子、伊藤晴美

3. 遺跡の立地と歴史的環境

（1）遺跡の立地

板付遺跡の位置

玄界灘に面した北部九州沿岸の中央部に位置する博多湾は波の荒い玄界灘にあっては志賀島と海の中道の砂嘴に抱かれ波静かな自然の良港である。この博多湾に流れ込む小河川は沖積作用によってかなりの広さの平野を形成している。このようにして形成された博多湾に面した平野は大きく福岡平野と呼ばれている。しかし、福岡平野はさらに低丘陵によって分断され、小さな平野に分かれている。東から見ていくと、多田堀川と須恵川によって形成された柏屋平野がある。柏屋平野の西側には三笠川と那珂川によって形成された福岡平野が存在する。福岡平野の西側には室見川によって形成された早良平野が存在し、さらにその西側には糸島平野が存在している。柏屋平野と福岡平野の境界をなすのは四王寺山から派生して博多湾



第1図 遺跡の位置

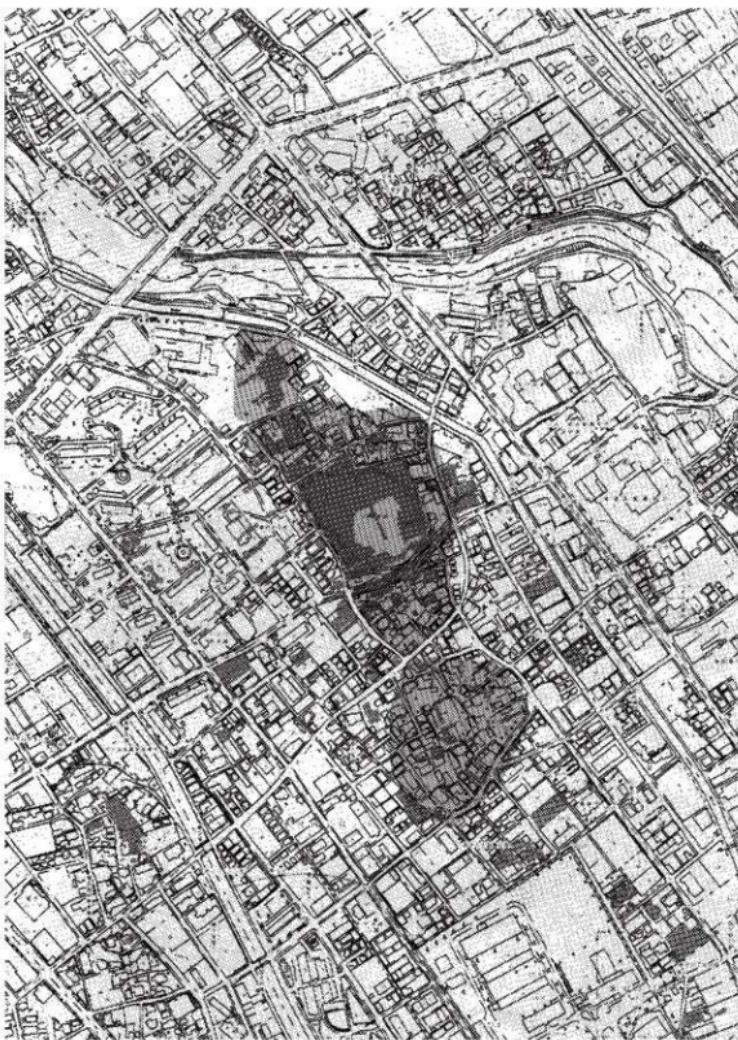
に向かって伸びる月隈丘陵である。福岡平野と早良平野の境界をなすのは両平野にまたがってそびえる油山から博多湾に向かって派生した低丘陵群である。早良平野と糸島平野を分断するのは、背振山系から分岐した飯盛山、長垂山等の山地である。これらの小平野は低丘陵や山地によって分断され、一つの独立したまとまりを示している。魏志倭人伝にいう国々がこれら小平野に相当することは注目すべきである。

これらの小平野の中で最も大きく、中心にある平野が厳密な意味の福岡平野である。平野の中央部には須玖岡本から延びる中位段丘が博多湾に向かって延びている。この段丘面には基部の須玖岡本遺跡をはじめ井戸、那珂、比恵遺跡など著名な弥生時代遺跡が立地している。段丘の東側に御笠川、西側に那珂川の二つの大きな河川が蛇行しながら北流して、その流域にやや広い沖積平野を形成している。この沖積地が福岡平野における主要な生産地となっている。平野の東側は前述したように四王寺山から派生した月隈丘陵に限られ、西は油山とそれから北に延びる支脈と低丘陵によって限られ、南は背振山系の山塊によって限られている。平野の南側の一部は背振山系と四王寺山によって狭まるが、限られることなく大宰府盆地を経て筑後平野へと通じている。

板付遺跡は福岡平野のやや東に偏った中央部に位置している。福岡国際空港の南西部、平野の東側を北流する御笠川左岸に位置する中位段丘Ⅱ面の独立台地を中心とし、その周囲の沖積地約80万m²に及んでいる。板付遺跡の北西には那珂環濠遺跡、春住遺跡、瑞穂遺跡等の弥生時代開始期の遺跡を含んだ比恵・那珂遺跡群、南西には奴国王の墓と目される須玖岡本遺跡を中心とする須玖遺跡群、南東の福岡国際空港内には板付遺跡同様に、刻目突帯文土器単純期から始まり、後期に葉環濠集落を形成する雀居遺跡、南東の月隈丘陵には金隈遺跡をはじめとして天神森遺跡、御陵前ノ塚遺跡、中・寺尾遺跡などの弥生時代の著名な埋葬遺跡が集中している。また、丘陵下の沖積地では最近、下月隈遺跡群の中に刻目突帯文土器期の遺跡が確認されている。以上からも板付遺跡が後に奴国と呼ばれた福岡平野の中心部に位置していることがわかる。早期・前期の遺跡分布からは板付遺跡が福岡平野における中心をなす拠点集落で、最古の農村遺跡であることかわかかる。

周辺の地形

板付遺跡周辺の地形についてみていく。福岡平野には周囲の山地を除けば、高位・中位・低位の段丘群と平野の主要な面を作る沖積面から成り立っている。高位段丘は遺跡の南西、春日丘陵一帯で、標高50~80mの起伏にとんだ平坦面を形成している。平坦面は基盤岩類の侵食された侵食平坦面の場合が多く、春日面と呼ばれている。この面はゆるく北へ傾斜している。中位段丘は平坦面の高さと堆積物の特徴から、Ⅰ面・Ⅱ面に細分される。中位段丘Ⅰ面は須玖面と呼ばれ、標高30~20mの平坦面を作り、砂礫層を主とした段丘堆積物より構成されている。河岸段丘の性格が強く、平坦面は北方下流側に緩傾斜で延びている。中位段丘Ⅱ面は、特殊な平坦面で福岡地方では、御笠川・那珂川の谷沿いに標高30~10mの面を形成して分布するのみで、柏屋平野の多く良川や早良平野の室見川等の河川沿いには分布していない。阿蘇火山のカルデラ形成期に噴出した火碎流（Aso-IV）によって形成された面である。この火碎流は大部分が白色粘土（八女粘土層）と黄褐色軽石質火山灰（鳥栖ローム層）として分布している。この面は板付遺跡の北側では沖積面下に没している。低位段丘は、那珂川右岸沿いの日佐一帯に模式的に発達しており、日佐面と命名されている。沖積面との比高差は1~3mである。主として砂礫層より構成された河岸段丘で、北に向かって緩傾斜で延びていて、末端では沖積面下に没している。沖積面は御笠川などの河川氾濫原堆積物と沖積世初めからの気候の温暖化に対応した海水準の上昇による海成層の堆積作用により礫・砂・粘土を堆積させて形成されたものである。御笠川流域には、板付遺跡付近まで段丘群が河川の両



第2図 遺跡の地形

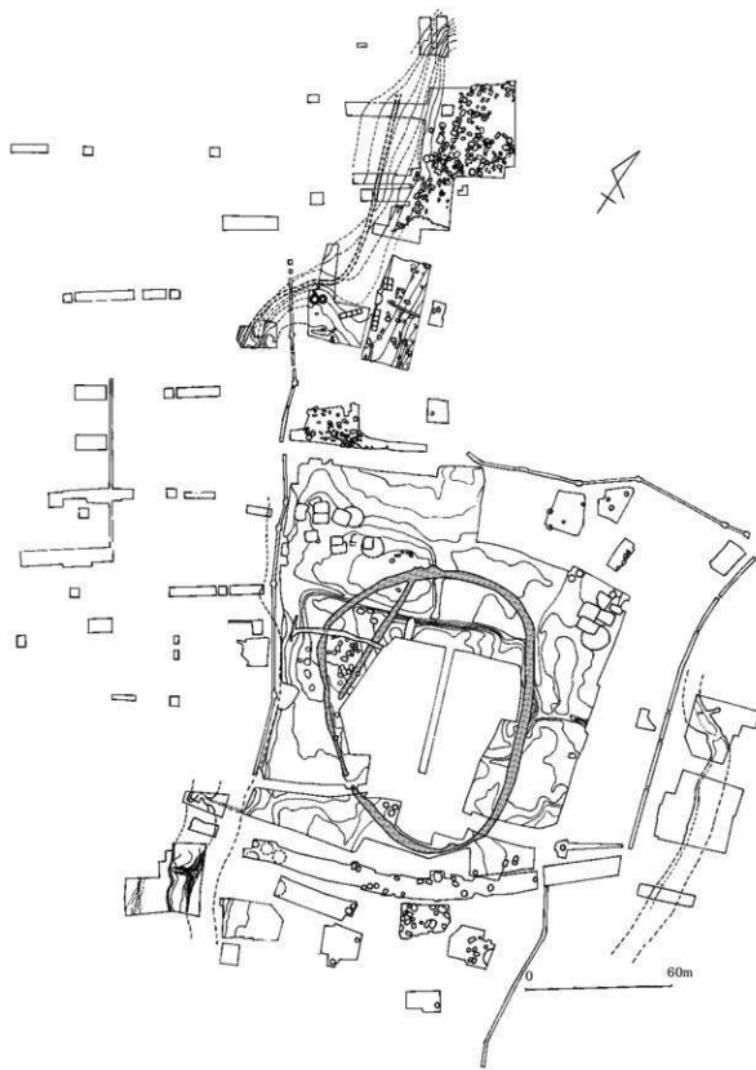
岸に分布しており、沖積面は段丘を切った低地部や河川沿いに段丘群と雜居している。沖積面の標高は7~9m原河床との比高1~1.5mを測る。

御笠川の左岸に位置する板付遺跡は、南北600m、東西150m、標高11~12mの細長い独立した低台地で、先に説明した中位段丘Ⅱ面にあたる。台地には頂部がカヶ所にあり、南側の頂部を中心とした部分を南台地、北側の頂部を中心とした部分を中央台地、現在、頂部は存在していないが、中央台地より北側を北台地として説明を加える。南台地と中央台地の境はくびれて鞍部となっている。台地上には集落と墓地が形成されている。台地を中心として、その東西の沖積地が生産地、すなわち、水田となっている。東側の沖積地は御笠川の氾濫によって、遺跡の大きな広がりはみられない。西側は、その西側に存在する諸岡の中位段丘Ⅱ面との間に幅400~600mの南北に延びる細長い沖積地が展開している。沖積地の中央部を諸岡川が蛇行しながら北流し、板付遺跡の主要な生産地となっている。

(2) 歴史的環境

福岡平野の歴史は後期旧石器時代から始まる。旧石器時代の遺跡は板付遺跡も含めた比恵・那珂の中位段丘Ⅱ面に散在している。特に板付遺跡の南西約0.7kmに位置する諸岡の丘陵上には旧石器時代の有望な包含層が数ヶ所にわかつて確認され、発掘調査が実施されている。遺跡はナイフ形石器、細石器を主体とするもので福岡市を代表する旧石器時代の遺跡である。板付遺跡の中では明瞭な包含層は確認されていないが、これまで板付遺跡の各調査区で、弥生時代の遺物に混入した状態で旧石器が出土している。これまで出土した石器にはナイフ形石器、台形石器、三稜尖頭器、細石核、使用痕ある剥片等がある。断片的な資料であるが、一応AT以降の石器が一通りそろっている。これらの石器は現在の板付団地の敷地で、かつては沖積地であった所。板付北小学校校庭の北台地、中央台地の北側調査区、環濠南側の県道敷地内の調査区、中央台地と南台地の鞍部に位置する調査区等から出土している。これらの石器の存在は、周辺部に旧石器時代の遺跡が存在するか、かつて存在したことを物語るものである。板付の台地上において今後旧石器時代の遺跡が確認される可能性もあるか、後述するように、後世の削平を考慮すると遺存の可能性は極めて低いと思われる。

続く縄文時代の遺跡も板付周辺には旧石器時代遺跡同様ににきわめて少ない。板付団地建設に伴い1ヶ所の遺物包含層が調査されている。概略を記すと、縄文時代の包含層は環濠集落を乗せる板付台地の西側に発達した低位段丘に立地している。この低位段丘は1977年の調査で突帯文土器単純期から板付Ⅰ式土器の段階の水田遺構が重層的に発掘されたG-7a・7b調査区の段丘の続きで、北西に約30m離れている。G-7a・7b調査区の基盤層は八女粘土層の上に黒色粘土層が堆積し、その上部に突帯文土器単純期の水田が乗る。縄文時代の包含層は水田下の黒色粘土層である。遺跡の範囲は狭いが、早期の押型文土器が単純に出土している。本遺跡から出土する押型文土器は尖底で山形文、楕円文を横走施文するタイプや撲糸文と楕円文を交互に横走施文するタイプがあり、押型文土器の中でも古い段階に位置づけが可能である。なお押型文土器は板付遺跡の北側に位置する那珂君休遺跡第4次調査で2点、南西部に位置する諸岡遺跡においても押型文土器が1点出土している。板付遺跡周辺では点々と押型文土器の遺跡が存在することが予想できる。板付遺跡の押型文土器遺跡の確認は重要な成果である。特に、その立地が埋没した低位段丘面であることは、縄文時代遺跡の立地を考える上で示唆的である。板付遺跡の南東部に位置する井相田D遺跡では地表下4.8mから縄文時代の埋没林が検出され、轟B式土器が検出されている。今後、低地の沖積地から有望な縄文時代遺跡が発見されることには疑いあるまい。しかし、次に述べる弥生時代に開田をはじめとする開拓が強力に推し進められ、縄文時代遺跡が破壊されたことも度々あったと推測される。



第3図 遺跡全体図

弥生時代になると板付遺跡をはじめ、重要な遺跡が數多く分布している。遺跡の分布は①板付台地から南方・須玖遺跡等のある春日丘陵にのびる低台地上。すなわち、諸岡川流域の遺跡群。②御笠川右岸と月隈丘陵を含んだ地域。③御笠川と那珂川に挟まれた比恵・那珂の低台地上。④那珂川の左岸一帯。の4区域に大別できる。

①地域は須玖岡本遺跡をはじめ全域に著名な弥生時代遺跡が分布している。魏志倭人伝に言う奴国の中心地に目される地域である。須玖岡本遺跡は奴国王およびその一族の墓地と考えられ、多量の鏡をはじめとする多量の青銅製武器が出土している。近年の調査では須玖水田遺跡、須玖坂本遺跡、須玖唐梨遺跡、岡本パンジャク遺跡、赤井手遺跡、大谷遺跡等からは青銅器工房遺跡や埋納遺跡が検出されていて青銅器は貰、量とともに他の弥生時代集落を圧倒している。また、井尻B遺跡からも鏡や鐵の鋳型が出土し、板付遺跡でも銅矛等の鋳型が出土している。また、板付遺跡の南3kmに位置する雜賀隈遺跡では突帶文土器段階の首長層の墳墓が調査されている。ここでは木棺墓4基、土坑墓の可能性ある土坑4基があり、このうち、4基の木棺墓と1基の土坑から壺形土器、有柄式磨製石剣、有茎磨製石鐵等の副葬品が出土している。

②地域は斉棺墓地として有名な金隈遺跡をはじめ丘陵部において斉棺墓地が調査されている。宝満尾遺跡では前期の貯蔵穴、中期～後期の墓地が調査され、土坑墓から中国・新代に製作された昭明鏡、素環頭刀子、鉄斧、ガラス小玉などが出土している。宝満尾遺跡のすぐ北側に位置する赤穂ヶ浦遺跡からは銅鐸の鋳型が出土し、天神森遺跡では列状に並んだ前期の木棺墓や中期の斉棺墓が調査され、木棺墓には小壺がもれなく副葬されていた。下月隈C遺跡では中期の斉棺墓から細形銅劍、ガラス製管玉が出土している。また、空港内の雀居遺跡は自然堤防に立地する遺跡である。突帶文土器単純期から前期の溝が検出され、土器・石器とともに多量の木製品が出土している。弥生時代開始期の農耕具の構成等、多くの問題を提起している。また、後期の環濠集落も存在している。環濠の内部には大規模な掘立柱建物群が存在している。木製短甲、盾等の武具類をはじめ多種多様の木製品が出土している。また、別地点では、前期の墓地が調査され、数少ない前期の人骨が出土して弥生人のルーツを考察する上で貴重な資料を提供している。家畜小屋と考えられる遺構もある。この遺構は幅20cm前後の溝か環状に巡り、溝の中には杭穴が密接して存在するものである。中国や朝鮮半島の民俗事例では豚小屋としての使用が多い。

③地域はその全域が弥生時代の遺跡である。かつて区画整理により丘陵が削られ、遺跡の中心部が破壊されたにも関わらず、ビル建設に伴う調査では重要な遺構や遺物が出土している。突帶文土器の段階から弥生時代の各時期の遺構遺物が出土している。青銅器の鋳型も多く出土し、奴国の一翼を担った地域であることがわかる。突帶文土器段階の那珂環濠遺跡は二重の環濠を持っている。また、中期の環濠として、比恵遺跡が著名である。

④地域はの弥生時代遺跡は他の地域に比較してやや貧弱である。突帶文土器単純期の水田遺構が検出された野多目遺跡が注目される。野多目遺跡の水田は中位段丘II面に立地、水田構造は板付遺跡と極めて類似している。むしろ両者を組み合わせることでその構造がよく理解できる。給排水を完全にした高度の構造を備えていることは注目される。また、この構造は福岡平野では古墳時代まで継承されている。

古墳時代以降も遺跡は継続して形成される。那珂八幡古墳は全長80mの前方後円墳である。埋葬主体部の北側に存在する木棺直葬の棺から三角縁神獸鏡が出土し、福岡平野の中では最も古式の古墳である。那珂八幡古墳の北側、アサヒビル工場内には横穴式石室を主体部とする前方後円墳・劍塚古墳があり、確認調査の結果、削平された前方後円墳1基が隣接して存在することが明らかになった。また、博多の砂丘部においても削平された前方後円墳2基が確認されている。

第2章 調査の概要

調査は指定地内の丘陵部の集落の遺構確認と遺構の一部については内容確認のための発掘調査を実施した。調査は指定地内の表土層を全面にわたって除去して遺構の平面確認に主眼を置いた。確認した主な遺構は環濠をはじめ、前期の貯蔵穴、前期～中期にかけての甕棺墓、中期～後期にかけての住居址、中期～後期の井戸、柱穴、古墳時代～中世の遺構として溝、土坑、柱穴等がある。これらの遺構は板付台地における長い間の継続した人類の歴史を如実に示している。以下、主要な遺構について調査の概要を見ていきたいと思う。

1. 環濠の調査

環濠の存在が確認されたのは日本考古学協会を中心とする調査が最初である。この調査では環濠の西側と弦状溝が調査された。この段階では濠の性格が明らかでなかったために、弧状溝とそれに弦を張ったように溝が囲り込まれていて弦状溝（濠）と呼ばれることになった。それ以後、明治大学を中心とする濠の追及調査で、その全形は図面上で復元可能となり、卵形をした環濠になることが判明していたが、表土層を除去して黄色い鳥居ロームの中に黒い濠の帯が白日にはじめて全形を現わし、環濠を目の当たりした感激はひとしおであった。考古学を学ぶ者にとって、この感激は終生忘れない経験であった。

板付の台地中央部に存在した通津寺は江戸時代から存続した寺院で、境内の大部分は墓地として利用され、加えて寺の移転に伴い墓の改葬が行なわれたため、境内の遺構の残存状態は極めて悪いことが予想できた。よって、調査の手順として最初に指定地内に試掘トレンチを入れ、遺構の残存状態を確認することから開始した。予想通り通津寺境内には現代墓はもちろん近世墓が密に作られ、弥生時代の遺構をはじめとした各時代の遺構はトレンチ内には皆無であった。しかし、境内東北部における福岡市の調査では前期中頃以降の住居址や中期後半の井戸が確認されていること、通津寺境外の外側には弥生時代の遺構がやや密に分布していることが確認できた。これまでの調査成果や試掘の結果を受けて、境内の大部分を掘削土の置き場として、通津寺の北側の一部を含めた史跡地内全域の表土層を除去し、全面露出することにした。

第4図は史跡指定地内丘陵部全域の表土層除去後の確認遺構全体図である。中央部、通津寺を含めた地域を取り囲むように環濠が存在する。環濠は日本考古学協会や明治大学、九州大学、福岡県教育委員会、福岡市教育委員会を中心とする調査で確認された成果から推定復元された形状や規模には大きな変化はないが、濠の幅等の細部において若干の差異が存在する。

今回の調査で特記されるのは、環濠の南西部において出入り口を確認したことである。位置はかつて通津寺の前を通っていた里道と環濠の交点部分である。出入り口の幅は5mを測る。出入り口は環濠を掘り残した陸橋となっている。環濠の陸橋部分はほぼ垂直に立ち上がる。陸橋の長さは環濠の削平が著しく明らかにすることはできない。また、陸橋にあったと考えられる門柱やネズミ返し等の遺構は削平のため全く残っていない。

環濠の北側中央部よりやや西に片寄った北西部には環濠と弦状溝の分岐点が存在する。弦状溝は環濠から分岐し、南に向かって直線的に延びる。弦状溝がほぼ磁北を取っていることは極めて注目される。なお、環濠と弦状溝の時間的関係が最初の調査段階から問題にされていた。今回もこの問題を解決すべく注意し、調査に臨んだが、分岐点はすでに日本考古学協会によって調査が完了しているので、弦状溝の一部を調査してその形成時期を再確認した。その結果、弦状溝の形成は板付I式土器であり、土器型的には環濠の形成時期と同じである。

第2章 調査の概要

調査は指定地内の丘陵部の集落の遺構確認と遺構の一部については内容確認のための発掘調査を実施した。調査は指定地内の表土層を全面にわたって除去して遺構の平面確認に主眼を置いた。確認した主な遺構は環濠をはじめ、前期の貯蔵穴、前期～中期にかけての甕棺墓、中期～後期にかけての住居址、中期～後期の井戸、柱穴、古墳時代～中世の遺構として溝、土坑、柱穴等がある。これらの遺構は板付台地における長い間の継続した人類の歴史を如実に示している。以下、主要な遺構について調査の概要を見ていきたいと思う。

1. 環濠の調査

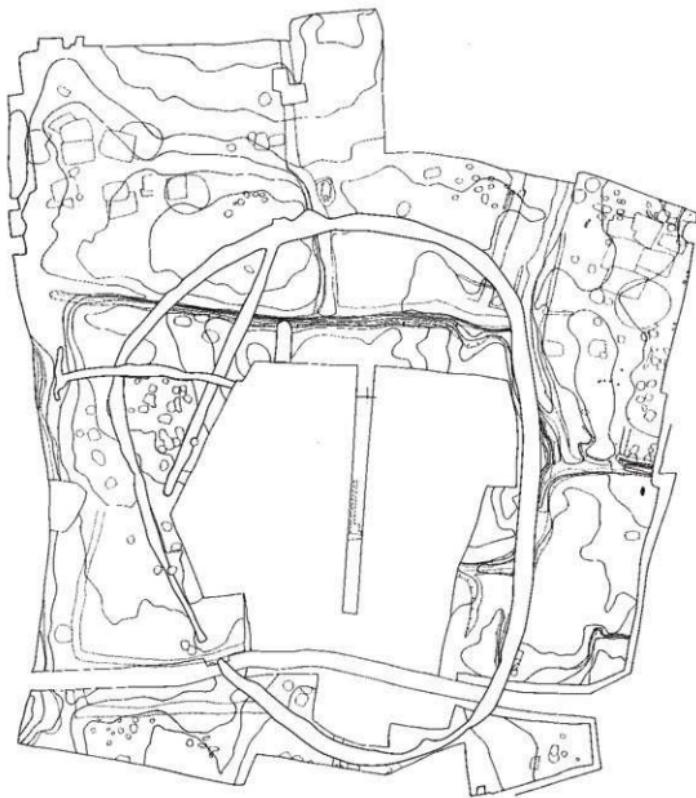
環濠の存在が確認されたのは日本考古学協会を中心とする調査が最初である。この調査では環濠の西側と弦状溝が調査された。この段階では濠の性格が明らかでなかったために、弧状溝とそれに弦を張ったように溝が囲り込まれていて弦状溝（濠）と呼ばれることになった。それ以後、明治大学を中心とする濠の追及調査で、その全形は図面上で復元可能となり、卵形をした環濠になることが判明していたが、表土層を除去して黄色い鳥居ロームの中に黒い濠の帯が白日にはじめて全形を現わし、環濠を目の当たりした感激はひとしおであった。考古学を学ぶ者にとって、この感激は終生忘れない経験であった。

板付の台地中央部に存在した通津寺は江戸時代から存続した寺院で、境内の大部分は墓地として利用され、加えて寺の移転に伴い墓の改葬が行なわれたため、境内の遺構の残存状態は極めて悪いことが予想できた。よって、調査の手順として最初に指定地内に試掘トレンチを入れ、遺構の残存状態を確認することから開始した。予想通り通津寺境内には現代墓はもちろん近世墓が密に作られ、弥生時代の遺構をはじめとした各時代の遺構はトレンチ内には皆無であった。しかし、境内東北部における福岡市の調査では前期中頃以降の住居址や中期後半の井戸が確認されていること、通津寺境外の外側には弥生時代の遺構がやや密に分布していることが確認できた。これまでの調査成果や試掘の結果を受けて、境内の大部分を掘削土の置き場として、通津寺の北側の一部を含めた史跡地内全域の表土層を除去し、全面露出することにした。

第4図は史跡指定地内丘陵部全域の表土層除去後の確認遺構全体図である。中央部、通津寺を含めた地域を取り囲むように環濠が存在する。環濠は日本考古学協会や明治大学、九州大学、福岡県教育委員会、福岡市教育委員会を中心とする調査で確認された成果から推定復元された形状や規模には大きな変化はないが、濠の幅等の細部において若干の差異が存在する。

今回の調査で特記されるのは、環濠の南西部において出入り口を確認したことである。位置はかつて通津寺の前を通っていた里道と環濠の交点部分である。出入り口の幅は5mを測る。出入り口は環濠を掘り残した陸橋となっている。環濠の陸橋部分はほぼ垂直に立ち上がる。陸橋の長さは環濠の削平が著しく明らかにすることはできない。また、陸橋にあったと考えられる門柱やネズミ返し等の遺構は削平のため全く残っていない。

環濠の北側中央部よりやや西に片寄った北西部には環濠と弦状溝の分岐点が存在する。弦状溝は環濠から分岐し、南に向かって直線的に延びる。弦状溝がほぼ磁北を取っていることは極めて注目される。なお、環濠と弦状溝の時間的関係が最初の調査段階から問題にされていた。今回もこの問題を解決すべく注意し、調査に臨んだが、分岐点はすでに日本考古学協会によって調査が完了しているので、弦状溝の一部を調査してその形成時期を再確認した。その結果、弦状溝の形成は板付I式土器であり、土器型的には環濠の形成時期と同じである。



第4図 調査区全体図

環濠と弦状濠によって三日月形に区画された一角が存在する。この区画内には貯蔵穴のみか50数基存在する。貯蔵穴を区画した特別の地域と見ることができる。なお、この区画内の貯蔵穴の中には環濠および弦状濠に切られたものも存在するので、環濠に先行した貯蔵穴が存在したことか判る。環濠の掘削時期か貯蔵穴群の形成過程の一段階に行なわれた推測することができる。この区画には環濠西側と弦状濠の間に濠の掘り残しの陸橋がある。陸橋の幅は4m、長さは削平か著しいために明らかでない。貯蔵穴を区画する地域を除いて環濠内は先述したように永年、通津寺の境内として使用され、特に境内西側は最近まで墓地として利用され、北側は江戸時代以来墓地として利用されていた。境内に確認した弥生時代の遺構は数基の貯蔵穴と考えられる遺構と、かつて、福岡市教育委員会と日本考古学協会の調査で検出された前期後半の堅穴住居址1棟、中期後半の井戸2基が検出されているにすぎない。

今回は環濠の状態を確認するために内容が明らかでない環濠の東側に2ヶ所、南側の最も狭い部分に1ヶ所、弦状濠に1ヶ所の計4ヶ所の調査区を設定した。それぞれの調査区については時間の関係もあったので各調査区の発掘の方法をかえて実施することにした。東側の第1区は主要な遺物について、出土地点、標高を記録した。第2区については出土品（土器、石器、石器素材、自然遺物、自然石等）すべてについて出土地点、標高を記録した。環濠南端部の第3区と弦状濠の調査区については層位ごとに発掘した。それぞれの調査区の成果の比較検討が、これまでの調査成果の検討に有効であった。

環濠からは土器をはじめ石器、骨角器の人工遺物と量的にはきわめて少ない貝殻、獸骨、魚骨、等の自然遺物がある。これらの遺物は弥生時代開始期の様相を示すものである。出土遺物から環濠の掘削は板付1式土器の段階に行なわれたことを再確認した。G-7a・7b調査区で確認した水田遺構が突堤文土器單純期に遡り、環濠の掘削時期とは一致しない。この不一致が何を意味するのか今後検討が必要である。

突堤文土器單純期の集落と考えられるのは環濠の北西に、堅穴住居址1棟、掘立柱建物3棟、家畜小屋と考えられる遺構2基、墓壙等から構成される遺構群である。この集落は時期的に突堤文土器段階に比定できるが、最下層の水田遺構の時期とはまだ隔たりがあり、最下層の水田の時期に該当する集落はいまだ未発見である。また、水田開発の労力を考慮すると既発見の集落の規模では難しいと考えられる。ではどこに水田遺構に対応する集落は形成されたのであろうか。環濠と弦状濠に囲まれた地域に分布する貯蔵穴の中に環濠や弦状濠に切られた貯蔵穴が存在することは前述したが、これらの存在は環濠に先立って、同地域に集落遺構が存在した可能性が高いことを示唆している。立地的にも環濠の位置する中央台地の中央部が最もふさわしい場所であると考えられる。突堤文單純期には環濠と重複するように集落が形成されたが、板付1式土器の段階に環濠集落形成の必要性が生じ、同一場所に改めて集落がつくりなおされたと考えられる。環濠・弦状濠の掘削は大土木工事であり、それに伴い前集落は大きく改変され、遺構そのものも失われた可能性は強い。環濠や弦状濠に切られた貯蔵穴の存在はその間の事情を物語っていると考えられる。集落の問題についても次報告で改めて検証することにする。

2. 環濠以外の遺構の調査

環濠外では環濠内と比較して遺構の遺存状態は良好である。これは環濠が丘陵頂部を囲むように掘削され、環濠外は台地の斜面部分にあたり削平がないことも大きな要因である。また、大部分が畠地であったことや、宅地であっても建物は全てが木造建築であって、地下に大きな影響を与えていたことも遺跡にとって幸いしている。環濠外の南側には貯蔵穴の一群が検出される。この一群は史跡指定地の南側に沿って走る県道、さらにその南の宅地まで掘り、現在まで57基以上の貯蔵穴が確認されている。この地域の貯蔵穴は殆ど切りあい関係がなく、一定の間隔を持って分布していることは、切りあい関係の著

しい環濠と弦状濠によって区画された地域に分布する貯蔵穴群とは異なった用途が考えることができる。例えば、区画内に存在する貯蔵穴は環濠内に区画を設けて保管が確実に行われていることからすると、この集落にとって最も重要なものである種モミか集中管理されていた可能性が強い。これに対して環濠南側に分布する貯蔵穴は一定の間隔を持って分布すること等から日常的な使用が考えられる。

環濠内には上述したように貯蔵穴のような深い遺構を除いてほとんど遺構は残っていないが、環濠外には環濠とは時期が異なる住居址等の遺構が良好な状態で残っている。住居址は指定地内の北側の東西の台地端の斜面部分に検出した東側斜面では中期の円形住居址1棟、後期の長方形住居址6棟以上、西斜面では中期の円形住居址3棟、後期の長方形住居址9棟以上が確認できた。これらの住居址は環濠とは直接の関係はなく、この時期には環濠は完全に埋まっている。ここで注意されるのが日本考古学協会の調査で確認された中期後半のT字形の溝である。この溝は西端の屈曲部から東に約45mのところで北側に屈曲し全体形としてコの字形になるが、段落ち部より北側は削平され現存していない。方形ないしは長方形に区画した溝の可能性が強い。もしそうだとすれば中期の円形住居址を囲む溝の可能性があるが、段落ちより北側にはその痕跡は確認できなかった。住居址についてはその内容を把握するために、円形住居址と長方形住居址の重複した遺構を発掘した。円形住居址は東西径8.7m、南北径8.8mのほぼ円形、壁溝をめぐらし、主柱穴は9~10本が円形に巡る。炉は後期の長方形住居址に切られて存在しない。後期の長方形住居址は東半部が近世の搅乱で破壊されているが、ほぼ全形を知ることができる。長軸径6.4m、短軸径4.7mの長方形プランをなす。部分的に壁溝をめぐらす。主柱穴は4本であるが、北側の1本と炉は近世の搅乱によって失われる。住居址の埋土に掘り込まれた土坑に小銅鐸が舌をつけた状態で埋納されていた。

環濠に関する遺構として、環濠の弦状濠の分岐点のすぐ北側において前期の7基からなる小児撫棺墓群を確認した。いずれも壺を下壺として利用している。4基に碧玉製管玉や小壺を副葬している。隣接する中期の住居址の状態からすれば、この小児墓群には盛り土を持っていた可能性が強く、墳丘墓の可能性が強い。

第3章 環濠第1区の調査

1. 調査区の設定

調査の第1の目的は環濠を中心とした遺構の確認とその性格を明らかにすることであった。そのためには第2章で述べたように、調査は環濠を中心とした地域の遺構確認を主眼に、指定地内の表土層の除去作業から開始した。表土の除去は重機を使用して行った。これまでの日本考古学協会を中心とする調査や福岡市教育委員会の指定地周辺の調査の成果では、環濠を中心とした台地上では弥生時代の遺構は環濠や貯蔵穴のような深い遺構は存在するが、住居址のような浅い遺構はほとんど遺存していなかった。今回の調査でもその傾向は同様であった。弥生時代以降、各時代において人間の関与が認められ、台地上は大きく改変され変形が著しい。特に改変が著しいのは中世以降、近世になり台地の中央部の最も高い部分に通津寺が建立されてからの改変は大きい。境内の大部分は墓地に利用され、弥生時代の遺構はほとんど破壊されている。また、通津寺の周辺部も宅地として利用され、削平が進み、生活排水の溝等も掘削されている。このように後世の搅乱を受けているので、遺構の存在について大きな期待はなかつたか。予想以上に遺構の存在があったことは喜ばしいことであった。

検出した遺構は弥生時代に限定すれば環濠をはじめとして、環濠の北側に接するように分布する前期の小堀甕棺墓群、環濠と弦状濠とに囲まれた地域に分布する前期の貯蔵穴群や環濠内や環濠外に散発的に分布する貯蔵穴、中期の方形に巡る溝、環濠北側に二群に分かれて分布する中～後期の住居址群、中期～後期の井戸がある。これらの遺構で小堀の甕棺墓群や住居址群は当初予想しなかった遺構である。検出した遺構については全て平面図として図化した。性格やその内容が明らかでないものについては、発掘調査を実施することにしたが、遺跡の保存を考慮し、対象を最小限に抑えた。

遺構の発掘対象としたのは、小堀の甕棺群、住居址の一部、環濠の一部である。

小堀甕棺群は総数7基、前期に属する壺を使用した所謂壺棺である。環濠に近く、小堀墓のみによって形成されているのは重要な意味を持っていると考え、その内容把握が必要であった。また、いずれの甕棺も上部が破壊され壊滅状態であったこと、甕棺の時期比定の必要性があったことから、記録保存の必要性を感じ、記録にとどめるための調査を行った。

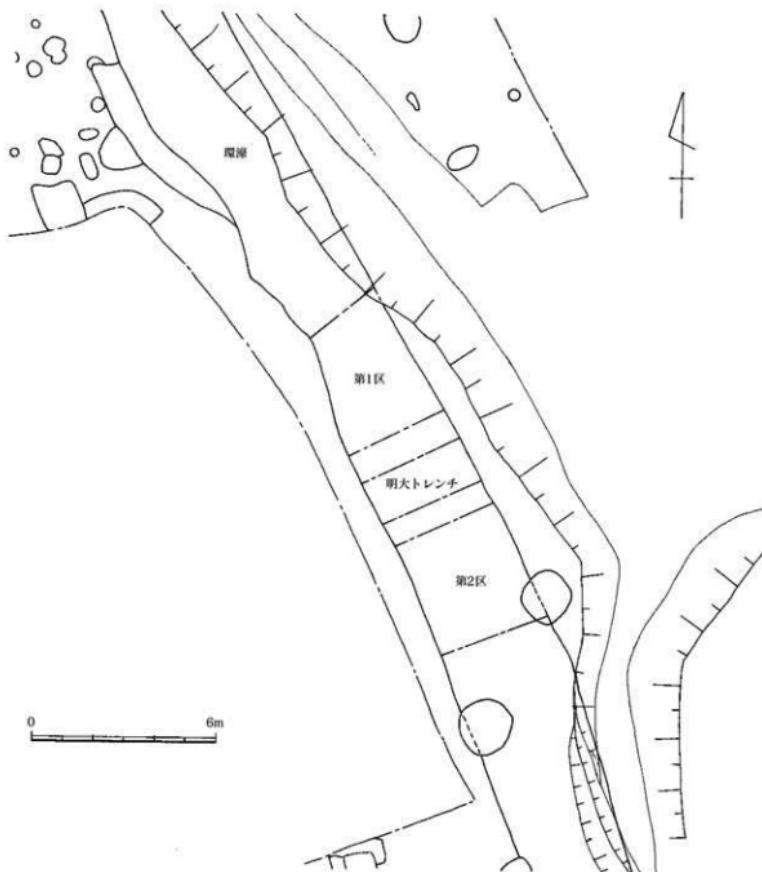
住居址群については、これまで板付遺跡ではほとんど調査されたことがなく、調査した住居址は壁も残っていないような状態であったために、その構造を把握する必要性があったこと、また、前期以降の板付遺跡の動向を知るために、中期の円形住居址と重複関係にある後期の方形住居址各1棟を発掘した。

環濠についてはこれまで日本考古学協会、明治大学、九州大学の調査が行われているが、調査の対象は主に環濠西側と弦状濠に集中し、その他の所については環濠の復元のために設定されたトレンチ調査であったため、内容が十分に把握されていなかった。その欠を補うために環濠東側を中心に内容把握のための発掘調査を実施した。調査区は明治大学調査の第10区と福岡市トレンチの間、すなわち、明治大学の第10区の北側、福岡市トレンチの南側に長さ4mの調査区を設定し、今回調査の第1区とした。また、明治大学の第10区の南側に1m離れて長さ4mの調査区を設定して、今回調査の第2区を設定した。また、環濠の南端部、最も環濠が狭くなる部分、明治大学第11区とH区に挟まれたところに幅1mの調査区を設定し、第3区とした。また弦状濠については、掘削時期について問題が提起されていたので、改めてその時期決定のために調査区を設定した。弦状濠の調査区は通津寺境内と宅地の間の崖部分から南に4mの長さで調査区を設定した。

2. 遺構

(1) 環濠

環濠は中央台地の最も高い部分を中心に形成されている。そのほぼ中心に通津寺が建立されていたことになる。環濠の全体形は卵形をなすが若干北側が広く、南側が細くなる。環濠の規模は濠の心で南北径110m、東西径86mを測る。環濠の南西部には濠の掘り残し部分があり、陸橋となっている。陸橋の幅は約5m、この集落の出入り口となっている。また、環濠の北側の中央よりやや西側から環濠から分岐した弦状濠が南北に直線的に走り、環濠西側中央部の手前で終わり、環濠と弦状濠の間が陸橋となっている。



第5図 環濠調査区の位置

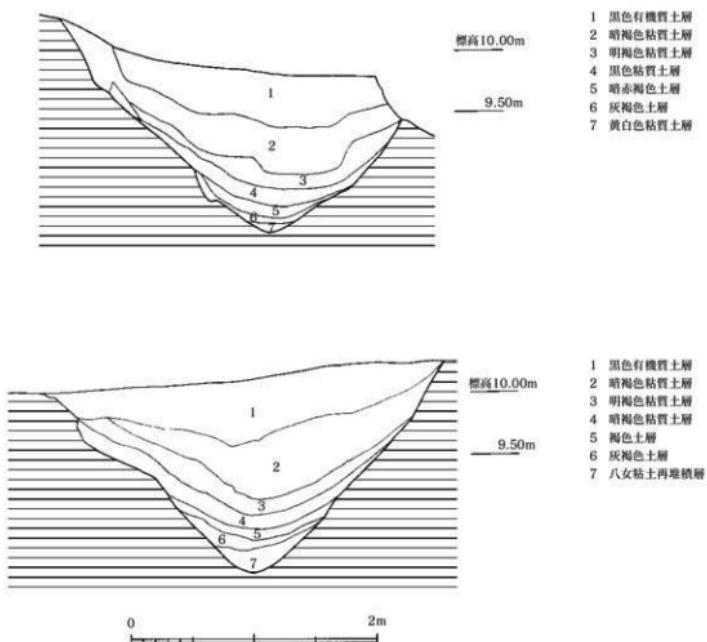
陸橋の幅は3mを測る。弦状濠の端や環濠の陸橋の部分は鋭い角度で立ち上がる。環濠の幅は削平もあるが、所によって大きな違いがある。概して東側が広く、西側が狭い。幅は1~4m、削平を考えれば、2~6mあったと考えることができる。

第1区では環濠は東側を大きく削平され浅くなっているが、北側で幅2.84m、深さ1.78cmを測り、南側で幅3.26m、深さ1.70mを測る。濠底は北側で標高7.52m、南側で7.55mを測り、南側から北側に向かってわずかに傾斜している。

(2) 北壁の土層

第1区の環濠は通津寺境内と民家の境界にあたり、後世の溝の掘削等の改変により大きく削平されている。特に東側が顕著で、環濠の東側の立ち上がりは近世の溝に切られている。

第1区の北壁の土層堆積いずれもレンズ状をなし、自然堆積であることがわかる。環濠の西側における確認面は標高10.3m、東側の確認面は標高9.44m、濠底は標高9.03m、濠幅2.9m、深さ1.77mを測る。



第6図 環濠第1区土層断面実測図

断面形はV字形というよりは三角形に近い。遺構の確認面は黄褐色の鳥栖ローム層であるが、標高9.40mのところで白色の八女粘土層に変わる。

濠内の土層堆積は、第1層、黒色有機質土層、土層中央部に少量の炭を含んでいる。また、直径5cm前後の鳥栖ロームの塊が均一に少量含まれている。層の厚さは中央部が最も厚く43cmを測るが、壁に向かって徐々に薄くなり、壁に近いところで20cmを測る。元来はまだ厚さがあったと考えられる。第2層は暗褐色粘質土層、第1層に比較してやや大きめの鳥栖ロームの塊が均一に混じる。炭も散在している。この層も中央部が最も厚く39cm、壁際に向かって徐々に薄くなり15cmを測るが、壁際に厚く堆積している。第3層は明褐色粘質土層、直径1~3cmの鳥栖ロームの塊が多量に混じっている。また、極少量の炭も混在している。全体に薄い層であり、厚いところで22cmを測る。東側に偏って堆積した土層であり、東側では壁に直接接しているが、西側では途中の第4層の上で終わっている。環濠の外側から堆積土が供給された可能性が強い。第4層は黒色粘質土層である。両壁間に鳥栖ロームの小さな塊が多量に含まれているが、中央部にはほとんど含まれていない。炭がごく少量含まれている。中央部が最も厚く、厚さ10cmを測る。壁に沿って薄くなる。西壁ではこの層が終わるところで鳥栖ロームの大きいブロックが乗っている。第5層は底近くに堆積した土層である。暗赤褐色土層、中央部が最も厚く、11cmを測る。第6層は灰褐色土層、全体に薄く堆積しているが、より西壁に沿った部分に堆積しているので、堆積土の供給源は環濠内側と考えられる。第7層は濠底に堆積した土層である。黄白色粘質土層、ほぼ水平に堆積している。厚さ7cm前後、八女粘土層の再堆積であり、灰色の土塊を含んでいる。

(3) 南壁の土層

第1区の南壁は北壁に比較して遺存状態は良好である。わずかに東側に傾斜する程度である。ただし周辺の遺構の遺存状態からすれば上部を1m前後削平されている可能性が強い。環濠西側の壁の確認面は標高10.27m、東側の確認面は10.05mを測る。鳥栖ローム層と八女粘土層の境は西壁が標高9.00m、東壁が9.08mである。環濠の埋土は上から、第1層、黒色有機土層。中央部に多量の炭を含む。径1cm前後の鳥栖ロームの塊が均一に混じっている。堆積土は中央部が最も厚く、東西壁側が薄くなるレンズ状をなしている。中央部で厚さ53cmを測る。第3層の東壁に沿った部分が第1層に切られていることから、第1層は濠の再掘削後に堆積した可能性があるが、このことについては後章において検討することにする。第2層は暗褐色粘質土層。炭を少量含み、鳥栖ロームの径1cm前後の塊を均一に含むのは第1層と同様である。第2層も第1層と同様にレンズ状の堆積を示しているが、この層の東の端は東壁まで達していない。西壁側に厚く堆積することから、この層の供給源は環濠西側、つまり環濠内部からによると考えられる。この層も中央部が最も厚く約60cmを測るが、西側は壁際までこの厚さをあまり損なわず維持しているが、中央部を過ぎたところから東では極端に薄くなる。第3層は明褐色粘質土層。炭を少量含んでいる。直径1~2cmの鳥栖ロームの塊を比較的多量に均一に含んでいる。この層は第1、2層に比較して薄い。また、第2層とは逆にこの層の供給源は東側、すなわち、環濠の外側から流れ込んだと考えられる。土層が最も厚いのは中央部ではなく東壁に沿って堆積した部分で厚さ25cmを測る。東側の土層は上部が第1層によって切り取られているので詳細は明らかでない。堆積は中央部から西壁に沿って徐々に薄くなり、標高9.8mのところで終わっている。第4層は暗褐色粘質土層。炭を含んでいる。両壁沿いに直径3cmの鳥栖ロームの塊が多量に流れ込んだ状態で堆積している。第3層と同じような堆積を示している。土層の供給源は東側で、環濠外側からのものである。土層が最も厚いのは東壁に沿って堆積した部分で厚さ20cm前後であるが、西側に向かって徐々に薄くなる。西壁に沿ったもっとも端は標高9.63mのところである。第5層は

濠底に薄く堆積する土層である。褐色土層で炭が含まれる。鳥栖ロームの大小の塊が多量に含まれる。厚さ8cm前後で、ほぼ均一である。西壁に沿った土層の端は標高9.16m、東壁に沿った土層の端は標高9.2mと東西にはほとんど差はない。環濠の内外から均一に土層の流れ込みがあったと考えられる。第6層は灰褐色土層、ところどころに炭が混じる。東側の壁に沿った部分の堆積が最も厚く、厚さ14cmを測る。東側に向かって徐々に薄くなる。東側すなわち環濠外側から流れ込んだ土層である。第7層は濠底に堆積する土層である。八女粘土層の流れ込み層である。灰色の八女粘土層の塊を含んでいる。中央部が最も厚く、厚さ18cmを測る。東壁に沿った土層の端は標高8.78m、西壁に沿った土層の端は標高9.00mで、この土層の堆積は西側、すなわち、環濠内側からの流れ込みである。

北壁、南壁の土層の対比は第1層から第7層まで同一の層として把握することができる。

3. 出土遺物

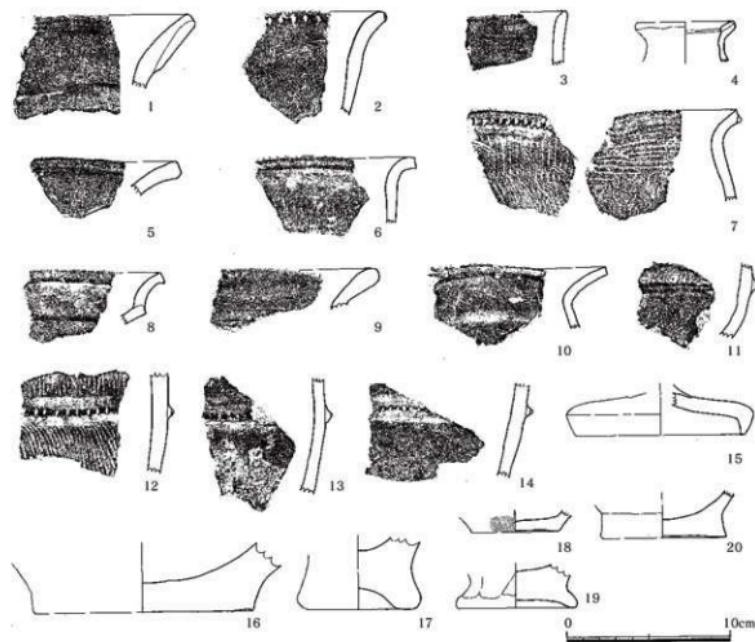
各調査区の出土遺物については出土土器を中心に述べ、土製品、石製品の一部については第1区、第2区、第3区、弦状濠出土品を一括して第7章で述べることにする。なお、出土土器の胎土は石英、長石の砂粒を多量に含み、焼成が良好な土器が多い。よって、土器の説明においては、特別の胎土を有する土器以外については説明を省略することにする。

(1) 井戸出土土器

第7図に示した土器は環濠と重複して作られた井戸遺構から出土した土器である。井戸は環濠が完全に埋没した段階に掘り込まれたもので、径1.2m、深さは意外と浅く、環濠の埋土中で終わっている。出土土器は少なく散発的に出土し、通常、井戸の底部付近に見られる祭祀用と考えられる丹塗りの土器は見られない。土器も井戸の使用時の土器と環濠から混入したとみられる土器が混在している。

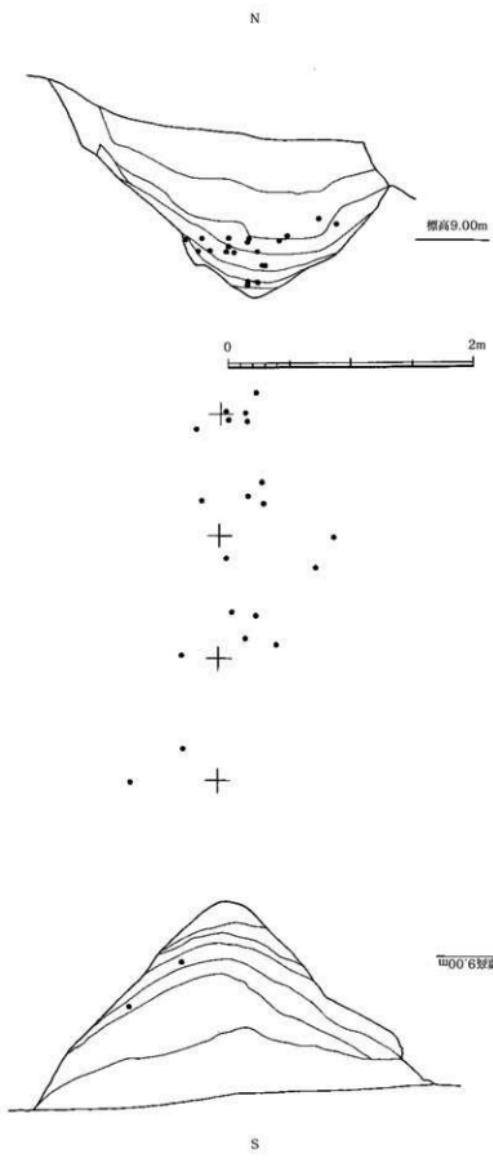
1、3、4、9は壺形土器の口縁部の破片、2、5～7、10は甌形土器の口縁部破片、11は壺形土器、12～14は甌形土器の胸部破片、8は浅鉢形土器の口縁部破片、15は蓋形の土器、16～19は底部破片である。

1は大型品、口縁部外側に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。内外面ともに刷毛目調整後に横方向の丁寧なヘラ研磨調整が施される。胎土には多量の砂粒が混入される。焼成は堅致。色調は黄褐色をなす。2は口唇部に刻目を施すが、やや下方に偏っている。外面は斜方向の刷毛目調整であるが、口縁部はヨコナデで刷毛目を消している。内面は横方向の刷毛目調整をナデ消している。3は口縁が直口する。口唇部がわずかに外反する。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整、外面と内面の口縁部に帶状に丹塗りが施される。4は小型品の口縁部。口縁部は外反し、頸部は外傾しながら伸びる。口縁部は粘土帯を内側に折り込み肥厚させている。粘土の接合部は段として残り明瞭である。口縁部径6.2cmを測る。頸部には指圧痕が残る。外面と口縁部内側はヘラ研磨調整であるが、丁寧でない。5は脚端部の可能性もある。外面は縱方向の刷毛目調整の上にナデ調整が加えられている。内面は丁寧な横方向のヘラ研磨調整を加えている。胎土は精製され極めて良質、焼成は堅致で白灰色をなし、一部は黒灰色をなす。6は口縁部が如意形に屈曲する。口縁端部は平坦で稜線は鋭い。外面は他方向の刷毛目調整、口縁部はナデを加え、刷毛目を消している。口縁部内面は斜方向の刷毛目調整。それ以下には指圧痕が残る。外面には部分的にスカイフ着する。7も口縁部は如意形をなす。口唇部は平坦で下方の稜線部にヘラによる刻目が施される。外面は縱～斜方向の目の粗い刷毛目調整が施され、口縁部内面には斜方向の外面同様の刷毛目調整が施される。8は胸部上位で屈曲し、内傾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。口唇部は平坦に仕上げられ、上下の稜



第7図 環濠第1区・井戸出土土器

線は鋭い。内外面ともに横方向の刷毛目調整を施し、上にナテ調整が施されている。9は大型品である。口縁端部は丸く收める。口縁部は肥厚するが、粘土接合部は不明瞭。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整。10はいわゆる「くの字形口縁」。口縁部は直線的に外反する。口縁端部は平坦、上下の後線部分がわずかに張り出し、内側がわずかにくぼむ。外面は斜方向の刷毛目調整、口縁部はその上にナテ調整が加えられるが、部分的に刷毛目痕が残る。内面は口縁部が横方向の刷毛目調整、胴部が斜方向の粗い刷毛目調整である。口縁部と胴部の境に後線ができる。11～14は胴部に貼り付けの突帯がある。11はM字突帯、12～14は三角形の突帯であるが12はやや丸みを持つ。11は内外面ともに横方向のヘラ研磨調整。12は外面に粗く深い縱方向の刷毛目調整を施し、突帯の上下にヨコナナデ調整が施される。突帯にはヘラによる小さな刻目が施文される。内面には指頭痕と横方向の粗い刷毛目がある。13は外面が縱方向のヘラナナデ調整。突帯の上位にヨコナナデ調整があり、下位はヘラナナデによる粘土が覆っている。内面には指頭痕とナナデ調整がみられる。14は外面に斜方向の細かい刷毛目調整が施され、突帯の上下にヨコナナデが加えられている。内面は縦方向の板ナナデ調整がみられる。15は蓋である。天井部外面にはつまみが貼り付けられていたとみられ、その痕跡がある。身受けするように口縁部が屈曲、垂直に1cmほど下方に延び、端部はヘラで切られ平坦である。全体に造りはいびつである。径11.4cmに復元できる。類例の少ない資



第8図 環濠第1区刻目突帯文土器出土状況

料である。16は大型の壺形土器の底部である。底部径13.5cmを測る。厚く重厚である。外面は指頭による調整で凹凸が著しい。内面はヘラナデ調整である。17は甕形土器の底部である。底部径7.5cm、底部の中央部が半円状に抉られ上げ底をなす。外面は縦方向の刷毛目調整である。18は小型の壺形土器の底部、復元径5.5cmを測る。外面には縦方向の丁寧な刷毛目が施される。内底部は指頭による調整痕によって凹凸が著しい。19は甕形土器の底部と考えられる。底部端部が大きく外側に張り出す。外底部はヘラ状の工具で削り取られ、ケズリの上にヘラナデを加え、上げ底状をなす。側面は指頭の調整により凹凸が著しい。底部径7.4cmを測る。20は甕形土器の底部。底部径は7.7cm。外底部はヘラ状工具によりケズリが加えられている。外面は板状の工具により上から底部に向かってヘラナデが加えられている。内底部は貝殻条痕を加えた後にナデ消している。底部の外形は円筒状をなす。

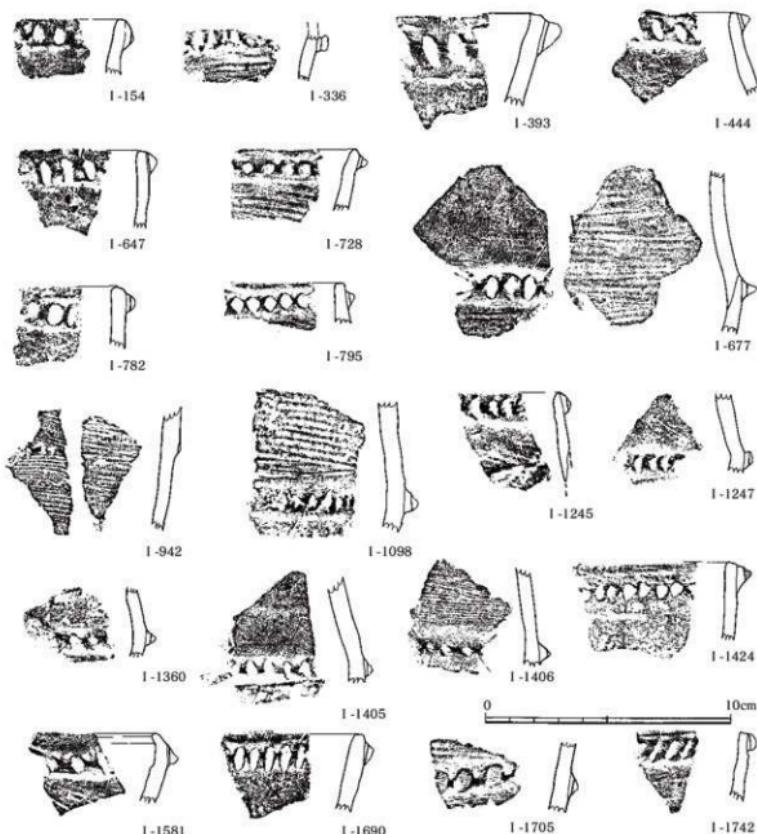
(2) 刻目突帯文土器出土状況

刻目突帯文土器の分布は一見大きな偏りが見られず、濠内に均等に分布しているように見えるが、調査区の北側に密で、南側にはわずか2点が存在するにすぎない。また、濠の東側に刻目突帯文土器の約3分の2が出土していて、環濠の外側から投棄された可能性が強い。出土する層は第2層下位以下の下層に集中している。具体的には、調査区の中央部より北側の出土土器を北壁に、南側の出土土器を南壁に投影した状態（以下、出土状況については上記の投影で示す）で検討すると、北壁ではI-154、336の2点が第2層に含まれ、I-393、647、942、1245、1247、

1742の6点が第3層に含まれ、I-677、782、1360、1405、1406、1424、の6点が第4層に含まれ、I-1098の1点が第5層に含まれ、I-795、1581、1690、1705の4点が第6層に含まれている。南壁ではI-444の1点が第3層に含まれ、I-728の1点が第4層に含まれている。北壁と南壁の対比、層位と土器の関係については次報告において改めて検討を加えたいと考えている。

(3) 刻目突帯文土器

第9図に刻目突帯文土器を図示した。刻目突帯文土器は出土状況で述べたように各層から出土する。I-154、393、444、647、728、795、1245、1424、1581、1690、1782は口縁部破片、I-444、1245は傾きから2条突帯、他は1条突帯の菱形土器。I-336、677、942、1098、1247、1360、1405、1406、



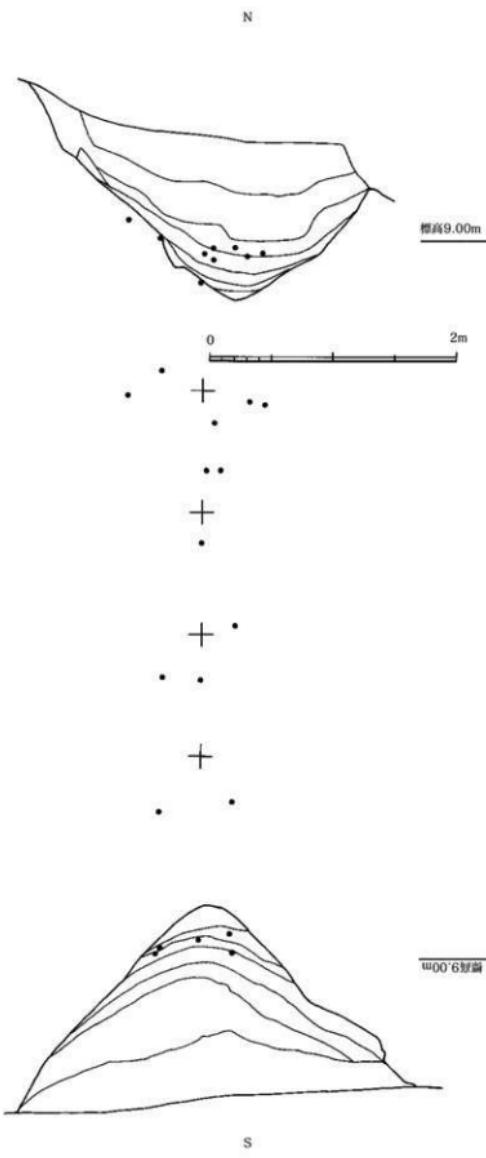
第9図 環濠第1区出土刻目突帯文土器実測図

1705は胸部破片で2条突帯の艶形土器である。

I-154、突帯はB、刻目は棒状工具による。内外面ともにヨコナデ調整である。I-336は胸屈曲部に断面方形の突帯を貼り付ける。刻目はヘラ状工具による。外面は横方向の貝殻条痕調整、内面は斜位の貝殻条痕である。I-393、突帯はB、刻目は棒状工具により、大きく深く刻まれる。外面は横方向の貝殻条痕、スカが付着する。内面はヨコナデ調整である。I-444、突帯はB、刻目は棒状工具による。内外面ともに横方向のナデ調整である。I-647、突帯はB、刻目は棒状工具により、深く刻まれる。内外面ともにナデ調整である。I-728、突帯はB、刻目はヘラ状工具による。外面は横方向の貝殻条痕、内面はナデ調整である。I-677、胸屈曲部に断面三角形の突帯を貼り付ける。刻目は棒状工具による。外面は横方向の貝殻条痕を施したあとから丁寧なヨコナデ調整を施している。内面は横方向の貝殻条痕調整である。I-782、突帯はB、刻目は棒状工具による。外面は斜位の貝殻条痕を施したあとに、ヨコナデ調整、内面はヨコナデ調整である。I-795、突帯A、刻目はヘラ状工具による。内外面ともにヨコナデ調整である。I-942、胸屈曲部に小さい突帯を貼り付ける。刻目はヘラ状工具により小さく刻まれる。内外面ともに横方向の細かい貝殻条痕を施す。外面の突帯より上部は斜位の条痕である。I-1098、胸屈曲部に断面カマボコ形の突帯を貼り付ける。刻目は小さな棒状工具による。外面は横方向の貝殻条痕、調整、内面はヨコナデ調整である。I-1245、突帯はC、刻目は貝殻条痕原体で刻まれる。外面は粗いヘラナデ調整、内面はヨコナデ調整である。I-1247、胸屈曲部に断面カマボコ形の突帯を貼り付ける。刻目は貝殻条痕原体による。外面はヨコナデ調整である。内面もヨコナデ調整であるが、下方に横方向の貝殻条痕を施す。I-1360、胸屈曲部に断面三角形の小さな突帯を貼り付ける。刻目はヘラ状工具による。外面は磨滅して詳細は不明。内面は横方向の貝殻条痕を施したあとに丁寧なヨコナデ調整を加え、貝殻条痕を消している。I-1098、前者同様に胸屈曲部に断面三角形の突帯を貼り付ける。刻目は棒状工具による。内外面ともに横方向の板ナデ調整である。I-1406、胸屈曲部に断面三角形の突帯を貼り付ける。刻目は棒状工具により、浅く刻まれる。外面は横方向の細かい貝殻条痕、突帯の上下に貼り付けのためのヨコナデがみられる。内面は丁寧なヨコナデ調整である。I-1424、突帯はB、刻目は刷毛目原体により、密に刻まれる。外面は横方向の刷毛目調整、内面はヨコナデ調整である。I-1581、口縁部が内側に内傾する。突帯はA、刻目はヘラ状工具による。外面は斜方向の貝殻条痕、上にナデ調整が加えられる。内面は丁寧なヨコナデ調整である。I-1690、突帯はA、刻目は棒状工具により、規則的に刻まれる。外面は斜方向の板ナデ調整、内面は丁寧なヨコナデ調整である。1705、胸屈曲部に断面三角形の突帯を貼り付ける。刻目は刷毛目原体による。外面は横方向の貝殻条痕、内面は丁寧なヨコナデ調整である。I-1742、突帯はC、刻目は棒状工具による。外面は横方向の貝殻条痕の上にヨコナデ調整を加える。内面はヨコナデ調整である。

(4) 浅鉢・高杯・鉢形土器出土状況

第1区から出土した鉢類は意外と少ない。平面的な分布は散発的で均一な分布のように見えるが、調査区の南端部に集中する傾向がある。また、濠の中心線から見れば、出土遺物は濠の西側に片寄っていることがわかる。いずれも環濠内側から投棄されたと推定できる。また、層位的な分布を見れば、いずれも第3層以下の下層に分布していることがわかる。具体的に出土土器と層位の関係を記すと、北壁ではI-1071、1090、1272の3点が第3層に含まれ、I-1090、1320、1431の3点は第4層に含まれ、I-662は投影図では断面図外に出るが、第4層に含まれる可能性が強い。第5層には出土は見られない。I-985、1642はともにわずかに土層断面図からはみ出だが、近接する第6層に含まれる可能性が強い。I-1642

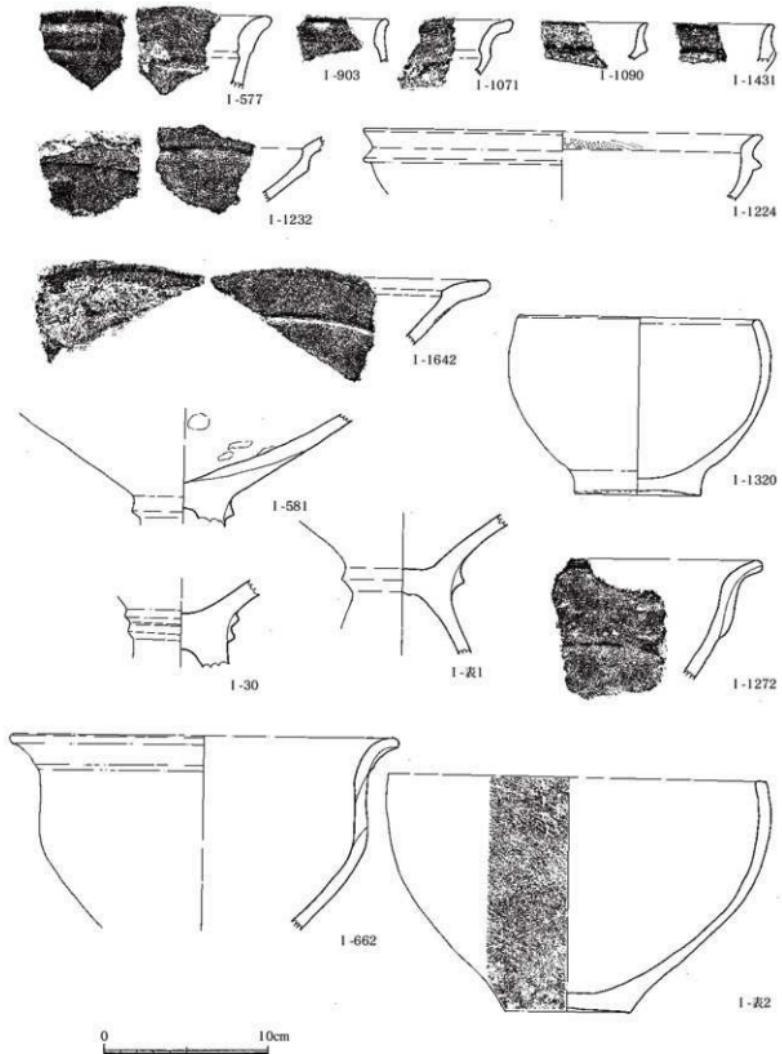


第10図 環濠第1区浅鉢・高杯・鉢形土器出土状況

は井戸の遺物が混入した可能性が強い。南壁ではI-581の1点が第4層に含まれ、I-903、1232の2点は第5層に含まれ、I-577、581の2点は第6層に含まれている。

(5) 浅鉢・高杯・鉢形土器

第11図に示した。I-577は特殊な器形をした鉢形土器である。口縁部はわずかに外反する。口縁部は内外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させている。外面は薄く、内面は厚い。外面の肥厚帯の下端にはわずかであるが段が形成され、一見、壺形土器の口縁部を思わせる。内面の肥厚部は厚く丸みを持ち、下端に大きな段が形成されている。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。胎土は精製され極めて良好である。内外面ともに黒褐色をなす。I-903は鉢形土器になると考えられる破片である。ほぼ垂直に立ち上がり、口唇部はわずかに外反し、丸くおさめる。内面の口縁部下にヘラによる抉りがみられ、鈍い稜線が形成される。内外面は横方向の丁寧なヘラナデ調整である。胎土は精製され極めて精良。内外面ともに黒褐色をなす。I-1071は胴部上半で屈曲し、口縁部は大きく外反する。口唇部は肥厚し、端部は丸くおさめる。内面には明瞭な段が形成される。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整であるが、外面は器面が剥落している。I-1090は浅鉢、胴部上半で屈曲しやや内傾気味に立ち上がり、口縁はやや外反する。口唇部はとかり気味に丸くおさめる。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整であるが、外面は保存状態が悪く荒れている。内外面ともに黄白色をなすI-1431も同様の浅鉢形土器である。屈曲部の粘土接合面で剥がれています。口唇部は

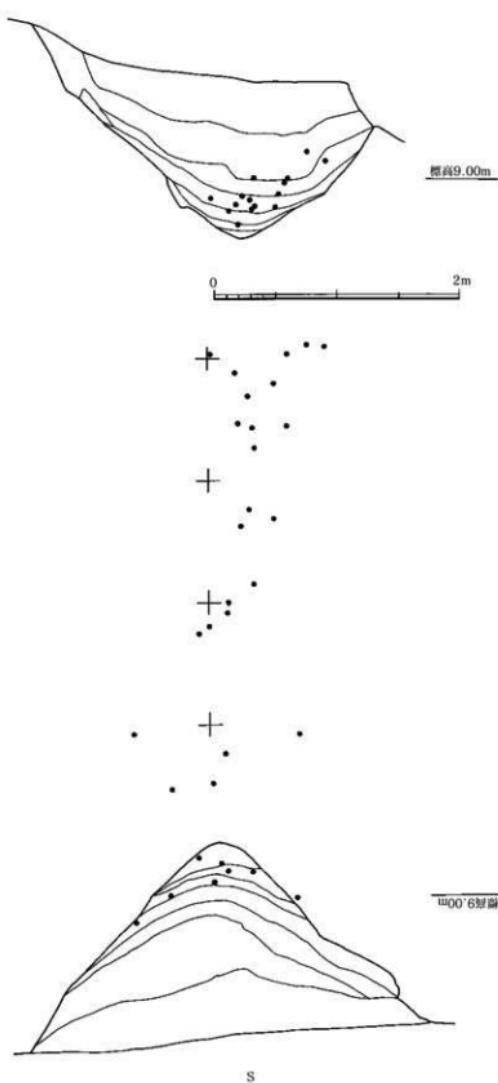


第11図 環濠第1区出土浅鉢・高杯・鉢形土器実測図

外反し、端部は丸くおさめている。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整であるが器面が荒れて遺存状態は悪い。I-1232は浅鉢形土器の胴部上半の破片である。胴部下半は底部から大きく外傾しながら立ち上がり、胴部上位で屈曲し垂直に立ち上がるが、またすぐ屈曲し大きく外傾しながら立ち上上がり口縁部に至ると考えられる。外面には第1の屈曲部に、内面では第2の屈曲部に鋭い稜線が形成される。外面は屈曲部より下か礙～斜位の刷毛目調整後に横方向のヘラ研磨調整を加えている。屈曲部より上位はヨコナデ調整である。内面は丁寧な横方向のヘラ研磨調整である。I-1224、復元口径24.4cm。胴部下半から底部を失う。胴部は丸みを持って立ち上がる。胴部上部で屈曲し内傾しながら立ち上上がり口縁部は外反する。口唇部は丸くおさめる。屈曲部には断面三角形の突帯1条を貼り付ける。外面の表面が剥離している。突帯下の胴部は表面が剥離している。突帯より上部はヨコナデ調整。内面は口縁部下に稜線ができる。横～斜方向の刷毛目調整を施した後に横方向のナデ調整を加えている。I-1320は小型の鉢形土器である。胴部の大部分を欠いているが全形を知ることができる。底部は円筒状にやや高く外底面の縁を幅1cm前後で輪状に残し、中央部を削り取り上げ底状にしている。胴部は外傾しながら丸みを持って立ち上がり、口縁部はわずかに内傾し、半球状をしている。口唇部は丸くおさめる。外面はやや雑な横方向のヘラ研磨調整、内面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。復元口径14.8cm、底部径7.7cm、器高10.9cmを測る。色調は外面が黄赤色、内面が黄白色外面に黒斑がある。I-1642、高杯の杯部の破片。体部は外傾しながら直線的に伸び、口縁部は屈曲して水平に横にのびる。口唇部は丸くおさめている。外面は器面の剥離が激しいが、元来は丁寧な横方向のヘラ研磨調整である。内面は口縁部と体部の境に明瞭な段が形成される。横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。内外面ともに褐色をなす。I-581は高杯の杯部から脚部にかけての破片である。杯部は外傾しながら直線的に立ち上がるが、口縁部を欠いている。脚部は円筒状をなし、杯部と脚部の境に断面三角形の貼り付け突帯1条をめぐらすが、脚の大部分を失う。外面は器表の状態が悪く、判然としないが、横方向のヘラ研磨調整とみられる。杯部内面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。外面は二次的加熱のため変色して桃色をなす。内面は黄赤色～灰白色をなす。脚部径5.2cmを測る。I-30、高杯の脚部破片。脚部とつき部の境に断面三角形の突帯2条をめぐらす。杯部は大きく外傾しながら立ち上上がるが、大部分を失っているので全形は不明。脚部は円筒状にのびるが下部を欠失し不明。I-表1、前者同様に高杯の脚部である。杯部と脚部の境に断面三角形の突帯条をめぐらしているが、大部分は剥離している。剥離した部分には縦～斜方向の刷毛目調整が観察できる。杯部は外傾しながら立ち上上がるが、上部を欠損し全形は不明。脚部は末広がり状にのびるが下半を欠損している。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整で仕上げている。I-1272は鉢形土器の口縁部から胴部にかけての破片。口縁部には幅広い粘土帶を貼り付けて肥厚させる。口縁は大きく外反して如意形をなす。口縁の肥厚帯の下端には段が形成される。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。外面は白黄色、内面は黄褐色をなす。I-662は前者とほぼ同様の器形をなす。底部を失うが、胴部下半は大きく外傾しながら立ち上上がり、胴中位で屈曲して胴部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部で大きく外反する。口縁部外面には粘土帶を貼り付けて幅の狭い肥厚帯を作り出している。肥厚帯の下端には段が形成されるがやや不明瞭である。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。復元口径24.6cmを測る。外面は赤褐色、内面は黄白色から黒灰色をなす。I-1320は口縁部の一部を欠損するがほぼ完形である。底部径7.6cm、底部は幅1.3cm前後の輪状をなし、内側が削り取られ、やや上げ底状をなす。体部は大きく外傾しながら立ち上上がり、中位で傾きが緩やかになり、口縁部はわずかに内傾する。口径23.1cm、器高14.2cmを測る。外面は斜位のヘラ研磨調整であるが、研磨にあたっては土器の成型後、土器をさかさまにして底部から右回りに施している。底部を中心へ渦を巻いているように見える。内面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。内底部はわずか

N

に凹凸がみられる。



第12図 環濠第1区壺形土器出土状況

(6) 壺形土器出土状況

第1区における壺形土器は良好な資料少ない。第12図に示した平面分布図では分布に特徴はなく、濠内に平均的に分布しているが、調査時の中軸線から見ると、中軸線より東側から出土した土器が24点中21点あり、環濠の東側から流れ込んだ土器が圧倒的に多いことがわかる。実際の中軸線においても24点中の18点が東側に存在し、環濠の東側、すなわち環濠の外側から投棄された土器が多いと考えられる。また、図示した土器は下層に片寄っている。北壁では第2層以下に、南壁では第4層以下に出土例がある。出土土器の具体例を見ていくこととする。

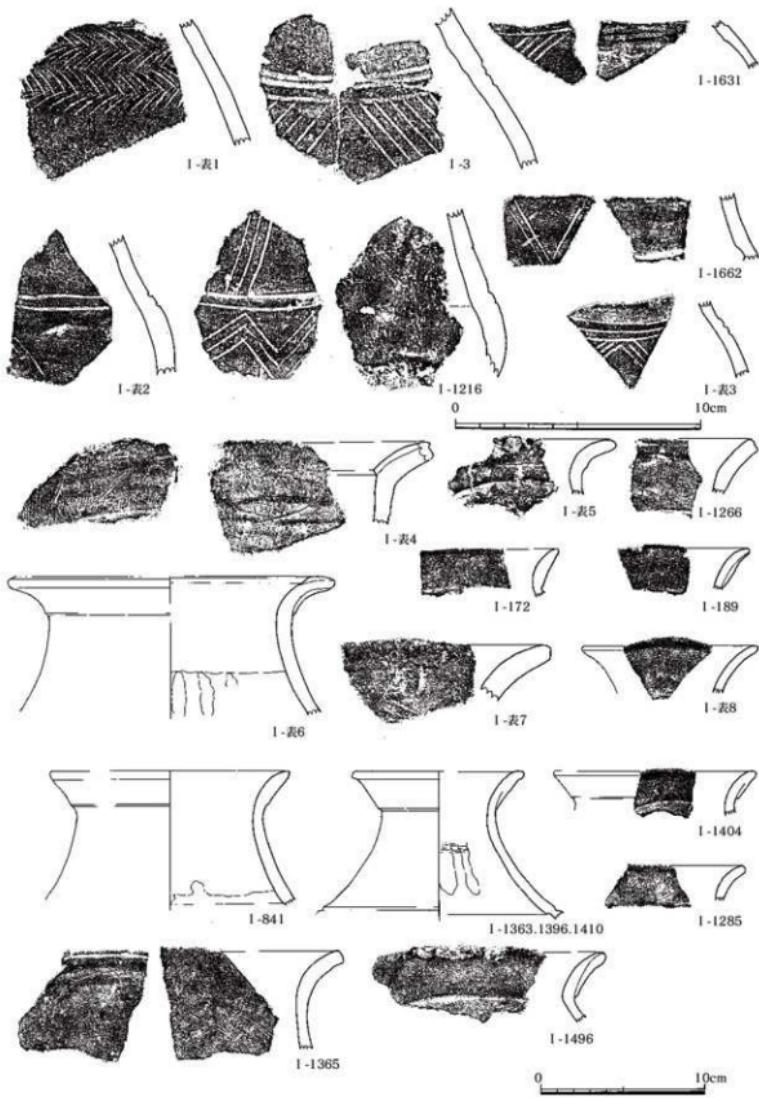
北壁ではI-3、I-401、I-1266の3点が第2層の下部に含まれ、I-166、I-172、I-1285の3点が第3層に含まれ、I-1216、I-1226、I-1365、I-1396、I-1410、I-1496、の6点が第4層に含まれ、I-1455の1点が第5層に含まれ、I-11600の1点が第6層に含まれている。

南壁ではI-449の1点が第4層に含まれ、I-

740、I-560の2点が第5層に含まれ I-189、I-1363、I-1453の3点が第6層に含まれ、I-1631、I-1662の2点が第7層に含まれている。

(7) 壺形土器

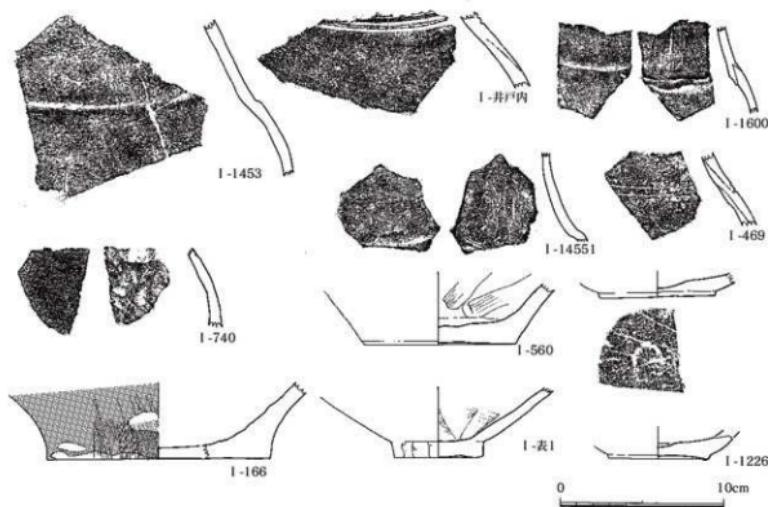
第13図 I-表1は大型壺の胴部破片。上半部に貝殻の復縁により無軸の羽状文を施文する。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面はナデ調整である。内外面ともに赤褐色をなす。この資料はミスでここに掲載した。弦状濠出土品である。I-3は大型壺、頸部から胴部にかけての破片である。頸部と胴部の境に凹線3条をめぐらし、その下、胴部上半に右側は右下がりの平行斜線7条、左側は左下がりの平行斜線5条の相対する斜線文を施文している。外面の頸部には斜位、胴部には横方向のヘラ研磨調か加えられている。内面はヘラナデ調整である。内外面ともに黄白色をなす。I-1631、小型壺の胴部破片。頸部との境に沈線1条をめぐらしている。その下に4条の弧状の平行沈線を施文している。対応部がないか弧状八字形文になると考えられる。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面は粘土接合の段がある。ヘラナデ調整。黄白色をなす I-表2、中型壺の頸部から胴部にかけての破片。頸部と胴部の境に2条の平行沈線をめぐらしている。下に3条を単位とする弧状の平行沈線が施文されるが、どのような文様になるかは明らかでない。内外面は横方向のヘラ研磨調整である。色調は内外面ともに茶褐色をなす。I-1216は中型壺、頸部から胴部にかけての破片。頸部と胴部の境にわずかであるか段が形成されている。また、この部分には2条の平行沈線がめぐらされている。文様帶は頸部と胴部上半に分かれれる。頸部には斜位の3条の平行沈線が施文され、胴部には3条の平行沈線によって連続山形文が施文されている。外面には横方向の丁寧なヘラ研磨調整を施し、内面には斜位の刷毛目調整の上に斜位のヘラナデ調整を加えている。内外面ともに黄白色をなす。I-1662、小型壺の胴部破片。頸部との境と考えられる部分に細沈線がめぐる。その下に2条の平行沈線で山形文が施文される。文様帶の直下で胴部は屈曲する。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面はナデ調整である。胎土は精良。外面は褐色、内面は灰黒色をなす。I-表3、小型壺の胴部破片。頸部との境に3条の平行沈線をめぐらし、わずかに段が形成される。その下に3条の平行沈線からなる山形文が施文される。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面はヘラケズリ状のヘラナデ調整である。外面は黒褐色、内面は白灰色をなす。I-表4、大型壺の口縁部破片。口縁部の内外面に粘土帯を貼り付け肥厚させている。外面の肥厚帯の下端には低い段が形成される。内面の段はやや高く明瞭である。口縁端部は欠損する。外面は縦方向の刷毛目調整を施した後に、雑な横方向のヘラ研磨調整を加えている。内面はヘラナデ後にヘラ研磨調整を加えている。内外面とも黄土色をなす。I-表5、口縁部から頸部にかけての破片。口縁上半は大きく外反する。口縁外面には粘土帯を貼り付けて肥厚させる。器面が荒れて調整はみにくいか内外面ともに横方向のヘラ研磨調整とみられる。内外面ともに黄白色をなす。I-1266、口縁外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。口縁と頸部の境に沈線1条をめぐらす。口唇部には粘土の接合部が一部沈線状に残る。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。内外面ともに黄赤色をなす。I-表6、大型壺の口頸部破片。頸部は内傾しながら緩やかに立ち上がる。口縁外面に粘土帯を貼り付け肥厚させる。下端には段が形成される。口縁上半が大きく外反する。端部は丸くおさめる。内面にも粘土帯を貼り付け肥厚させ口縁に平坦面を作り出している。肥厚帯の下端に段が形成されるか不明瞭でない。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は口縁部が横方向のヘラ研磨調整、頸部には指圧痕が並列し、ナデ調整が加えられる。色調は外面が黄赤色、内面が黄褐色をなす。復元口径20.0cm。I-172、中型壺の口縁部破片。外面に粘土帯を貼り付け肥厚させるが、下端の段は不明瞭である。内外面は横方向のヘラ研磨調整。胎土は精良。色調は黄白色をなす。I-189、小型壺の口縁部破片。外面に粘土帯を貼り付け



第13図 環濠第1区出土壺形土器実測図Ⅰ

肥厚させているが、下端の段はやや不明瞭。口唇部は丸くおさめる。内外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土は精良。色調は外面が褐色、内面が黄褐色をなす。I-表7、大型壺の口縁部破片。外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。下端に低い段が形成されるが不明瞭である。口唇部は平坦である。内外面は横方向のヘラ研磨調整であるが、器面の保存状態が悪い。色調は黄赤色をなす。I-表8、小型壺の口縁部破片。口縁は緩やかに反転しながら立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。内外面は横方向の刷毛目調整を施し、その上に横方向のヘラ研磨調整を加えている。胎土は精良。内外面は黄土色である。I-840・841・842・844、小型壺の口頸部破片。頸部は内傾しながら緩やかに立ち上がり、口縁部は外傾しながら直線的に立ち上がる。口縁外面には粘土帯を貼り付けて肥厚させる。肥厚帯の下端には低い段を形成する。胸部との境にも凹線をめぐらし段を形成している。内外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。外面には部分的に黒色の顔料が残っていて彩文土器の可能性が強い。外面は黄灰色、内面は黄白色～黒灰色をなす。復元口径14.8cmを測る。I-1363・1396・1410は中型壺の口縁部から頸部にかけての破片である。頸部は内傾しながら立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。口縁端部は丸くおさめている。口縁部には粘土帯を貼り付けて肥厚させる。粘土帯の段はあまり明瞭でない。頸部と胸部の境に沈線1条をめぐらし、わずかに段が形成されている。内面にも粘土接合による段がわずかに残っている。外面と口縁部の内面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。内面の頸部には横方向の刷毛目調整と指圧痕が残り、ナデ調整が加えられる。胎土は精製され極めて良質である。彩文土器の可能性が高い。色調は外面が褐色、内面が黄白色をなす。I-1404、小型壺の口縁部破片。外面に粘土帯を貼り付け肥厚させる。肥厚帯の下端には明瞭な段が形成される。口唇部は丸くおさめる。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土は精製され良質である。色調は黄赤色をなす。I-1285、小型壺の口縁部破片。口唇部は丸くおさめる。内外面は横方向のヘラ研磨調整。胎土は精良。黄赤色をなす。I-1365、口縁部から頸部にかけての破片、口縁部が大きく外反する。口唇部は粘土接合部か沈線状に残る。内外面は斜位の刷毛目調整の上にヘラナデ調整を加えている。部分的に刷毛目が残っている。外面は白灰色～黄赤色、黄赤色～褐色である。I-1496は口縁外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。下端に形成された段は明瞭、頸部は大きく開く。口唇部は丸くおさめる。内外面は横方向のヘラ研磨調整。二次的に火を受けて変色している。内外面は橙白色であるが変色部分は灰色をなす。

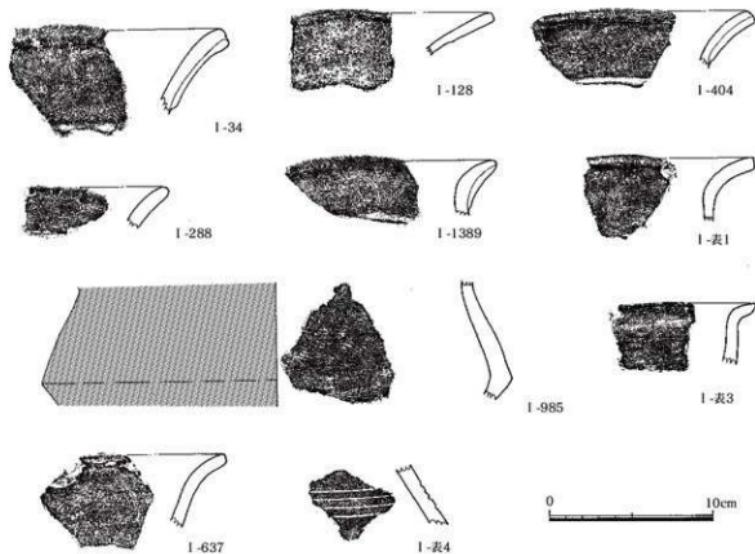
第14図 I-1453、中型壺の頸部から胸部にかけての破片。頸部と胸部の境に段が形成される。外面は横方向のヘラ研磨調整。内面は横方向のナデ調整である。色調は外面が褐色、黒斑がある。内面は黄土色である。I-井戸、大型壺の胸部破片。頸部との境に平行沈線3条をめぐらす。外面は斜位のヘラ研磨調整。内面は斜位のヘラナデ調整である。内外面ともに褐色をなす。I-1600は小型壺の頸部から胸部にかけての破片。頸部と胸部の境に小さな段が形成される。内面には粘土接合のためにできた段が二重にあり、極めて明瞭である。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。内面は同様に横方向の丁寧なヘラナデ調整である。胎土は精製され極めて良質である。色調は内外面ともに黄白色をなす。I-740、小型壺の胸部破片。頸部との境に細沈線2条をめぐらす。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面は指頭痕が残り、上にナデ調整が加えられる。外面は褐色、内面は灰褐色をなす。I-1455は小型壺の頸部破片。頸部と胸部の境に小さな段が形成される。内面にも同様の小さな段ができる。外面は口縁部にあたる上部は横方向の丁寧なヘラ研磨調整で、頸部は斜方向の丁寧なヘラ研磨調整である。内面は口縁部の部分が横方向の丁寧なヘラ研磨調整で、頸部はヨコナデ調整である。胎土は精良。色調は内外面ともに赤褐色をなす。I-469、中型壺の頸部から胸部にかけての破片。頸部と胸部の境に細沈線2条をめぐらす。内外面は横方向のヘラ研磨調整。黄褐色をなす。I-560、I-401は中型壺の底部破片。底部復元径は10.1cm



第14図 環濠第1区出土壺形土器実測図II

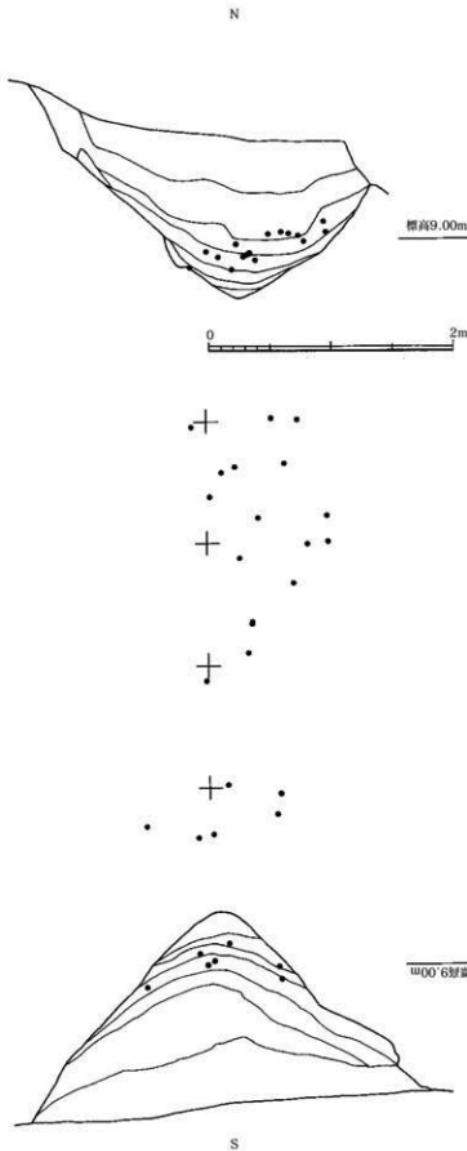
を測る。底部は低い円盤状をなしている。外底部には木葉痕がついている。胴部は大きく外傾しながら立ち上がる。調整痕は器面の遺存状態が悪く、明らかにできない。胎土は精良。色調は内外面ともに黄土色をなす。I-166、大型壺の底部である。底部復元径は13.8cmを測る。安定した平底で胴部は外傾しながら立ち上がる。外面の底部近くは縦方向の刷毛目調整が施されるが底部より2cmより上部は刷毛目調整の上に縦方向のヘラ研磨調整を加えている。全面に丹塗りされるか底端部には及ばず、垂れ落ちか部分的にみられる。内底部は器面が剥離していて詳細は不明。色調は外面の丹塗りの下地が黄褐色、内面が黒灰色をなす。I-表1、胴部から底部にかけての破片である。底部はいわゆる円盤貼り付けの底部で、円盤状をなし、高さ0.9cmで比較的高い。底部径5.6cm。胴部は外傾しながら立ち上がる。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。内面はヘラケズリ状のヘラナタ調整で内底部にはヘラケズリの痕跡が放射状に残っている。胎土は精製され極めて良質である。色調は外面が黄褐色、内面が黒褐色をなす。I-1226、中型壺の底部である。底部はわずかに上底状をなす。胴部は丸みを持って立ち上がる。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。外底部は一方向からのヘラ研磨調整。内底部は器面の剥離が著しく詳細は不明。胎土は精製され良質である。色調は外面が白灰色～黒褐色、内面は黒褐色から黒色をなす。底部径6.2cmを測る。

第15図1-34、大型の壺形土器の口縁部破片。口縁部に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。特に口唇部付近が最も肥厚し、平坦面を作り出している。口縁帶の下端には段階が形成される。口縁帶には斜位の刷毛目調整を施し、その上にヘラ研磨を加えている。内面は丁寧なヘラ研磨調整である。内外面ともに丹塗り研磨されている。胎土の色調は内外面ともに赤桃色をなす。I-128、口縁部は大きく外傾しながら直線



第15図 環濠第1区出土壺形土器実測図III

的にのびる。口唇部は丸くおさめ、口唇部の中央に浅い凹線1条がめぐるが、これは粘土接合部の名残と考えられる。頸部で屈曲し、下方に延びると考えられる。外面はやや磨滅していて調整は観察しにくいか斜位の刷毛目調整を施している。内面は横方向の刷毛目調整で、その上にヨコナテ調整を加え、刷毛目を消している。色調は外面が黄赤色、内面が黄土色～黒褐色をなす。大型の鉢形土器になると考えられる。I-404、大型の壺形土器の口縁部破片。口縁部に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。肥厚した口縁部の下端には段が形成されるか段は低い。口唇部は平坦面を作り出すか中央部に凹凸状のくぼみか部分的に残る。内外面ともに丁寧なヘラ研磨調整である。色調は外面が黄土色～黄赤色、内面が黄赤色をなす。I-288、中型の壺形土器の口縁部破片。口縁部に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。下端の段は不明瞭である。口唇部は丸くおさめ、中央部に細綱状の粘土接合部が残っている。内外面ともにやや粗雑なヘラ研磨調整である。色調は外面が黄土色～黄褐色、内面は赤褐色をなす。I-1389、中型の壺形土器の口縁部破片。口縁部は緩やかに外反する。口縁部に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。下端部には段が形成されるにかわり凹線1条がめぐる。内外面は横方向のヘラ研磨調整、外面は丹塗りされている。胎土は精製されて良質である。色調は内外面ともに黄白色をなすが、内面は一部に赤色の部分がある。I-表1、中型の壺形土器の口縁部破片。口縁部は大きく外反する。口唇部は平坦に作り上げる。外面は縦～斜方向の刷毛目調整後、



第16図 環濠第1区壺形土器出土状況

横方向のヘラナデ調整を加えている。内面の口縁部は横方向の刷毛目調整を施した後に横方向のヘラナデ調整を加えている。胴部は横方向のヘラナデ調整である。色調は外面が黄灰色～黄土色、内面は黄赤色をなす。壺形土器の可能性もある。I-985、胸部がくの字形に屈曲する深鉢形の土器と考えられる。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、全面が丹塗りされている。口縁部は外反するが失われている。内面は斜位の刷毛目調整を施した後に、横方向のヘラ研磨調整を加えて刷毛目を消している。色調は外面の下地は黄白色、内面は黒褐色をなす。I-表2、口縁部が屈曲して外反する。口唇部は丸くおさめ、内外面は横方向のヘラ研磨調整である。色調は内外面とも赤色をなす。鉢形土器になると想る。I-637、口縁部は緩やかに外反する。口唇部は平坦に仕上げている。内外面ともに丁寧なヘラ研磨調整である。色調は外面が褐色～黒色、内面は黒色をなす。I-表3、大型の壺形土器の胴部破片。頸部と胴部の境に的確な4条の平行沈線をめぐらしている。外面は丁寧な横方向のヘラ研磨調整、内面は横方向のヘラナデ調整である。色調は外面が黄赤色、内面は黄白色をなす。

(8) 壺形土器出土状況

第16図は第1区における壺形土器の出土状況である。良好な資料が少ない。平面分布図では1ヶ所に集中するとかの特徴ではなく、濠内に平均的に分布しているが、調査時の中軸線から見ると、中軸線より東側から出土した土器が24点中21点あり、環濠の東側から流れ込んだ土器が圧倒的に多いことがわかる。実際の中軸線においても25点中の21点が東側に存在し、環濠の東側、すなわち環濠の外側から投棄

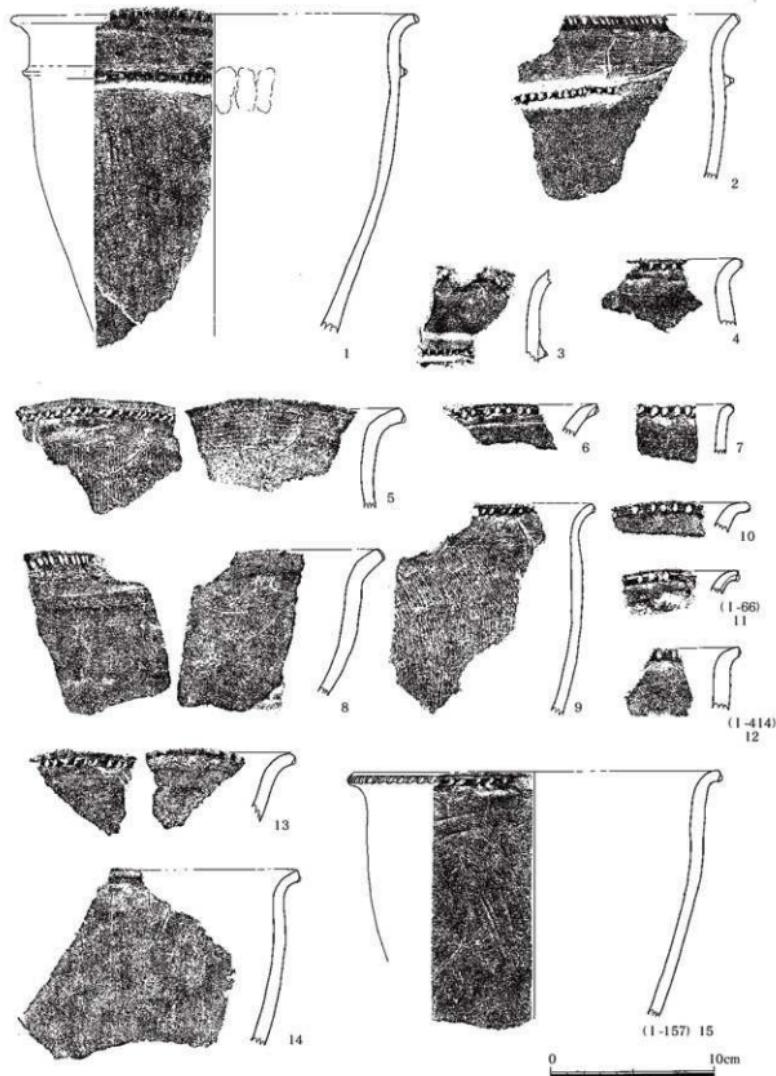
された土器が多いと考えられる。また、図示した土器は下層に片寄っている。北壁では第2層以下に、南壁では第4層以下に出土例がある。出土土器の具体例を見ていくことにする。

北壁ではI-174、I-410、I-527、I-1034の4点が第2層の下部に含まれ、I-298、I-541、I-1628、I-635の4点が第3層に含まれ、I-851、I-1086、I-1353、I-1357、I-1359、I-1364、I-1369、の7点が第4層に含まれ、I-1024の1点が第6層に含まれている。

南壁ではI-209、I-456、I-559、I-700の4点が第4層に含まれ、I-1028の1点が第5層に含まれ、I-506、I-1024の2点が第6層に含まれている。

(9) 麗形土器

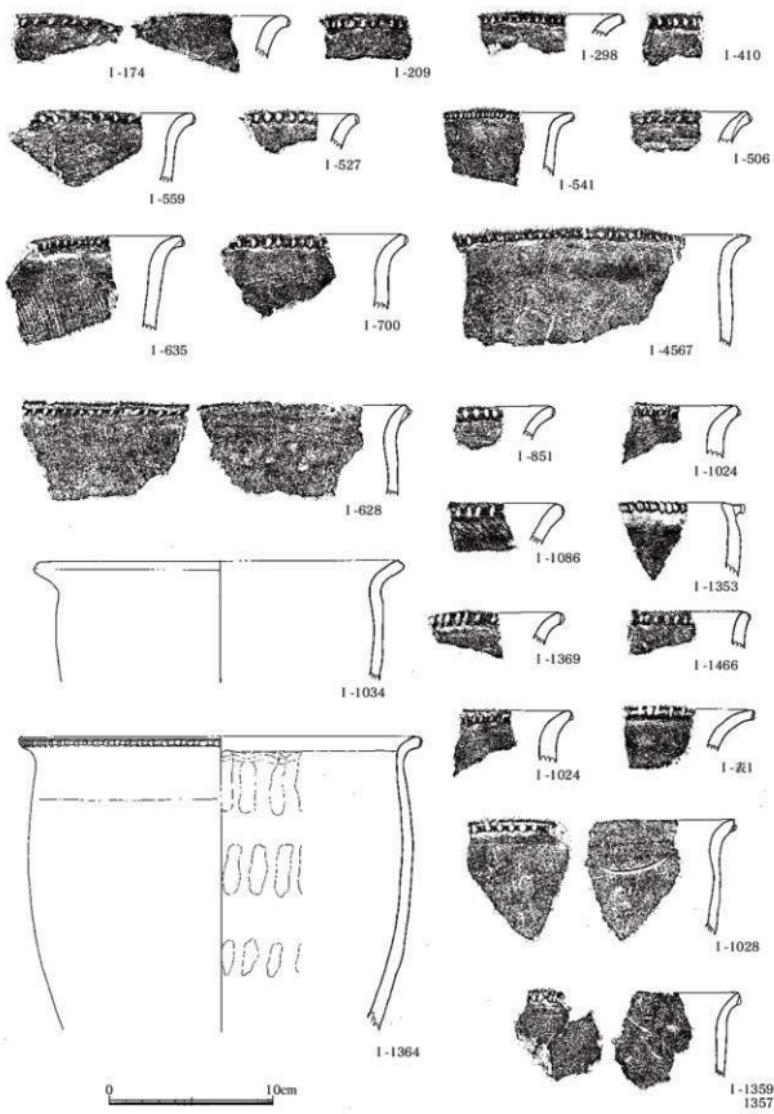
第17図1はほぼ全形を知ることができる。底部を失っているか胴部下半は外傾しながら直線的に立ち上がり、胴部中位から上部はほぼ垂直に立ち上がる。口縁部はわずかに外反し、所謂如意形口縁をなす。口唇部には全面にヘラ状工具による刻目を施す。口縁下には断面三角形の貼り付け突帯1条をめぐらしている。突帯の頂部にもヘラ状工具による小さい刻目が施されている。口縁部の内外面はヨコナデ調整、口縁部と突帯の間は右下がりのヘラナデ調整、突帯下の胴部は縱方向のヘラ研磨調整である。内面はヘラナデ調整、突帯部分には指圧痕が並列して残っている。色調は外面が赤褐色～黒褐色、内面は黄土色をなす。復元口径25.0cm、器高は24.0cm前後と考えられる。2は口縁部が如意形をなし、口縁下に突帯1条をめぐらした麗形土器である。口唇部は平坦に仕上げ、全面にヘラ状工具による刻目を密に施している。胴部の突帯は貼り付けられたもので断面台形をなす。刻目はヘラ状工具によるかやや不規則である。外面は縱方向の刷毛目調整であるか突帯は刷毛目調整後に貼り付けられ、突帯の下方から上はヨコナデ調整が加えられている。内面は口縁部がヨコナデ調整で、胴部は器面の状態が悪く不明。色調は外面が黄白色褐色、一部に黒斑がみられる。内面は黄白色をなす。3、口縁部を失うか、如意形口縁を持ち胴部に貼り付け突帯1条をめぐらした麗形土器である。口縁部は緩やかに外反する。胴部の突帯は断面三角形をなしヘラ状工具により小さな刻目を施す。内外面はともにヨコナデ調整である。色調は外面が褐色で、一部に黒斑が認められる。内面は黄赤色をなす。4、胴部は内傾しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。口唇部は丸くおさめる。下端に片寄ってヘラ状工具により刻目が施される。外面はヨコナデ調整。内面は口縁部がヨコナデ調整、胴部は横方向のヘラナデ調整である。色調は外面が褐色、内面が黄白色～褐色をなす。5、胴部はほぼ直線的に立ち上がる。口縁部は大きく外反する。口唇部は平坦に仕上げ、ヨコナデを加えている。下端部にヘラ状工具により的確な刻目が密に施されている。外面は縱方向の刷毛目調整、口縁部はあとからヨコナデを加えて刷毛目を消している。内面は口縁部が横方向の刷毛目調整、上からヨコナデを加えて刷毛目を消している。胴部は横方向のヘラナデ調整である。口縁部下には指圧痕が並列している。色調は内外面ともに黄白色をなす。6、口縁部は大きく外反する。口唇部は丸くおさめ全面にヘラ状工具により刻目が密に施される。外面は横方向のヘラナデ調整、内面は横方向の刷毛目調整を施している。色調は内外面とともに黄土色をなす。7、口縁部がわずかに外反する。口唇部は丸くおさめ全面にヘラ状工具により深い刻目が施される。内外面はヨコナデ調整を加えている。内面屈曲部には稜線ができる。色調は内外面ともに黄赤色をなす。8は如意形をなすが、全体に器壁が厚い。胴部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。口唇部は平坦に仕上げ、全面にヘラ状工具により刻目を密に施している。外面は口縁部がヨコナデ調整、胴部は横方向の細かい刷毛目調整である。内面は口縁部が横方向の細かい刷毛目調整、胴部はナデ調整である。色調は内外面とともに黄土色をなす。9、口縁部は緩やかに外反し、如意形をなす。口唇部は丸くおさめ、下端にヘラ状工具により刻目を施す。外面



第17図 環濠第1区出土甕形土器実測図 I

は縦～斜方向の刷毛目調整、口縁下はその上にヨコナデ調整を加えている。内面は口縁部からヘラナデ調整、胸部はナデ調整である。口縁部下には指圧痕が並列している。色調は外面が黄赤色～黒褐色をなす。内面は黄土色をなす。10、口縁端部がわずかに外反する。口唇部は丸くおさめ下端に片寄ってヘラ状工具により刻目が施される。内外面は横方向のヘラナデ調整を加えている。色調は内外面ともに黄土色をなす。11、口縁部が緩やかに外反する。口唇部は丸くおさめ、下端に片寄ってヘラ状工具により深い刻目が施される。刻みの上位には粘土の接合部が沈線状に残り、一見、刻目部分が突帶状になる。内外面はヨコナデ調整を加えている。色調は外面が褐色、内面が茶褐色～褐色をなす。12、口縁端部がわずかに外反する。口唇部は丸くおさめ下端に片寄って棒状工具により刻目が施される。内外面は横方向のヘラナデ調整を加えている。色調は内外面ともに黄赤色をなす。13、胸部は直線的に立ち上がる。口縁部は緩やかに外反する。口唇部は丸くおさめ、下端にヘラ状工具により刻目を施す。刻目はやや不規則である。外面には縦～斜方向の刷毛目調整が施されるが、刷毛目原体には細かい刷毛目とやや大きい刷毛目の二種類がある。内面の口縁～頸部にかけて横～斜位の刷毛目調整が施される。口縁部内外面にはヨコナデ調整を加えて刷毛目調整を消している。胸部内面はヘラナデ調整である。色調は外面が黄赤色～褐色、内面は褐色である。14、口縁部は如意形をなす。胸部は丸みを持って立ち上がる。口唇部は平坦に仕上げ、刻目は付けられない。外面には細かい刷毛目調整を施す。内面の口縁部は横方向のヘラ研磨調整、胸部は斜位のヘラナデ調整である。色調は外面が黄白色～黒灰色、内面が黄土色をなす。15、ほぼ全形を知ることができ。底部を失っているか胸部下半は外傾しながら直線的に立ち上がり、胸部中位から上部はほぼ垂直に立ち上がる。口縁部は上部で屈曲して外反し、所謂如意形口縁をなす。口唇部下端にヘラ状の工具により刻目を施す。刻目の上部には沈線1条がめぐり、刻目は一見、突帶状になっている。口縁部の内外面はヨコナデ調整、胸部外面は口縁部直下が横方向、その下位が斜方向のヘラナデ調整、最後に棒状工具により、やや難なナデを行っている。内面はヘラナデ調整である。口縁部下に二段にわたって指圧痕が並列して残っている。色調は外面の口縁部周縁が黄白色、その下は褐色をなし、ススが付着する。内面は黄白色をなす。口径23.0cm、器高は22.0cm前後と考えられる

第18図I-174、口縁部は緩やかに外反し、如意形をなす。口唇部は丸くおさめ、中央に浅い沈線1条がめぐる。下端に棒状工具による刻目を規則的に施す。外面はヨコナデ調整、内面は縦方向の刷毛目調整の上にナデ調整を加えている。色調は外面が褐色、内面が黄白色をなす。I-209、口縁は緩やかに外反する。口唇部は平坦に仕上げ、下端部に刷毛目原体による刻目を施す。外面は縦方向の刷毛目調整、内面はヘラナデ調整である。外面の口縁部にもヨコナデが加えられ刷毛目を消している。色調は外面が黄灰色、内面が灰色をなす。I-298、口縁部は緩やかに外反し、如意形をなす。口唇部は丸くおさめ、口唇部下端にヘラ状工具による刻目を規則的に施す。外面は横方向のヘラナデ調整、内面も横方向のヘラナデ調整である。色調は外面が黄土色、内面が黄白色～黄赤色をなす。I-410、口縁部は緩やかに外反する。口唇部は肥厚気味に丸くおさめる。口唇部の下端に片寄ってヘラ状工具による刻目を施す。内外面はともにヨコナデ調整である。色調は外面が赤褐色で一部に黒斑かみられる。内面は赤褐色である。I-559、口縁部は如意形をなす。口唇部は丸くおさめ、下端にヘラ状工具により規則的な刻目を施す。外面の口縁部直下に縦方向の刷毛目調整、胸部に条痕の調整を加えている。内面は横～斜位の刷毛目調整を施したあとヨコナデ調整を加えている。胸部はナデ調整である。口縁下に指圧痕が並列している。色調は外面が褐色、内面が黄土色～黒褐色をなす。I-527、口縁部は緩やかに外反する。口唇部は肥厚気味に丸くおさめる。口唇部の全面にヘラ状工具による刻目を整然と施す。外面斜位の刷毛目調整を施し、上に横方向のヘラナデ調整を加える。内面は横方向のヘラナデ調整である。色調は内外面とも



第18図 環濠第1区出土甕形土器実測図II

に黄土色である。I-541、口縁部は大きく外反する。口唇部は丸くおさめる。口唇部の下端に片寄ってヘラ状工具による刻目を密に施文する。外面は斜位の刷毛目調整を施した後に、横方向のヘラナデ調整を加えている。内面は口縁部が横方向、胸部が斜位のヘラナデ調整である。色調は内外面ともに赤褐色である。外面の一部に黒斑がみられる。I-506、口縁部は緩やかに外反する。口唇部は平坦に仕上げる。口唇部の下端に片寄って棒状工具による刻目を施文する。外面は縦の刷毛目調整を施した後に、横方向のヘラナデ調整を加えている。刷毛目の終点が口縁下に並列して残っている。内面は横方向のヘラナデ調整である。色調は外面が黄白色～褐色、内面は褐色～黒褐色をなす。I-635、胸部が直線的に立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。口唇部は丸くおさめ、下端部にヘラ状工具による刻目が浅く密に施文される。刻目の上部に細沈線をめぐらし、一見突尖状に見える。外面は縦方向の刷毛目調整、口縁部とその下は斜位のヘラナデを加えて刷毛目を消している。内面は口縁部がヨコナデ調整。胸部が横方向のヘラナデ調整である。口縁下には指圧痕が並列している。色調は外面が黄土色、内面が赤白色～灰白色をなす。I-700、口縁部は如意形をなす。口唇部は丸くおさめ、全面にヘラ状工具により規則的な刻目を施文する。口縁部内にヨコナデ調整を加えている。胸部は内外面ともにナデ調整を加えている。色調は外面が褐色、内面が黄白色～褐色をなす。I-4567、口縁は如意形をなす。口唇部は丸くおさめ、下端にヘラ状工具により刻目を施文するが、刻目はやや不規則である。口縁部の内外面はヨコナデ調整、外面の胸部は横方向のヘラナデ調整である。内面はナデ調整であるが、指頭痕が3段に並列し凹凸が著しい。色調は内外面ともに黄白色～黄土色をなす。I-628、口縁部は緩やかに外反し、如意形をなす。口唇部は平坦に仕上げ、下端にヘラ状工具により規則的な刻目を施文する。外面は口縁下2cmの範囲は縦方向のヘラナデ調整、その下は斜位の刷毛目調整を施す。内面は口縁部に横方向のやや粗い刷毛目調整を施し、上にヨコナデ調整を加えている。胸部はナデ調整である。口縁下に指頭痕が並列している。色調は外面が黄褐色、一部に黒斑がみられる。内面は黄白色をなす。I-851、口縁部は如意形をなす。あまり外反しない。口唇部は丸くおさめ、全面に刷毛目原体により規則的な刻目を施文する。外面は縦方向の刷毛目調整を加えた後に横方向のヘラナデ調整を施している。内面は横方向のヘラナデ調整である。色調は外面が黄褐色、スカ付着している。内面が褐色をなす。I-1024、口縁部は如意形をなす。あまり外反しない。口唇部は平坦面を作り出している。下端にヘラ状工具により刻目を施文する。外面は縦方向の刷毛目調整を加えた後に横方向のヘラナデ調整を施している。内面は横方向のヘラナデ調整である。色調は外面が黒褐色、スカ付着している。内面が黄白色をなす。下段のI-1024と同一個体である。ミスで掲載した。I-1034、胸部上半部を残す。胸部中位から上部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部の下で内傾し、口縁部ははわずかに外反し、所謂如意形口縁をなす。口唇部は丸くおさめ中央部に粘土接合面が凹線状に残る。刻目は施されない。口縁部の内外面はヨコナデ調整、胸部外面は口縁下に指頭痕が並列して残り、その上に斜方向のヘラナデ調整を施している。内面はヘラナデ調整である。口縁下には外面の指頭痕による瘤状の高まりが同様に並列している。色調は外面が黄白色～褐色、黒斑がある。内面は白黄色をなす。口径22.7cmを測る。I-1364、ほぼ全形を知ることができる。底部を失っているが胸部下半は外傾しながら直線的に立ち上がり、胸部中位から上部は内傾しながら立ち上がり、胸部に膨らみがみられる。口縁部は大きく外反し、所謂如意形口縁をなす。口唇部は丸くおさめ、下端部に片寄ってヘラ状工具による刻目を施文する。口縁部の内外面はヨコナデ調整、胸部外面は縦方向のヘラナデ調整、ヘラナデには細かい条線が観察できる。部分的にスカ付着する。内面はヘラナデ調整、口縁部の下から胸部下半にかけて3段にわたって指圧痕が並列して残っている。色調は外面が黄褐色、黒斑がある。内面は胸部上半部が白黄色、胸部中位のやや下部は帶状に黒褐色に変色し、さらに下位は桃色に変色している。復元口径25.6cm、器高は26.0cm

前後と考えられる。I-1086、口縁部はほとんど外反しない。口唇平坦に仕上げ、口唇部の下端にヘラ状工具により刻目を施文する。外面には斜位の条痕を施している。内面も同様の条痕を施し、上に横方向のヘラナデ調整を加えている。色調は外面が灰色、内面が黄白色をなすI-1353、口縁部には突帶を貼り付ける。突帶は高く、口縁部に接しているので口縁部は幅広い面を作り出している。端部全面にヘラ状工具により刻目を施文する。口縁直下には強い指ナデを施し凹線状のくぼみを作り出す。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面も同様に横方向のヘラナデ調整である。色調は内外面ともに黄土色をなす。I-1369、口縁部は如意形に外反する。口唇部は平坦に作り出され、全面にヘラ状工具に刻目を施文する。内外面は横方向のヘラナデ調整である。色調は内外面ともに黒褐色をなす。I-1466、口縁部はほとんど外反しない。口唇部は丸くおさめ、口唇部の下端にハケ目原体により刻目を施文する。横方向の刷毛目調整を施した後、ヘラナデ調整を施しさらに部分的に縦方向の細かい刷毛目調整を施している。内面は横方向の刷毛目調整を施した後に横方向のヘラナデ調整を加えている。色調は内外面ともに黄土色をなすI-1024、口縁部は如意形に外反する。口唇部の下端にヘラ状工具により規則的な刻目を施文する。刻目の上に沈線がめぐり刻目は一見突帶状に見える。外面は細かい縦方向の刷毛目調整、内面の口縁部は横～斜位の細かい刷毛目調整で、一部上からナデが加えられている。脚部はナデ調整である。色調は外面が褐色、内面が黄土色をなすI-表1、口縁部は大きく外反する。口唇部は平坦に作られ、その全面にヘラ状工具により刻目を施文する。口唇部の中央には粘土の接合部か凹線状に残っている。内外面は横方向のヘラナデ調整を加えている。外面にはスリップかゆけられている。色調は外面が黄赤色、内面が黄土色をなすI-1028、口縁部は如意形に外反する。口唇部の下端にヘラ状工具により規則的な刻目を施文する。刻目の上に沈線がめぐり刻目は一見突帶状に見える。外面は細かい縦方向の刷毛目調整、内面の口縁部は横～斜位の細かい刷毛目調整で、一部上からナデが加えられている。脚部はナデ調整である。色調は外面が褐色、内面が黄土色をなす。I-1359・1357、口縁部は緩やかにわずかに外反する。口唇部は平坦に仕上げ、下端に刷毛目原体による刻目を密に施文している。外面は縦～斜方向の細かい刷毛目調整、内面は口縁部に横～斜方向の細かい刷毛目調整、下はナデ調整を加えている。色調は外面が褐色、色調は外面が赤褐色、内面が黄白色～赤褐色をなす。

第4章 環濠第2区の調査

1. 遺構

(1) 環濠

第2区は第1区の南側に設定した調査区である。第1区と第2区の間には明治大学のトレンチが存在する。第1区と明治大学の第10トレンチの間は2m、明治大学のトレンチ幅1.5m、明治大学第10トレンチと第2区の間1m、第1区と第2区の間は4.5m開いている。第2区はそれから4mを調査区とした。

第2区は第1区に比較して遺存状態は良好である。第2区の濠幅は北側で3.98m、南側で3.00mを測る。濠底は南側で標高8.50m、北側で標高8.38mを測り、南側から北側に向かってわずかに傾斜している。

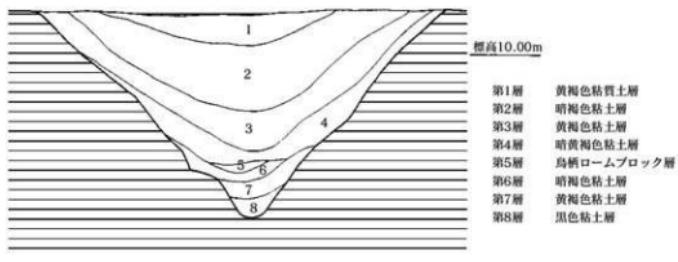
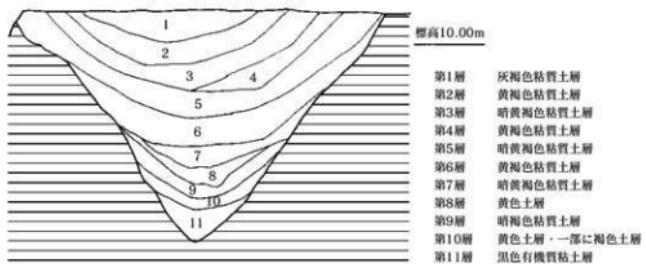
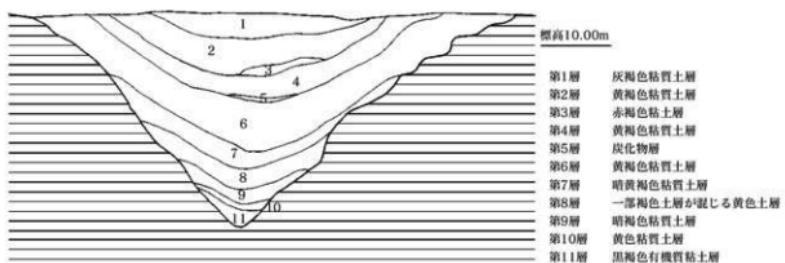
(2) 北壁の土層

第5図に示したように第1区の南側に4.5m離れて第2区を設定した。第1区は後世の削平により大きく改変されていたが、第2区は比較的安定している。ただし、上部かかわり削平されていることは第1区と同様である。

第19図に第2区の土層断面図を示した。①は第2区北壁の断面図、②は第2区南壁の断面図、③は明治大学第10区トレンチ南壁断面図である。

第2区の北壁の土層堆積はいずれもレンズ状をなし、環濠の両側から流れ込んだ自然堆積であることがわかる。環濠の西側における確認面は標高10.24m、東側の確認面は標高10.2m、濠底は標高8.5m、濠幅3.98m、深さ1.8mを測る。断面形はV字形というよりは三角形に近い。遺構の確認面は黄褐色の鳥栖ローム層であるが、標高9.00mのところで白色の八女粘土層に変わる。

濠内の土層堆積は、第1層、環濠の中央部に堆積した土層である。灰褐色粘質土層、直径2~5mm前後の赤褐色の鳥栖ロームの塊が含まれている。層の幅は1.8m、層の厚さは中央部が最も厚く20cmを測る。第2層は黄褐色粘質土層、第1層に比較してやや大きめの径2~10mmの鳥栖ロームの塊が均一に混じる。炭も散在している。第2層の幅は2.28m、層の厚さは中央部が最も厚く、厚さ36cmを測る。壁際に向かって徐々に薄くなり伸びるが、上部は削平によって切断されている。第3層は第2層の中央部にブロック状に堆積する土層である。赤褐色の粘土層である。幅72cm、厚さ8cm。環濠の外側の流入土と考えられる。第4層は黄褐色粘質土層、ほぼ均一に堆積する土層である。が、全体に東側に堆積した土層が厚く、西側に向かってわずかに薄くなっている。堆積土の供給は東西、すなわち環濠の内外の両者が考えられるが、幾分外側からの方が多かったと考えられる。土層の厚さは中央部で20cmを測る。第5層は炭化物層である。中央部に薄く堆積する。層の幅は56cm、厚さは4cmを測る。第6層は黄褐色粘質土層。鳥栖ロームの径2~10mmの塊が多量に含まれる。また、この層に含まれる炭化物も量が多い。中央部が最も厚く40cmを測る。両側壁に沿った部分も厚さを減ずることなく、立ち上がりしている。包含される土器の量も多く、この層の供給源は環濠の東西、すなわち内外の両側からのものと考えられ、その量から考えるとかなりの時間を要したか、あるいは流入の頻度が激しかったとみられる。第7層は暗黄褐色粘質土層である。鳥栖ロームの塊を多量に含み、炭化物の量も多い。東西の壁に沿って堆積している。東側の層の端部は標高9.74m、西側の層の端部は標高9.74mと全く同じであるが、堆積の厚さには大きな差がある。西壁に沿った部分は厚さ22cm、東壁に沿った部分では厚さ10cmとその差は歴然としている。土層堆積から見る限り、西側、すなわち環濠内から流入したほうか理解しやすいが、上部の壁の状態と第7層上部、(第6層下部)の段階で濠の再掘削があった可能性もある。第8層は鳥栖ロームのブロックを多量に含み、一部褐色土層が混じ



第19図 環濠第2区土層断面実測図

る黄色土層である。厚さ16cm。特に中央部には鳥栖ロームの大きい塊が存在する。このブロックを境にして、この層は上下に細分できる。下層は褐色土層がより多く含まれる。第9層は鳥栖ロームのブロックを含んだ暗褐色粘質土層である。厚さ12cm前後、土は東西、すなわち環濠の内外から流れ込んだとみられる。第10層は厚さ8cm前後、鳥栖ロームのブロックを多量に含み、一部八女粘土層のブロックも含んでいる。一部に褐色土をmajiedた黄色粘質土層である。第11層は最下層である。八女粘土層のブロックを多量に含む黒褐色有機質粘土層である。厚さは16cm。土層の状態から環濠の内側から流れ込んだと考えられる。

(3) 南壁の土層

第2区の南壁は北壁同様に遺存状態は良好である。検出面はほぼ水平である。ただし周辺の遺構の遺存状態からすれば上部を1m前後削平されている可能性が高い。環濠西側の壁の確認面は標高10.26m、東側の確認面は10.28mを測る。鳥栖ローム層と八女粘土層の境は西壁が標高8.98m、東壁が9.02mである。環濠の埋土はいずれもレンズ状をなす。上から、第1層、幅144cm、厚さは中央部で30cmを測る。鳥栖ロームの径2~5mmの塊を多く含んだ灰褐色粘質土層である。第2層は幅184cm。厚さは20cm前後でほとんど変わらないか東側が若干薄くなる。鳥栖ロームの径2~10mmの塊を多く含んだ黄褐色粘質土層である。炭化物を多く含んでいる。第3層は幅228cm、厚さ22cm、東側に向かって徐々に薄くなる。径10~20mmの鳥栖ロームの塊を含んでいるが量的には少ない。ただし、中央部には25cm×15cmの大型の鳥栖ロームのブロックをも含んでいる。上層よりはやや暗い暗黃褐色粘質土層である。炭化物を含んでいる。第4層は濠の西側にのみに堆積する土層である。層の厚さは24cm。黄褐色粘質土層である。第2層~第4層はその土層堆積から西側、すなわち環濠内側から流れ込んだ土層と考えられる。第5層は径5~20mmの鳥栖ロームの塊を含む暗黃褐色粘質土層である。層の厚さは22cm前後でほとんど変化は見られない。濠内全域を覆う。第6層は鳥栖ロームの径2~10mmの塊を多量に含んだ黄褐色粘質土層である。厚さは中央部が厚く24cm前後を測る。層の端部は東側が標高9.88m、西側が標高10.26cmと大きな差がある。状況から堆積土の供給は東西両側からのものであるが、量的には西側、環濠の内側からが多かったと考えられる。この層の下面で環濠の再掘削が行われた可能性が高い。第7層は濠中央部から西壁にかけて堆積した土層である。鳥栖ロームの塊を多量に含んでいる暗黃褐色粘質土層である。炭化物も多く含まれている。環濠内側からの流入土である。濠の中央部が厚く20cmを測る。第8層は濠の中央部にのみ堆積する土層である。鳥栖ロームの塊を多量に含み、一部に褐色土層が混じった黄色土層である。厚さ18cm。上下に分離が可能で、下層を8層下部として分離する。第9層も同様に濠の中央部に堆積する土層である。一部に鳥栖ロームの塊を含んだ暗褐色粘質土層である。厚さは12cm、層の厚さには場所による変化は見られない。第10層も濠の中央部に堆積する土層である。鳥栖ロームのブロック、一部に八女粘土層のブロックを多量に含んだ黄色土層で、一部に褐色土層をmajiedる。厚さ14cmを測る。第11層は最下層に堆積する土層である。黒色有機質粘土層で、八女粘土層のブロックを多量に含んでいる。

以上が第2区の南北壁の土層である。土層堆積はよく似ているが、微妙に異なり、片側にない層もある。ここで南北壁の層の対比を行っておくことにする。第1層、第2層は両壁ともに共通している。北壁の第3層、第4層は南壁の第3層に比定できる。南壁の第4層に対比できる層は北壁ではなく、北壁の第5層に対比できる層は南壁ではない。北壁の第6層は南壁の第5層、第6層に比定できる。第7層は両壁に共通している。北壁の第8層上部は南壁の第8層に、北壁の第8層下部は南壁の第9層に対比できる。南壁の第10層は北壁には存在しない。北壁の第10層、第11層が南壁の第11層に対比できる。

(4) 明治大学第10区トレンチ南壁土層

明治大学第10区トレンチについては埋土を除去し、南壁について土層図を作製した。その概略を記すこととする。

10区トレンチも第1区や第2区同様に上部をかなり削平されている。濠の幅は3.38mを測る。濠の確認面は東側で標高10.32m、西側で標高10.36mでを測り、わずかに西側が高い。濠の深さは1.66mを測る。このトレンチの土層堆積もレンズ状堆積をなし、濠の両側から流れ込んだ自然堆積であることがわかる。基盤層は鳥栖ローム層と八女粘土層であり、標高9.00mのところで鳥栖ローム層から八女粘土層に移行する。

濠内の土層堆積は、第1層は濠の中心部に溝状に堆積した土層である。幅178cm、厚さは中央部で24cmを測る。径1~5cmの鳥栖ロームの塊を含んだ黄褐色粘質土層である。第2層も濠の中央部に溝状に堆積した土層で幅282cm、層の最も厚い部分は中央部で厚さ54cmを測る。土層の堆積から見れば東西の両側からの土砂の流入が考えられるが、わずかであるが、西側すなわち環濠の内側からの土砂が多いようである。土器が多量に含まれている。径2~4cmの八女粘土層の塊を含んだ暗褐色粘土層である。第3層は濠内にほぼ均一に堆積している。径0.5~2cmの鳥栖ロームの塊を含んだ黄褐色粘土層。厚さは中央部で32cmを測る。第4層は東西の壁に沿って堆積した土層である。鳥栖ロームの塊が含まれるのが少なくなるが、径5cmの塊も含まれる。第3層よりやや暗い暗褐色粘土層である。厚さは中央部でなく中央部の壁に沿った両側が最も厚く24cm前後の厚さである。土層堆積から解釈すると東西の両側から土砂が流入し、その量は土層が現存する西壁の上部に達していて西側からの流入が多いとみられるが、普通に考えて最も堆積が多いと考えられる中央部の堆積が極めて少ないと違和感がある。この層の上層である第3層の段階で濠の掘り直しがあったことが想定できる。第5層以下の層堆積は上層と比較して一変し、堆積の層は薄く小さい。第5層は濠の中央部に堆積した層で幅50cm、厚さは中央部で10cmを測る。鳥栖ロームのブロック層である。第6層は東壁から中央部をわずかに越える部分に堆積した土層である。層の状態からは東壁側、すなわち環濠の外側からの流入土であることがわかる。厚さはほぼ一様で10cm前後である。暗褐色粘土層である。第7層は西壁に沿った部分から流れ込んだような状態であり、東壁で止まるように堆積した土層である。鳥栖ロームの径0.1~2cmの塊を多量に含んだ黄褐色粘土層である。第8層は環濠の最下層である。厚さは中央部で18cm前後である。八女粘土のブロックを多く含んだ黑色粘土層である。

2. 出土遺物

(1) 刻目突帯文土器出土状況

第20図に刻目突帯文土器の出土状況を示した。刻目突帯文土器の分布は大きな偏りは見られない。全体的な平面的分布はほぼ均一に分布している。各層位においても状態は同じであり、第1層以下すべての層から出土し、特に集中するところは見られない。出土する土器片も小さく完形に復元できる資料はない。以下、各層におけるあり方を具体的にみていくことにする。なお、出土土器の層位における投影は調査区の中央部から北側は北壁の土層断面図に、南側は南壁の土層断面図を行った。また、土層断面図の対応関係は後章において行うので、ここでは各断面図の層位をそのまま使用する。

北壁側の第1層からはII-200、795、1197、3316、3468の5点、南壁側の第1層からはII-1234、1567、



第20図 環濠第2区刻目突帶文土器出土状況

1780の3点が出土している。北壁側第2層からはII-131、2326、2726、4676、5875、6442、の6点、南壁側第2層からはII-1836、5529の2点が出土している。北壁側第3層からはII-1559、1629、4369、4941、5575、5673、8736、8755、8376の9点が出土している。北壁側第4層からはII-5592、6979、7383、9212、8880の5点、南壁側第4層からはII-8929、8939、9339の3点が出土している。北壁側第5層からは出土土器はない。南壁側第5層からはII-3614、4053、5482、6217、6746、7669、7979、7998、9288、9962、10000、10036、10315、11943、12117、14332の16点が出土している。北壁側第6層からはII-1281、1828、7064、7065、7244、9261、9428、9729、10807、10826、11021、11567、11869、12010、13007、13205の16点、南壁側第6層からはII-6150、6979、7912、9316、9481、10485、10488、11167、11510、12074、12078、12121、12361、12740、12878、13088、13300、13429の18点が出土している。北壁側第7層からはII-12842、13598、13635、13639の4点、南壁側第7層からはII-12064、13782、14118の3点が出土している。北壁側第8層からはII-14193、14444、14896、15175の4点、南壁側からはII-14546、15240、の2点が出土している。北壁側第

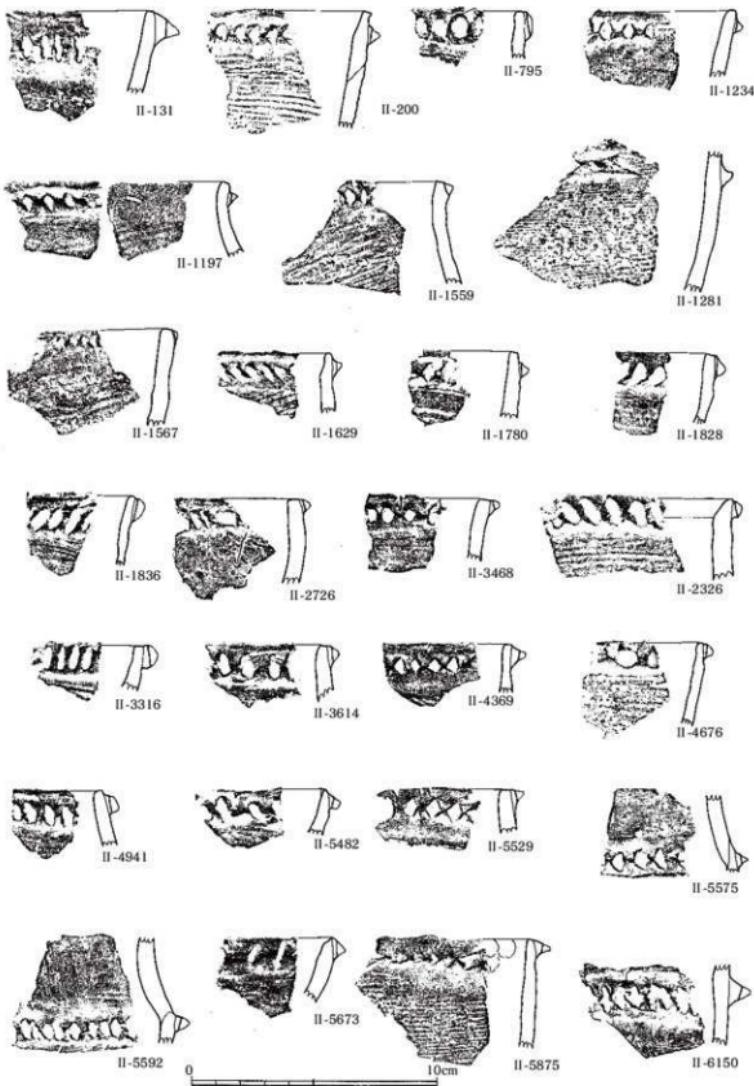
9層からはII-15288の1点、南壁側第9層からはII-13847、14612、14782、15503、15562の5点が出土している。北壁側からは第10層以下には図示した突帯文土器は出土していない。南壁側第10層からはII-14822、15722の2点が出土している。第11層からはII-15809、15857の2点が出土している。

(2) 刻目突帯文土器

刻目突帯文土器は第21図～第24図に示した。

第22図II-131、200、795、1234、1197、1559、1567、1629、1780、1828、1836、3468、2326、3316、3614、4369、4676、4941、5482、5529、5673、5875は口縁部破片である。II-1197、1559、4941は傾きから2条突帯、他は1条突帯の甕形土器である。II-1281、5575、5592、6150は胸部破片でいずれも2条突帯の甕形土器である。

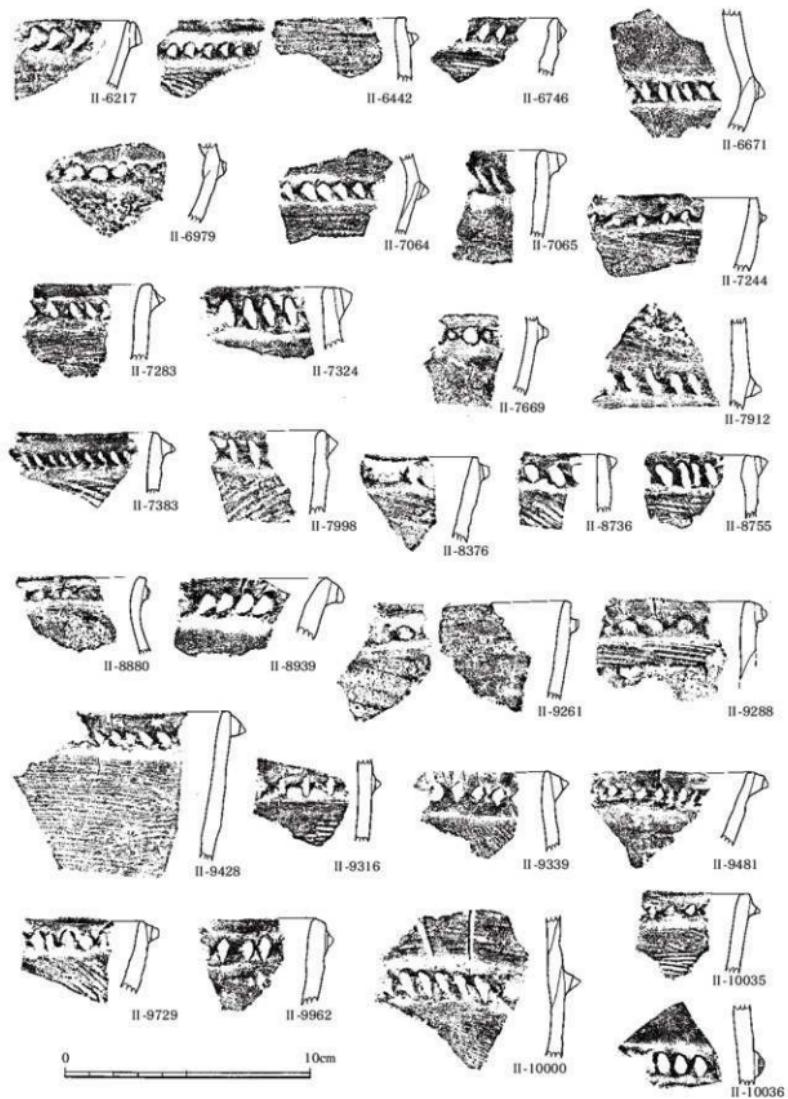
II-131、突帯はB、刻目は棒状工具による。内外面は横方向の貝殻条痕を施し、その上にナデを加え、条痕を消している。II-200、突帯はA、刻目は条痕原体によって刻まれる。口唇部はヘラナデにより平坦、外面は横方向の貝殻条痕、内面はナデ調整である。II-795、突帯はC、刻目は棒状工具による。外面は横方向の細かい条痕、内面はナデ調整である。口縁部内面には刻目か輪状に反映している。II-1234、突帯はA、刻目はヘラ状工具による。口唇部は丸く收める。内外面ともにナデ調整である。II-1197、突帯はA、刻目は棒状工具による。口唇部は丸く收める。内外面ともに横方向の貝殻条痕を施した上にナデを加えて、条痕を消している。II-1559、突帯はB、刻目はヘラ状工具による。外面は横方向の貝殻条痕、内面はナデ調整である。II-1281、突帯は断面三角形をなす。外面には横方向の刷毛目調整、突帯は刷毛目施文後に貼り付けられたものである。スヌが付着している。内面は横～斜方向の板ナデ調整である。II-567、突帯はBであるが、突帯は極めて小さい。刻目はヘラ状工具による。外面には横方向の貝殻条痕が施されるが、一部ナデ消されている。内面は斜位のナデ調整である。II-1629、突帯はA、刻目は棒状工具による。外面は斜位の貝殻条痕、内面はナデ調整である。II-1780、突帯はA、刻目はヘラ状工具による。口唇部は丸く收める。外面は横方向の貝殻条痕、内面はナデ調整である。II-1828、突帯はB、刻目はヘラ状工具による。内外面ともにヨコナデ調整である。II-1836、突帯はB、刻目はヘラ状工具による。外面は横方向の貝殻条痕、内面はナデ調整である。II-2870、突帯はB、刻目はヘラ状工具による。内外面ともに横方向のナデ調整である。II-3468、突帯はB、刻目は棒状工具による。内外面ともにヨコナデ調整である。II-2326、突帯はC、刻目は棒状工具による。外面は横方向の貝殻条痕、内面はナデ調整である。II-3316、突帯はC、刻目は棒状工具による。外面は横方向の貝殻条痕、内面はナデ調整である。口唇部は平坦で、丹塗りがみられる。II-3614、突帯はC、刻目は棒状工具による。内外面ともにヨコナデ調整である。II-4369、突帯はB、刻目はヘラ状工具による。外面は斜位の貝殻条痕である。II-4676、突帯はB、刻目は指頭による。外面は横方向の貝殻条痕、内面は不明である。II-4941、突帯はB、刻目は棒状工具による。内外面ともにヨコナデ調整である。II-5529、突帯はB、刻目はヘラ状工具による。外面は横方向のヨコナデ調整、内面は斜位のヘラ削り調整である。II-5875、突帯はB、刻目はヘラ状工具による。外面は横方向の細かい貝殻条痕、内面には指圧痕があり、凹凸が著しい。II-6150、突帯は高く断面三角形をなす。刻目は棒状工具による。外面は横方向の貝殻条痕、上からナデが加えられる。内面はナデ調整、粘土接合痕が明顯に残る。



第21図 環濠第2区出土刻目突带文土器実測図 I

第22図II-6217、6442、6746、7065、7244、7383、7324、7979、7998、8736、8755、8880、8939、9261、9288、9428、9339、9481、9729、9962、10315は口縁部破片、II-6442、8880、9339は傾きから2条突帯の菱形土器の可能性がある。他の口縁部破片は1条突帯の菱形土器である。他は胴部破片である。

II-6217、突帯はB、刻目はヘラによる。内外面ともに横方向の貝殻条痕を施した後、ヨコナデ調整を加えている。II-6442、突帯はA、刻目はヘラによる。外面は斜方向、内面は横方向の貝殻条痕調整、突帯の上下はヨコナデ調整である。II-6746、突帯はB、刻目はヘラによる。内外面は横方向の貝殻条痕後、ヨコナデが施される。II-6671、胴部屈曲部に突帯を貼り付ける。突帯は断面三角形をなす。刻目は棒状工具による。外面頭部は縱方向の板ナデ調整、突帯の上下はヨコナデ調整である。内面はナデ調整である。II-6979、胴屈曲部に低い突帯を貼り付ける。刻目は指頭によるものである。外面はヨコナデ調整、突帯下にススが付着する。器面の剥離がみられる。内面は板による削り状の調整。II-7064、胴屈曲部に断面三角形の突帯を貼り付ける。刻目はヘラによるものである。内外面は横方向の貝殻条痕を施し、上にナデ調整を加える。II-7065、突帯はB、刻目は鋭いヘラによる。内外面はヨコナデ調整である。II-7244、突帯はA、やや小さい。刻目は棒状工具によるもので、やや間隔をおいて施される。内外面は斜方向の貝殻条痕を施し、上にヨコナデ調整を加える。II-7383、突帯はA、刻目は棒状工具による。外面は横方向の細かい条痕を施す。内面はヨコナデ調整である。II-7324、突帯はB、刻目は棒状工具による。外面はヨコナデ調整、内面は横方向の貝殻条痕を施し、その上に丁寧なヨコナデ調整を加える。II-7669、胴屈曲部に断面三角形の突帯を貼り付ける。突帯の刻目は刷毛目原体による。内外面はヨコナデ調整である。II-7912、胴屈曲部に断面三角形の突帯を貼り付ける。刻目は棒状工具による。外面は横方向の貝殻条痕を施し、上にヨコナデ調整を加える。内面は斜位の貝殻条痕を施し、上にヨコナデ調整を加える。II-7979、突帯はA、刻目は板状工具による。外面は斜位の貝殻条痕を施し、上にヨコナデ調整を加える。内面は丁寧なヨコナデ調整である。II-7998、突帯はB、刻目は棒状工具による。外面に斜位の貝殻条痕を施し、内面はヨコナデ調整を加える。II-8376、突帯はA、刻目は棒状工具によるが、破損し不明瞭。外面に斜位の貝殻条痕を施し、上にヨコナデ調整を加える。内面は横方向の貝殻条痕を施し、上に丁寧なヨコナデ調整を加える。II-8736、突帯はB、刻目は棒状工具による。外面に斜位の貝殻条痕を施し、内面はヨコナデ調整を加える。口唇部から内面にかけて丹塗りがみられる。II-8755、突帯はB、刻目は棒状工具による。外面に横方向の貝殻条痕を施す。内面はヨコナデ調整を加える。突帯はA、口唇部は丸く収める。刻目はヘラによる。全体に磨滅している。内面はヨコナデ調整を加える。II-8880、突帯はA、刻目はヘラ状工具による。外面は剥離して調整不明、内面はヘラナデ調整である。II-8939、突帯はB、刻目はヘラによる。内外面はヨコナデ調整である。II-9261、突帯はA、口唇部は平坦に仕上げる。突帯の刻目はヘラによる。外面は斜位の板状工具によるケズリ状の調整。内面はヨコナデ調整である。II-9288、突帯はB、刻目はヘラによる。外面に横方向の貝殻条痕を施し、内面は横方向の貝殻条痕の上にヨコナデ調整を加える。II-9428、突帯はB、刻目は棒状工具による。外面には横方向の刷毛目調整、ススが付着している。内面はヨコナデ調整である。II-9316、屈曲部に断面三角形の突帯を貼り付ける。突帯の刻目は棒状工具による。外面の下方に横方向の貝殻条痕を施す。突帯の上下はヨコナデ調整である。内面はナデ調整。II-9339、突帯はB、刻目はヘラによる。外面は横方向の刷毛目の上から斜位の細かい条痕を施している。内面はナデ調整。II-9481、突帯はB、刻目は棒状工具による。内外面はヨコナデ調整である。II-9729、突帯はB、刻目はヘラ状工具による。外面は斜位の貝殻条痕調整。内面は横方向の貝殻条痕の上にナデ調整を加える。II-9962、突帯はA、刻目は棒状工具による。内外面はヨコナデ調整である。胴屈曲部に高い断面三角形の突帯を貼り付ける。

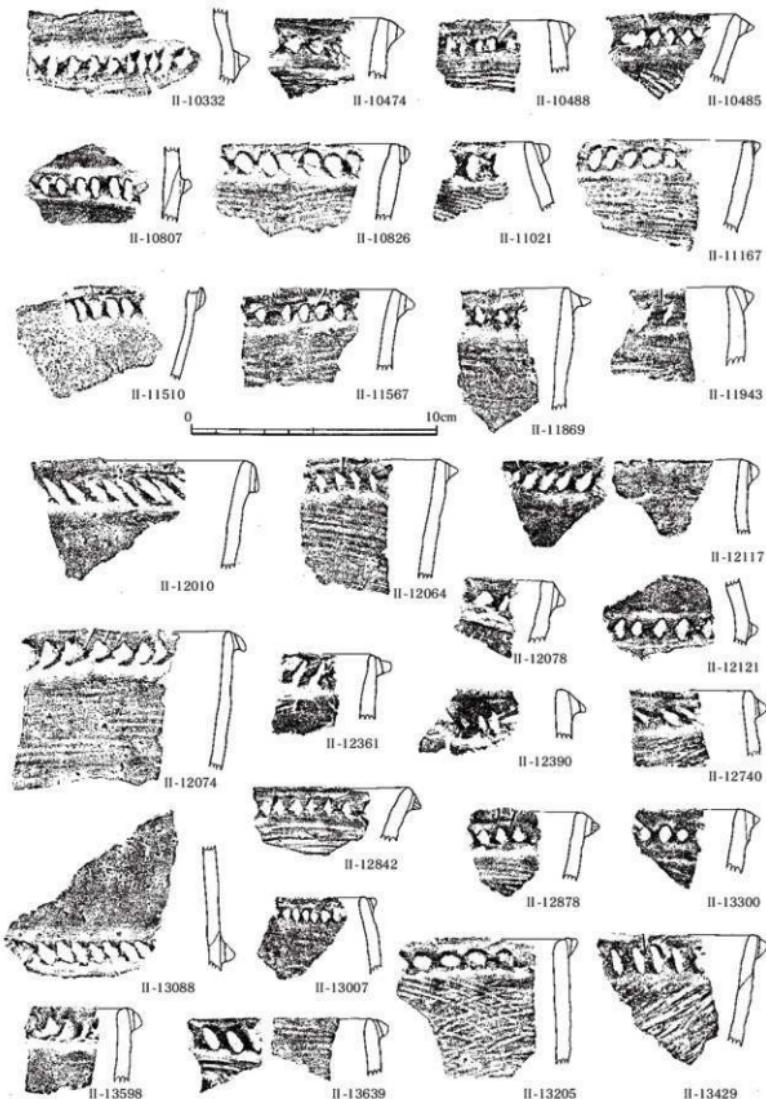


第22図 環濠第2区出土刻目突带文土器実測図II

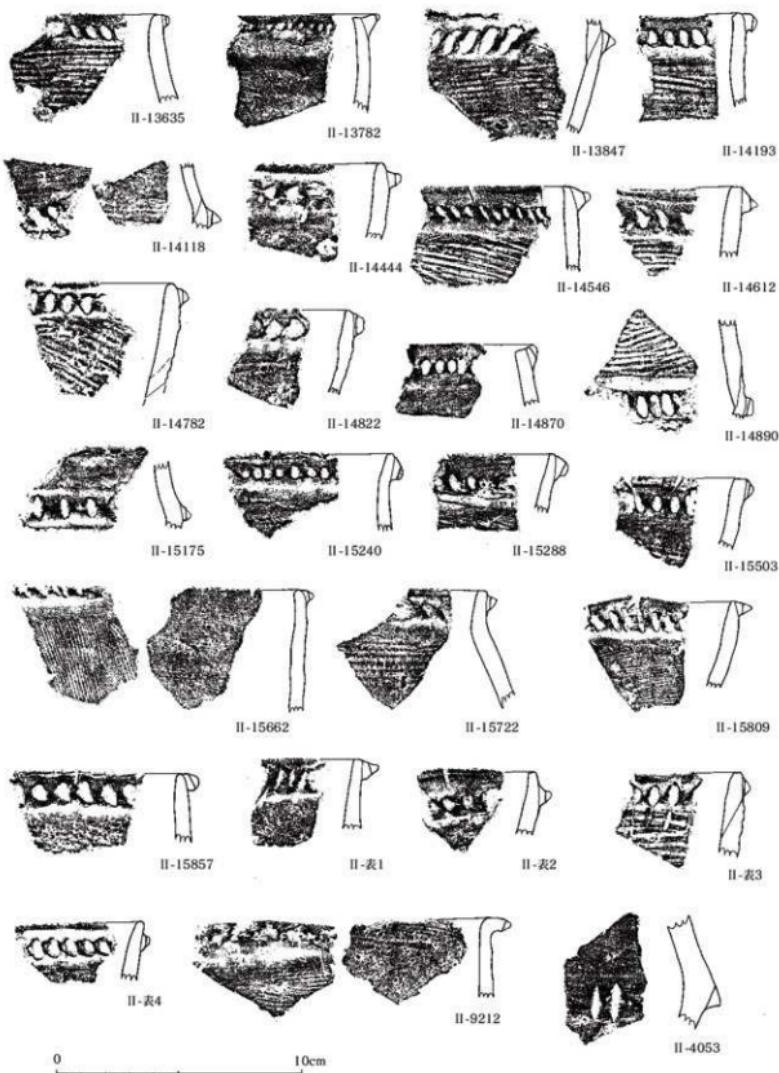
刻目は棒状工具による。外面は横方向の貝殻条痕を施し、突帯下には条痕の上に斜位の刷毛目を加えている。内面は横方向の貝殻条痕を施し、その上にヨコナデ調整を加える。II-10000、胸部破片。屈曲部はほとんど屈曲しない。突帯が貼り付けられ、刻目は棒状工具によるか、上下2段に刻まれている。外面は横方向の貝殻条痕を施した後、突帯より上はヘラナデ、下は斜位の刷毛目調整を加えている。II-10315、突帯はA、刻目はヘラ状工具による。口唇部は平坦である。外面は斜へ横方向の貝殻条痕、内面はヨコナデ調整である。II-10036、屈曲部に断面カマボコ形の突帯を貼り付ける。刻目は刷毛目原体による。内面はナデ調整である。

第23図II-10474、10488、10485、10826、11201、11167、11567、11869、11943、12010、12064、12078、12117、12121、12074、12361、12390、12740、12842、12878、13300、13007、13598、13639、13205、13429は口縁部破片、II-11021、13007は傾きから2条突帯の菱形土器とみられ、他の口縁部破片は1条突帯の菱形土器である。他は胸部破片である。

II-10332、胸屈曲部に断面三角形の突帯を貼り付ける。刻目は刷毛目原体による。外面は横方向の貝殻条痕、内面には横方向の貝殻条痕を施し、上にナデ調整を加える。内面の上部には指頭圧痕が残る。II-10474、突帯はB、刻目は条痕原体によるものである。内外面には横方向の貝殻条痕を施し、上からナデ調整を加える。II-10488、突帯はB、刻目は棒状工具による。外面は横方向の貝殻条痕を施し、内面はナデ調整である。II-10485、突帯はB、刻目はヘラ状工具による。外面に斜方向の貝殻条痕を施す。突帯の上下はヨコナデ調整である。内面は斜位の貝殻条痕を施し、上にナデ調整を加える。II-10807、胸屈曲部に断面三角形の突帯を貼り付ける。刻目は棒状工具による。外面は横方向の貝殻条痕、内面はナデ調整である。II-10826、突帯はB、刻目は棒状工具による。外面は横方向の貝殻条痕、横内面はナデ調整である。突帯から口縁部内面にかけて丹塗りが認められる。II-11021、突帯はC、刻目はヘラ状工具による。外面は細かい横方向の貝殻条痕、内面はヨコナデ調整である。II-11167、突帯はB、刻目は棒状工具による。外面は横方向の貝殻条痕、内面は横方向の貝殻条痕の上にヨコナデ調整を加える。II-11150、胸屈曲部に断面カマボコ形の突帯を貼り付ける。刻目は棒状工具による。内外面はナデ調整、器面の剥離が著しい。II-11567、突帯はB、刻目は棒状工具による。外面は横方向のヘラケズリ状のヘラナデ調整、内面はナデ調整である。II-11869、突帯はB、突帯は高く、刻目は棒状工具による。外面は横方向の貝殻条痕、上にヨコナデ調整を加える。内面はナデ調整である。II-11943、突帯はB、刻目は棒状工具による。外面は横方向の刷毛目調整、内面は横方向の貝殻条痕の上に丁寧なヨコナデ調整を加える。II-12010、突帯はC、突帯は断面形がカマボコ形をなす。刻目は棒状工具により、下方の延長部にも痕跡が残っている。内外面ともに丁寧なヨコナデ調整である。II-12064、突帯はB、刻目はヘラ状工具による。外面は横方向の貝殻条痕、内面は丁寧なヨコナデ調整である。II-12117、突帯はB、刻目は棒状工具による。内外面はヘラケズリ状のヘラナデ調整である。II-12078、突帯はB、刻目はヘラ状工具による。内外面ともに横方向の貝殻条痕、上からナデ調整を加える。II-12121、胸屈曲部に断面三角形の突帯を貼り付ける。刻目は棒状工具による。内外面ともにヨコナデ調整である。II-12074、突帯はB、刻目はヘラ状工具によるが、ケズリの部分が下に垂れかかる。内外面ともに横方向の貝殻条痕、上にヨコナデ調整を加える。II-12361、突帯はB、刻目はヘラ状工具による。外面は横方向の貝殻条痕、上から粘土張っている。内面はナデ調整である。II-12390、突帯はB、刻目はヘラ状工具による。内外面ともにヨコナデ調整である。II-12740、突帯はA、刻目は棒状工具による。外面は細かい横方向の貝殻条痕、内面はヨコナデ調整である。II-12842、突帯はB、刻目は貝殻条痕原体による。外面は横方向の貝殻条痕、内面は横方向の貝殻条痕の上にヨコナデ調整を施す。II-12787、突帯はB、刻目は刷毛目



第23図 環濠第2区出土刻目突带文土器実測図III

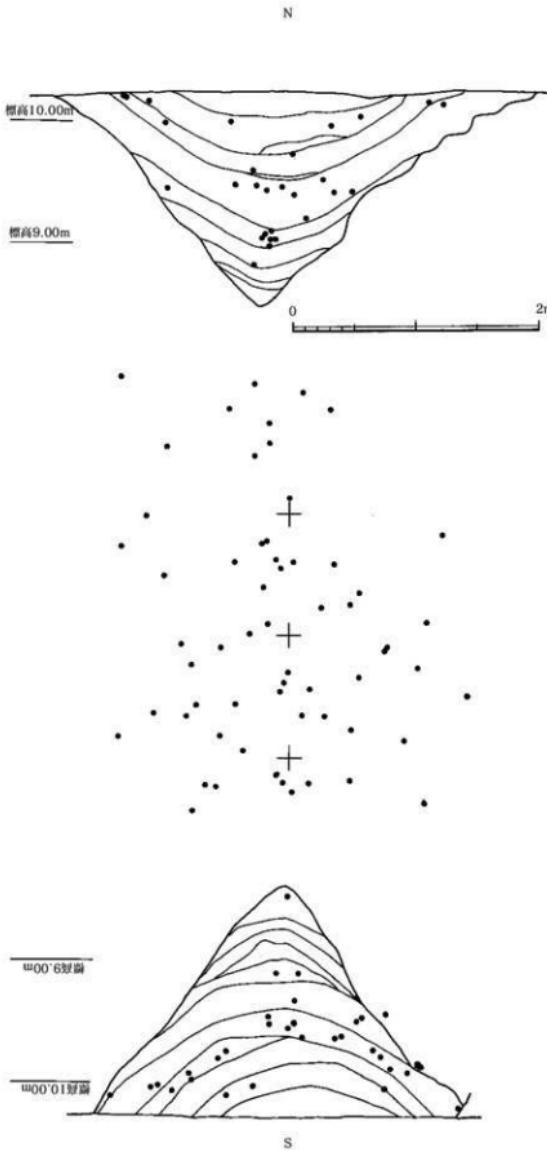


第24図 環濠第2区出土刻目突带文土器実測図IV

原体による。外面には細かい横方向の貝殻条痕を施す。内面はヨコナデ調整である。II-13300、突帶はB、刻目は刷毛目原体による。外面は横方向の貝殻条痕、上からヨコナデ調整を加える。内面はヨコナデ調整である。II-13088、胴屈曲部に断面がカマボコ形をした突帶を貼り付けている。刻目は棒状工具による。外面の突帶下は横方向の貝殻条痕、上はヨコナデ調整である。内面はヨコナデ調整である。II-13007、突帶はB、刻目は刷毛目原体による。外面は横方向の貝殻条痕、上にヨコナデ調整を加える。内面はヨコナデ調整である。この土器は強く火を受け変色し、口縁の内外は赤色、その下は外面が白桃色、内面が白色をなす。後世の製埴土器の変色に類似している。II-13598、突帶はB、刻目はヘラ状工具による。内外面はヨコナデ調整である。II-13639、突帶はB、刻目は棒状工具による。外面は横方向の貝殻条痕である。II-13205、突帶はC、低く断面カマボコ形をなす。刻目は指頭による。外面は横方向の貝殻条痕を扇状に重複させながら施している。内面はヨコナデ調整である。II-13429、突帶はB、刻目は棒状工具による。外面は斜方向の貝殻条痕を施す。内面は横～斜方向のナデ調整である。

第24図II-13635、13782、14193、14444、14546、14612、14782、14822、14870、15240、15288、15543、15662、15722、15809、15857、表1、表2、表3、表4、9212は口縁部破片である。II-13635、14870、15240、15722は傾きから2条突帶の甕形土器の可能性が強い。他の口縁部破片は1条突帶の甕形土器である。その他の土器は2条突帶の甕形土器の胴部破片である。

II-13635、突帶はB、刻目は棒状工具による。外面には横方向の貝殻条痕を施す。内面はヨコナデ調整である。II-13782、突帶はB、刻目は細かい棒状工具による。外面は斜位の貝殻条痕を施した上にヨコナデ調整を加える。内面は丁寧なヨコナデ調整である。II-13847、胴屈曲部に断面三角形の突帶を貼り付ける。刻目は棒状工具により深く施される。外面は横方向の貝殻条痕調整、内面も外側同様の貝殻条痕を施す。また、粘土接合部の痕跡が明瞭に残る。粘土接合は内傾接合である。II-14193、突帶はC、刻目は棒状工具による。外面横方向の貝殻条痕で上にヨコナデ調整を加える。内面も同様に貝殻条痕を施した上に丁寧なヨコナデ調整を加えている。II-14118、胴屈曲部に断面三角形の突帶を貼り付ける。内外面ともに横方向の貝殻条痕を施し、その上にヨコナデ調整を加えている。II-14444、突帶はA、刻目はヘラ状工具による。外面は横方向の貝殻条痕を施した上にヨコナデ調整を加えている。内面は斜位のナデ調整を加えている。高熱を受け全体が赤色に変色している。II-14546、突帶はB、刻目は細かい棒状工具による。外面は横方向の貝殻条痕調整、内面は丁寧なヨコナデ調整を加えている。II-14612、突帶はB、刻目は棒状工具による。外面は横方向の貝殻条痕、内面はヨコナデ調整を加えている。II-14782、突帶はA、刻目は棒状工具による。外面は斜方向の貝殻条痕、内面はヨコナデ調整を加えている。II-14822、突帶はA、刻目はヘラ状工具による。外面は横方向の貝殻条痕を施した後に、ヨコナデ調整を加えている。II-14870、突帶はB、刻目は細かい棒状工具による。外面はヨコナデ調整を加えている。胴屈曲部に断面カマボコ形の突帶を貼り付ける。刻目は棒状工具による。外面の突帶の上には貼り付けのための、強いヨコナデが凹線状延びる。それより上部は横～斜位の貝殻条痕が施される。内面はヨコナデ調整である。II-14890、胴屈曲部に断面台形の突帶を貼り付ける。刻目は棒状工具による。外面は横～斜方向の貝殻条痕、内面はヨコナデ調整である。II-15175、胴屈曲部に断面三角形の突帶を貼り付ける。刻目は棒状工具により、間隔をもって施される。外面はヨコナデ調整、内面は表面の状態が悪いために不明瞭である。II-15240、突帶はB、刻目は刷毛目原体による。外面は横方向の貝殻条痕、上からヨコナデ調整を加えている。内面はヨコナデ調整である。II-15288、突帶はB、刻目は棒状工具による。外面は横方向の貝殻条痕、内面はヨコナデ調整である。II-15503、突帶はB、口唇部は平坦に仕上げる。刻目は棒状工具による。外面は横方向の貝殻条痕、上からヨコナデ調整を加えている。



第25図 環濠第2区浅鉢・高杯・鉢形土器出土状況

内面はヨコナデ調整である。II-15662、突帯はB、刻目は棒状工具による。突帯の下位はヨコナデ調整、それより下は縦方向の刷毛目調整である。内面は横方向の刷毛目調整である。II-15722、突帯はA、刻目は棒状工具による。外面は横方向の貝殻条痕、内面は横方向の貝殻条痕を施し、その上に丁寧なヨコナデ調整を加えている。II-15809、突帯はB、刻目は細かい棒状工具による。外面は横方向の刷毛目調整、内面は横～斜位の貝殻条痕を施した後、丁寧なヨコナデ調整を加えている。II-15857、突帯はC、刻目はヘラ状工具による。外面は斜方向の貝殻条痕、内面はヨコナデ調整である。II-表1、突帯はB、刻目は細かい板状工具による。内外面はヨコナデ調整である。II-表2、突帯はA、口唇部は丸く収める。刻目は棒状工具による。外面はケズリ状の調整。内面はヨコナデ調整である。II-表3、突帯はA、口唇部は丸く収める。刻目は棒状工具による。外面は横方向の貝殻条痕、内面はヨコナデ調整である。II-表4、突帯はA、刻目はヘラ状工具による。内外面はヨコナデ調整である。II-9212、突帯はB、突帯は高く一見如意形口縁を思わせる。刻目は細かい棒状工具による。外面は横方向の刷毛目調整、内面は横方向の粗い刷毛目調整である。II-4053は胴屈部に断面三角形の突帯を貼り付ける。刻目はヘラ状工具による。内外面ともにヘラナデ調整である。

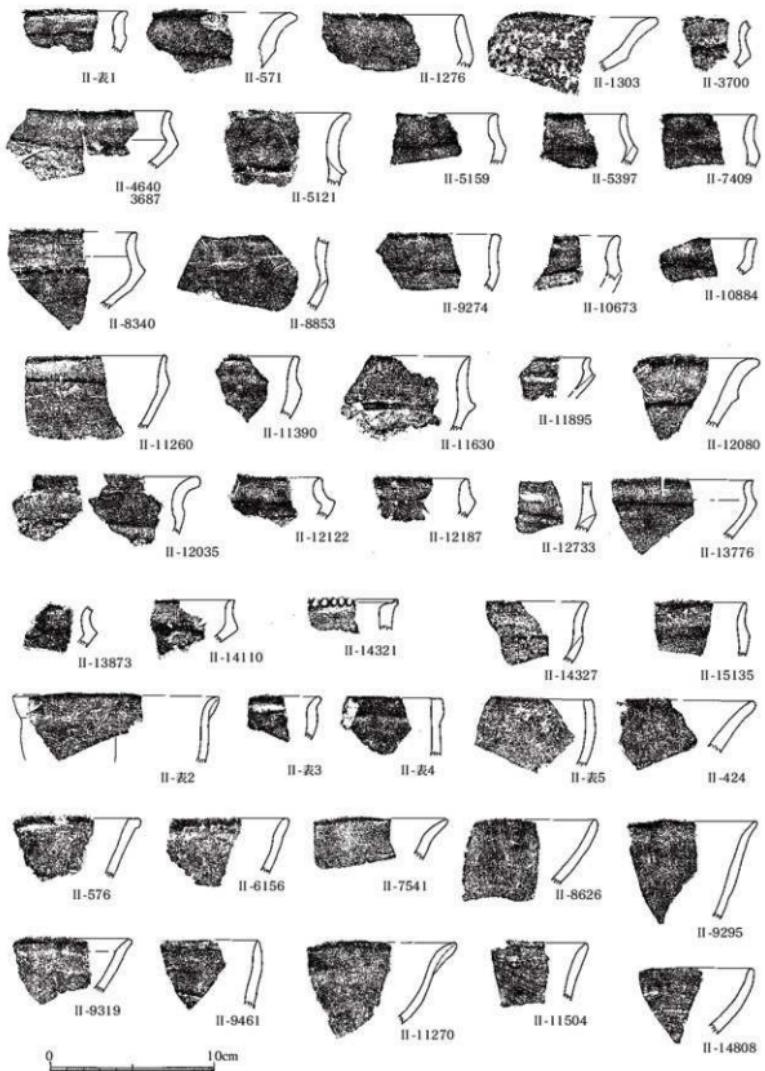
(3) 浅鉢・高杯・鉢形土器出土状況

第25図は浅鉢、高杯、鉢形土器の出土状況である。浅鉢、高杯、鉢形土器の分布には大きな偏りは見られない。平面的分布ではやや南側に分布が密で北側では少ない。各層位における状態も同じで、第1層からほとんどの層に出土している。上層に多く、下層に少ない傾向がみられる。以下、各層におけるあり方を具体的にみていくことにする。出土土器の層位における投影は他と同様である。

北壁の第1層からは出土土器はない。南壁の第1層からはII-3687の1点が出土している。北壁の第2層からはII-5854の1点、南壁の第2層からはII-3700、4640の2点が出土している。北壁の第3層からは出土土器はない。南壁の第3層からはII-788、4599、4905、5397(2点あり)、5471、8853の7点が出土している。北壁の第4層からはII-571、5637、9274、10673の4点、南壁の第4層からはII-6156、7541、8748、9295、9319の5点が出土している。北壁の第5層からは出土土器はない。南壁の第5層からはII-424、4921、5121、5159、7409、8340、10624、10673、11504、11630の10点が出土している。北壁の第6層からはII-189、576、1276、1303、5251、8626、9762、10278、10884、11200、11270、11390、11478、11895、12187、12635、13203の17点、南壁の第6層はII-12080、12122、12733、13776の4点が出土している。北壁の第7層からはII-13841、13873、14321、14327の4点、南壁の第7層からはII-14117、14242の2点が出土している。北壁の第8層からはII-14808、15135の2点が出土している。第9層～第11層には鉢類の出土はない。南壁の第8層～第10層には鉢類の出土はない。第11層にII-15887の1点が出土している。

(4) 浅鉢・高杯・鉢形土器

第26図II-表1、全体に磨滅している。胴部上半で屈曲し、口縁部端が外反し、丸くおさめている。屈曲部より上は低い。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整であるが器面の荒れが著しい。胎土は精良。色調は内外面ともに褐色をなす。II-571は鉢形土器である。器形はII-12080ときわめて類似している。口縁部には粘土帯を貼り付けて肥厚させる。粘土帯の方に段ができるが、段は貼り付け突起状に見える。口縁端部は丸くおさめる。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。色調は内外面ともに黄白色をなす。II-1276、胴上半で屈曲するが、屈曲部は丸みをもつ。屈曲部より上はほぼ垂直に立ち上がる。口唇部は丸くおさめる。内外面は横方向のヘラ研磨調整。胎土は精良。色調は黄白色をなす。II-1303、胴上半部で屈曲し、口縁部は緩やかに外反する。内外面とも横方向のヘラ研磨調整であるが、器面の遺存状態が悪い。色調は黒色をなす。II-3700は屈曲部の稜線は丸く、屈曲部より上はやや高い。緩やかに反転し、口縁部は外反するが端部を失う。器面が荒れていて調整は観察にくいか、横方向のヘラ研磨と考えられる。色調は外面が黄土色、内面が黄赤色をなす。II-3687、4640、は2片が接合している。屈曲部の稜線は明瞭である。屈曲部より上はやや高い、口縁部はさらに屈曲して、やや外反する。口唇部は丸くおさめている。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整であるが、胴部の屈曲部より下は器面の剥離が著しい。胎土は精製され極めて良質である。色調は内外面ともに黒灰色をなす。II-5121、鉢形土器になると考えられる破片。胴部上半で屈曲し、そり気味に立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部は丸くおさめている。屈曲部に断面三角形の突起を貼り付ける。外面は横方向のやや粗雑なヘラナナテ調整である。内面は横～斜位の刷毛目調整を加えた後に横方向のヘラナナテ調整を加えている。II-5159、屈曲部は明瞭。屈曲部より上は内傾しながら立ち上がり口縁部はわずかに外反する。口唇部は平坦に仕上げる。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。色調は外面が黄赤色、内面が黄土色をなす。II-5397、



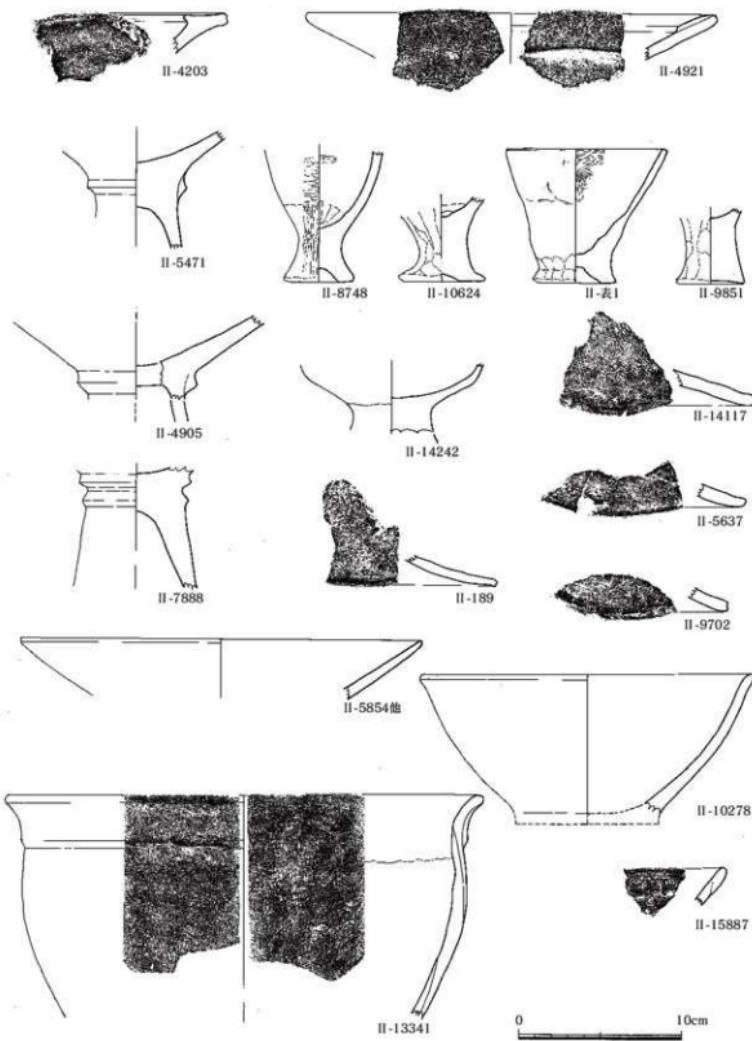
第26図 環濠第2区出土浅鉢・高杯・鉢形土器実測図Ⅰ

胸部上半の屈曲部は明瞭、屈曲部より上はやや高い。口縁端部は丸くおさめている。外面と内面の口縁部は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面の下半は横方向のヘラナデ調整である。II-7409、胸部上半の屈曲部の稜線はやや不明瞭、屈曲部より上はやや高い。口縁部は外反し、端部はとがり気味におさめている。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。色調は外面が褐色、内面は黒褐色である。II-8340、胸部は外傾しながら立ち上がるか胴上部で屈曲し内傾し、口縁部は再び外反する。口縁端部は丸くおさめている。屈曲部には鋭い稜線ができる。屈曲部より上はやや高く、この部分に丹塗りの痕跡を示すように赤色顔料の付着が観察できる。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。外面は黒褐色、内面は黒色をなす。II-8853、胸部上半で屈曲し、内傾しながら立ち上がり口縁部は外反するが、口縁部を失う。屈曲部の稜線はやや不明瞭、屈曲部より上はやや高い。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整、胎土は精良。色調は外面が黄赤色、内面が赤黄色をなす。II-9274、胸部上半の屈曲は弱く、稜線はやや不明瞭である。口縁部はわずかに外反する。端部は平坦である。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。色調は外面が赤色、内面が黄褐色～黒色をなす。II-10673、屈曲部の粘土接合部で剥離している。口縁部は緩やかに反転する。口縁端部は丸くおさめている。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。色調は外面が黄褐色、内面が黒灰色をなす。II-10884、口縁部は屈曲部からほぼ垂直に立ち上がる。端部は丸くおさめている。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。色調は外面が黄褐色、内面が黒色をなす。内外に赤色顔料が観察できる。II-11200、同様の器形をなす。口縁端部がわずかに外反し、丸くおさめている。屈曲部の稜線は鈍い。屈曲部より上は低い。外面はやや雑な横方向のヘラ研磨調整、内面は横方向の刷毛目調整の上に横方向のヘラ研磨調整を加えている。外面は黄褐色、内面は黒灰色をなす。II-11390、胸部上半の屈曲部の稜線は不明瞭、口縁部は外反し、端部は平坦である。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整、胎土は精良。色調は外面が黄褐色、内面は灰黒色をなす。II-11630、胸部上半で屈曲し、口縁部はわずかに外反し、端部はとがり気味におさめている。屈曲部には断面カマボコ状の突帯を貼り付けている。内外面ともに刷毛目調整後に横方向のヘラ研磨調整を加えている。色調は内外面ともに黄赤色をなす。II-11895、屈曲部の粘土接合部で剥離している。屈曲部より上は低く、口縁端部は外反し、丸くおさめている。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。外面は褐色、内面は黒色をなす。II-12080は鉢形土器である。胸部は外傾しながら直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部に粘土帶を貼り付けて肥厚させる。肥厚帶の方に段が形成されるが、段の部分が三角形の突帯状に見える。内外面ともに横方向の丁寧なヘラナデ調整である。色調は内外面ともに黄白色をなす。II-12035、胸部上半で屈曲し、わずかに内傾するか口縁部は大きく外反する。口唇部は丸くおさめる。外面は表面が荒れていて調整痕は明らかでないか、内面は横方向のヘラ研磨調整である。II-12122、上部の屈曲は強く、稜線は明瞭である。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部は丸くおさめている。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面はヨコナデ調整である。II-12187は他の土器に比較して厚い。屈曲部の稜線は鈍い。屈曲部より上は低く、緩やかに反転する。口縁端部はとがり気味に丸くおさめる。器面が荒れていて調整はわかりにくいか、横方向のヘラ研磨調整と考えられる。色調は外面が黄褐色～褐色、内面は褐色をなす。II-12733、屈曲部は鋭くない。口縁部を欠く。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整。外面は黒色、内面は黄白色をなす。II-13776、屈曲部の稜線は明瞭である。屈曲部の上は低く、口縁端部はわずかに外反する。口唇部は丸くおさめている。内外面はともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内外面ともに黄褐色～褐色をなす。II-13873、屈曲部の稜線は鋭い。屈曲部の上は大きく内傾しながら立ち上がり、口縁部は外反するが、端部を失う。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。胎土は精良。色調は内外面ともに褐色をなす。II-14110は屈曲部の

屈曲は大きく、上部は大きく内傾しながら立ち上がり、口縁部は反転してほぼ垂直に立ち上がり、端部は丸くおさめている。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。色調は外面が黒色、内面が黄褐色をなす。II-14321、口縁は垂直に立ち上がり、口唇部に刷毛目原体で刻目が施される。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面は丁寧なヘラ研磨調整である。色調は内外面ともに黒褐色をなす。II-14327、屈曲部は鈍く、屈曲部より上はゆるやかに外反し、端部は丸くおさめる。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。外面は黒褐色、内面は黄褐色である。器面が荒れている。II-15135、胴部上半で屈曲するか後線は明瞭でない。口縁部はわずかに外反する。端部は丸くおさめている。内外面ともに横方向のヘラナデ調整である。胎土は精良。色調は内外面ともに黒灰色をなす。II-表2は復元口径12.7cmの小型の鉢である。胴部は丸みを持ってほぼ垂直に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。口縁部には狭い粘土帯を貼り付けて肥厚させる。肥厚帯の方には明瞭な段は形成されない。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。胎土は精良。色調は内外面ともに黄白色をなす。II-表3、口縁端部で小さく外反する。端部は丸くおさめる。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土は精製され極めて良質。色調は内外面ともに黒灰色をなす。II-表4、北側の断面の土器である。胴部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部には粘土帯を貼り付けて肥厚させる。口縁端部は平坦である。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。胎土は精製され良質。内外面ともに黄土色をなす。II-表5、II-424、口唇部は丸くおさめる。器面が荒れていて調整は不明。外面は黄赤色、内面は黄土色をなす。II-576、胴部は外傾しながら直線的に立ち上がる。口縁は玉縁状をなす。口唇部は平坦である。外面は横方向のヘラ研磨調整。内面は斜位のヘラケズリ状の調整である。外面は黒色、内面は黒灰色をなす。II-6156は口縁部がわずかに外反し、口縁端部は丸くおさめる。外面は斜位の刷毛目調整の後、横方向のヘラナデ調整を加えている。内面は横方向のヘラ研磨調整である。口縁部に浅い沈線がめぐらか明瞭でない。色調は外面が黄赤色、内面が黄赤色をなす。II-7541、丸みを持って立ち上がる胴部上半部で緩やかに屈曲して口縁部は外反し、端部は丸くおさめている。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整で、口縁部の内外面にはわずかであるか赤色顔料が付着している。元来は丹塗りされていたと考えられる。胎土は精良。色調は外面が黄白色、内外面が褐色をなす。II-8626、胴部は内湾気味に立ち上がる。口唇部は丸くおさめる。外面には縦方向の刷毛目調整。内面は横方向のヘラナデ調整である。内外面ともに黄土色をなす。II-9295、胴部は外傾しながら直線的に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。口唇部は丸くおさめる。器壁は極めて薄い。内外面は横方向のヘラ研磨調整。外面の下半は縦方向のヘラ研磨調整である。色調は内外面ともに黄褐色をなす。II-9319、胴部は丸みを持って立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。口縁端部は丸くおさめている。内外面ともにヘラ研磨調整であるがやや粗雑である。内外面ともに黄土色をなす。II-9461、口唇部はとがり気味におさめられる。内外面ともに難な横方向のヘラ研磨調整である。胎土は精良。色調は内外面ともに黄白色をなす。II-11270、胴部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は外反する。口縁の外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。内外面は丁寧なヘラ研磨調整である。胎土は精製され極めて良質である。色調は内外面ともに黄土色をなす。II-11504、胴部は外傾しながら直線的に立ち上がる。外面は横～斜位のヘラ研磨調整、内面は横方向のヘラ研磨調整である。色調は内外面ともに黄褐色をなす。II-14808、椀状の器形をなす。口唇部は丸くおさめる。外面は刷毛目調整の上にヘラナデ調整を加える。内面は横方向のヘラ研磨調整である。色調は外面が黄赤色、内面は黄白色～黒色をなす。

第27図II-4203、高杯の杯部破片。時期的に混入した可能性が強い。動形口縁をなす。II-4921は高杯の杯部破片。杯部は外傾しながら直線的に立ち上がる。口縁部の内側に粘土帯を貼り付けて肥厚させ

る。粘土帶の下端には段が形成される。復元口径23.2cmを測る。内外面とともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。色調は内外面ともに黄赤色をなす。II-5471は高杯の杯部下半から脚上半部の破片である。杯部は大きく外傾しながら直線的に立ち上がる。脚部と杯部の境には断面三角形の貼り付け突帯1条をめぐらしている。内外面は丁寧なヘラ研磨調整であるが、外面の器面の保存状態が悪い。II-4905も前者同様の破片である。杯部は大きく外傾しながら直線的に立ち上がる。杯部と脚部の境に断面三角形の貼り付け突帯1条をめぐらしている。内外面は丁寧な横方向のヘラ研磨調整である。杯部の外面上半には丹塗りが認められる。外面は黄赤色、内面は黒灰色をなす。II-7888も同様の破片である。杯部と脚部の境に断面三角形の貼り付け突帯2条をめぐらしている。突帯部分はヨコナデ調整、杯部内面は丁寧なヘラ研磨調整である。脚部外面は器面が荒れていて調整は不明。内面はナデ調整である。II-8748はワイングラス状をした脚付の小型の鉢である。ほぼ全形を知ることができるが、口縁部を欠損する。脚台は若干外側に開き、上げ底状をなすか比較的安定している。中実の脚筒部は短く伸びる。鉢部はあまり外傾せず立ち上がる。鉢部の外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。脚部は継の丁寧なヘラ研磨調整である。鉢部内面は下半かヘラによる丁寧な削りで、痕跡が放射状に残る。上半部は横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。胎土は精製され極めて良質である。内外面ともに黄褐色をなす。底部径4.3cmである。II-10624前者同様に脚台付の小型の鉢形土器になると考えられるが、鉢部の大部分を欠損している。脚筒部は大きく外側に開く。中央部に浅いくぼみを作り出している。中実の脚筒部はやや高く伸びる。鉢部は前者同様に伸び、やや深くなるとみられる。内外面ヘラ研磨調整であるが、前者と比較するとかなり粗雑である。脚部外面は継方向のヘラ研磨調整である。胎土は精製され良質。内外面ともに黄白色をなす。底部径5.4cmを測る。II-表1、他とは若干異なる。脚台付の鉢である。作りがやや粗雑である。脚台は指押さえで調整する。端部が外に張り出す。鉢部は直線的に立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。外面は継方向のヘラナデ、内面は下半部が斜位、上半部が横方向のヘラナデ調整である。口径10.0cm、脚台径5.2cm、器高8.3cmを測る。II-9851は、脚台付の小型の鉢形土器である。鉢部を欠損しているが、器形的には他と大きな違いはない。脚台は円筒状で脚端部はほとんど外側に張り出さない。わずかに上げ底状になる。中実の脚筒部はわずかに伸び、鉢部に連なる。内外面はヘラ研磨調整である。胎土は精製され良質である。底部径4.3cmを測る。内外面は黄白色をなす。II-14242、脚付椀と考えられる器形をなす。脚部は現存部では中実の円筒状をなす。椀部は外傾しながら緩やかなカーブをもって立ち上るが上部を欠損し、全体形は不明。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面は横方向のヘラナデ調整である。胎土は精良。色調は外面が褐色～黒色、内面が黒褐色をなす。II-189は脚端部と考えられる破片。端部は平坦に仕上げている。内外面ともにヨコナデ調整である。色調は外面が黄褐色、内面が灰褐色である。II-14117は脚端部と考えられる破片である。端部は丸くおさめている。外面の端部近くに指による強いナデがめぐらされる。II-5637は脚端部と考えられる破片である。端部は丸くおさめている。内外面ともにヨコナデ調整である。色調は外面が黄褐色、内面が黒褐色である。II-9702、脚端部と考えられる破片である。内外面ともにヘラナデ調整である。色調は内外面ともに黄白色をなす。II-5854・5921・5923・6512・6808は同一個体である。浅い鉢形土器である。外面はヘラナデ調整、内面は横方向のヘラ研磨調整である。色調は外面が赤褐色～黒色、内面が黒褐色をなす。復元口径24.6cmを測る。II-10278は鉢形土器。底部を失う。胴部は外傾しながら丸みを持って立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。口縁端部は丸くおさめている。復元口径20.6cmを測る。外面は横一斜位の刷毛目調整の後に横方向の丁寧なヘラ研磨調整を加えている。内面も横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。胎土は精製されて極めて良質である。色調は外面が黄白色、内面は黄褐色である。II-13341、鉢形土器である。胴部は丸みを持って立ち上がり、胴

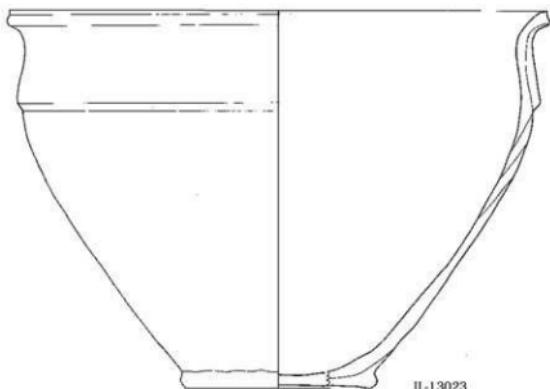


第27図 環濠第2区出土浅鉢・高杯・鉢形土器実測図II

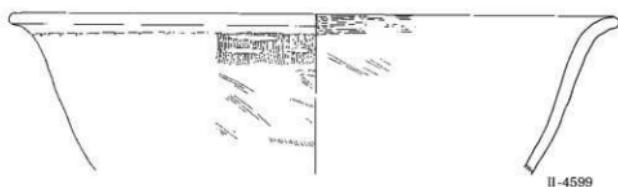
の上部でわずかに内傾するか口縁部は外反する。口縁の外面には粘土帯を貼り付けて肥厚させる。肥厚帯の下端には明瞭な段が形成される。口縁端部は丸くおさめる。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は口縁のやや下に指圧痕が残り、その上に横方向のヘラ研磨調整を施す。胸部は斜位のヘラ研磨調整である。色調は内外面ともに黒褐色をなす。復元口径29.4cmを測る。II-15887や粗い造りの鉢形土器である。口唇部は丸くおさめる。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整。胎土は精良。内外面ともに黒褐色をなす。

第28図II-13023は大型の鉢形土器である。同一個体の破片8点がありほぼ全形を知ることができる。底部はやや上げ底状をなす安定した平底である。底部端は外側に張り出している。胸部は外傾しながら立ち上がり、胸部中位で反転して口縁部近くはわずかに内傾する。口縁端部は大きく外反する。口唇部には強いヨコナデが加えられ凹線1条が巡る。口縁部外面には幅約5cmの粘土帯が貼り付けられ肥厚させていく。粘土帯の方には明瞭な段が形成されている。内外面には横方向のヘラ研磨調整が加えられる。復元口径33.4cm、底部復元径12.0cm、器高23.1cmを測る。外面は赤褐色、内面は黒灰色をなす。胸部内面2か所に圧痕があるか何であるかは同定できない。II-4599も同様に大型の鉢形土器である。胸部は外傾しながら立ち上がり、口縁部は大きく外反する。口唇部は丸くおさめる。口縁部外面はヨコナデ調整、その下に縦方向の刷毛目調整さらにその下位は斜方向の刷毛目調整の上に横方向のヘラ研磨調整を加えている。内面は口縁部が横方向の刷毛目調整。胸部は斜位の刷毛目調整後に、斜位のヘラナデ調整を加え刷毛目を消している。復元口径37.2cmを測る。内外面ともに黄褐色をなす。II-11478は大型の鉢形土器である。同一個体の破片16点があり、底部を欠失するかほぼ全形を知ることができる。胸部は外傾しながら立ち上がり、口縁部は大きく外反する。口唇部は丸くおさめる。復元口径40.1cm、胸部上半には指圧痕が並列している。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面はヘラナデ調整である。二次的に火を受けた部分的に変色している。色調は外面が黄色から赤桃色、内面は赤黄色から灰褐色をなす。

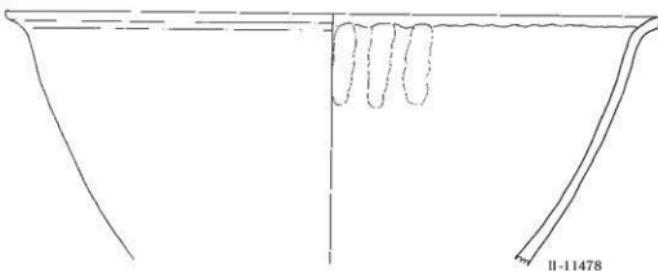
第29図II-12391、口縁部は直口する。口唇部は丸くおさめる。外面は器面が荒れて調整は不明。内面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。内面に屈曲部があるかどのようになるか明らかにできない。鉢形土器になると考えられる。II-3267、中型の鉢形土器の口縁部破片である。口縁部は大きく外反する。口唇部は丸く仕上げ、内外面は横方向のヘラ研磨調整である。色調は内外面ともに赤白色～赤色をなす。二次的に火を受けた変色している。II-4248、胸部中位で屈曲し口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。口唇部は丸くおさめる。内外面は横方向のヘラ研磨調整である。色調は内外面ともに黄白色で、口縁部が墨灰色をなす。わん形の鉢になると考えられる。II-5885、口縁部は大きく外反する。口唇部は粘土を折り返し肥厚気味に平坦面を持ちながら丸くおさめる。内外面は横方向のヘラナデ調整である。色調は外面が黄白色、内面は赤黄色をなす。II-8304、口縁部破片。外傾しながら直線的にのびる。内外面は横方向のヘラ研磨調整。色調は外面が黄白色、内面が灰褐色～黒色をなす。II-4854、大型の鉢形土器になるとと考えられる胸部から口縁部にかけての破片である。胸部から外傾しながら直線的に立ち上がる。口唇部は肥厚しながら平坦に仕上げられる。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は斜位の刷毛目調整後、横方向のヘラ研磨調整を加えている。色調は外面が黄白色、内外面ともに黄白色をなす。II-8635、中型の鉢形土器の胸部から口縁部にかけての破片である。胸部はやや丸みを持ち、口縁部は緩やかに外反する。口唇部は平坦に仕上げている。外面は横～斜方向のヘラ研磨調整を加えている。内面は横方向のヘラ研磨調整である。口縁部下に指圧痕が並列して残っている。内面の全面に黒色の付着物がみられる。色調は外面が黄土色、内面は付着物のために黄灰色である。II-表1、大型の鉢形土器の胸部から口縁部にかけての破片である。胸部はやや丸みを持ち、口縁部は緩やかに外反する。口唇部は平坦に仕上げ、中央部には粘土接合の痕跡が凹線状に残っている。外面には縦方向の刷毛目調整を施し、その上に横方向のヘラ研磨調



II-13023



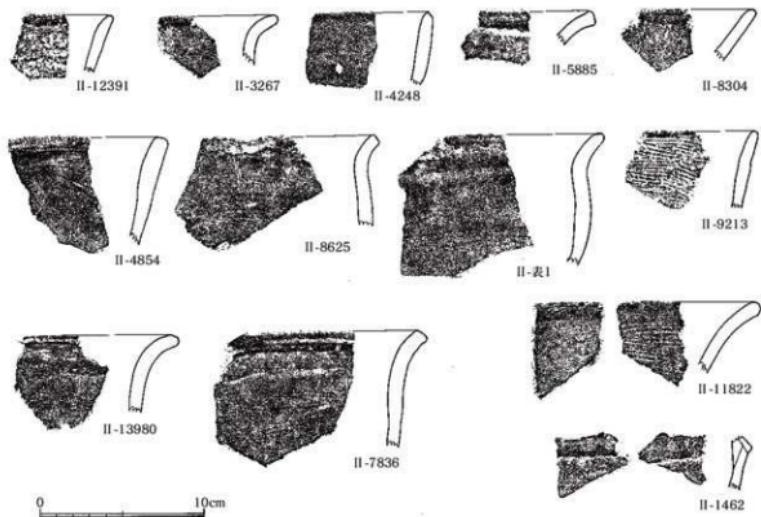
II-4599



II-11478

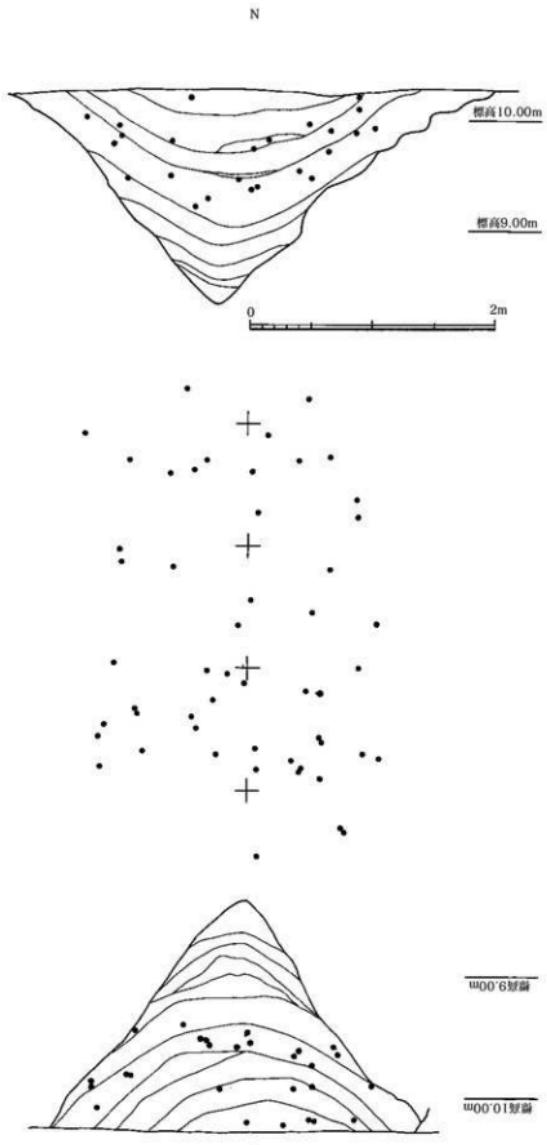


第28図 環濠第2区出土浅鉢・高杯・鉢形土器実測図III



第29図 環濠第2区出土浅鉢・高杯・鉢形土器実測図IV

整を加え刷毛目を消している。刷毛目の終点が口縁下に斜めに並列して残っている。内面は横方向のヘラ研磨調整である。色調は外面が黄白色、内面が黒色をなす。II-9213、鉢形土器の胸部から口縁部にかけての破片である。胸部から口縁部にかけて外傾しながら直線的に立ち上がる。口唇部はとがり気味に丸くおさめる。外面には綫～横方向の貝殻条痕を施す。内面は横方向のヘラナナ調整である。色調は外面が褐色、内面が黄土色をなす。II-13980、中型の鉢形土器。胸部から口縁部にかけての破片である。胸部はやや丸みを持ち、口縁部は緩やかに外反する。口唇部は平坦に仕上げ、中央部には粘土接合の痕跡が四線状に残っている。内外面には横方向のヘラ研磨調整を加えている。内面の口縁部下には指圧痕が並列して残っている。色調は内外面ともに白灰色をなす。II-7836、大型の鉢形土器。胸部から口縁部にかけての破片である。胸部はやや丸みを持ち、口縁部は緩やかに外反する。口唇部は平坦に仕上げ、中央部には粘土接合の痕跡が四線状に残っている。外面には綫方向の刷毛目調整を施し、その上に横方向のヘラ研磨調整を加え刷毛目を消している。刷毛目の終点が口縁下に斜めに並列して残っている。内面は横方向のヘラ研磨調整である。色調は外面が黄白色、内面が黒色をなす。II-11822、大型の鉢形土器。胸部から口縁部にかけての破片である。口縁部は緩やかに外反する。口唇部は平坦面を持ちながら丸くおさめる。外面には横方向のヘラ研磨調整を加え、内面は横～斜方向の刷毛目調整を加え、口縁部の一部をヘラ研磨調整で消している。色調は外面が黄土色～黒色、内面が黒灰色～黒色をなす。II-1462、胸部での字に屈曲する。屈曲部は突帯状に成形している。外面は丁寧な横方向のヘラ研磨調整、内面も同様の調整である。屈曲部に粘土接合部が明瞭に残っている。粘土接合は内傾接合である。色調は内外面ともに黄赤色をなし、外面に黒斑がある。



第30図 環濠第2区（沈線文様）壺形土器出土状況

(5) 沈線文様をもつ壺形土器 出土状況

第30図に沈線文様をもつ壺形土器の出土状況を示した。平面的分布はほぼ一面に分布し特に集中するところは見られない。全体的に沈線文様をもつ土器は上層に多く、下層にはほとんど見られない。このことは弥生時代の開始期の文様は沈線で文様を施文することは少なく、沈線文様のもととなったのは他の方法で文様が施文されたと考えることができる。すなわち、板付遺跡では彩文による文様施文が最も先行すると考えることができる。以下、各層における具体的な方を見ていくことにする。土層の対応関係は後章において検討するので、ここでは各断面の層位をそのまま使用する。

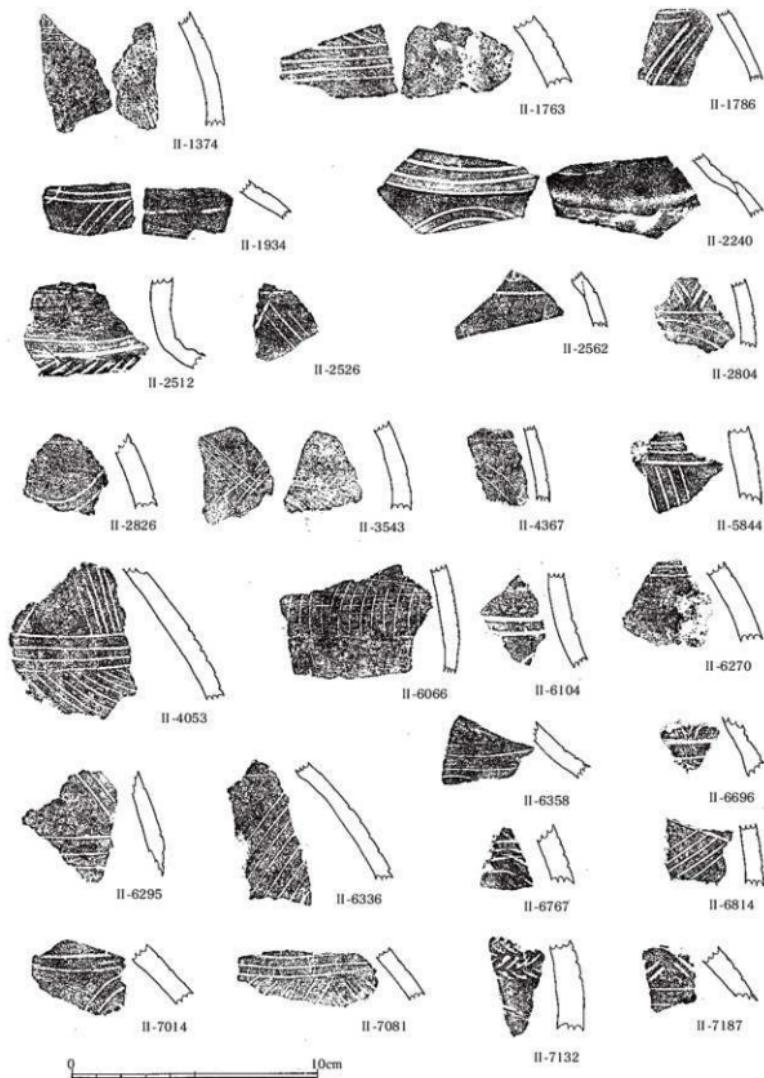
北壁はII-1934の1点が第1層に含まれ、II-1374、II-5844、II-6066の3点が第2層に含まれ、II-7187、II-8399の2点が第3層に含まれ、II-4367、II-6104、II-6814の3点が第4層に含まれ、第5層には出土例はない。II-3543、II-6295、II-7014、II-7796、II-9119、II-9986、II-10852、II-10907、II-10947、II-11121、II-11475、II-11917、II-12285、II-12491、の14点が第6層に含まれ、II-11073の1点が第7層に含まれる。

南壁ではII-1763、II-2512、II-2562、II-2804の4点が第1層に含まれ、II-

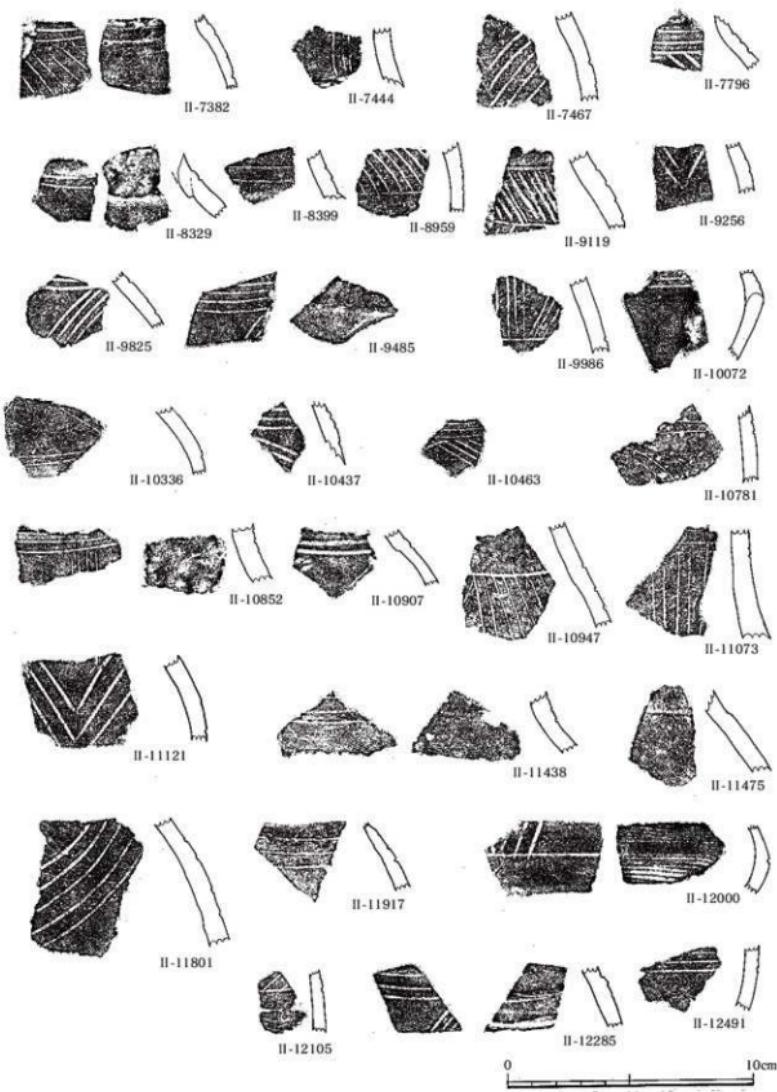
1374、II-6066、II-6767、の3点が第2層に含まれ、II-6270の1点が第3層に含まれ、第4層には出土例ない。II-2240、II-6336、II-7832、II-8329、II-8959、II-9256、II-9485、II-9825、II-10336、II-10463、II-10781、II-11801、II-11917の13点は第5層に含まれ、II-7132、II-7444、II-10072、II-10437、II-12005点は第6層に含まれ、II-12105の1点は第7層に含まれる。

(6) 沈線文様をもつ壺形土器

第31図II-1374、頸部と胴部の境に平行細沈線3条をめぐらす。外面は斜方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面は斜方向の刷毛目調整の上に斜方向の板ナデ調整である。II-1763、大型の壺形土器の胴部、胴中位に細沈線4条を平行してめぐらす。下の3条には沈線の重複がみられる。平行線の上には右下がりの斜位の平行細沈線が描かれる。羽状文と考えられるかぬの存在は不明。外面は斜方向のヘラ研磨調整。内面は斜方向のヘラナデ調整である。II-1786、小型壺の胴部破片。頸部との境に2条の平行沈線をめぐらす。その下に左下がりの弧状の平行弧状沈線3条を施文している。対応する部分が失われているが、弧状八字形文になると考えられる。内外面器面調整は不明。外面は黄土色、内面は灰色をなす。II-1934、内外面は横方向のヘラ研磨調整。黒灰色をなす。小型壺の胴部破片。頸部との境に3条の平行沈線をめぐらす。その下に左下がりの弧状の平行沈線4条を施文している。弧状八字形文になるとと考えられる。II-2240、中型壺の凹部破片。頸部との境に3条の平行沈線をめぐらす。下の沈線部分に段が形成される。その下に2条の円弧文を施文する。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面は粘土の接合部に不整の小さな段ができる、さらに外面の段が反映している。また、指圧痕が並列している。色調は外面が墨褐色、内面は灰褐色をなす。II-2512、頸部から胴部にかけての破片。頸部と胴部の境に2条の平行細沈線をめぐらし、その下に斜位の平行細沈線を描く。羽状文の可能性が強いが、有軸か無軸かは判断できない。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整。II-2526、胴部上半の破片。頸部との境に平行細沈線2条をめぐらし、その下位に平行細沈線3条からなる山形文を施文している。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。II-2562、胴中位の破片。中位に平行細沈線2条をめぐらし、その上に右下がりの平行細沈線2条を描いている。羽状文になるとと考えられるかぬの存在は不明である。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。胎土は他と異なり精製され極めて良質である。II-2804、中型壺の胴中位の破片。胴中位に細沈線1条をめぐらし、その上位に相対する斜位の平行細沈線を描き、下位には円弧状の平行細沈線を描いている。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横方向の貝殻条痕を施し、ヨコナデで消している。II-2826、中型壺の胴上半部の破片。上位に細沈線1条をめぐらし、その下に下向きの貝殻復縁を利用した円弧文2条を描く。外面は斜方向のヘラ研磨調整、内面は斜位のヘラナデ調整である。II-3543、中型壺の胴部上半の小破片。3条の平行細沈線を山形に施文しているが、谷部分で沈線が交差している。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は上か横方向のヘラナデ調整、下か斜位の刷毛目を施し、上からナデを加えている。II-4367、中型壺の胴部上半の破片。上位に2条の平行細沈線をめぐらし、その下に2条の平行細沈線からなる連弧文を施文している。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面はナデ調整である。II-5844、胴部上半破片、上位に4条の平行細沈線をめぐらし、下位に斜位の平行細沈線4条を描く。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横方向のヘラナデ調整である。II-4053、大型の壺形土器の胴部上半の破片。4条の並行沈線をめぐらし、その下に斜位の平行沈線（羽状文）また、上には相対する斜位の平行沈線が描かれる。外面は横方向のヘラ研磨、内面はナデ調整である。II-6066、中型壺の胴上半部の小破片。帶状に細沈線による格子文を施文している。縦線はわずかに弧状をなす。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面



第31図 環濠第2区出土（沈線文様）壺形土器実測図Ⅰ



第32図 環濠第2区出土（沈線文様）壺形土器実測図II

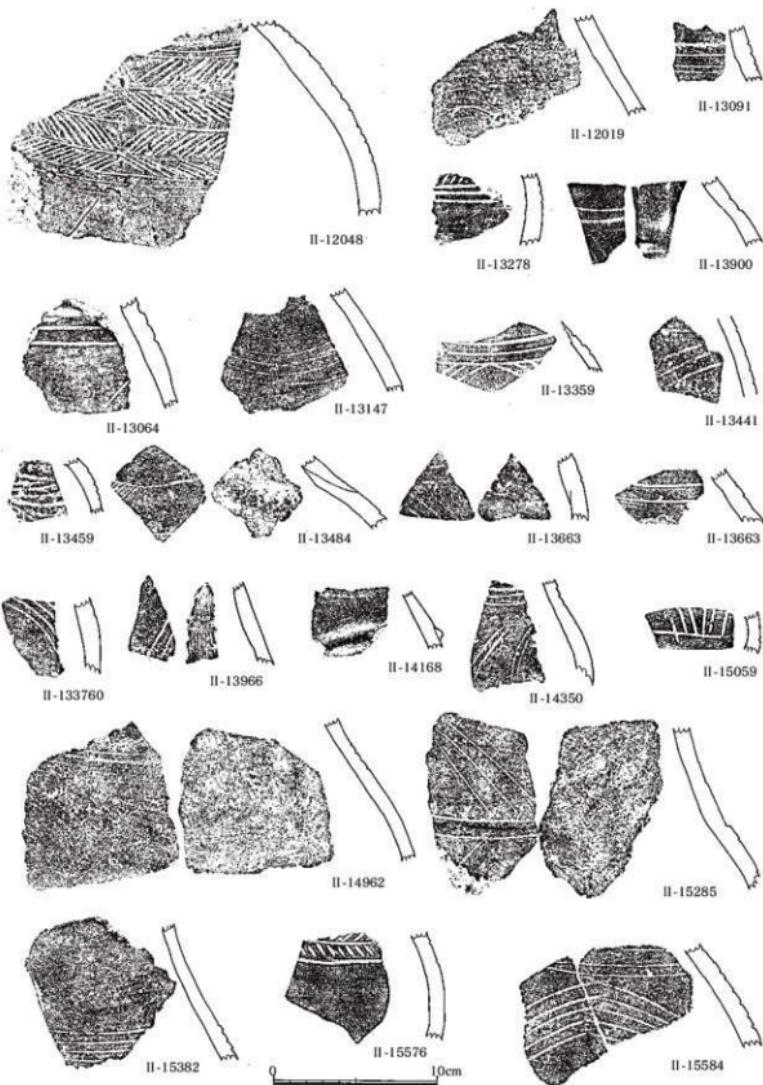
は横方向のヘラナデ調整を加えている。II-6104、頸部から胸部上半にかけての破片。境に平行沈線2条をめぐらし、その下位に円弧状の沈線を描いている。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横方向のヘラナデ調整である。II-6270、胸部上半の破片。上位に平行細沈線2条をめぐらす。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。II-6295、胸中位の破片、3条の平行沈線をめぐらし、その上に弧状の平行沈線を描いている。外面は横×斜方向のヘラ研磨、内面はヨコナデ調整である。II-6336、胸部上半の破片。上位に1条の細沈線をめぐらし、下位に左下がりの斜位の平行細沈線8条を描いている。外面は縦方向のヘラ研磨調整、内面は斜位のヘラナデ調整。II-6358、頸部から胸部上半にかけての破片。境に2条の平行沈線をめぐらし、下位に円弧状の沈線1条が描かれる。外面は横方向のヘラ研磨、内面はヨコナデ調整である。II-6696、中型壺の頸部と胸部の境周辺の小破片である。並行する細沈線2条をめぐらし、その上位に相対する斜位の平行細沈線2条を施し、下位には右下がりの平行細沈線を施文する。羽状文と考えられるか喰の有無は不明。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は斜位のヘラナデ調整である。II-6767、中型壺の胸部上半の小破片。円弧状の平行細沈線4条を施文する。外面は斜位のヘラ研磨調整、内面は同様に斜位のヘラ研磨調整である。II-6814、中型壺の胸部上半の破片。上位に細沈線1条をめぐらし、その下に左下がりの平行細沈線5条を施文している。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面はナデ調整である。II-7014、中型壺の胸部上半の破片。上位に2条の平行沈線をめぐらし、その下に円弧状の平行沈線を描く。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は斜位のヘラナデ調整である。II-7081、胸部上半の破片、3条の平行沈線をめぐらし、下に相対する平行沈線を描いている。外面は横方向のヘラ研磨、内面は斜位のナデ調整である。II-7132、大型壺の胸部中位の破片。中位に無軸の羽状文が2段に施文される。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面はナデ調整である。II-7187、中型壺の胸部上半の小破片。下位に平行した細沈線2条をめぐらし、上位に相対する斜位の平行細沈線を施文する。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面はヨコナデ調整である。

第32図II-7382、小型壺の胸部破片。頸部との境に2条の平行細沈線をめぐらす。その下に右下がりの平行細沈線を施文するが、元来は有軸羽状文の可能性が強い。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面は横方向のヘラナデ調整である。色調は内外面ともに黄白色をなす。II-7444、中型壺の頸部破片。下位に沈線1条をめぐらす。その上には区画するように縦の平行沈線4条を施文する。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面はナデ調整である。外面は丹塗りされている。II-7467、中型壺の胸部上半の破片。5条の平行する連弧文を施文する。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面はナデ調整である。II-7796、小型壺の胸部上半の破片。上位に平行する細沈線3条をめぐらし、その下に相対する斜位の平行する細沈線を施文する。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面はナデ調整である。胎土は精製され極めて良質である。II-8329、中型壺の頸部から胸部上半の破片。頸部と胸部の境に平行する2条の細沈線をめぐらす。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面はナデ調整である。頸部と胸部の境は粘土接合部で段を形成する。段の上には指圧痕が顕著である。II-8399、中型壺の頸部破片。頸部下端に3条の平行細沈線をめぐらす。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面はナデ調整である。II-8959、胸部上半の破片。下に文様区画のための細沈線1条をめぐらす。その上に平行斜線が細沈線で施文されている。破片が小さく文様の全体構成はわからないが、有軸羽状文が施文されたと考えられる。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面はナデ調整である。II-9119、中型壺の頸部から胸部にかけての破片。頸部に1条の細沈線をめぐらし、その下に有軸羽状文を施文する。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面はナデ調整である。II-9256、小型壺の胸部上半の破片。2条の平行沈線で連続三角文を施文する。内外面は磨滅し、詳細は不明。胎土は精製され極めて良質である。II-9825、胸部上半の破片。上位に平行する2条の沈線をめぐらし、下に弧状の平

行沈線4条を施文する。文様が部分的であるか弧状八字形文が施文されていると考えられる。外面は横向のヘラ研磨調整、内面はナデ調整である。II-9485、胴部上半の破片。上部に平行細沈線4条をめぐらす。下位に2条の平行細沈線を弧状に施文する。外面は横向のヘラ研磨調整。内面は頸部と胴部の境の粘土接合部に段が残っている。ヘラナデ調整である。II-9986、中型壺の胴部上半の破片。上位に平行する1条の細沈線をめぐらす。その下に4条の縦の平行沈線と3条の斜位の平行沈線を施文する。外面は横向のヘラ研磨調整、内面はナデ調整である。II-10072、小型壺の胴部破片。胴部中位で屈曲する。屈曲部の上に2条の平行細沈線をめぐらす。外面は横向の丁寧なヘラ研磨調整、内面は横向の丁寧なヘラナデ調整である。内外面とも黒色をなす。II-10336、中型壺の胴部破片。胴中に2条の平行細沈線をめぐらす。その上に相対する斜位の細沈線が施文されている。山形文が施文されていた可能性が強い。外面は横向の丁寧なヘラ研磨調整、内面は縦方向の刷毛目調整を加え上にヨコナデ調整が加えられている。外面は黒色、内面が灰色をなす。II-10437、小型壺の胴部上半の破片。上位に平行する3条の細沈線をめぐらす。その下に2条の平行する細沈線で円弧文を施文する。内外面の調整は不明。胎土は精製され極めて良質である。II-10463、胴部上半の破片。頸部との境に平行細沈線3条をめぐらし、下に3条の平行細沈線で山形文を施文している。外面は横向のヘラ研磨調整、内面はナデ調整である。II-10781、中型壺の胴部上半の破片。上位に平行する3条の細沈線をめぐらす。下には4条の平行する細沈線で円弧文を施文する。外面は横向のヘラ研磨調整、内面はナデ調整である。大型壺の胴部上半の破片。5条の平行する沈線で下向きの円弧文を施文する。外面は横向のヘラ研磨調整、内面は横向のヘラナデ調整である。II-10852、頸部から胴部にかけての破片。頸部と胴部の境に平行する細沈線3条をめぐらし、その下に区画するような縦の平行する細沈線4条を施文する。外面は横向のヘラ研磨調整、内面はナデ調整で指圧痕が残る。II-10907、中型壺の胴部上半の破片。上位に平行する2条の平行する沈線をめぐらす。下には左側に左下がりの平行する2条の沈線、右側に弧状の沈線が施文される。外面は横向のヘラ研磨調整、内面はヨコナデ調整である。内面の頸部と胴部の境には明瞭な段が形成される。II-10947、中型壺の頸部から胴部にかけての破片。頸部に1条の細沈線をめぐらし、下に相対する斜位の平行細沈線を施文する。外面は横向のヘラ研磨調整、内面は横向のヘラナデ調整である。頸部にわずかに段ができる。II-11073、中型壺の頸部破片。上位に平行する細沈線2条をめぐらしその下に頸部を区画するように縦の平行細沈線5条を施文する。外面は横向のヘラ研磨、内面はナデ調整である。II-11121、中型壺の胴部破片。3条を単位とする平行沈線によるヘラ書きの山形文が施文される。外面は横向の丁寧なヘラ研磨調整、内面は横向のヘラナデ調整である。色調は外面が黄白色、内面が黄灰色をなす。II-11438、中型壺の頸部から胴部上半の破片。頸部と胴部の境に貝殻復線による3条の平行する細沈線をめぐらす。外面は横向のヘラ研磨調整、内面は横向の刷毛目調整を加えた後に横向のヘラ研磨調整を加えている。II-11475、中型壺の頸部から胴部の破片。頸部と胴部の境に沈線1条をめぐらす。外面は横向のヘラ研磨調整、内面はナデ調整である。II-11801、胴部上半の破片。5条の平行沈線を下向きの円弧文を施文している。外面は横向のヘラ研磨調整、内面はナデ調整である。II-11917、胴部上半の破片。上位に平行する4条の細沈線をめぐらす。外面は横向のヘラ研磨調整、内面は斜位のナデ調整である。II-12000、中型壺の胴部破片。胴部中位に沈線1条をめぐらし、上に3条を単位とする弧状の平行沈線が施文されている。外面は横向の丁寧なヘラ研磨調整、内面は横向のヘラナデ調整である。内外面は黒褐色をなす。II-12105、中型壺の胴部破片。1条の細沈線をめぐらし、その上に左下がりの平行斜線2条を施文する。羽状文と考えられるが、軸の有無は不明。外面は横向のヘラ研磨調整、内面はナデ調整である。胎土は精製され極めて良質である。II-12285、小型壺の胴部破片。頸部との

境に3条の平行細沈線をめぐらす。その下に左下がりの3条を単位とする弧状の平行細沈線を施文している。弧状八字形文を施文された可能性が高い。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面は粘土接合部が明瞭に残り、横方向のヘラナデ調整を施している。外面は黒灰色、内面は黄土色をなす。II-12491、胴中位の小破片である。上位に平行する3条の細沈線をめぐらす。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面はナデ調整である。

第33図II-12048、大型の壺の胴部上半の破片。頸部と胴部の境に3条の細沈線をめぐらす。その下位には4段にわたって有軸羽状文を施文するが、同じところで羽状文の方向をかえて相対する羽状文を施文し、その間には三角形ないしは菱形の空白部が形成される。羽状文の下位には3条の平行した細沈線をめぐらす。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面はナデ調整であるII-12019、大型の壺形土器の頸部破片。下位に4条の平行する細沈線を弧状に施文する。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面はナデ調整である。外面には丹塗りが施される。II-13091、中型壺の頸部から胴部にかけての破片。頸部と胴部の境に4条の平行する細沈線を施文している。II-13278、小型壺の胴部破片。胴部中位に3条の平行沈線をめぐらす。その上に左下がりの平行沈線を施文している。有軸羽状文が施文されている可能性が高い。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面は斜位のヘラナデ調整である。外面は白灰色、内面は灰色をなす。II-13900、小型壺の胴頸部破片。頸部と胴部の境に3条の平行沈線をめぐらす。その下に右下がりの弧状の平行沈線3条を施文される。文様が部分的であるが、弧状八字形文が施文されていると考えられる。内外面は丁寧なヘラ研磨調整。外面は黄灰色、内面は灰色をなす。II-13064、中型壺の胴部上半の破片。頸部との境に平行した沈線3条の沈線をめぐらす。下位に円弧文を施文する。頸部と胴部の境にわずかな段差が形成される。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面はヨコナデ調整である。II-13147、中型壺の胴部上半の破片。4条の平行する細沈線で下向きの円弧文を施文する。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は縦方向の板ナデ調整である。II-13359、小型壺の胴部上半の破片。頸部と胴部の境に3条の平行した沈線をめぐらす。下位に弧状八字形文を施文する。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面はナデ調整である。胎土は精製され極めて良質である。II-13441、小型壺の胴部上半の破片。上位に細沈線1条をめぐらし、下位に3条からなる平行細沈線で円弧文を施文する。内外面の調整は不明。胎土は精製され極めて良質である。II-13459、小型壺の胴部上半の破片。直線と斜線を組み合わせた文様を施文している。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整。胎土は精製され極めて良質である。II-13484、中型壺の胴部上半の破片。約2cmの間隔の平行した細沈線をめぐらし、2~3条の斜位の細沈線で区画している。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面はヨコナデ調整である。縦方向に指圧痕が残る。II-13663、中型の壺形土器の頸部から胴部にかけての破片。頸部と胴部の境に2条の平行した細沈線をめぐらす。その下に3条からなる弧状八字形文が施文される。外面は強い二次的加熱によって灰色~桃色に変色している。内面はヨコナデ調整である。内面の粘土接合部の段は削り取られている。II-13760、中型壺の胴部上半の破片。4条の平行する細沈線で円弧文を施文している。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。II-13996、中型壺の頸部破片。頸部に斜位の平行沈線2条が施文されている。外面は横方向のヘラ研磨調整、丹塗りが施されている。内面は縦方向の刷毛目調整である。II-14168、小型壺の胴部破片。弧状の小さな実線を貼り付けている。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面はヘラナデ調整。色調は外面が灰黒色、内面が黄灰色をなす。II-14350、中型壺の頸部から胴部にかけての破片。頸部と胴部の境に4条の細沈線をめぐらす下位に3条の細沈線で円弧文を施文し、左側に2条の弧線を施文する。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面はナデ調整である。II-15059、小型壺の胴部破片。中位に沈線1条をめぐらし、その上に3条を単位とする弧状の平行沈線を施文している。弧状八字形文と



第33図 環濠第2区出土（沈線文様）壺形土器実測図III

考えられる。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面は横方向のヘラナデ調整である。外面は褐色、内面は黄白色をなす。II-14962、中型壺の頸部から胸部にかけての破片。頸部と胸部の境に4条の平行した細沈線をめぐらす。その下に4条の平行した細沈線からなる連弧文を施文している。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面はナデ調整、下位は横方向の板ナデ調整である。II-15285、中型壺の頸部から胸部にかけての破片。頸部と胸部の境に2条の平行する細沈線をめぐらす。頸部には3条の平行した細沈線が斜位に施文され、下位には斜線1条が施文される。頸部と胸部の境に段階形成され、外面は丹塗りである。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面はナデ調整であるが、頸部には縱方向の指圧痕が残る。II-15382、中型壺の頸部破片、頸部の下位に3条の平行した沈線をめぐらす。丁寧な外面は横方向のヘラ研磨調整、内面はナデ調整で、縦に指圧痕が残る。II-15576、小型壺の胸部破片。胸部の上半部に有軸羽状文が施文されている。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面は横方向のヘラナデ調整である。色調は内外面ともに黄褐色をなす。II-15584、中型壺の胸部上半の破片。上位に平行する細沈線3条をめぐらす。下位には5条の平行する細沈線で円弧文を施文するが、円弧の頂点で互いの沈線が連結されるが、左側の沈線からはみだしている。円弧の頂点はややとがり気味である。弧状八字形文から円弧文への過程を示すものであろうか。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面はナデ調整である。

(7) 壺形土器出土状況

第34図に壺形土器の出土状況を示した。全体に濃密な状態で分布している。層位的にも各層に包含されている。各層におけるあり方を具体的にみていく。

北壁の第1層からはII-362、II-1364、II-1934、II-2108、II-2266、II-2873の6点が出土している。第2層からはII-185、II-570、II-1374、II-2197、II-3914、II-3921、II-4203、II-4651、II-5844、II-5955、II-5985、II-5988、II-6358、II-6537、II-6696、II-7260の16点が出土している。第3層からはII-7187、II-8211、II-8399、II-8439、4点が出土している。第4層からはII-517、II-576、II-3774、II-3903、II-5542、II-5736、II-6104、II-6399、II-6444、II-6270、II-7096、II-7467、II-7859、II-8623の14点が出土している。第5層からは出土していない。第6層からはII-1171、II-1264、II-1468、II-2415、II-2634、II-3543、II-4355、II-6295、II-6907、II-7081、II-7502、II-7796、II-7864、II-9119、II-9347、II-9421、II-9440、II-9856、II-9986、II-10139、II-10149、II-10193、II-10296、II-10321、II-10676、II-10852、II-10947、II-11073、II-11097、II-11121、II-11475、II-11878、II-11438、II-11577、II-12019、II-12056、II-12158、II-12466、II-12491、II-12517、II-12552、II-12557、II-12763、II-12885、II-13034、II-13103、II-13206、II-13327、II-13359、II-13484の50点が出土している。第7層からはII-9880、II-10530、II-11613、II-12687、II-12810、II-13011、II-13043、II-13045、II-13278、II-13459、II-13865、II-13966、II-14186、II-14169、II-14295の15点が出土している。第8層からはII-13896、II-13900、II-14087、II-14188、II-14886、II-14897、II-15029、II-15110の8点が出土している。第9層からはII-14350、II-14962、II-15059、II-15285、II-15567、II-15576、II-15858の7点が出土している。第10層からはII-15584の1点が出土している。

南壁では第1層からII-1744、II-1763、II-2526、II-2512、II-2562、II-2804、II-2873の7点が出土している。第2層からはII-1222、II-1841、II-1934、II-2108、II-2197、II-2711の6点が出土している。第3層からはII-1662、II-2098、II-2266、II-2826、II-2842、



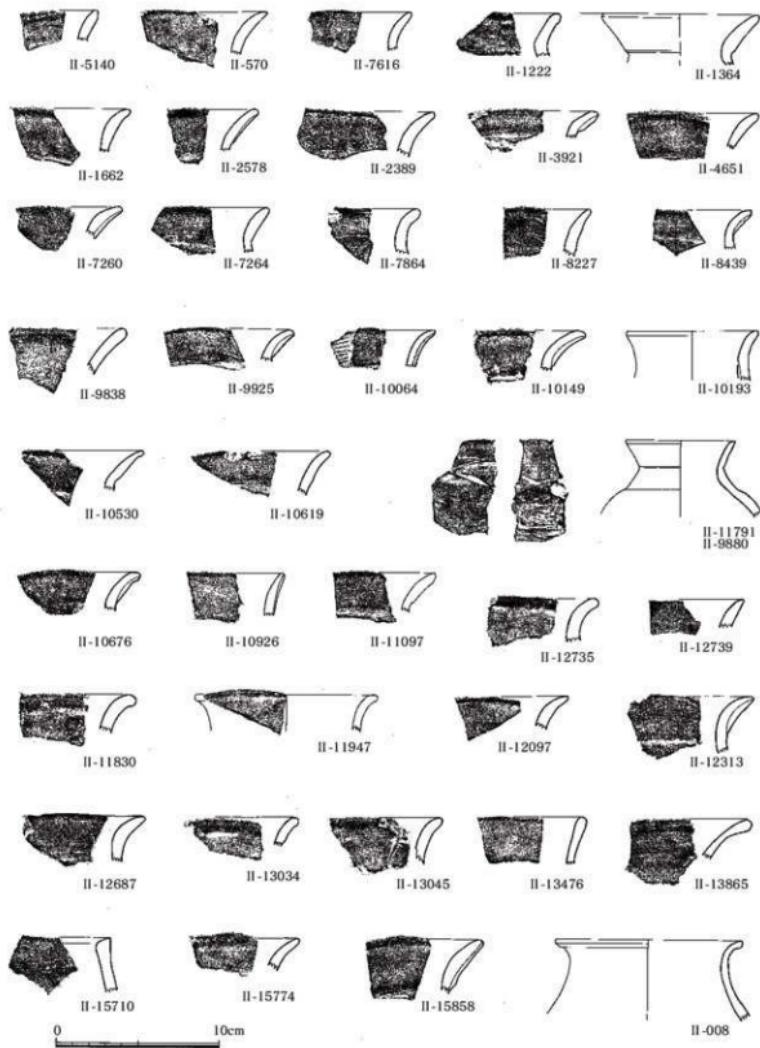
第34図 環濠第2区壺形土器出土状況

II-4367、II-5542、II-5736、II-6767、II-7467、II-7836、II-8195、II-8211、II-8227、II-8399、II-8439、II-8647、II-8725の18点が出土している。第4層からはII-1162、II-1570、II-6444、II-8345、II-10403の5点が出土している。第5層からはII-517、II-1786、II-2240、II-2578、II-5140、II-6104、II-6295、II-7616、II-7959、II-9012、II-9256、II-9347、II-9440、II-9485、II-9838、II-10463、II-10781、II-10926、II-11097、II-11475、II-11801、II-11917、II-12048、II-12073、II-12097の25点が出土している。第6層からはII-7312、II-7444、II-10064、II-10437、II-11511、II-12466、II-12517、II-12733、II-12810、II-13103、II-13147、II-13265、II-13278、II-13690の14点が出土している。第7層からはII-12105、II-14253、II-13206、II-13760、II-14327、II-14551、II-14582の7点が出土している。第8層からは出土していない。第9層からはII-15374、II-15678の2点が出土している。第10層からはII-15682の1点が出土している。第11層からはII-15887の1点が出土している。

(8) 壺形土器

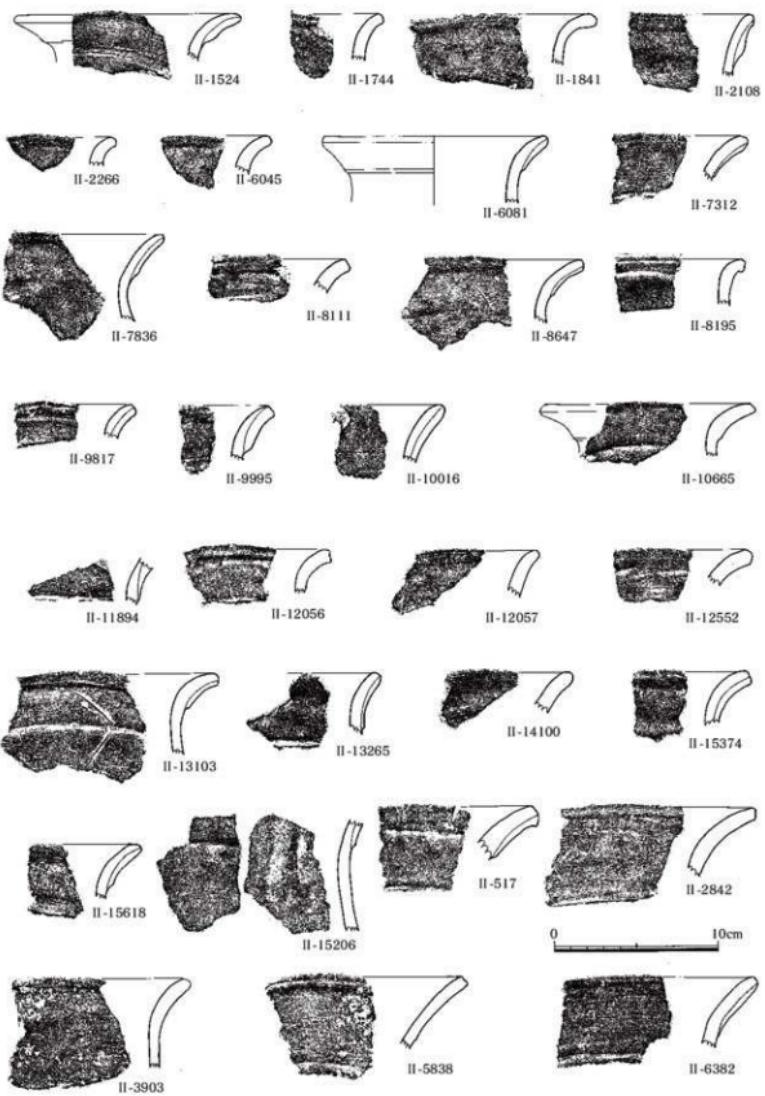
第35図 II-5140、口縁はあまり外傾せず直線的に立ち上がる。端部は丸くおさめる。外面は横方

向のヘラナデの上に横方向の雑なヘラ研磨調整を加えている。内面は横方向の刷毛目調整の上にヘラ研磨調整を加えている。両面ともに黄白色をなす。胎土は精良。II-570、小型壺の口縁部破片。頸部との境に細沈線1条をめぐらす。口唇部は丸くおさめる。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土は精製され良質である。外面は黄白色～褐色、内面は黄白色をなす。II-7616、小型壺の口縁部。外面に粘土帯を貼り付け肥厚させるが、下端の段は不明瞭、口唇部は丸くおさめる。内外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。黄白色～褐色をなす。II-1222、口縁は頸部で屈曲し外傾しながら直線的に立ち上がる。内外面ともに横方向の雑なヘラ研磨調整。色調は外面が灰褐色、内面が黄褐色である。口縁外面に粘土帯を貼り付け肥厚させる。下端の段は明瞭。外面は横方向のヘラナデ調整、内面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。色調は外面が黄白色～黒色、内面が黄白色をなす。II-1364、口縁外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。下端の段は明瞭である。内外面ともに横・斜位方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土は精良。内外面ともに黒褐色をなす。復元口径9.8cm。II-1662、外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させ、下端に段が形成されるかやや不明瞭。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整。色調は内外面ともに黄白色をなす。II-2578、外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。下端に段が形成されるかやや不明瞭である。口縁端部は丸くおさめる。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整。色調は外面が黄褐色、内面が黒色をなす。II-2389、中型壺の口縁部。口唇部は丸くおさめる。内外面は横方向のヘラ研磨調整。赤黄色をなす。II-3921、中型壺の口縁部破片。外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させるか段は明瞭でない。口唇部は丸くおさめる。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土は精良である。外面は褐色、内面は黄赤色である。口縁外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させるか下端の段は不明瞭である。口唇部は丸くおさめる。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土は精製され極めて良質。外面は黄灰色、内面は黄赤色をなす。II-4651、口縁外面に粘土帯を貼り付け肥厚させるか下端の段は不明瞭である。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整で、丹塗りされている。胎土は精製され極めて良質である。素地の色調は黄白色をなす。II-7260、外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。端部は丸くおさめる。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整。両面とも黄白色をなす。II-7264、小型壺の口縁部破片。外面に粘土帯を貼り付け肥厚させている。方の段は形成されないか頸部で屈曲するため明瞭である。内外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。色調は外面が黄白色、内面は褐色である。II-7864、口縁は外反し、口縁下に凹線1条がめぐらされる。端部は丸くおさめる。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整。外面は黄褐色、内面は灰褐色をなす。II-8227、口縁端部はとがり気味に丸くおさめる。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土は精良。黄赤色をなす。II-8439、口縁は大きく外反する。外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させている。端部に段を形成するがあまり明瞭でない。内外面は横方向のヘラ研磨調整。II-9838、外傾しながら直線的に立ち上がる。端部は肥厚気味に丸くおさめる。外面は褐色、内面は黒色をなす。内外面ともに横方向のヘラナデ調整。II-9925、外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させるが、下端の段は不明瞭である。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整。色調は黄白色、内面が灰白色をなす。II-10064、口縁部は外反し、端部はとがり気味におさめる。口縁部外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させ、下端にわずかに段ができる。粘土帯の貼り付けにおいては接着度を強くするために接着面に横方向の貝殻条痕を的確に施している。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土は精製され極めて良質である。内外面ともに黒褐色をなす。II-10149、中型壺の口縁部破片。外面に粘土帯を貼り付け肥厚させる。下端に段が形成される。内外面は横方向のヘラ研磨調整。黄褐色をなす。II-10193、口縁から頸部にかけての破片。頸部は垂直に立ち上がり、口縁はわずかに外反する。端部は丸くおさめる。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整。復元口径8.2cm。胎土は精製され良質。色調は外面が褐色、内面が黒色をなす。



第35図 環濠第2区出土壺形土器実測図Ⅰ

II-10530、小型壺の口縁部破片。外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。下端に段が形成される。口唇部は丸くおさめる。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内外面ともに褐色をなす。II-10619、中型壺の口縁部破片。口縁下端に段が形成されるかやや不明瞭である。内外面は横方向のヘラ研磨調整。外面は褐色、内面は黄褐色をなす。II-9880・11791、小型壺である。胸部と頸部の境には不明瞭ながら段が形成され、頸部は内傾しながら短く立ち上がり、口縁部はわずかに外傾しながら直線的に立ち上がる。口縁部と頸部の境には段が形成されるが、ややいつつである。外面と口縁部の内面には横方向の丁寧なヘラ研磨調整が施される。胸部内面はヘラによる調整か確に付けられ、条痕状をなす。復元口径6.8cm、頸部復元径5.2cmを測る。内外面は黄褐色をなすが、外面の各部に黒色の顔料が残っていて、彩文土器であった可能性が強い。II-10676、口縁外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。下端の段は不明瞭。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内外面ともに褐色をなす。II-10926、口縁はあまり外傾せず立ち上がる。端部は丸くおさめる。外面に薄い粘土帯を貼り付けて肥厚させる。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整。胎土は精良。両面ともに黄白色をなす。II-11097、口縁部は直線的に外反する。外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。下端の段は明瞭である。口唇部は丸くおさめる。胎土は精製されて良質である。内外面とも褐色をなす。II-12735、口唇部は丸くおさめる。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整で、丹塗りされている。素地の色調は外面が黄白色、内面が黄白色～黒褐色をなす。II-12739、口縁外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させるが、下端の段は不明瞭である。口唇部は丸くおさめる。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面は横方向の刷毛目調整の上にヘラナデ調整を加えている。胎土は精製され極めて良質。外面は白灰色、内面は黄赤色をなす。II-11830、口縁は大きく外反する。口縁端部は丸くおさめる。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。ともに丹塗りされている。素地の色調は黄白色をなす。器面がやや荒れている。II-11947、口縁端部が外反し、丸くおさめる。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土は精良。内外面ともに黄褐色～黒褐色をなす。復元口径11.2cm。II-12097、口縁は外反し、端部は丸くおさめる。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土は精製され良質。外面は黄白色、内面は黄赤色をなす。口縁は外傾しながら直線的に立ち上がる。端部は丸くおさめる。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内外面ともに黄白色をなす。II-12313、口縁部は外傾しながら直線的に延びる。口縁外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させている。粘土帯の下端に段が形成されるか小さく不明瞭である。段の下に縦方向の刷毛目の痕跡がある。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整、ともに丹塗りされている。素地の色調は黄白色をなす。II-12687、口唇部は丸くおさめる。外面は横方向の刷毛目調整の上に横方向の丁寧なヘラ研磨調整を加える。内面も横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。胎土は精良。内外面ともに黒褐色をなす。II-13034、口縁端部は丸く肥厚させながらおさめる。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整、色調は内外面ともに黄赤色をなす。II-13045、口縁端部が外反する。口唇部は丸くおさめる。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整、丹塗りされる。素地は黄白色をなす。II-13476、小型壺の口縁部破片。口縁はほぼ直線的に立ち上がる。内外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土は精良。内外面ともに黄白色をなす。II-13865、口縁端部は肥厚し丸くおさめる。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整、丹塗りされている。内外面ともに黄白色をなす。II-15710、口縁部は内傾しながら直線的にのびる。口唇部はやや肥厚し、平坦に仕上げる。内外面は横方向のヘラ研磨調整。黄褐色をなす。II-15774、口唇部は丸くおさめる。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整、丹塗りされている。素地の色調は黄白色をなす。II-15858、口縁外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。下端の段はやや不明瞭。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整。黒褐色をなす。胎土は精良。II-8、口縁部から頸部にかけての破片である。復元口径11.6cmを測る。頸部は内傾しながら緩やかに立ち上



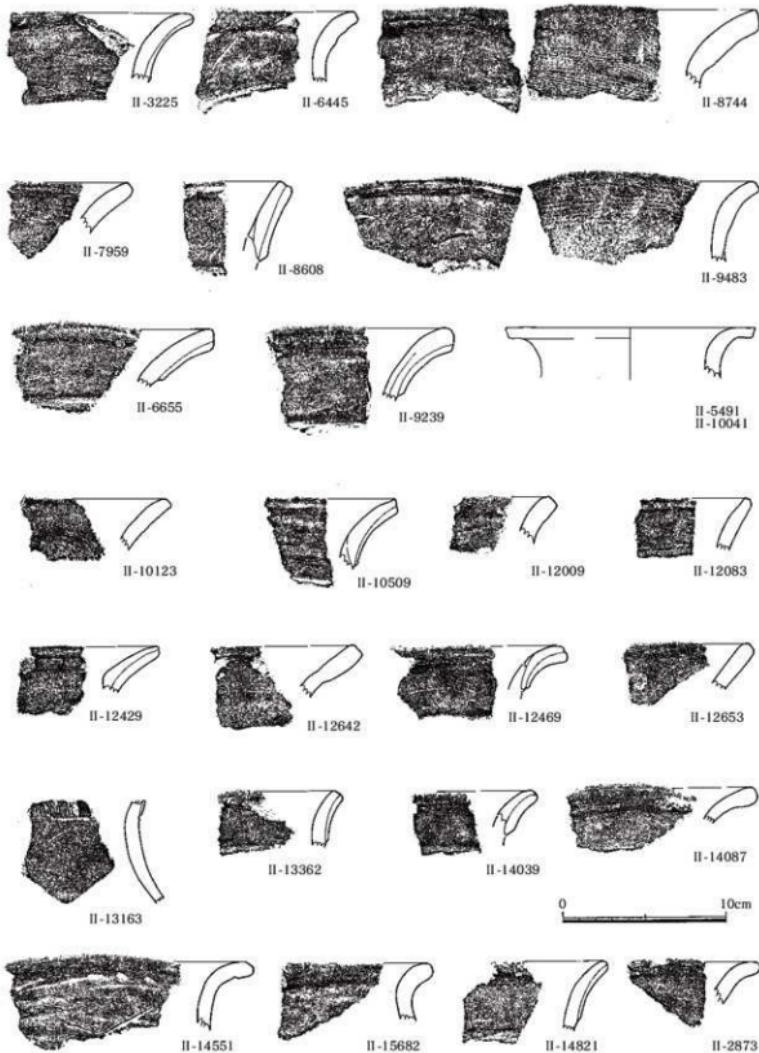
第36図 環濠第2区出土壺形土器実測図Ⅱ

り、口縁は大きく外反する。口縁端部はやや肥厚気味に丸くおさめる。器面が荒れて判然としないか外面は横方向のヘラ研磨調整。内面の頸部は横方向の刷毛目調整、口縁はその上に横方向のヘラ研磨を施す。色調は内外面ともに黄白色をなす。

第36図II-1524、口縁外面に粘土帶を貼り付け肥厚させる。下端の段は明瞭、口唇部は丸くおさめる。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整。復元口径14.0cm。色調は外面が黄灰色、内面が黄赤褐色をなす。II-1744、口縁端部が外反する。口唇部は丸くおさめられ、沈線1条がめぐる。内外面は横方向のヘラ研磨調整、丹塗りされている。素地の色調は黄白色をなす。II-1841、口縁部が大きく外反する。端部は丸くおさめる。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整で丹塗りされている。丹塗りの下の素地は内外面とも黄白色をなす。内面には口縁部を外反させるための指圧痕が残っている。II-2108、口縁は緩やかに外傾しながら立ち上がり、端部が外反し、丸くおさめる。外面には粘土帶が貼り付けられるが、下半部に厚く突帯状に貼り付けられるために下端の段は不明瞭である。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。色調は内外面ともに赤褐色をなす。II-2266、口縁は外反する。端部は丸くおさめる。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整。両面とも黄土色をなす。II-6045、口縁端部が外反し、丸くおさめる。外面は横方向のヘラナデ調整。内面は横方向のヘラ研磨調整である。外面が黄白色、内面が黄赤色である。II-6081、頸部は垂直に立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。口縁外面には粘土帶を貼り付け肥厚させている。粘土帶の下端には段が形成される。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整。復元口径13.8cmを測る。II-7312、口縁部は外傾しながら直線的に延びる。口縁外面には粘土帶を貼り付け肥厚させている。粘土帶の下端に小さな段ができるが明瞭でない。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整で丹塗りされている。素地の色調は灰白色をなす。II-7836、口縁部から頸部にかけての破片。頸部は内傾しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。口縁部外面には粘土帶が貼り付けられ肥厚する。粘土帶の下端には段が形成されるがあまり明瞭ではない。口縁端部は丸くおさめる。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。色調は内外面ともに黄白色をなす。II-8111、口縁外面に粘土帶を貼り付けて肥厚させるが、下端の段は部分的で不明瞭である。口唇部には粘土接合部が部分的に凹線状に残る。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。色調は外面が黄白色、内面が黒色である。II-8647、口縁部は外傾しながら緩やかに立ち上がる。口縁外面には粘土帶を貼り付け、肥厚させている。下端に段が形成されるが明瞭ではない。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整を加えている。内外面ともに黄土色をなす。II-8395、口縁部は折り返され、玉縁状をなす。口唇部に1条の沈線をめぐらす。内外面ともに刷毛目調整後、横方向のヘラ研磨調整を施し、丹塗りされている。素地の色調は黄白色をなす。II-9817、口縁は外反し、口縁部は粘土帶を張り合わせている。端部の粘土帶の合せ目に溝ができる。口縁下に細い沈線1条がめぐる。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整色調は内外面ともに灰白色から黒色である。II-9995、口縁部は外面に粘土帶を貼り付けて肥厚させる。下端の段はやや不明瞭である。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整。外面は黄土色、内面は黄赤色である。II-10016、口縁は緩やかに外反し、口唇部は丸くおさめる。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。色調は外面が黄赤色、内面は黄褐色をなす。II-10665、口縁外面に粘土帶を貼り付けて肥厚させる。下端の段は明瞭。口唇部は丸くおさめる。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整。褐色をなす。復元口径13.4cm。II-11894、口縁部破片。外面に粘土帶を貼り付けて肥厚させる。下端の段は明瞭である。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。色調は外面が黄土色、内面が黄赤色をなす。II-12056、口縁部は大きく外反する。口縁部外面には粘土帶が貼り付けられ肥厚するが下端の段は不明瞭である。口縁端部はヨコナデが加えられ平坦である。内外面は横方向のヘラ研磨調整である。色調は黄赤色をなす。II-12057はあまり外傾せずに立ち上がる。口

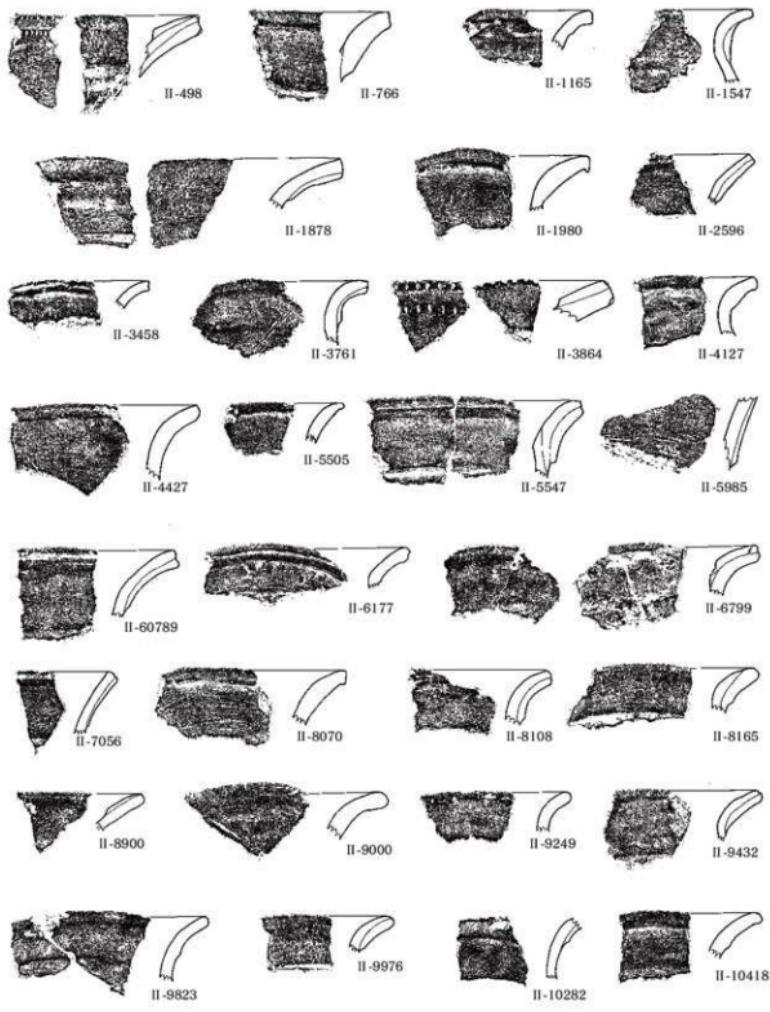
唇部は丸くおさめている。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整。内外面ともに黒褐色をなす。II-12552、口線は大きく外反する。口線端部は丸くおさめる。外面は縦方向の刷毛目調整の上に横方向のヘラ研磨を加える。内面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。内外面ともに丹塗りである。素地の色調は黄白色をなす。II-13103、口線部は大きく外反する。口線外面には粘土帶を貼り付け、肥厚させている。下端には明瞭な段が形成されている。肥厚帶の幅は狭い。内外面には横～斜位の刷毛目調整を加えた後で、横方向の丁寧なヘラ研磨調整が加えられている。内外面ともに丹塗りされている。素地の色調は黄白色をなす。II-13265、口線部はわずかに外反する。口線端部は丸くおさめる。口線部外面に粘土帶を貼り付け肥厚させている。粘土帶の下端には段が形成される。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整、ともに丹塗りされている。素地の色調は黄白色をなす。II-14100、端部は丸くおさめる。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整。色調は内外面ともに黄白色～黒色をなす。II-15374、口線端部は平坦で、粘土接合部が凹部として残っている。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整、丹塗りされている。素地は内外面ともに黄褐色をなす。II-15618、口線外面に粘土帶を貼り付け肥厚させている。下端の段は不明瞭である。口唇部は丸くおさめる。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。色調は内外面とも黄褐色である。II-13206、口線部から頸部にかけての破片である。口線外面に粘土帶を貼り付け肥厚させているが、端部を欠いている。下端に明瞭な段が形成される。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は頸部に指圧痕が並列し、口線部は横方向のヘラ研磨調整である。外面と口線部内側は丹塗りされる。素地の色調は内外面ともに黄白色である。II-1517、口線部は外傾しながら直線的にのびる。外面には粘土帶が貼り付け肥厚させている。方に小さい段が形成されている。口線端部はなでられ平坦になって下方に粘土が垂れている。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。外面は丹塗りされている。素地の色調は黄白色をなす。II-2842、口線部は外傾しながら緩やかに立ち上がる。外面には粘土帶が貼り付け肥厚させている。下端には段が形成されているが明瞭ではない。肥厚帶は幅広い。端部には板ナデが加えられ平坦である。内外面には板ナデが加えられ、さらにヘラ研磨が加えられている。色調は黄白色をなす。II-3903、口線部は緩やかに外反する。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。外面と口線部内面は丹塗りされている。II-5838、口線は外傾しながら直線的に立ち上がる。口唇部は平坦に仕上げる。II-6382、大型壺の口線部破片。口線外面に粘土帶を貼り付け肥厚させる。下端に段が形成されるがやや不明瞭である。口唇部は丸くおさめる。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内外面ともに灰褐色をなす。

第37図II-3225、口線部は外傾しながら緩やかに立ち上がり、口線端部は丸くおさめる。口線部の下端にわずかな段が形成されるがやや不明瞭である。内外面ともに横方向の粗い刷毛目調整の上にヘラナデ調整が加えられている。内外面ともに黄褐色をなす。外面には粘土帶が貼り付けられ肥厚させ、下端には段が形成されるが破損しているので不明瞭である。肥厚帶は幅広である。内外面には横～斜位の刷毛目調整を施した後に、外面と内面の上半に横方向のヘラ研磨調整が加えられる。内外面ともに丹塗りされている。素地は灰白色をなす。II-6444、口線は外傾しながら緩やかに立ち上がる。端部は平坦に仕上げる。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整で、丹塗りされている。素地の色調は黄白色をなす。II-8744、大型壺の口線部破片。口線外面に粘土帶を貼り付け肥厚させる。端部はほぼ平坦に仕上げる。下端の段は明瞭でない。外面は横方向のヘラナデ調整、内面は横方向の目の粗い刷毛目調整を施している。内外面ともに黄白色をなす。II-7959、口線部は外反し、直線的にのびる。口唇部は平坦で、中央部に粘土接合部が凹線状に残っている。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整、丹塗りされている。素地の色調は黄白色をなす。II-8608、口線は外傾しながら直線的にのびる。外面に粘土帶を貼り付け肥厚させている。下端に段が形成される。口唇部は平坦で凹線1条がめぐる。頸部の粘土接合部で外れている。粘土接合は外



第37図 環濠第2区出土壺形土器実測図III

傾接合である。内外面は横方向のヘラ研磨調整である。色調は外面が黄土色、内面が黄白色をなす。II-9483、壺形土器の口縁部破片。ミスで掲載したのでここで説明を加える。口縁部は緩やかに外反し、如意形をなす。口唇部は平坦に仕上げる。口縁部外面はヨコナデ調整。胸部には縦方向の刷毛目調整を加える。口縁部内面は横方向の刷毛目調整後、ヨコナデ調整を加える。胸部はヘラナデ調整である。色調は外面が褐色、内面が黄土色をなす。II-6656、大型の壺形土器の口縁部破片。口縁外面に粘土帶を貼り付けて肥厚させる。口唇部は平坦に仕上げるが粘土の接合部が凹部として残っている。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整で、黄白色をなす。II-9239、大型の壺形土器の口縁部破片。外面に粘土帶を貼り付けて肥厚させる。口唇部は肥厚気味に平坦に仕上げる。外面は横方向のヘラナデ調整、内面は横方向の刷毛目調整の上にヘラナデ調整を加えている。外面は褐色、内面は赤褐色をなす。II-5491・10041、口縁部は大きく外反する。口唇部はヘラナデされ平坦である。口縁部内側には口縁を外反させるための指圧痕か並列してついている。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整。色調は外面ともに黄褐色をなす。復元口径15.2cm。II-10123、外傾しながら直線的に立ち上がる。口唇部は丸くおさめる。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。内外面ともに黄赤色をなす。II-10509、口縁外面に粘土帶を貼り付けて肥厚させる。下端に形成される段は明瞭である。口唇部は平坦で粘土の接合部が凹線状に残る。また頸部にも粘土接合部が凹線に残っていて、外傾接合である。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整、褐色をなす。II-12009、小破片。口縁端部は丸くおさめる。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整。色調は内外面ともに黄白色をなす。II-12083、口縁は外傾しながら直線的に立ち上がる。口唇部は平坦である。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。色調は外面が黄灰色、内面は黄土色である。II-12429、口縁部は大きく外反する。口唇部は平坦である。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。色調は外面が黄土色、内面が褐色をなす。II-12642、口縁外面に粘土帶を貼り付けて肥厚させるが、下端の段は明瞭でない。口唇部は平坦である。内外面ともに横方向のヘラナデ調整である。色調は黄土色をなす。II-12469は口縁部外面に粘土帶を貼り付けて肥厚させ、下端に段が形成される。口縁端部は平坦である。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整で、ともに丹塗りされている。内面は粘土接合部で剥離していて、接合は外傾接合である。素地の色調は黄白色をなす。II-12653、大型壺の口縁部破片。口唇部は丸くおさめる。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整。色調は外面が黄土色、内面は褐色をなす。II-13163、口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部と頸部の境に沈線1条がめぐらされる。口縁には粘土帶が貼り付けられ肥厚するか貼り付け面には縦の刷毛目が施され接着を強固にしている。内外面は横方向のヘラ研磨調整である。外面は黄褐色、内面は黄赤色をなす。II-13362、口縁外面に粘土帶を貼り付けて肥厚させている。下端に小さな段が形成される。内外面ともに横方向のヘラ調整であるが遺存状態が悪い。内外面とも黒色をなす。II-14039、外面に粘土帶を貼り付け肥厚させている。粘土接合は明瞭に残っている。下端に段が形成されるかやや不明瞭である。内外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。内外面は黄白色をなす。II-14087口縁部は大きく外反する。端部は肥厚し、丸くおさめる。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整。丹塗りの痕跡が認められる。素地の色調は外面が黄白色、内面は黄赤色をなす。II-14551、口縁部は大きく外反する。口縁部は肥厚気味に丸くおさめている。外面には縦方向の刷毛目調整が施され、刷毛目工具の終点が線状に連続して残っている。刷毛目の上には横方向のヘラナデ調整を加えている。口縁内面は横方向のヘラ研磨調整、頸部には指圧痕か並列し、上にヨコナデ調整が加えられている。外面と内面の口縁部は丹塗りされている。素地の色調は外面が灰白色、内面が黄赤色をなす。II-15682、大型壺の口縁部で大きく外反する。口縁端部は丸くおさめる。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整で丹塗りされている。素地の色調は黄赤色をなす。II-14821、口縁外面に粘土帶を貼り付け



0 10cm

第38図 環濠第2区出土壺形土器実測図IV

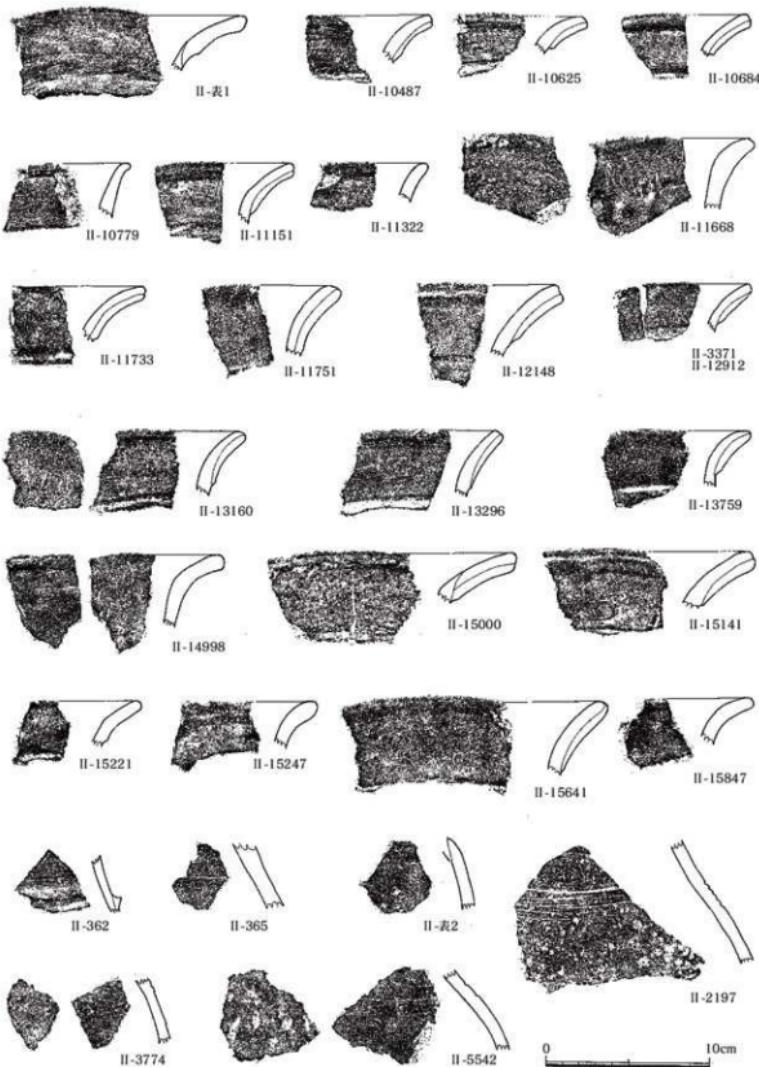
て肥厚させる。肥厚帯の下端には段が形成される。口唇部は丸くおさめる。外面は横方向のヘラ研磨調整である。内面は斜位の刷毛目調整の後に横方向のヘラ研磨調整を加える。内外面ともに黄白色をなす。II-2873、大型壺の口縁で大きく外反する。端部は丸くおさめる。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整で丹塗りされている。

第38図II-498、大型壺の口縁部小破片。口縁部の内側に粘土帶を貼り付けて肥厚させる。肥厚帯の下端には段が形成される。段は高く明瞭である。口唇部は平坦に仕上げていて、両端部にヘラ状工具により小さな刻目が施文される。内外面ともに横方向のヘラナデ調整であるが、部分的に横方向のヘラ研磨を施している。器壁の接合は外傾接合である。色調は内外面ともに黄白色をなす。II-766、大型壺の口縁部破片。外面に粘土帶を貼り付けて肥厚させる。肥厚帯の下端には段が形成される。段は明瞭で高い。口唇部は平坦に仕上げている。外面は器面が荒れていて調整は判別できない。内面は横方向のヘラナデ調整である。色調は内外面ともに黄白色をなす。口縁部直下の器壁の接合は外傾接合である。II-1165、中型壺の口縁部破片。口唇部は肥厚気味に平坦に仕上げられ、ヘラナデが加えられる。外面は横方向のヘラなで調整、内面は横方向のヘラ研磨調整である。色調は外面が黒色、内面が黄赤色～褐色をなす。II-1547、中型壺の口縁部破片。外面に粘土帶を貼り付けて肥厚させる。下端に段が形成されるが、低く不明瞭である。口唇部は平坦に仕上げられる。外面は横方向の雑なヘラナデ調整、内面は口縁部が横方向のヘラ研磨調整、頸部は縦方向のヘラナデ調整である。指圧痕が並列している。色調は内外面ともに黄土色をなす。II-1878、大型壺の口縁部破片。外面に粘土帶を貼り付けて肥厚させる。肥厚帯の下端に低い段が形成される。口唇部が最も肥厚し平坦に仕上げる。平坦面は横方向のヘラナデ調整である。外面は縦方向の刷毛目調整後に、横方向のヘラナデ調整を施し刷毛目を消している。内面は横方向の刷毛目調整を施し、その上にヘラナデ、ヘラ研磨を加え刷毛目を消している。色調は内外面ともに黄土色をなす。II-1980、中型壺の口縁部破片。口縁部は大きく外反する。口唇部は平坦に仕上げている。下端部が下方にのびる特徴がある。口唇部にはヨコナデが加えられる。外面は縦方向の刷毛目調整を施した後に横方向のヘラナデ調整を施している。内面は横方向のヘラナデ調整で、口縁部には横方向のヘラ研磨調整を加えている。色調は外面が黄白色、内面は黄土色をなす。口縁部に黒斑がある。II-2576、中型壺の口縁部破片。外面に粘土帶を貼り付けて肥厚させる。下端に段が形成され、段は明確である。口唇部は丸く仕上げられ粘土接合部の痕跡が中央部に凹線状に部分的に残る。内外面は横方向のヘラ研磨調整。色調は内外面ともに褐色をなす。II-3458、中型壺の口縁部破片。口唇部は平坦に仕上げられが、粘土接合部の痕跡が中央部に凹線状に残る。内外面は横方向のヘラ研磨調整。色調は外面が茶褐色、内面が黄赤色～黒褐色をなす。鉢形土器の可能性もある。II-3761、中型壺の胴部破片。口縁部外面には粘土帶を貼り付けて肥厚させる。肥厚帯の下端には段が形成されるが低くあまり明瞭ではない。口縁部の途中で屈曲し大きく外反する。口唇部は平坦面を保ちながら丸くおさめている。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横方向のヘラナデ調整で、口縁部はヘラ研磨調整を加えている。色調は外面が黄土色、内面が黄白色をなす。II-3864、大型壺の口縁部小破片。内面に粘土帶を貼り付けて肥厚させる。下端には明瞭な段が形成される。口唇部は平坦に仕上げ、両端部にヘラ状工具による刻目が的確に施文される。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整、色調は内外面ともに黒褐色をなす。II-4127、中型壺の口縁部破片。口縁部外面に粘土帶を貼り付けて肥厚させるが下端の段は不明瞭である。口唇部は平坦に仕上げられる。内外面は横方向のヘラナデ研磨調整。色調は外面が黄土色、内面が褐色をなす。II-4427、口縁部は大きく外反する。口唇部は平坦に仕上げるが中央部に粘土接合部が不整の線状に残っている。外面は丁寧なヘラ研磨調整、内面は口縁部が横方向のヘラ研磨調整、頸部は横方向のヘラナデ調整である。色調は外面が黄赤色、内面が黄土色で黒

斑がある。II-5505、小型壺の口縁部破片。外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。下端の段は明瞭でない。口唇部は玉縁状に丸くおさめる。内外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。色調は外面が黄灰色、内面が黄土色～褐色をなす。胎土は精製され極めて良質である。II-5547・2097、大型壺の口縁部破片。口縁部外面に粘土帯を貼り付けて口縁部を肥厚させる。肥厚帯の下端には段が形成される。段は高く明瞭である。口唇部平坦面を作り出している。中央部には粘土接合部が凹線状に残っている。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。口縁部直下の器壁の接合は外側接合である。色調は内外面ともに灰白色をなす。II-5985、大型壺の口縁部破片。外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。下端に段が形成される。内外面は横方向のヘラ研磨調整である。色調は内外面ともに黄土色をなす。II-6079、大型壺の口縁部破片。口縁部外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。肥厚帯の下端には段が形成されるが、低く明瞭ではない。口唇部は肥厚し平坦に仕上げているが中央部に粘土接合部が凹線状に残っている。内外面は横方向のヘラ研磨調整である。色調は内外面ともに白灰色をなす。II-6117、中型壺の口縁部破片。口縁部外面には粘土帯を貼り付けて肥厚させる。肥厚帯の下端には段が形成されるが、あまり明瞭ではない。口唇部は肥厚気味に丸くおさめる。中央部には粘土接合部が凹線として残る。外面は横方向のヘラナデ調整、内面は横方向のヘラ研磨調整である。色調は内外面ともに黄白色をなす。外面に黒斑がある。II-6799・5874、中型壺の口縁部破片。口縁部外面と内面に粘土帯を貼り付けて肥厚させている。外面は下端には段が形成されるが、低く明瞭ではない。内面の粘土帯は剥離している。剥離面には斜位の刷毛目が施されている。肥厚帯の下端に段が形成されているが、状態は不明。口唇部は平坦に仕上げられるが、中央部には粘土接合部が凹線状に残っている。外面は横方向のヘラナデ調整である。色調は内外面ともに黄土色をなす。II-7056、中型壺の口縁部破片。外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。下端に段が形成されるが低く明瞭でない。口唇部は肥厚気味に平坦に仕上げられ粘土接合部の痕跡が中央部に凹線状に残る。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面は斜位の刷毛目調整後、上に横方向のヘラナデ調整を加え刷毛目を消している。色調は外面が赤褐色、内面が黄白色～黒褐色をなす。II-8070、口縁部は屈曲し外傾しながら直線的にのびる。口唇部は平坦に仕上げ下端部が下方にのびる。外面は横方向のヘラナデ調整後に粗雑な横方向のヘラ研磨調整を加えている。内面やや雑な横方向のヘラ研磨調整である。色調は内外面ともに黄白色である。II-8108、大型壺の口縁部破片。外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。下端に段が形成される。口唇部は平坦に仕上げられ粘土接合部の痕跡が中央部に凹線状に部分的に残る。内外面は横方向の雑なヘラ研磨調整。色調は外面が褐色、内面が褐色をなす。II-8165、大型壺の口縁部破片。外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。肥厚帯は下端に明瞭な段が形成されている。口唇部は丸くおさめている。外面には横方向の丁寧なヘラナデ調整を施している。内面は横方向のヘラ研磨調整である。色調は外面が黄土色、内面が黄白色～黒灰色をなす。II-8900、大型壺の口縁部破片。口唇部は丸く仕上げられ、粘土接合部の痕跡が中央部に凹線状に残る。内外面は横方向のヘラ研磨調整。色調は内外面ともに黄土色をなす。II-9000、大型壺の口縁部は大きく外反する。口唇部はやや肥厚させながら丸くおさめる。内外面は横方向のヘラ研磨調整。色調は内外面とも黄灰色をなす。II-9249、甕形土器の口縁部破片。内外面ともにヨコナデ調整。色調は外面が黄褐色、内面が黒褐色をなす。II-9482、大型壺の口縁部破片。外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させるが、下端には段が形成されない。口唇部は平坦に仕上げられ粘土接合部の痕跡が中央部に凹線状に残る。内外面は横方向のヘラ研磨調整。色調は内外面ともに黄白色をなす。II-9823、中型壺の口縁部小破片。外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。下端に段が形成されるが、あまり明瞭ではない。口唇部は丸くおさめる。内外面は横方向の雑なヘラ研磨調整。色調は内外面ともに黄白色をなす。II-9976、中型壺の口縁部破片。外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。下

端に段が形成され、明瞭に残る。口唇部は丸くおさめられる。外面は横方向のヘラナテ調整、内面は横方向のヘラ研磨調整。色調は外面が黄白色、内面が黄灰色をなす。II-10282、中型壺の口縁部破片。外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させ、下端に段が形成される。段は明瞭で高い。上半部を失う。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面は横方向の刷毛目調整後、横方向のヘラ研磨調整を加え、刷毛目を消している。色調は内外面ともに黄白色をなす。外面は丹塗りされている。II-10418、中型壺の口縁部破片。外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させ、下端に段が形成される。段は明瞭である。口唇部は丸くおさめる。内外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。色調は外面が黄白色、内面は褐色をなす。

第39図II-表1、大型壺の口縁部破片。口縁部は大きく外反する。口縁部外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。肥厚帯の下端に段を形成するが、段の整形は粗雑である。口唇部は丸くおさめるが口唇部の中央部には粘土の接合部が沈線状に残っている。外面はやや粗雑な横方向のヘラ研磨調整、内面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。色調は外面が黄白色、内面が黄白色～赤黄色をなす。II-10487、大型壺の口縁部小破片。大きく外反する。口唇部は平坦に仕上げる。口縁部外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。肥厚帯の下端には段が形成される。段は不明瞭である。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。色調は内外面ともに黄褐色をなす。II-10625、中型壺の口縁部小破片。口縁部外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。肥厚帯の下端には段が形成される。段は高く極めて明瞭である。口唇部は平坦に整形する。内外面ともに斜位の刷毛目調整を施した後に、横方向のヘラ研磨調整を加えて刷毛目を消している。色調は内外面ともに黄白色をなす。II-10684、中型壺の口縁部小破片。外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させ、下端には段が形成される。段は明瞭である。口唇部は平坦に仕上げ、中央部には粘土接合部が不整な凹線として部分的に残っている。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。色調は内外面ともに黄土色をなす。II-10779、大型壺の口縁部破片と考えられるが、大型の鉢の可能性もある。口唇部は小さな玉縁状に肥厚させて丸くおさめる。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整と考えられるが器面が荒れて詳細は明らかでない。割れ口から観察できる粘土の接合は外側接合である。二次的に火を受けたと考えられ、内外面ともに黄赤色～赤色をなす。II-11151、大型壺の口縁部小破片。外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。肥厚帯の下端には段が形成される。段はヘラで整形されるがやや粗雑である。口唇部は肥厚気味に平坦に仕上げている。内外面は横方向のヘラ研磨調整を加えている。色調は外面が黄白色～黄褐色、内面が黄赤色～褐色をなす。II-11322、中型壺の口縁部小破片。口唇部は丸くおさめる。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横方向のヘラナテ調整である。色調は外面が黄褐色～黒褐色、内面が黄灰色をなす。II-11668、大型壺の口縁部破片。口縁部内側に粘土帯を貼り付けて肥厚させるが、他の例のように肥厚帯を作ることはなく、内面の口端部をやや下った部分が厚くなる。口唇部は丸くおさめている。外面と内面の口縁部は横方向のヘラ研磨調整であるが、表面がやや荒れていて詳細は不明。表面にスリップ状に桃色の粘土が薄く残っているので丹塗り磨研されていたことがわかる。内面の口縁下には横方向の細かい刷毛目調整が施される。刷毛目の最上部には指頭痕が並列して残っている。色調はスリップの下の素地は黄土色をなす。II-11733、大型壺の口縁部小破片。外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。肥厚帯の下端には段が形成される。口唇部は平坦に仕上げられるが、中央部に粘土接合部が不整な凹線として残っている。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。色調は外面が赤褐色、内面が黒褐色をなす。II-11751、大型壺の口縁部小破片。外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。下端には段が形成されるがあまり明瞭でない。口唇部は丸くおさめる。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整であるが、やや器面が荒れているために詳細は明らかでない。色調は内外面ともに黄白色をなす。II-12148、大型壺の口縁部破片。外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。肥厚帯の下端には段が形成される。口唇部は平坦

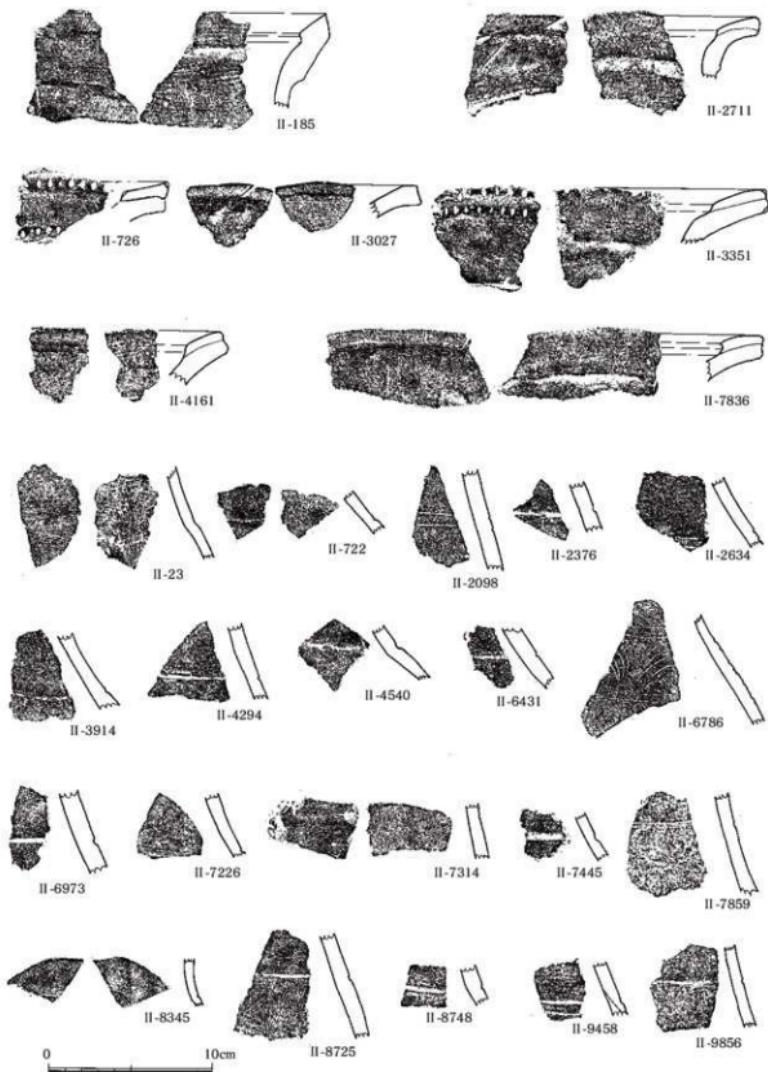


第39図 環濠第2区出土壺形土器実測図V

に作られ、粘土接合部が不整な凹線として残っている。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整と考えられるが、器面が荒れていて詳細は明らかでない。色調は内外面ともに黄赤色をなす。II-3371・12912、中型壺の口縁部小破片。大きく外反する。外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。肥厚帯の下端には段が形成されるが不明瞭。口唇部は丸くおさめる。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整。色調は内外面ともに褐色をなすが、外面がやや明るく、内面がやや暗い。II-13160、大型壺の口縁部破片。外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。肥厚帯の下端には段が形成されている。口縁は上半部で屈曲するように外反する。口唇部は丸くおさめるが、中央部に粘土接合部が細線として残っている。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横方向の刷毛目調整を施した後に横方向のヘラ研磨調整を加えて刷毛目を消している。色調は外面が黄白色～黒灰色。内面が黄土色をなす。II-13296、大型壺の口縁部破片。外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。肥厚帯の下端には段を形成し、段は明瞭である。口唇部は丸くおさめる。内外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。色調は外面が黄赤色、内面は黄白色をなす。口縁部には黒斑がみられる。II-13759、中型壺の口縁部破片。口縁部外面には粘土帯を貼り付けて肥厚させている。口唇部は丸くおさめる。肥厚帯の下端には明瞭な段が形成される。内外面には丁寧なヘラ研磨が施される。色調は外面が黄土色、内外面が黄褐色をなす。II-14998、大型の壺形土器の口縁部破片。口縁部上半で大きく外反する。口唇部は丸くおさめるが、中央部に粘土の接合部が細い凹線状に残っている。外面は斜位の刷毛目調整後に横方向のヘラ研磨調整を加えている。内面は横～斜位の刷毛目調整を施した後に口縁部に横方向のヘラ研磨調整を加えて刷毛目を消している。口縁下には指圧痕が並列して残っている。色調は内外面ともに黄赤色をなす。II-15000、大型壺の口縁部破片。外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。肥厚帯の下端には段ができるが、段は低い。口唇部は平坦に仕上げられる。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。色調は内外面ともに黄赤色をなす。II-15141、大型壺の口縁部破片。口縁部外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させているが、肥厚帯の下端には明瞭な段は形成されていない。口唇部は丸くおさめるが、中央部に粘土の接合部が凹線状に残っている。外面は横方向のヘラナナデ調整、内面は横方向のヘラ研磨調整である。色調は内外面ともに黄土色をなす。II-15221、中型壺の口縁部小破片。口縁部外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。肥厚帯の下端には段が形成される。段は明瞭に残っている。口唇部は平坦面を有するが丸くおさめている。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整を加えている。内外面ともに丹塗り磨研である。素地の色調は内外面とも黄褐色をなす。II-15247、大型壺の口縁部小破片。口唇部は丸くおさめる。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整、内面は雑なヘラナナデ調整。色調は外面が黄土色、内面が黄白色である。II-15641、大型壺の口縁部破片。外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させている。肥厚帯の下端に段を形成しているが低い。口唇部は丸くおさめる。口唇部の中央には粘土接合部が沈線状に部分的に残っている。内外面は横方向のヘラ研磨調整である。色調は外面が黄白色～黄赤色をなす。II-15847、中型壺の口縁部。口唇部は丸くおさめるが中央部に粘土の接合部が細線状に残る。内外面は横方向のヘラ研磨調整である。色調は外面が黄土色、内面が黄赤色をなす。II-362、中型壺の頸部破片。頸部と胸部の境に断面三角形の突帶を貼り付けてめぐらしている。突帶の両側はヨコナナデ調整。頸部は横方向のヘラ研磨調整。内面はヘラナナデ調整である。色調は外面が黄白色、内面は黄灰色をなす。II-365、頸部から胸部にかけての小破片である。頸部と胸部の境に沈線1条をめぐらす。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横方向のヘラナナデ調整である。色調は外面が黄赤色、内面は黄土色をなす。II-391、中型壺の胸部破片。頸部との境に沈線1条をめぐらす。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横方向のヘラナナデ調整である。色調は外面が黄白色～黄赤色、内面は黄土色である。II-3774、中型壺の胸部破片。頸部と胸部の境に2条の平行細沈線をめぐらしている。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横方向のヘ

ラナデ調整である。色調は外面が黄白色、内面が黄土色をなす。II-5542、大型壺の頸部破片。頸部との境に2条の平行細沈線をめぐらしているが端正ではない。外面は横向のヘラ研磨調整、内面は横向のヘラナデ調整である。指圧痕が間隔をおいて並列して残っている。色調は外面が茶褐色、内面は黄土色である。II-2197、大型壺の頸部から胴部にかけての破片である。頸部と胴部の境に5条の平行沈線がめぐらされる。内外面ともに器面が荒れていて調整は明確にはできないが、わずかに残る痕跡から横向のヘラ研磨が施されていたと考えられる。色調は内外面ともに黄赤色をなす。

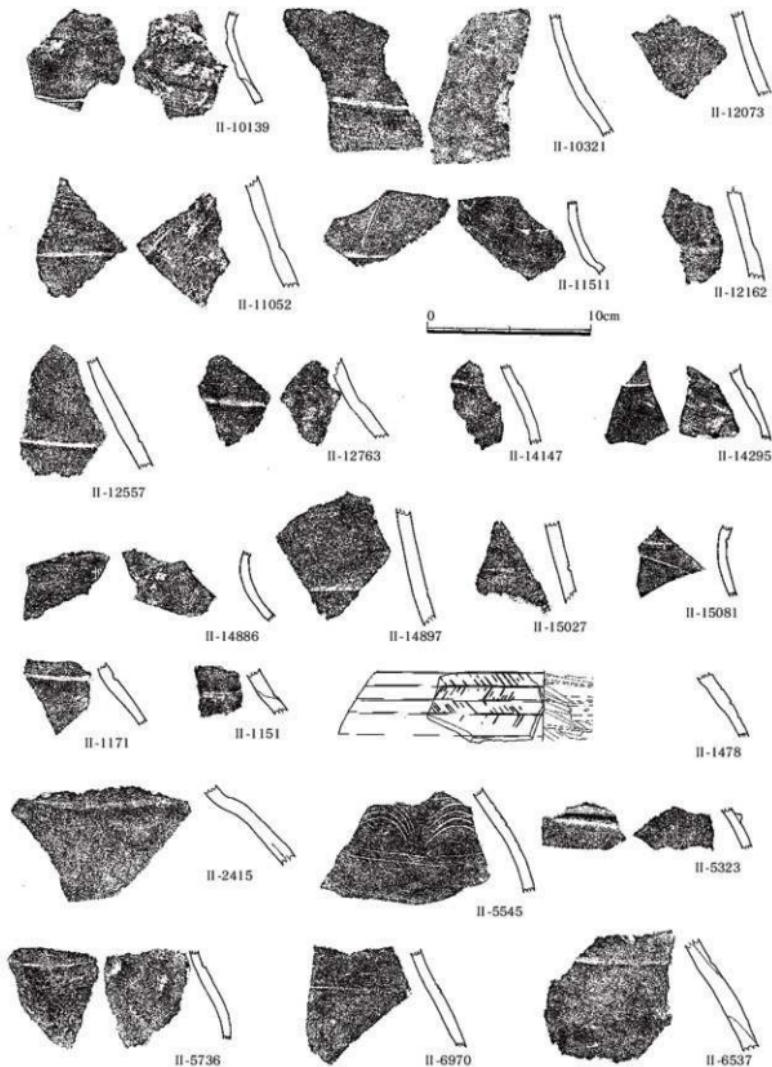
第40図II-185、大型壺の口縁から頸部にかけての破片。口縁部の内外面に粘土帶を貼り付けて肥厚させている。外面の粘土帶はやや幅広く下端の段は明瞭であるが緩やかである。内面の段は内側にいり込むような直な段である。口唇部は平坦である。内外面は粗い刷毛目調整を加えた後にヘラナデを加えている。内外面ともに灰白色をなす。II-2711は大型壺の口縁部破片。口縁部の中位で上部は屈曲し大きく外反する。口縁端部は平坦に整形される。口縁外面には粘土帶が貼り付けられ肥厚させている。肥厚帶の下端には凹線がめぐらされ段が形成されるが明瞭ではない。口縁内面にも粘土帶が貼り付けられ肥厚させている。下端には明瞭な段が形成されている。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整。色調は内外面ともに赤褐色をなす。II-726、口縁は大きく外反する。内面に粘土帶を貼り付け肥厚させている。下端に段ができる。口唇部には凹線をめぐらし、内外面は横向のヘラ研磨調整である。内外面は黄白色をなす。II-3027、大きく外反する。口縁端部はやや下に張り出し、平坦で凹線をめぐらす。外面は横向のヘラ研磨調整。内面は横向の刷毛目調整で端部近くはヘラナデが加えられ平坦面ができる。外面は黒色、内面は黄赤色をなす。II-3351、大型壺の口縁部破片。外面と内面の上半部に粘土帶を貼り付けて肥厚させる。内外の粘土帶の下端に段が形成されるが、外面はやや不明瞭、内面は明瞭である。口唇部は平坦で口唇部の両端にヘラによる刻目が施文される。内外面ともに横方向のやや雑なヘラ研磨調整。内外面ともに黄赤色をなす。II-4161、大型壺の口縁部破片。内面の上半部に粘土帶を貼り付けて肥厚させる。内側の粘土帶の下端に段が形成され、明瞭に残る。口唇部は平坦である。外面は横向のやや雑なヘラ研磨調整。内面は横向の粗い刷毛目調整を加え、上にヘラナデ調整が加えられる。内外面ともに黄土色をなす。II-7836、大型壺の口縁部破片。内面に粘土帶を貼り付けて肥厚させる。口唇部は平坦であるが、粘土帶の接合部が一部沈線状に残る。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内外面ともに黄白色をなす。II-23、中型壺の頸部から胴部にかけての破片。頸部は直線的であるが喉部は膨らむ。外面は横向のヘラ研磨調整。内面は斜位の刷毛目調整で、頸部にはナデが加えられる。外面は黒褐色、内面は黄赤色をなす。II-722、頸部と胴部の境に不明瞭な段ができる。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面は横方向の刷毛目調整である。色調は外面が黄土色、黒灰色である。II-2098、大型壺の頸部破片。中央部に2条の沈線がめぐる。外面は横向のヘラ研磨調整、内面は縱方向のヘラナデ調整である。色調は外面が黄赤色、内面が黄白色である。II-2376、頸部と胴部の境に沈線1条をめぐらす。内外面ともにヘラ研磨調整。色調は外面が灰褐色、内面が褐色をなす。II-2634、頸部破片。胴部の境に2条の沈線をめぐらす。外面は斜位のヘラ研磨調整。内面はナデ調整である。内外面は黄赤色をなす。II-3914、大型壺の頸部から胴部の破片である。頸部と胴部の境に凹線をめぐらすが、外面に施された横方向のヘラ研磨調整によって不明瞭になっている部分もある。内面はヘラナデ調整である。外面は灰白色、内面は灰黒色である。II-4294、頸部から胴部にかけての破片。頸部と胴部の境に沈線1条をめぐらす。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は斜位のヘラナデ調整である。外面は灰色から黒色、内面は黄白色をなす。II-4540、頸部と胴部の境に段が形成される。外面がヘラ研磨、内面がヘラナデ調整である。黄土色をなす。II-6431、頸部と胴部の境に沈線1条をめぐらす。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整、白灰色



第40図 環濠第2区出土壺形土器実測図VI

をなす。II-6786、中型壺の頸部から胴部にかけての破片。頸部と胴部の境に平行細沈線2条をめぐらし、さらに下方に同様の平行細沈線2条をめぐらし、文様帶を区画している。文様帶には4条を単位とする平行細沈線で重弧文が並列して施文されている。外面は丁寧な横方向のヘラ研磨調整。内面はナデ調整で胴部上半に指圧痕が残る。外面は褐色、内面は黄赤色をなす。II-6973、頸部と胴部の境に凹線1条をめぐらす。外面はヘラ研磨、内面はヘラナデ調整である。内外面とも黄赤色をなす。II-7226、頸部破片。胴部の境に沈線1条をめぐらす。外面は斜位のヘラ研磨調整、内面は斜位のヘラナデ調整である。内外面ともに黄土色をなす。II-7314、頸部と胴部の境と考えられる部分に細沈線2条をめぐらされる。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は斜位のヘラナデ調整である。内外面ともに黄褐色をなす。II-7445、頸部と胴部の境に凹線1条をめぐらす。内外面はヘラ研磨外面は黄白色、内面は赤褐色をなす。II-7859、大型壺の頸部。上部に沈線1条をめぐらす。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面はヘラナデ調整である。外面は白色、内面は灰白色である。II-8345、頸部と胴部の境に細沈線1条をめぐらす。頸部内面には指圧痕が並列する。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面はナデ調整である。胎土は精製され極めて良質、黄白色をなす。II-8725、大型壺の頸部から胴部にかけての破片。頸部と胴部の境に沈線1条をめぐらす。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は斜位のヘラナデ調整である。外面は白灰色、内面は黄赤色をなす。II-8748、頸部と胴部の境に沈線1条をめぐらす。内外面ともにヘラナデ調整である。色調は外面が黄白色、内面が黄土色をなす。II-9458、頸部と胴部の境に沈線2条をめぐらす。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面はヘラナデ調整である。外面は黄褐色、内面は赤褐色をなす。II-9856、頸部から胴部にかけての破片。頸部と胴部の境に凹線1条をめぐらす。外面は横方向のヘラ研磨調整。内面は斜位のヘラナデ調整である。外面が黄土色、内面が黄白色をなす。

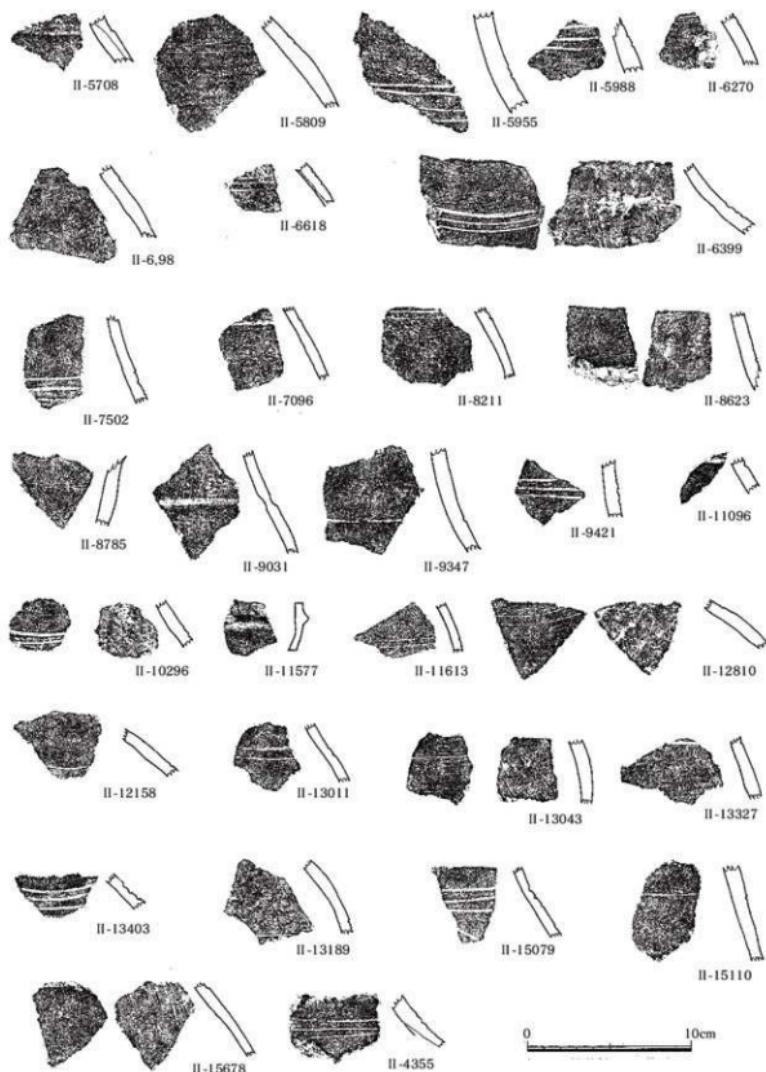
第41図II-10139、頸部は緩やかに内傾しながら立ち上がり、口縁部は反転して外反するが、欠損する。頸部と胴部の境に平行沈線2条をめぐらすが、一周したところでうまく重ならないでずれている。内面の頸部と胴部の境には段が形成されているが、あまり明瞭ではない。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面はヘラナデ調整であるが、器面の状態が悪い。胎土は精製され良質である。外面は灰褐色、内面は黒褐色である。II-10321は大型壺の頸部から胴部にかけての破片。頸部は内傾しながら立ち上がり、頸部と胴部の境に凹線1条がめぐる。わずかな段が形成されている。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は胴部上半と頸部に指圧痕が残り、斜位の刷毛目調整が施されている。外面には丹塗りされた赤色顔料が部分的に残っている。色調は外面が黄白色、内面が黄土色である。II-12073、中型壺の頸部破片。胴部との境に細沈線1条をめぐらす。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は指圧痕が並列し、上にヘラナデ調整を加える。色調は外面が黄白色から黒色、内面は黄白色をなす。II-11052、大型壺の頸部から胴部にかけての破片。頸部と胴部の境に沈線をめぐらしている。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は板ナデ調整、板の端部の圧痕が3条残っている。外面は白灰色、内面は灰褐色をなす。II-11511、頸部破片。胴部との境に小さな段が形成される。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。頸部内面には指圧痕が残る。胎土は精製され極めて良質である。色調は外面が黄土色、内面が黄白色をなす。II-12162、中型壺の頸部から胴部にかけての破片。頸部と胴部の境に段が形成される。内外面は横方向のヘラ研磨調整。色調は内外面ともに黄赤色をなす。II-12557、大型壺の頸部から胴部にかけての破片。頸部と胴部の境に沈線をめぐらす。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。黄土色をなす。II-12763、頸部から胴部にかけての破片。頸部と胴部の境に小さな段ができる。外面は横方向のヘラ研磨調整。内面は頸部が横方向の刷毛目調整、胴部に指圧痕が並列している。外面は褐色、内面は黄土色である。II-14147、頸部と胴部の境に段が形成される。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横方向のヘラナデ調整である。



第41図 環濠第2区出土壺形土器実測図VII

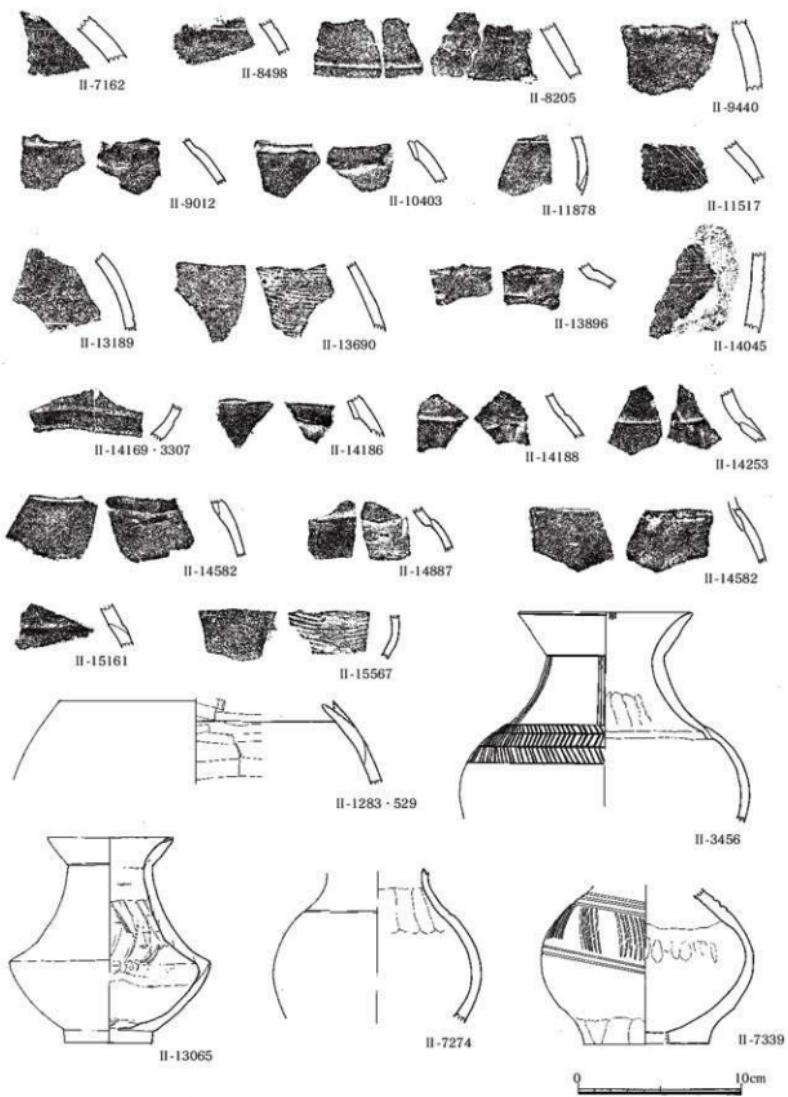
色調は外面が黄白色、内面が黄赤色をなす。II-14295は頸部と胴部の境に明瞭な段が形成されている。内面の段はヘラによって削り取られている。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面はヘラナデ調整である。胎土は精製され良質、外面は灰褐色、内面は黄土色である。II-14886、頸部破片。口縁部との境に段ができる。外面と頸部の上半は横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。内面の下半は横方向のヘラナデ調整である。胎土は精製され極めて良質である。色調は黄褐色である。II-14897、大型壺の頸部破片。胴部との境に小さな段ができる。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横方向のヘラナデ調整である。色調は外面は黄白色、内面は黄赤色である。II-15029、中型壺の頸部から胴部にかけての破片。頸部と胴部の境に沈線1条をめぐらす。内外面は横方向のヘラ研磨調整。外面は褐色、内面は黄赤色をなす。II-15081・12182、口縁部と頸部の境に凹線2条がめぐり、口縁部の下端に小さい段が形成される。外面と口縁部内面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面の頸部は横方向のヘラナデ調整である。胎土は精良。色調は内外面ともに黄褐色をなす。II-1171、中型壺の頸部から胴部にかけての破片。頸部と胴部の境に沈線1条をめぐらす。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面は斜位のヘラナデ調整である。外面は丹塗りである。素地の色調は外面が黒色、内面は黄赤色をなす。II-1151、頸部から胴部にかけての小破片。境にわずかに段ができる。内外面は横方向のヘラナデ調整。外面は黄白色、内面は黒灰色。II-1478、中型壺の胴部破片。頸部との境に沈線1条をめぐらし、わずかに段が形成される。その下に約1cmの間隔を持って平行沈線が4条めぐられ、沈線を軸に彩文で4段にわたって羽状文が施文されている。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面はヘラナデ後に横方向のヘラ研磨調整を加えている。粘土接合部が不整な段として残っている。素地の色調は内外面ともに黄白色をなす。II-2415、大型壺の胴部破片。頸部と胴部の境に段が形成される。外面は斜位の刷毛目調整を加えた後に横方向のヘラ研磨調整を加える。丹塗りされている。内面はナデ調整である。素地の色調は黄白色をなす。II-5545、中型壺の胴部破片。頸部との境に細沈線1条をめぐらす。さらに下方に2条の平行沈線をめぐらし、文様帯を区画している。文様帯には4条の平行沈線を単位とした重孤文を並列施文している。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は斜位のヘラナデ調整である。外面は黄褐色、内面は黄土色をなす。II-5323、中壺の胴部破片。断面三角形の小さな粘土紐を貼り付けた突帶1条をめぐらす。内外面はヘラナデ調整。外面は黄白色、内面は赤黄色をなす。II-5736、中型壺の胴部破片。頸部との境に凹線をめぐらすが、外面の横方向のヘラ研磨調整によって部分的に不明瞭になっている。内面は斜位の刷毛目調整である。外面は黄白色、内面は灰色をなす。II-6907、中型壺の頸部から胴部にかけての破片。頸部と胴部の境に細沈線3条をめぐらす。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面は頸部と胴部の境に指圧痕が並列している。上から斜位のヘラナデ調整を加える。色調は外面が灰白色、内面は黄白色をなす。II-6537、大型壺の胴部破片。頸部と胴部の境に凹線1条がめぐる。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。外面の凹線の中と内面に赤色顔料が観察できる。丹塗り土器であるが、内面の顔料は垂れたものである。素地の色調は外面が白灰色、内面が黄白色をなす。

第42図II-5708、大型壺の胴部破片。頸部との境に段が形成される。内外面ともに横方向の雑なヘラ研磨調整である。色調は内外面ともに褐色をなす。II-5809、大型壺の胴部破片。頸部との境に平行細沈線2条をめぐらす。内外面ともに横方向の雑なヘラ研磨調整である。色調は外面が黄褐色～黄灰色、内面は黄赤色をなす。II-5955、大型壺の頸部から胴部にかけての破片。頸部と胴部の境に4条の平行沈線をめぐらす。外面はやや雑な横方向のヘラ研磨調整、色調は外面が茶色～黄褐色、内面が赤褐色である。内面は横方向のヘラナデ調整である。II-5988、大型壺の胴部小破片。頸部との境に平行沈線3条をめぐらしている。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。色調は内外面ともに黄土色をなす。II-6270、



第42図 環濠第2区出土壺形土器実測図Ⅷ

大型壺の頸部小破片。頸部との境に平行沈線2条をめぐらしている。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。色調は内外面ともに黄土色をなす。II-6098、大型壺の頸部破片。頸部との境に平行細沈線3条をめぐらす。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横～斜位のヘラナデ調整である。色調は内外面とも黄赤色をなす。II-6618、中型壺の頸部小破片。文様帶の下端に平行沈線3条をめぐらしている。その上に縦線、斜線が見えるが文様構成は不明。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は器面が剝離しているため不明。色調は外面が黄白色をなす。II-6399、大型壺の頸部から胴部にかけての破片。頸部と胴部の境には段が形成される。段の下方には平行沈線2条がめぐらされる。外面は丁寧なヘラ研磨調整、内面はヘラナデ調整である。頸部には指圧痕が並列して残る。頸部と胴部の境には粘土接合部が不整な凹線として残っている。色調は外面が黄土色～黄赤色、内面は黄白色をなす。II-7502、中型壺の頸部破片。胴部との境に平行沈線3条をめぐらす。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横方向のヘラナデ調整である。指圧痕が並列して残っている。II-7096、中型壺の頸部から胴部にかけての破片。頸部と胴部の境に段が形成される。段は明瞭である。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面は斜位のヘラナデ調整である。色調は外面が褐色、内面が黄土色をなす。II-8211、中型壺の胴部破片。頸部と胴部の境に平行細沈線2条をめぐらしている。外面には横方向のヘラ研磨調整を加えている。内面は縦～斜方向のヘラナデ調整である。色調は外面が黄赤色、内面が灰褐色をなす。II-8623、大型壺の胴部破片。頸部との境に細沈線1条をめぐらす。外面は丁寧なヘラ研磨調整、内面はヘラナデ調整で、頸部には指圧痕が並列して残っている。胴部は斜位～横方向の刷毛目調整である。色調は内外面ともに黄白色をなす。II-8785、胴部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は緩やかに外反すると考えられるが、口縁部を欠いている。口縁下にきわめて細い沈線が1条めぐらされる。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横方向のヘラナデ調整である。色調は外面が黄白色、内面が黄土色をなす。II-9031、中型壺の頸部から胴部にかけての破片。頸部と胴部の境に凹線をめぐらし、段が形成される。段は明瞭である。胴部は膨らみがある。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横方向のヘラナデ調整と考えられるが、磨滅しているために判然としない。色調は外面が黄灰色～黄赤色、内面は桃色をなす。II-9347、大型壺の頸部から胴部にかけての破片。頸部と胴部の境に沈線1条をめぐらす。外面の頸部には斜位、胴部には横方向のヘラ研磨調整を加えている。内面は横方向のヘラナデ調整である。色調は外面が黄灰色、内面が黄土色をなす。II-9421、中型壺の頸部から胴部にかけての小破片。頸部と胴部の境に平行沈線3条をめぐらす。外面は斜方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面は横方向のヘラナデ調整である。色調は内外面ともに黄赤色をなす。II-11096、胴部破片。頸部との境に平行沈線2条をめぐらす。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横方向のヘラナデ調整である。色調は内外面ともに黄土色をなす。II-10296、中型壺の胴部破片。頸部との境に平行沈線2条をめぐらしている。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横方向のヘラナデ調整である。指圧痕が並列して残っている。色調は外面が黄土色、内面は黄赤色をなす。II-11577、小型の壺形土器の胴部破片。1条の貼り付け突帯をめぐらしている。突帯の断面形は三角形をなす。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横方向の丁寧なヘラナデ調整である。色調は外面が黄褐色、内面は黄白色をなす。II-11613、中型壺の胴部破片。胴部中位に文様帶区画のための平行細線2条をめぐらしている。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横方向のヘラナデ調整である。色調は内外面ともに黄灰色をなす。極めて薄い土器である。II-12810、中型壺の胴部破片。頸部と胴部の境に平行細沈線3条をめぐらす。外面は横方向の丁寧なヘラナデ調整。一部に黒色顔料が残っているので彩文土器の可能性もある。内面は斜位のヘラナデ調整である。指圧痕が並列して残っている。色調は外面が黄褐色、内面は褐色をなす。II-12158、中型壺の胴部破片。胴部上半で下向きの弧状の細沈線文が施されているが、全体の文様構成は不明。外面は横方向のヘ



第43図 環濠第2区出土壺形土器実測図IX

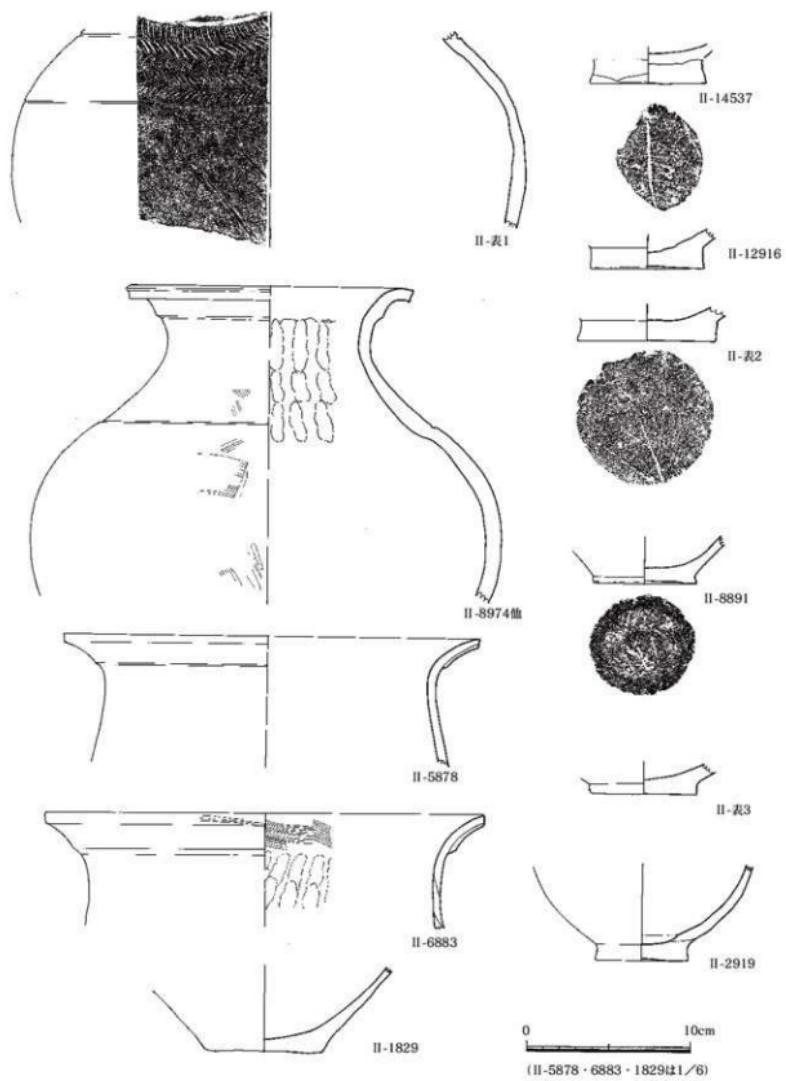
ラ研磨調整、内面は横方向のヘラナデ調整である。色調は内外面ともに黄土色をなす。II-13011、小型壺の頸部から胴部にかけての破片。頸部と胴部の境に平行細沈線2条をめぐらす。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。内面は斜位のヘラナデ調整である。色調は外面が黄赤色、内面が黄白色をなす。II-13043、中型壺の胴部破片。胴部上半で文様区画の下の細沈線が引条めぐらされる。外面は横方向の丁寧なヘラナデ調整、内面は斜位の刷毛目調整を施した後に横方向のヘラナデ調整を加えて刷毛目を消している。色調は外面が褐色、内面が黒褐色をなす。II-13327中型壺の胴部破片。頸部との境に沈線1条をめぐらす。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面は斜位の刷毛目調整を施した後に横方向のヘラナデ調整を施している。色調は内外面ともに赤褐色をなす。II-13403、中型壺の胴部に破片。頸部との境に平行細沈線4条をめぐらす。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横方向のヘラナデ調整である。頸部と胴部の境には指頭痕が並列して残っている。色調は外面が黄褐色、内面が黄赤色をなす。II-13189、中型壺の胴部破片。胴部の中位に細沈線1条をぐらす。文様帶の下の区画線と考えられるが、文様帶と考えられる部分には文様はないので彩文の可能性がある。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面はヘラナデ調整。色調は内外面ともに黄白色をなす。II-15079、中型壺の頸部から胴部にかけての破片。頸部と胴部の境に沈線3条をめぐらす。その下に弧状の沈線か施文されているか、全体文様は不明、円弧文になるか。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面は斜位の刷毛目調整後、ヘラナデ調整を加えている。色調は内外面ともに黄白色をなす。II-15110、大型壺の頸部から胴部にかけての破片。頸部と胴部の境に細沈線1条をめぐらす。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は斜位のヘラナデ調整である。色調は外面が黄白色、内面が赤色をなす。II-15678、大型壺の胴部破片。頸部との境に段が形成される。外面は丁寧なヘラナデ調整、内面は斜位の刷毛目調整を施した後に、下位にヘラナデを施している。色調は外面が黄白色、内面が黄褐色をなす。II-4355、大型壺の頸部から胴部にかけての破片。境に平行沈線3条をめぐらしている。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は磨滅して調整は不明。色調は外面が黒褐色、内面は灰白色をなす。

第43図II-7162、大型壺の胴部破片。頸部との境に細沈線をめぐらす。内外面は横方向のヘラ研磨調整。黄褐色をなす。II-8498、中型壺の胴部破片。頸部の境に沈線1条をめぐらす。内外面はヨコナデ調整。黄白色をなす。II-8205、頸部破片。胴部との境に凹線1条をめぐらす。内外面は斜位の刷毛目調整を施した後に横方向のヘラ研磨調整を施す。外面は黄土色、内面は褐色である。II-9440、中型壺の胴部破片。頸部との境に段が形成される。外面は横方向の雑なヘラ研磨調整、内面はヨコナデ調整である。色調は赤色をなす。II-9012は胴部破片。頸部との境に小さな段が形成される。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面はヘラナデ調整である。胎土は精製され極めて良質である。色調は外面が黄白色、内面は黄赤色をなす。II-10403、胴部上半破片。頸部と胴部の境の内側に貼り付けられた粘土帯が明瞭に残り、下端に段ができる。粘土帯の幅は約1.5cmである。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面はヨコナデ調整である。胎土は精製され極めて良質である。色調は外面が黄褐色から黒色、内面は黄白色をなす。II-11878、小型壺の胴部破片。細沈線1条かめぐるがこれは文様の区画線である。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面は横方向の丁寧なヘラナデ調整である。胎土は精製され良質である。色調は外面が黄褐色～黒褐色、内面が黒褐色をなす。II-12517、中型壺の胴部破片。斜位の平行沈線3条を施文する。内外面は横方向のヘラ研磨調整。黄土色をなす。II-13189、中型壺の胴部破片。胴部の中位に細沈線2条がめぐらされる。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面はヘラナデ調整である。色調は外面が黄褐色、内面が黄灰色である。II-13690、胴部破片。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。丹塗りされる。内面は横方向の貝殻条痕が明瞭に残っている。赤色をなす。II-13896、頸部と胴部の境に明

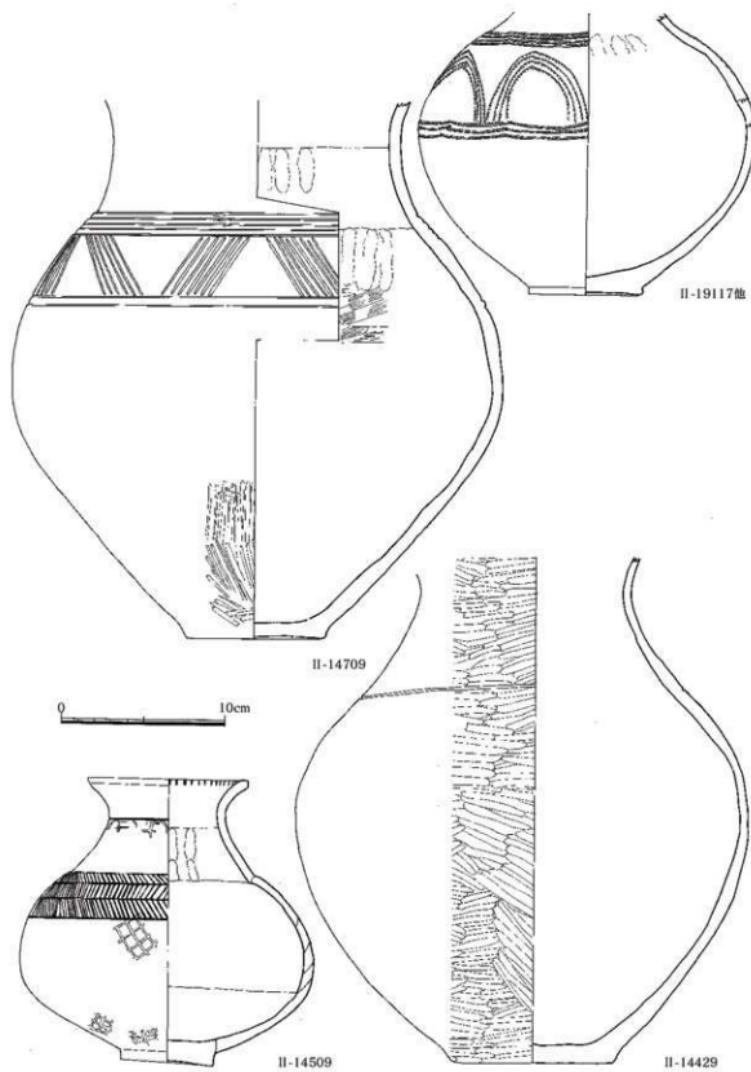
瞭な段が形成される。内面には棱線ができる。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面はヨコナデ調整である。胎土は精製され極めて良質。内外面ともに黄白色をなす。II-14045、大型壺の胴部破片。頸部との境に沈線4条をめぐらしている。内外面の調整は不明瞭である。外面は黄赤色、内面は黄白色である。II-3307・14169、小型壺の胴部下半の破片。平行した凹線2条が間隔をおいて施される。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横方向のヘラナデ調整。外面は黄赤色、内面は黄白色をなす。II-14186、胴部上半の破片。頸部との境に小さな段が形成される。内面には頸部と胴部の粘土接合部が明瞭な段として残っている。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面はヘラナデ調整である。胎土は精良。色調は外面が黒褐色～褐色、内面は灰褐色をなす。II-14188、頸部から胴部の破片。頸部と胴部の境に細沈線がめぐらされ小さな段が形成される。内面は粘土接合部が残り、その下部に指頭圧痕が並列している。胎土は精製され極めて良質である。色調は内外面ともに黄白色をなす。II-14253、頸部と胴部の境に小さいく明瞭な段が形成されている。内面の段はヘラによって削り取られる。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面はヘラナデ調整である。胎土は精良。色調は外面が黄褐色、内面が黒褐色である。II-14582は胴部破片。頸部との境に小さな段が形成される。内面には粘土接合の段が明瞭に残っている。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。胎土は精製され極めて良質である。色調は外面が黄灰色、内面が黒灰色をなす。II-14887は小型壺の頸部から胴部にかけての破片。頸部と胴部の境には明瞭な段が形成される。内面も同様であるが、ヘラによって粘土が貼り付けられている。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、一部に褐色の有軸羽状文が残っているので彩文されていたことがわかる。褐色になっているのは下の黒色が変色したもので、元来は黒色に赤色の彩文が施文されていたと考えられる。内面は横方向のヘラナデ調整である。胎土は精製され良質である。外面は褐色、内面は黄褐色をなす。II-表1は胴部破片。頸部との境に小さな段が形成される。内面には粘土接合痕が剥離した状態で明瞭に残っている。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。胎土は精製され極めて良質である。色調は内外面ともに黄褐色をなす。II-15161、頸部から胴部にかけての破片。頸部と胴部の境に段を形成する。外面は横方向のヘラ研磨調整。内外面はヨコナデ調整。外面は黄土色、内面は赤白色をなす。II-15567、小型壺の胴部破片。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面は横方向の貝殻条痕調整である。胎土は精製され良質である。色調は外面が褐色、内面が灰黒色をなす。II-1283・529、中型壺の胴部破片。頸部との境に段を形成する。外面に赤色顔料が付着していて彩文土器であったことがわかるか、文様構成は不明。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面は丁寧なヘラナデ調整である。外面は黄灰色、内面は黄土色をなす。特記すべきは頸部と胴部の接合の仕方である。胴部の接合面、約1.5cmの範囲に横方向の刷毛目を施し、接合部をより確実にする工夫がみられる。次に、頸部の粘土帯を胴部の端部を挟み込むように貼り付け、そして、頸部と胴部接合の外面の隙間を埋めるように粘土帯を充填、内面の粘土接合部の張り出しをヘラケズリで取り除き整形、外面にヘラ研磨を加えている。II-3456は小型壺。胴部下半と底部を失う。胴部は球状をなし、胴部最大径はやや上位にある。胴部と頸部の境には段が形成される。頸部は内傾しながら緩やかに立ち上がる。口縁部との境はやや不明瞭であるが、口縁部は外傾しながら直線的に立ち上がる。口縁外面には粘土帯を貼り付けて肥厚させている。下端の段は不明瞭。口唇部はとがり気味に丸くおさめる。外面には彩文が施文される。復元的に文様構成記すと以下になる。外面は口唇部に1条、口縁部と頸部の境に1条の線がめぐらされ、頸部には3条を単位と縦線を4ヶ所に施し頸部を分割している。頸部との境から胴部上半にかけては有軸羽状文が3段に施文されている。口縁部内側には長さ約1cmの縦線が並列施文される。板付遺跡における基本的な彩文文様のパターンである。外面は丁寧なヘラ研磨調整、内面の口縁部はヘラ研磨調整、頸部には指圧痕が並列、ナデ調整が加えられる。胴部と

頸部の境には粘土接合部が段として残っている。胎土は精製され良質。素地の色調は外面が黄赤色、内面が黄白色をなす。口径10.7cm、胸部最大径17.8cmを測る。II-13065、小型壺。底部を失うかほぼ完形に復元できる。底部は他例から円盤貼り付け状の底部になると考えられる。胸部は外傾しながら丸みを持って立ち上がり、強く屈曲して頸部に移行する。頸部は内傾しながら緩やかに立ち上がる。口縁部は外傾しながら直線的に立ち上がる。口縁は外面に粘土帯を貼り付け肥厚させるが、下端の段は明瞭でない。外面口縁部内面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面はヘラナデ調整である。胎土は精良。外面は茶褐色、内面は黄白色をなす。II-7274は頸部から胸部にかけての破片である。胸部は球形をなし、頸部は内傾しながら立ち上がり、口縁部のところではほぼ垂直になる。頸部と胸部の境には細沈線1条がめぐらされる。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。内面には頸部下半に指圧痕が並列して残る。胸部はヨコナデ調整である。胸部最大径は胸中位にあり復元径は12.6cmを測る。II-7339は小型の壺形土器である。頸部、口縁部を欠損する。底部は安定した平底、外形は若干筒形をなすが、やや粗いヘラケズリ状の調整がみられる。胸部は球形をなす。頸部と胸部の境に凹線3条をめぐらしている。胸中位にも沈線2条をめぐらし、文様帶の区画を作るかや斜めになっている。文様帶には6条からなる平行沈線をハの字状に配しているが、一部にはハの字にならない部分もあり、平行沈線も6条ではなく、8条以上の部分もある。この文様は板付I式土器の特徴的な文様とされた弧状八字形文の変形したものと考えられる。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面はナデ調整で胸中位に指圧痕がみられる。底部復元径7.6cm、胸部最大径は中位にあり復元径13.0cmを測る。色調は外面が黄赤色、内面が黄白色をなす。

第44図II-表1、環濠最上層に出土したが地点が不明である。大型壺の胸部上半の大きな破片である。頸部との境には太い沈線をめぐらし、その中にヘラナデを加えて段を形成している。この段より約5cm下ったところには細沈線1条をめぐらし、文様帶を作り出している。文様帶にはヘラ状工具による細沈線で無軸の羽状文を5段にわたって施している。外面の文様帶は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、文様帶以下は斜方向の丁寧なヘラ研磨調整である。内面の胸部上半は指でかき掻げ多様な凹線状のくぼみが見られ、その上に斜方向のヘラナデを施している。胸部下半は横方向のヘラナデ調整である。色調は内外面とともに赤茶色をなす。胸部最大径は31.3cmを測る。II-8914、8943、8974、9114、9072、9400他は中型壺の口縁部から胸部にかけての破片であるが、17点が接合して底部を除いてほぼ全形を知ることができる。胸部は球状に張り出し胸部と頸部の境には沈線1条をめぐらしている。頸部は大きく内傾しながら立ち上がり、上半部で反転して緩やかに外反し、口縁部に移行する。口縁部は外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。肥厚帶の下端には段が形成される。段は高いか雑なヘラ研磨で調整されるのであまり明瞭ではない。口縁部は頸部からの継ぎで緩やかに外反するが、口縁部の上半部で屈曲して大きく外反する。口唇部は平坦に仕上げられ、ヘラ状の工具で中央部がヨコナデされ凹線状にくぼんでいる部分もある。外面の調整は肥厚帶が横方向、頸部上半が縱方向、下半が横方向、胸部が斜方向のヘラ研磨調整である。内面は口縁部が横方向のヘラ研磨調整、頸部は指圧痕が3段にわたって並列している。頸部から胸部は斜方向のヘラナデ調整である。色調は内外面ともに黄土色～黄赤色をなす。口径17.7cm、胸部最大径28.8cmを測る。II-5878他、大型壺の口縁部から頸部にかけての破片である。頸部は内傾しながら立ち上がり、口縁部は緩やかに外反し、口縁部は外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。肥厚帶の下端には段が形成される。段は高く明瞭である。口唇部は平坦に仕上げられ、粘土接合部が凹線状にくぼんでいる部分もある。外面の調整は横方向ヘラ研磨調整である。内面は口縁部が横方向のヘラ研磨調整、頸部から胸部は斜方向のヘラナデ調整である。色調は内外面ともに黄土色、口径51.0cmを測る。II-5595・6883・9507、大型壺の口縁部から頸部にかけての破片である。頸部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は緩やかに外反し、



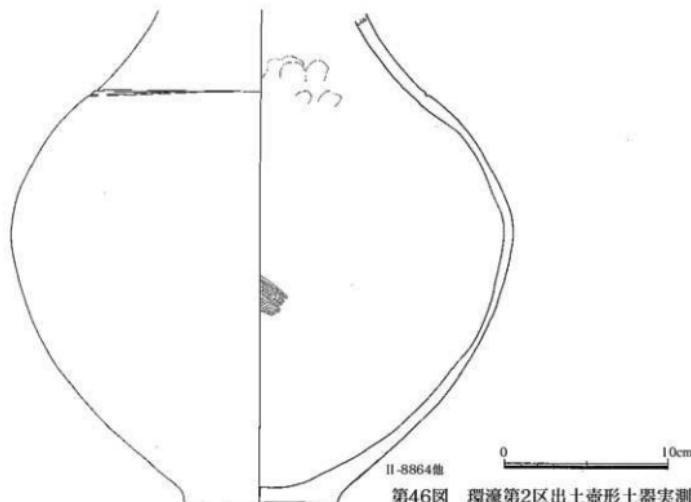
第44図 環濠第2区出土壺形土器実測図 X



第45図 環濠第2区出土壺形土器実測図XI

口縁部は外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。肥厚帯の下端には段が形成される。段は高く明瞭である。口唇部は平坦に仕上げられる。口唇部には粗い刷毛目調整が残っている。外面口縁部の調整はヨコナデ調整で、頸部は横方向へラ研磨調整である。内面は口縁部に粗い横方向の刷毛目調整が施され、上にヨコナデ調整が施されている。頸部は指圧痕が並列して残っている。その上にヘラナデ調整が加えられている。頸部の粘土接合は外傾接合である。色調は外面ともに黄土色、口径54.0cmを測る。II-1829・1832大型壺の底部と考えられる。外面は横方向のヘラ研磨調整である。底部径11.8cmを測る。II-14537以下は小型壺の底部である。II-14537は円盤状をなす。胴部とは剥離している。側面はヨコナデ調整であるが、部分的に端部がケズリ状になっている。外底部には木葉痕が残る。色調は褐色をなす。底部径7.1cm。II-12916も同様の底部である。胴部は大きく外傾しながら立ち上がる。胴部の器壁の接合は円盤の縁に乗せるような形をとっている。所謂円盤貼り付けの底部である。外面は丁寧なヘラ研磨調整。色調は外面ともに褐色をなす。底部径7.0cm。胎土は精製され極めて良質である。II-表1、円盤貼り付けの底部。端部がわずかに外に張り出す。外面はヨコナデ調整。色調は外面ともに黄白色をなす。胎土は精製され良質である。底部径8.4cm。外底部に木葉痕が残る。II-8891、他と比較して高さが低い、底部端がやや外に張り出す。胴部はやや立ち気味に外傾しながら立ち上がる。外面は横方向のヘラ研磨調整。外底部の中央部は削りを加えてやや上げ底状に形成している。色調は外面ともに黄白色。底部から胴部にかけて黒斑がある。II-表2、同様の円盤貼り付けの底部である。胴部は大きく外傾しながら立ち上がるかほとんどを失う。外面は丁寧なヘラ研磨調整。内面はヘラナデ調整。色調は外面が黄褐色、内面が黄土色をなす。底部径6.7cm。外底部に木葉痕が残る。II-2919・5392も同様の円盤貼り付けの底部である。胴部は大きく外傾しながら丸みをもって立ち上がる。胴部の器壁の接合は円盤の縁に乗せるような形をとっている典型的な円盤貼り付けである。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面は横方向のヘラナデ調整である。外面に黒色顔料の塗布がみられる。色調は外面は褐色をなす。胎土は精製され良質である。底部径7.0cm。外底部に木葉痕が残る。

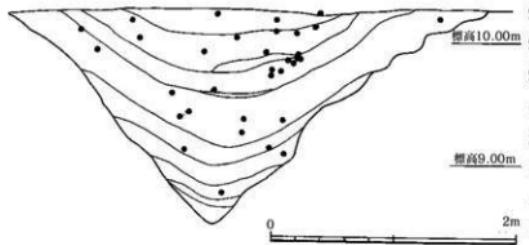
第45図II-14709、II-9891、10110、10157、10160、10273、11271、11341、11342、12327、12341、12505、12593、12594、13426は15点の土器片が接合、あるいは同一個体と考えられるものである。ほぼ頸部以下を復元できる。底部は円盤貼り付け状をなすが低く、端部が若干外に張り出す。外底部はわずかに中央部がくぼむ。胴部は大きく外傾しながら膨らみ球状をなす。胴部最大径は胴中位にある。胴部と頸部の境には段を形成することなく緩やかに内傾しながら移行する。胴部と頸部の境には貝殻復縁の押圧による平行沈線を4条めぐらしている。沈線は貝殻復縁の押圧によるために部分的に弧状になるか重複する部分に注意を払いうまく繋いでいる。その下には同様の貝殻復縁を利用して4重の重弧文が施文されている。平行線と異なり、重複部分が明らかである。その下には文様帶を区画するように同様の貝殻復縁による3条の平行沈線がめぐらされるが、上部ほど丁寧でなく繋ぎ目が明らかである。外底部も含めて外面は横方向のヘラ研磨調整、内面はヘラナデ調整である。外面は黄褐色～褐色、内面は赤褐色～黒灰色をなす。底部径7.0cm。胴部最大径は20.8cmを測る。II-14557、14634、14642、14643、14648、14655、14657、14659、14660、14706、14707、14709、14711、14712、14715、14716、14724、14735、14736、14740、14743、14746、14747、14750、は同一個体。口縁部を失うかほぼ完形に復元できる。底部は安定した平底である。胴部は約45度の角度で外傾しながら立ち上がり、胴部中位で反転し丸みを持って内傾しながら立ち上がる。胴部と頸部の境には沈線がめぐらされ、わずかに段が形成される。頸部は中位までわずかに内傾しながら立ち上がるが、その上は反転して緩やかに外反しながら立ち上がる。全体としてほぼ垂直に立ち上がる。口縁部は欠損する。胴部上半には沈線による文様が施文される。文様は頸部



第46図 環濠第2区出土壺形土器実測図XII

との境には平行沈線5条をめぐらし、さらに下に約4cmの間隔をおいて平行沈線2条をめぐらし、文様帯を形成している。文様帯には平行沈線7条を斜位にハの字形に連続施文している。外面は胴部下半が嶮～斜位のヘラ研磨調整、他は横方向のヘラ研磨調整である。内面頸部上半が横方向のヘラ研磨調整、頸部下半と胴部上半には指圧痕が並列して残り、上に横～斜方向のヘラナナデ調整、胴部下半は縦方向のヘラナナデ調整である。底部径8.5cm、胴部最大径30.0cm、頸部径19.6cm、器高は口縁部を失うか現存で32cm以上を測る。II-14509、完形に復元できる。底部は円盤貼り付け状をなすが、胴部の粘土接合は底部の側面に貼り付けている。胴部は大きく外傾しながら立ち上がり、扁平な球状に形成される。胴部と頸部の境には段が形成されている。頸部は内傾しながら直線的に立ち上がり口縁部は反転して緩やかに外反する。口縁部には粘土帶を貼り付け肥厚させ、下端にわずかに段ができる。内外面には彩文による文様が施文される。外面の文様は口唇部と口縁部下端の段の部分に彩文の1条の線をめぐらし、胴部と頸部の境から上部にかけて有輪羽状文が3段に彩文されている。また内面には口縁端部に沿って、垂下する短直線を並列彩文している。外面は横方向のヘラ研磨調整である。内面は頸部には指圧痕が並列して残り、上に横方向のヘラナナデ調整、胴部もヘラナナデ調整である。外面には編みかごの痕跡が見られ、使用にあたって編みかごに入れられていたと考えられる。底部径5.7cm、胴部最大径は胴中位にあり17.9cm、頸部径10.1cm、口縁部径9.8cm、器高17.5cmを測る。II-14429・14531・14618・14620・14625・14654・14696・14698・14700・14701・14702・14704・14710・14714・14721・14722・14725・14726・14729・14738・14739・14744・14758・14763・14765・14787・14791の27点は同一個体。口縁部を失うがほぼ完形に復元できる。底部は安定した平底である。胴部は約45度の角度で外傾しながらやや丸みを持って立ち上がり、胴部中位で反転し丸みを持って内傾しながら立ち上がる。やや胴長である。胴部と頸部の境には沈線1条をめぐらしている。頸部は内傾しながら立ち上がり、口縁部近くで反転して緩やかに外反するか口縁部を失う。外面は横～斜方向の丁寧なヘラ研磨調整である。内面は横方向のヘラナナデ調整である。色調は外面が黄白色、3ヶ所に黒斑が認められる。内面は橙色をなす。底部径10.0cm、胴部最大径28.6cm、頸部径19.6cm、器高は口縁部を失うか現存で31cm以上を測る。

N



第46図II-8864・8865・8913・8946・

8947・8970・9008・9009・9010・

9055・9056・9077・9078・9469・

9546・9690・9693・9695・9697・

9815・9816・9822・9826・9852・9876

の25点は同一個体。口縁部を失うかほぼ完形に復元できる。底部は安定した平底でやや円筒状に高くなる。胴部は大きく外傾しながらやや丸みを持って立ち上がり、胴部最大径

は上位にあり、その点から反転し丸みを持つ内傾しながら立ち上がる。胴部と頸部の境には沈線1条をめぐらしている。頸部は大きく内傾しながら立ち上がる。口縁部を失う。

外面は横～斜方向の丁寧なヘラ研磨調整である。内面の頸部には指圧痕が並列して残り、その上に横方向のヘラ研磨調整を加えている。胴部は斜位のヘラナナテ調整である。色調は外面が赤褐色～黒褐色、

内面は黄赤色～黄白色をなす。底部径9.5cm、

胴部最大径30.7cm、頸部径20.2cm、器高は

口縁部を失うか現存で30cm以上を測る。

(9) 瓢形土器出土状況

第47、48図に瓢形土器の出土状況を示した。

第47図には主要な破片の分布、第48図には完形に復元できた瓢形土器の分布状況を示した。

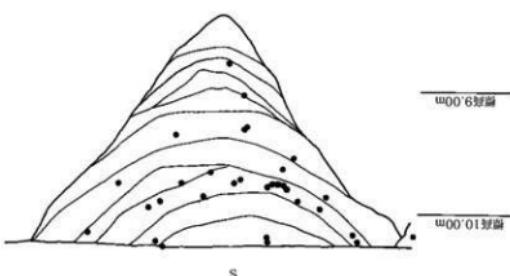
第47図について説明を加える。平面分布は平均的に分布しているように見えるが濠の壁に近い部分は層が薄いために出土土器は少なく、濠底に近いほど包含層が深く、その分だけ出土土器の量も多くなる傾向にある。それらを加味すると、ほぼ均一な分布をしていることがわかる。ただし濠の東西の比較では若干であるが東側に土器の出土が多いようである。日常的な生活の場の検討には重要な手掛かりを与えてくれるものと考えている。以下、出土土器の具体例を示す。

北壁側の第1層からはII-379、II-748、

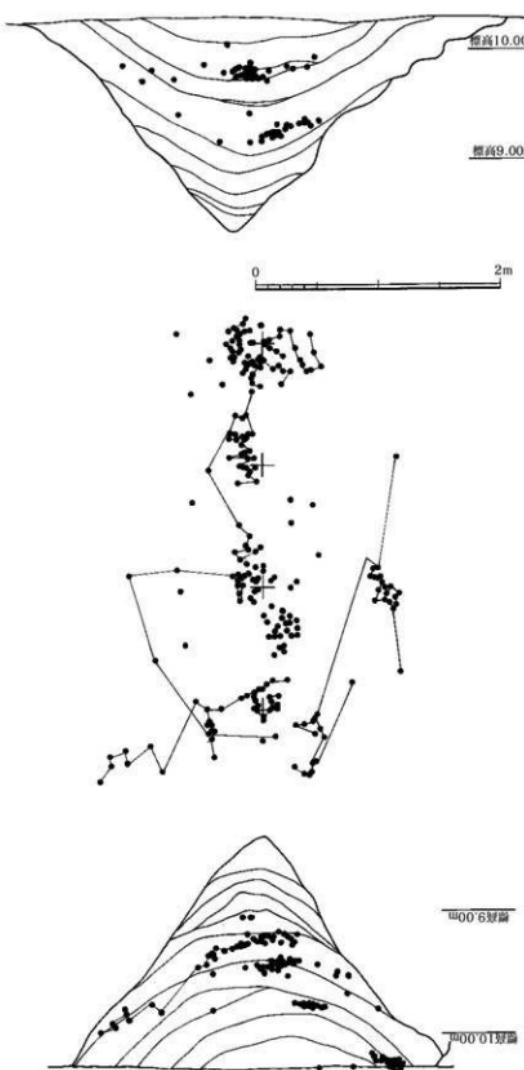
S

m00'6剖面

m00'01剖面



第47図 環濠第2区瓢形土器出土状況 I



第48図 環濠第2区変形土器出土状況II

II-866の3点が出土している。第2層からはII-1198、II-2186、II-3520、II-4135、II-4537、II-4553、II-5895、II-5950、II-5973の9点が出土している。第3層からは出土していない。第4層からはII-5670、II-6240、II-6522、II-6849、II-8071、II-8074、II-8402、II-8956の8点が出土している。第6層からはII-1012、II-2090、II-6870、II-9845、II-11066、II-11796、II-12165、II-12429、II-12500の9点が出土している。第7層からはII-13999、II-14361の2点が出土している。第8層からはII-14159、II-13999の2点が出土している。第9層からはII-15300の1点が出土している。

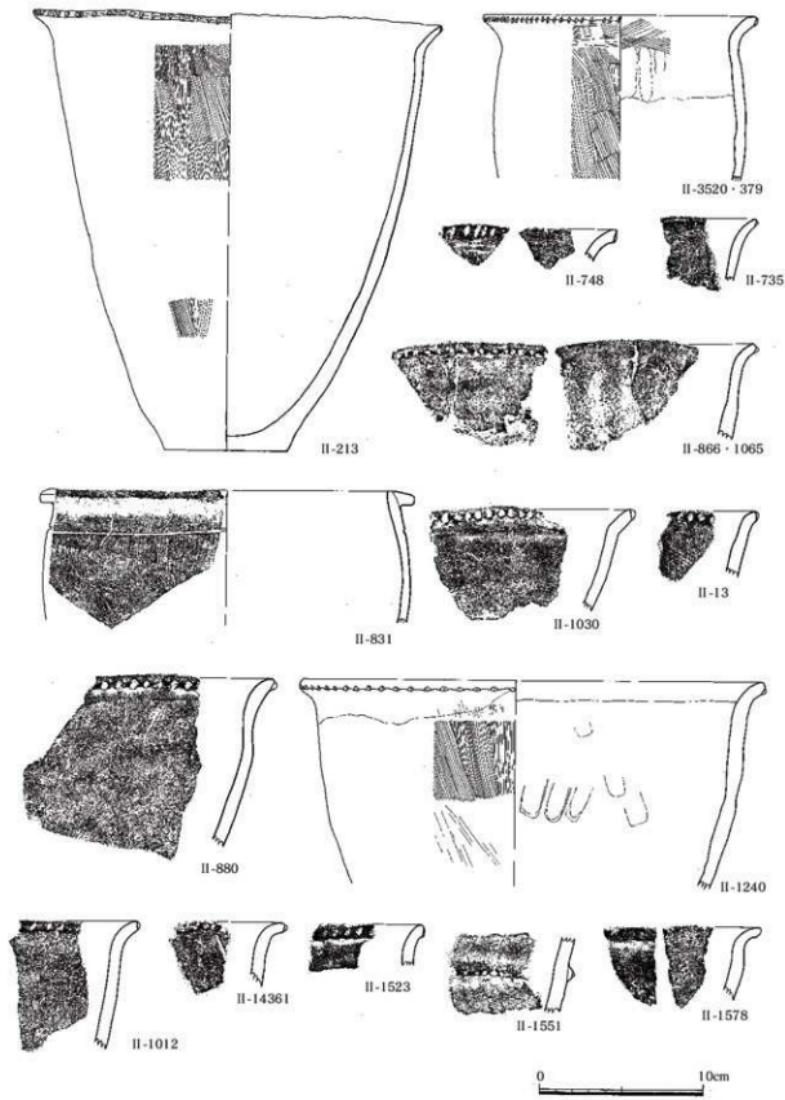
南壁の第1層からはII-13、II-735、II-1772の3点が出土している。第2層からはII-831の1点が出土している。第3層からはII-1030、II-5761、II-1619、II-6027、II-6405、II-7507、II-7603、II-7692、II-7703、II-7883、II-8071、II-8184、II-8454、II-8551、II-8661の15点が出土している。第4層からはII-1785、II-8147の2点が出土している。第5層からはII-8000、II-9249、II-10037の3点が出土している。第6層からはII-9845、II-12426、II-12740、II-13156の4点が出土している。第7層からはII-14468の1点が出土している。第8層には出土していない。第9層からはII-15662の1点が出土している。

第48図は接合復元できた変形土器の一部の出土状況である。そのあり

方はきわめて興味深い出土状況を示している。詳細は後章において考察するので、その概略を記しておくことにする。平面的分布では①同一個体が集中して分布するあり方と、②同一個体がかなり離れて分布するあり方の二つのタイプが存在する。①の場合は完形品に近い状態で底面に転げ落ちて、そのままの状態で埋没したが多いと考えられる。一方、②の場合は底に落ちる前の段階に割れて破片となり、破片が底面に流れ込んだと考えられるものである。この場合は断面では層に沿って落ちていく状態を感じることができ。層位的にもまとまりがあり、遺物が混在する底の堆積の中には土器の編年を考える上においておおいに参考となる。同一層内においてもその上下関係を明確に把握することができる。例えば、第52図II-8402他に示した土器は最も上層に出土し、従来は亀の甲タイプとされた土器である。第54図II-12761他やII-13198他の土器は口唇部全面に刻目を施文した土器であり、前期前半の土器として認識されていた一群の土器である。

(10) 龜形土器

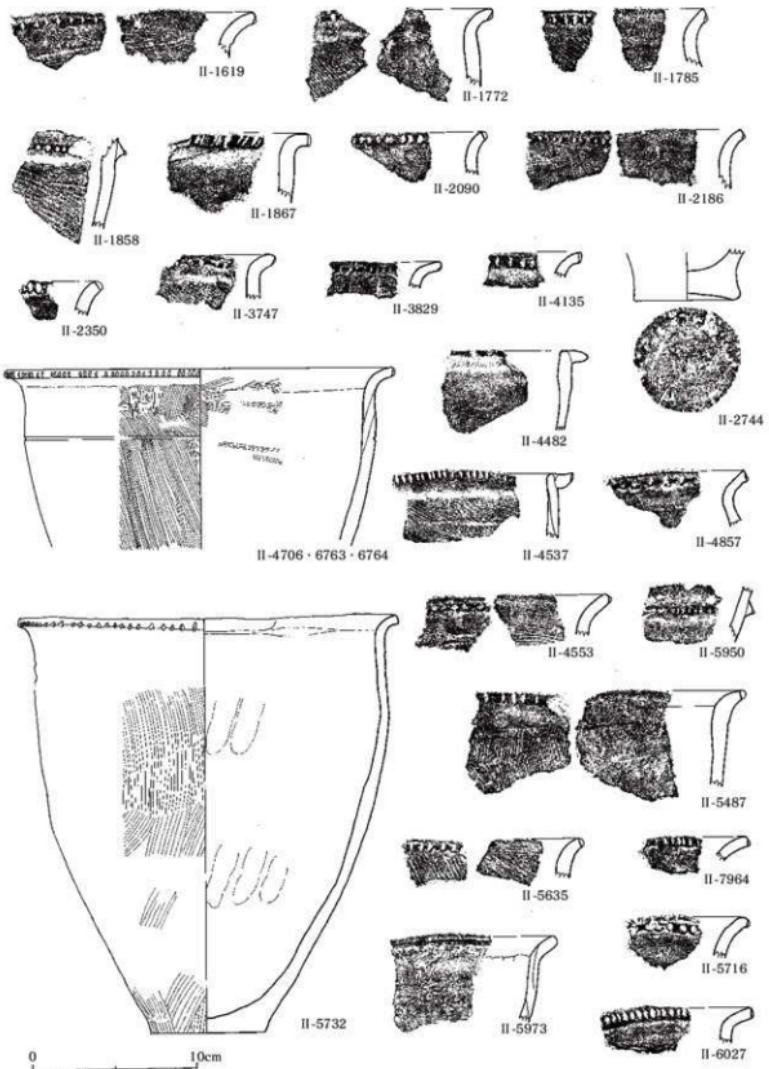
第49図II-213、接合によってほぼ全形を知ることができる。底部は安定した平底、胴部は外傾しながら立ち上がり、脇の膨らみはほとんどない。口縁部は緩やかに外反し、直線的にのびる。口唇部は平坦に作り出され、刻目は口唇の全面にヘラ状工具によって的確に施文される。刻目の間隔はやや離れている。口縁部の外面はヨコナデ調整。胴部外面は縦方向の刷毛目調整。胴部下半は器面の剥離が著しく調整痕は見にくいか縦方向の刷毛目調整の上に横方向のヘラナデ調整を加えて刷毛目を消している。胴部内面は横方向のヘラナデ調整である。色調は外面が橙色をなすが、上半部はススのためにやや黒ずんでいる。内面は橙色をなす。口径28.9cm、器高26.7cm、底部径8.0cmを測る。II-3520・379、接合によって上半部を知ることができる。下半部と底部を失う。胴部上半はわずかに内傾しながら立ち上がり、胴中位が最大径を示し、胴部に若干の膨らみがみられる。口縁部は緩やかに外反し、如意形をなす。口唇部は丸くおさめ、口唇部の下端にヘラ状工具によって刻目が施文される。刻目の間隔は一定していない。口縁部の外面は縦方向の刷毛目調整後、ヨコナデ調整が加えられ、刷毛目を消している。胴部外面は縦方区の刷毛目調整。内面は口縁部がヨコナデ調整。胴部内面は横方向のヘラナデ調整である。色調は外面が橙色をなすが、上半部はススのためにやや黒ずんでいる。内面は橙色をなす。口径28.9cm、器高26.7cm、底部径8.0cmを測る。II-748、口縁部の小破片。如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、全面にヘラ状工具により刻目を施文する。外面は縦方向、内面は横方向の刷毛目調整を施している。色調は内外面ともに黄土色をなす。II-735、口縁部は緩やかにわずかに外反するのみである。口唇部はわずかに平坦部があるが丸くおさめる。口唇部下端に棒状工具で浅く小さい刻目を施文する。外面は縦方向のヘラナデ調整、内面は口縁部が横方向のヘラ研磨調整、胴部は斜位の刷毛目調整である。色調は外面が褐色、内面が黄土色をなす。II-816・1065、胴部はやや膨らむ。口縁部は緩やかに外反する。口唇部は平坦に仕上げられる。口唇の下端にヘラ状工具により刻目が施文されるが、粗雑である。外面は縦方向のヘラナデ調整である。内面は口縁部に横方向の刷毛目調整を施し、その上にヨコナデ調整を加えている。胴部は横方向のヘラナデ調整である。口縁下に指圧痕が並列している。色調は外面が褐色、内面が黄土色～褐色をなす。II-831、逆L字形の口縁をなす。口縁は粘土紐を貼り付けて形成している。口縁部は平坦で、やや外側に向かって傾斜している。胴部は膨らみを持ち、口縁の直下に沈線1条をめぐらす。外面の口縁から沈線の間はヨコナデ調整である。沈線より下位は縦方向の刷毛目調整である。内面は横方向のヘラ研磨調整である。色調は内外面ともに黄白色をなす。口径22.9cmを測る。II-1030、胴部は丸みを持って立ち上がり、口縁で屈曲して直線的にのびる。口唇部は丸くおさめる。全面に棒状工具で刻目が密に施文される。外面



第49図 環濠第2区出土甕形土器実測図 I

は口縁部が横方向、胸部が縱方向のヘラナデ調整である。内面は口縁部と胸部の境に稜線ができるが、あまり明瞭ではない。ヨコナデ調整である。色調は外面が黄白色、内面は黄赤色をなす。II-13、胸部は直線的に立ち上がり、口唇部がわずかに外反する。口唇部は丸くおさめ、全面にヘラ状工具による刻目を深く施文する。外面は斜位のヘラナデ調整、口縁部の内外面にはヨコナデ調整が加えられる。色調は外面が褐色、内面が黄土色をなす。II-880、胸部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。口唇部は平坦に仕上げ、下端にヘラ状工具により深い刻目を施文する。外面は横～斜方向のヘラナデ調整である。口縁部下4cmより下にはスカ付着している。内面は口縁部が横方向のヘラナデ調整、胸部が縱方向のヘラナデ調整である。口縁下に指痕痕が並列している。色調は内外面ともに黄赤色をなすが、胸部の二次的に火を受けた部分は白灰色～黒灰色をなす。II-1240、作図復元によって上半部を知ることができる。下半部と底部を失う。胸部上半はわずかに外傾しながら立ち上がる。口縁部は緩やかに外反し、如意形をなす。口唇部は平坦に形成される。口唇部の下端にヘラ状工具によって刻目が施文される。口縁部の内外面はヨコナデ調整。外面は縱方向の細かい刷毛目調整、下位の刷毛目はヘラナデ調整によって不明瞭である。スカ付着する。内面は口縁部直下とその下位に指圧痕が並列して残っている。上に横方向のヘラナデ調整を加えている。色調は外面が褐色～黒色、内面が黄褐色をなす。口径30.5cmを測る。II-1012、口縁部は如意形をなす。口唇部は丸くおさめ、全面にヘラによる刻目が間隔を持って施文される。内外面ともに器面が磨滅して調整は観察できない。色調は外面が黄褐色、内面が黄白色をなす。II-14361、口縁部は上部で屈曲し如意形をなす。口唇部は丸くおさめ、口唇部全面にヘラ状工具による刻目を施文している。外面はヨコナデ調整、内面は口縁部が横方向の刷毛目調整、上からヨコナデを加えている。胸部はヘラナデ調整である。色調は内外面ともに黄土色をなす。II-1523、口縁部は緩やかに外反する。口唇部は平坦に仕上げる。下端に偏り棒状工具による刻目を施文する。刻目は深い。外面はヨコナデ調整、内面は横方向のヘラ研磨調整である。色調は外面が褐色、内面が黄白色をなす。II-1551は胸部破片。中央部に貼り付け突帯1条がめぐらされる。破片の上部に外反の兆しが観察できるので、突帯は口縁下の突帯である。突帯は断面形が台形をなし、ヘラによる刻目が施文されるが、やや不規則である。外面の突帯より上は斜位の刷毛目調整、下は縦～横方向の刷毛目調整、突帯の上下はヨコナデ調整である。内面は横～斜位のヘラナデ調整である。色調は内外面ともに黄白色で一部に黒斑がみられる。II-1578、胸部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は大きく外反する。口唇部は肥厚気味に丸くおさめる。外面の口縁部はヨコナデ調整、胸部は縦方向のヘラナデ調整である。内面は口縁部が横方向の刷毛目調整、胸部が斜位のヘラナデ調整である。色調は外面が褐色、内面が黄白色である。菱形土器でなく鉢形土器の可能性もある。

第50図II-1619、口縁部は大きく外反する。口唇部は平坦に仕上げ、下端にヘラ状工具により等間隔の規則的な刻目を施文する。口縁部外面はヨコナデ調整、端部より約2cm離れたところで刷毛目の終点を揃えて縦方向の刷毛目調整を加えている。口縁部肥厚帯と同様の意味を持たせたものとして注目される。内面は口縁部が横方向、それより下は斜方向の刷毛目調整を加えている。色調は外面が黄赤色～黒褐色、内面が黒褐色をなす。II-1772、口縁部は如意形をなす。口唇部は平坦に仕上げ、下端にヘラ状工具により刻目を施文するが、一部が残存するのみで詳細は不明。口縁部の内外面はヨコナデ調整であるが、外面に縦方向、内面に横方向の刷毛目が部分的に観察できるのでナデ消されたことがわかる。胸部外面は斜方向の刷毛目調整、内面は斜位のヘラナデ調整である。色調は外面が黄赤色、内面が黄白色をなす。II-1785、口縁部は緩やかに外反する。口唇部の下端ヘラ状工具により規則的な刻目が施されるが、刻目の上に細かい沈線をめぐらし、刻目の部分が一見突帯状に見える。外面は粗い斜位の刷毛目調整、内面は同

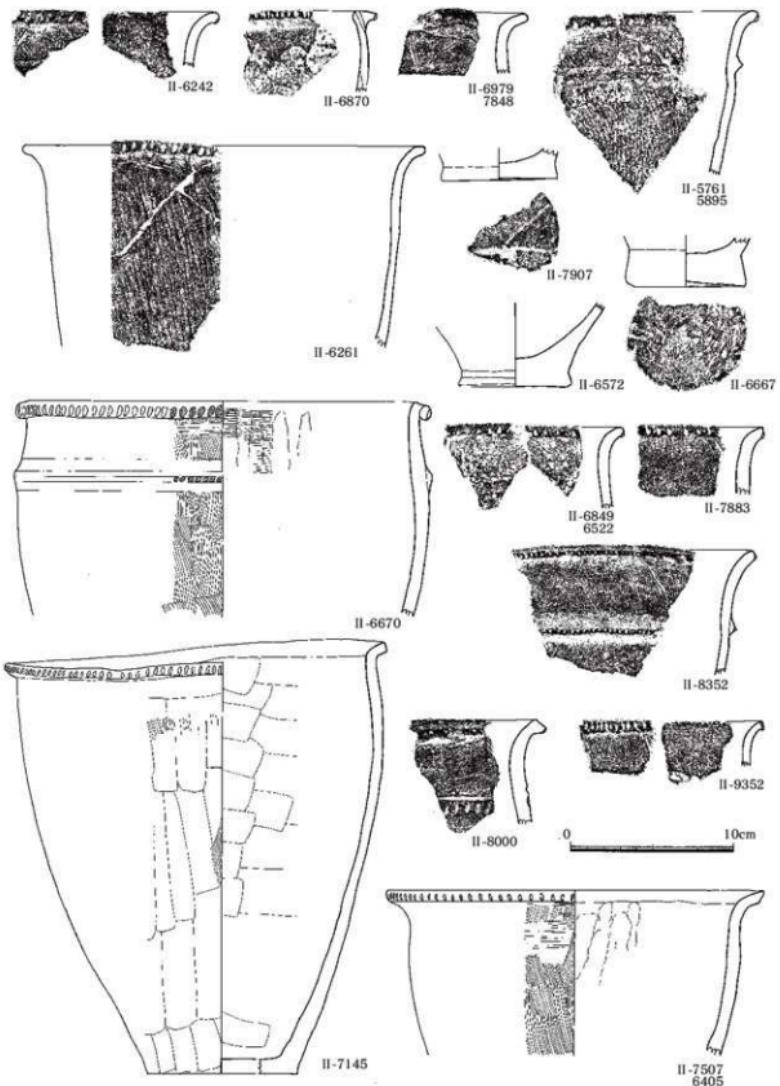


第50図 環濠第2区出土甕形土器実測図II

様の粗い刷毛目調整を横方向に施している。色調は内外面ともに黄白色をなすが、刻目周辺は褐色をなす。II-1858、胴部に貼り付け突帯をめぐらした甕形土器である。突帯は断面形が台形をなし、頂部に棒状工具により刻目を施文する。胴部には目の粗い斜方向の刷毛目調整を施すが、突帯の上下はヨコナデ調整を加えて刷毛目を消している。内面はヘラナデ調整である。指圧痕が並列して残っている。色調は内外面ともに黄白色であるが、外面には赤黄色がまだら状に発色している。II-1867、口縁部は如意形をなすが、上部で強く屈曲する。口唇部は平坦で刻目は板状の工具で全面に施文されるか間隔があり規則である。二次的に火を受けたと考えられ硬化している。内外面ともにヨコナデ調整である。色調は黄灰色をなす。II-2090、口縁部は緩やかに外反するが、あまり大きくは外反しない。口唇部は丸くおさめる。全面にヘラ状工具により的確に刻目が施文される。内外面ともにヨコナデ調整を加えている。色調は内外面ともに黒褐色～赤褐色である。II-2186、口縁部は緩やかに外反する。口唇部は平坦に仕上げ、下端にヘラ状工具により刻目を密に施文している。上端部は鋭い稜線を形成する。外面はヨコナデ調整、内面は横方向の刷毛目調整を加え、その上にヨコナデ調整を加えて刷毛目を消している。色調は外面が黄褐色、内面が黄褐色～黒灰色をなす。II-2350、口縁部は緩やかに外反する。口唇部は平坦に仕上げ、全面に棒状工具により刻目を施文する。内外面ともにヨコナデ調整を加えている。色調は内外面ともに黄土色をなす。II-3747、口縁部上部で屈曲し外反する。口唇部は丸くおさめるが全体に作りはひびつである。口唇部下端に棒状工具により刻目が施文される。外面は斜位の刷毛目調整を加えた後、ヨコナデ調整を加えている。内面は口縁部が横方向の刷毛目調整、胴部はヘラナデ調整である。色調は外面が褐色、内面は黄白色～黄土色をなす。II-3829、口縁部は大きく外反する。口唇部は平坦に仕上げ、下端部にヘラによる小さな刻目を施文する。外面は縦方向の刷毛目調整、内面は横方向の刷毛目調整、その上にヨコナデを加えて刷毛目を消している。刷毛目の眼はやや粗い。色調は内外面ともに黄白色をなす。II-4135、口縁部は外反する。口唇部は平坦に仕上げ、ヘラ状工具により等間隔に刻目を施文する。外面は縦方向の刷毛目調整、スカ付着する。内面はヨコナデ調整である。色調は外面が黒褐色、内面は黄赤色～褐色をなす。II-4706・6763・6764、作図復元によって上半部を知ることができる。下半部と底部を失う。胴部上半はわずかに外傾しながら立ち上がり、口縁部近くはほぼ垂直に立ち上がる。口縁部は屈曲するようになり外反し、如意形をなす。口唇部は丸く形成される。口唇部のほぼ全面にヘラ状工具によって刻目が施文される。刻目の間隔は一定していない。口縁下約3.5cmの所に沈線1条をめぐらす。沈線は刷毛目調整後に施文されたものである。口縁部の内外面はヨコナデ調整を加えている。外面は縦～斜方向の細かい刷毛目調整であるが、口縁下0.5cmのところに刷毛目の終点をそろえている。口縁部の肥厚帯を意識したものであろうか。スカ付着する。内面は口縁部から胴部上半にかけて横～斜方向の刷毛目調整施すが、口縁部はヨコナデで刷毛目を消している。胴部下半は縦方向のヘラナデ調整である。胴部の粘土接合は内傾接合になっている。色調は外面が黒褐色、内面が褐色をなす。口径30.5cmを測る。II-4482、口縁部は突帯を貼り付けて横に張り出す。端部は丸くおさめている。外面は縦～斜位の刷毛目調整を施し、内面は口縁部がヨコナデ調整、胴部はヘラナデ調整である。色調は外面が黄白色、内面が赤黄色をなす。II-2744、甕形土器の底部である。径6.6cmを測る。円筒状をなす。体部には横方向の貝殻条痕調整が観察できる。外底部へラ状工具により削られ上げ底状をなす。内面はナデ調整であるが、凹凸が著しい。色調は外面が黄白色、内面は赤黄色である。II-4537、口縁部に粘土紐を貼り付けて高い突帯を作り出す。そのため口縁部は平坦になる。口唇部は丸くおさめ頂部にへラ状工具により小さな刻目を施文する。口縁部の内外面はヨコナデ調整、胴部外面は斜位の刷毛目調整、内面は横方向のヘラナデ調整である。口縁下に指圧痕が並列して残る。色調は内外面ともに黄白色をなす。II-4857、胴部は内傾しながら立ち上がり

り、口縁部は緩やかに外反する。口唇部は平坦に仕上げ、ヨコナデ調整が加えられる。下端に棒状工具により刻目が施文され、刻目にはススが付着している。内外面ともにヨコナデ調整である。色調は外面が褐色～黄白色、内面が黄白色をなす。II-4553、口縁部は直線的に外反する。口唇部は平坦に仕上げる。下端に棒状工具による刻目を施文する。外面の口縁部はヨコナデ調整、脣部は縦方向の刷毛目調整である。内面は横向の刷毛目調整である。色調は外面が黄白色～褐色、内面は黄白色をなす。II-5950、菱形土器の脣部破片。1条の貼り付け突帯をめぐらす。突帯は断面三角形ヘラ状工具により小さな刻目が密に施文される。外面はヨコナデ調整、内面はヘラナデ調整である。指頭痕が残っている。色調は外面が褐色～灰色、内面が白灰色である。II-5732他、破片51点の接合によってほぼ全形を知ることができる。底部は安定した平底、脣部は外傾しながら立ち上がるが、脣の膨らみはほとんどない。脣部上位三分の二のところからほぼ垂直に立ち上がる。口縁部は上部近くが強く外反する。口唇部は平坦に作り出され、その下端にヘラ状工具によって浅く施文される。刻目の間隔はやや離れている。口縁部下に2条の凹線がめぐらされる。口縁部の内外面はヨコナデ調整。凹線の一部はヨコナデによって消えている。脣部外面は縦方向の刷毛目調整。脣部下半は刷毛目調整の上に横方向のヘラナデ調整を加えて刷毛目を消している。脣部内面は横向のヘラナデ調整である。口縁部を下った所とさらに下段に指圧痕が並列して残っている。色調は外面が橙色をなすが、上半部はススのためにやや黒ずんでいる。内面は橙色をなす。内底部より上位に焦げ付きの跡がみられる。口径28.4cm、器高25.5cm、底部径7.0cmを測る。II-5487、脣部はほぼ直線的に立ち上がり口縁部が外反する。口唇部は丸くおさめる。全面にヘラによる刻目を施文する。刻目の間隔は不揃いである。口縁部の外面はヨコナデ調整である。口縁端から約2cm下方に刷毛目の終点を揃えて縦方向の刷毛目調整を加えている。内面は脣部との境に稜線ができる。口縁部には横向の刷毛目調整を施し、上からヨコナデを加えている。脣部はヘラナデ調整である。色調は外面が赤褐色、内面は黄土色をなす。II-5635、口縁部はわずかに外反する。口唇部は平坦に仕上げられる。下端に刷毛目原体により刻目が施文される。外面は斜位の刷毛目調整、内面は口縁部が横方向の刷毛目調整、脣部は斜位の刷毛目調整を施した後、ヨコナデ調整を加える。刷毛目はやや粗い。色調は外面が褐色、内面は黄白色をなす。II-7964、口縁部は大きく外反する。口唇部は平坦に仕上げ、下端に片寄ってヘラによる刻目を施文するが、やや粗雑である。内外面ともにヨコナデ調整である。色調は内外面ともに褐色をなす。II-5973、脣部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は大きく外反する。口唇部は平坦に仕上げ、両面からのヘラナデによって中央部に凹線状のくぼみができる。外面は斜位の刷毛目調整後、横方向のヘラ研磨調整を加え刷毛目を消している。内面の口縁部は横方向の刷毛目調整を施し、上からヘラナデを加えている。色調は内外面ともに黄赤色をなす。II-5716、口縁部は緩やかに外反する。口唇部は平坦に仕上げ、下端に棒状工具により刻目を施文し、刻目の上に細沈線1条をめぐらすために刻目の部分は突帯状になる。内外面ともにヨコナデ調整である。色調は外面が褐色、内面が黄赤色をなす。II-6027口縁部は大きく外反する。口唇部は肥厚気味に丸くおさめる。口唇部の全面にヘラ状工具により深い刻目を密接して施文する。内外面ともにヨコナデ調整である。色調は外面ともに黄土色～黒褐色、内面は黄赤色をなす。

第51図II-6242、口縁部は緩やかに外反し、如意形をなす。口唇部は丸くおさめるが、平坦面が存在する。下端にヘラ状工具による刻目が等間隔で施文される。器面が荒れていて調整は観察が困難であるが、外面はヨコナデ調整、幅広で浅い凹線1条がめぐらされる。内面は横向の刷毛目調整である。色調は内外面ともに赤褐色～黒色である。II-6870、口縁部に突帯を貼り付けている。口縁部は平坦である。口唇部にヘラ状工具により刻目を密に施文する。口縁部の内外面はヨコナデ調整を加えている。内面はナデ調整を加えている。口縁部の下に指頭痕が2段に並列して残る。色調は内外面ともに黄土色をなす。II-

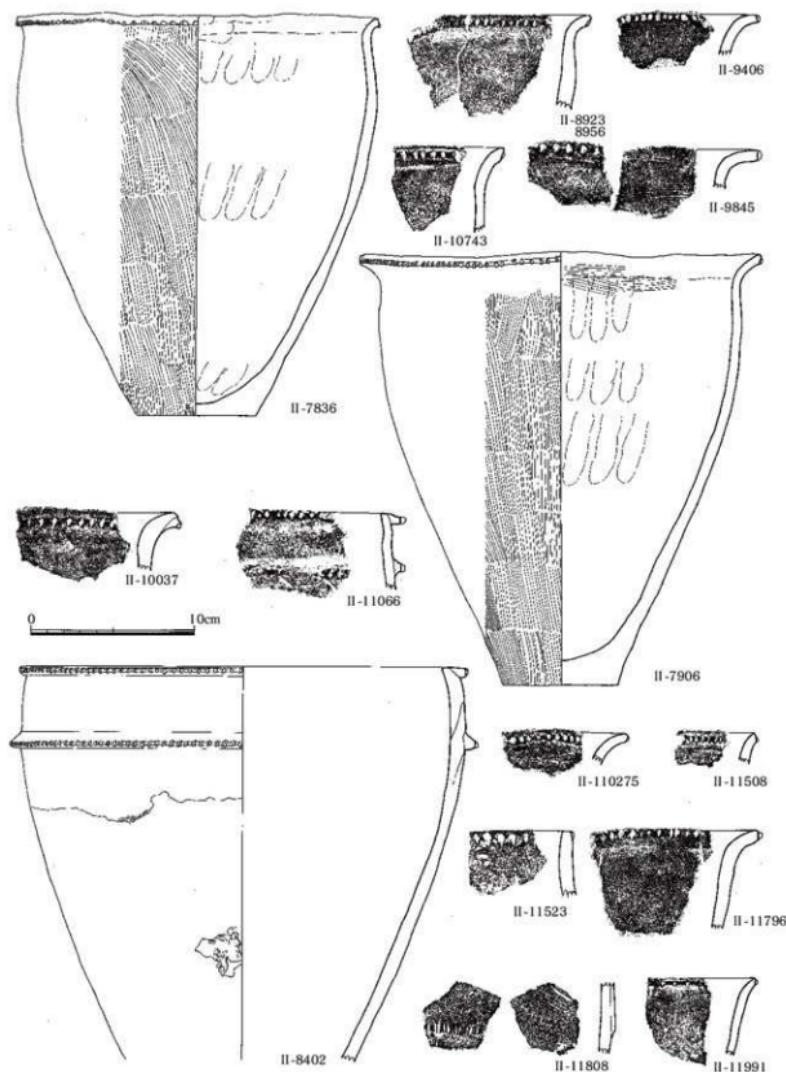


第51図 環濠第2区出土甕形土器実測図III

6977・7848、壺形土器の頸部から口縁部にかけての破片である。口縁部は丸くおさめる。外面と口縁部の内側は横向の丁寧なヘラ研磨調整である。研磨の下に一部横向の刷毛目調整が確認できるので下地に刷毛目調整を施したことかわかる。II-5761・5895は口縁部から胴部にかけての破片である。全体に磨滅している。口縁は如意形に外反している。口唇部下端にヘラによる刻目を施文する。口縁下に2条の凹線をめぐらしていたと考えられ、その痕跡がみられるが表面が剥離しているために断定できない。その下方には縦～斜位のやや目の粗い刷毛目調整が施される。内面は口縁部がヨコナデ調整、胴部が斜位のヘラナデ調整である。色調は外面が黄白色～赤褐色、内面は灰白色～黒褐色をなす。II-6261、作図復元によって上半部を知ることができる。下半部と底部を失う。胴部上半はわずかに外傾しながら立ち上がり、口縁部に向かって緩やかに外反し、如意形をなす。口唇部は丸くおさめられる。口縁部の下端にわずかに片寄って棒状工具によって刻目が施文される。刻目の間隔は一定していない。口縁部の外面はヨコナデ調整、外面は縦～斜方向のヘラ研磨調整であるが、器面の凹凸が著しい。スカ付着している。内面は口縁部から胴部上半にかけて横向のヘラ研磨調整を施す。胴下半部は下からかきあげたようなヘラケズリ状のヘラナデ調整である。色調は外面が黄褐色、内面が黄土色～褐色をなす。口径24.8cmを測る。II-7977、底部破片。低い円筒状をなす。復元径7.2cmを測る。外底部に木葉痕がついている。壺形土器の底部の可能性が高い。色調は内外面ともに黄赤色をなす。底部径7.5cmを測る。II-6572、底部から胴部にかけての破片である。底部端が外側に張り出す。胴部はあまり外傾せずに立ち上がる。外底部は多方向のヘラ研磨調整、胴部の内外面は丁寧な横向のヘラ研磨調整である。器形的には甌形土器であるが、壺形土器の可能性も高い。底部径6.8cmを測る。色調は内外面ともに黄褐色、一部に黒斑がみられる。II-6667、底部破片。底部端がやや張り出しが、円筒状をなす。側面はヨコナデ調整を加えている。外底部は多方向から削られわずかに上底状になる。色調は内外面ともに黄土色をなす。II-6670、作図復元によって上半部の器形を知ることができる。下半部と底部を失う。胴部上半はわずかに外傾し、膨らみをもって立ち上がる。口縁部近くはわずかに内傾しながら立ち上がる。口縁端部に粘土紐が貼り付けられ、突帯を形成する。突帯は断面が半円状をなす。突帯は全面に刷毛目原体によって刻目が密に施文される。刻目の間隔は一定していない。口縁部突帯より約3cm下った胴部にも貼り付け突帯1条をめぐらしている。この突帯にも刷毛目原体により頂部に小さな刻目が施文されている。外面は縦方向の刷毛目調整である。刷毛目は口縁部突帯の下にも確認できるので突帯の貼り付けは刷毛目を施した後である。口縁部突帯の下側、胴部突帯の両側はヨコナデ調整によって刷毛目を消している。スカ部分的に付着している。内面は口縁部に指圧痕が並列して残り、その上に横向の刷毛目調整を施している。胴下半部は器面が荒れていて調整は不明。色調は外面が黄褐色、内面が黄灰色でくすんでいる。II-6849・6522、胴部はやや膨らみを持ち、口縁部は緩やかに外反する。口唇部は丸くおさめるが、下端部にヘラ状工具により刻目を施文する。刻目はやや粗雑である。外面はヨコナデ調整であるが器面が荒れている。胴部に2条の浅い凹線をめぐらしている。内面は口縁部がヨコナデ調整、胴部がヘラナデ調整である。色調は外面が黄赤色、内面が褐色～黒褐色をなす。II-7883は他と同様に口縁部は如意形をなすがあまり外反しない。口唇部下端にヘラによる刻目が間隔を持って施文される。外面はヨコナデ調整、内面は口縁部がヨコナデ調整であるが、詳細は器面が荒れて観察できない。色調は外面が黒褐色、内面は口縁部が黒褐色で、下は黄赤色をなす。II-7145、破片21点の接合によってほぼ全形を知ることができる。底部は安定した平底、胴部は外傾しながら立ち上がるが、胴の膨らみはほとんどない。胴部上位のところからわずかに内傾しながら立ち上がる。口縁部は上部近くが短く屈曲して外反する。口唇部は平坦に作り出され、その下端に片寄ってヘラ状工具によつて浅く、等間隔で刻目が施文される。外面は縦方向の刷毛目調整後に、縦方向の板ナデ調整を加えて刷毛

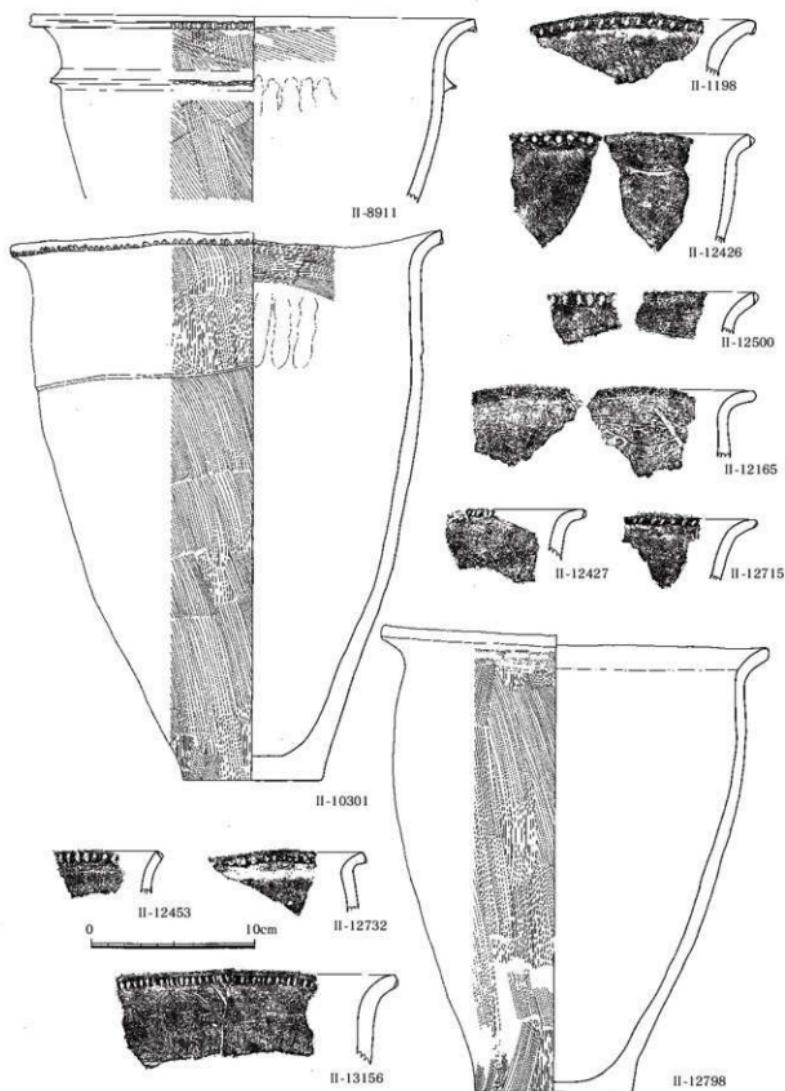
目を消している。刷毛目は部分的に残る。口縁部直下は横方向の板ナデ調整である。胴部下半は刷毛目調整の上に横方向のヘラナデ調整を加えて刷毛目を消している。胴部内面は横方向のヘラナデ調整である。内面は横方向の板ナデ調整である。色調は外面が橙色～褐色をなすが、黒斑か3ヶ所にある。内面は橙色をなす。内底部に焦げ付きがみられる。口径25.0cm、器高28.6cm、底部径9.8cmを測る。II-8352は口縁部が如意形に外反し、口縁部下に刻目突帯1条を貼り付けている。口唇部は平坦に仕上げ、下端にヘラによる小さな刻目を施文する。下の貼り付け突帯も同様にヘラによる小さな刻目を密に施文している。外面は継方向の細かい刷毛目調整を施し、口縁部と貼り付け突帯の間は継方向のヘラナデ調整、突帯の下方は横方向のヘラナデ調整である。内面は器面の保存状態が良くないので充分な観察ができない。口縁部の直下と貼り付け突帯部分の内側には指頭痕が並列している。口縁部の指頭痕は如意形口縁と突帯部分の指頭痕は突帯の貼り付けに関係したものであろう。色調は外面が黄褐色、一部黒斑がみられる。内面は黄赤色をなす。II-8000、口縁部は継やかに外反する。口唇部は平坦に仕上げ、平坦面にはヨコナデ調整が加えられる。下端部にはヘラ状工具により浅く小さい刻目が施文される。口縁下の胴部に沈線1条がめぐらされ、その下に浅い押点文が並んでいる。外面はヨコナデ調整、内面は口縁部がヨコナデ調整で胴部は横方向のヘラナデ調整である。全体に厚い土器である。色調は外面が黄褐色～褐色、内面は黄土色である。瀬戸内地方の土器で搬入品と考えられる。II-8233、口縁部はわずかに外反する。口唇部は平坦に仕上げられ、全面に刷毛目原体による刻目が密に施文される。外面は継方向の刷毛目調整、内面は口縁部が横方向の刷毛目調整、胴部は斜位の刷毛目調整で上にヘラナデが加えられる。色調は内外面ともに黄褐色をなす。II-7507・6405、作図復元によって上半部の器形を知ることができる。下半部と底部を失う。胴部上半はわずかに外傾しながら丸みを持って立ち上がり、口縁部に向かって継やかに外反し、如意形をなす。口唇部は丸くおさめられる。口唇部の下端にヘラ状工具によって刻目が施文される。刻みの間隔は一定していない。口縁部の外面はヨコナデ調整、外面は継～斜方向の目の細かい刷毛目調整を丁寧に施している。内面は口縁部に横方向の刷毛目調整を施し、その上にヨコナデ調整を加えて刷毛目を消している。口縁直下には指圧痕が並列して残っている。継方向のヘラナデ調整である。色調は外面が黄褐色～黒灰色をなし、一部に黒斑がみられる。内面が明黄褐色をなす。口径23.2cmを測る。

第52図II-7836、ほぼ完形で出土している。全形を知ることができる。底部は安定した平底、胴部は外傾しながら立ち上がり、口縁部近くでわずかに内傾し、口縁は短く外反する。胴の膨らみはほとんどない。口唇部は平坦に作り出され、その下端にヘラ状工具によって刻目が密に施文される。外面は継～斜方向の刷毛目調整、口縁部はその上にヨコナデを加えている。刷毛目の目は粗い。内面の口縁部は強いヨコナデ調整である。内底部、胴部中位、口縁部近くには指圧痕が3段にわたって残っている。胴部上半は横方向の板ナデ調整である。色調は内外面ともに橙色～褐色をなす。口径23.6cm、器高26.5cm、底部径7.8cmを測る。II-8923・8956、胴部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は上部で大きく屈曲し外反する。口唇部は平坦に仕上げ、下端部にヘラ状工具により小さな刻目が施文される。外面は継方向の刷毛目調整。その上に横方向のヘラナデ調整を加えて刷毛目を消している。内面の口縁部はヨコナデ調整、胴部は斜位のヘラナデ調整である。色調は内外面が黄土色をなす。口唇部は褐色に変色している。II-9406は大きく外反し、如意形をなす。口唇部は丸くおさめ、刷毛目原体による刻目を密に規則的に施文している。刻目内には刷毛目が残っている。内外面はともに横方向のヘラナデ調整である。二次的に火を受けて、口縁部が灰色に変色している。色調は内外面ともに黄赤色～灰色をなす。II-10743、胴部は膨らみ、口縁部は継やかに外反する。口唇部は肥厚させ、口唇部の上端部をとがり気味におさめる。下端部に刷毛目原体により的確に刻目を施文する。刻目の上部の上をなすことによって、粘土を刻目側に寄せ、結果



第52図 環濠第2区出土甕形土器実測図IV

として刻目との間にくぼみを作り沈線状にすることによって突帯風にしている。他の例の沈線も同様の過程を踏んでいるが、表現として細沈線で表している。外面はヨコナデ調整、内面は口縁部か横方向の小さな刷毛目調整を加えた後ヨコナデを加えて刷毛目を消している。胴部は斜位のヘラナデ調整である。色調は内外面ともに黄土色である。II-9845、口縁部は大きく外反する。口唇部は丸くおさめる。口唇部全面にヘラ状工具により深く的確な刻目を施文する。外面はヨコナデ調整、内面は横方向の刷毛目調整、口縁部はさらにヨコナデ調整を加えて刷毛目を消している。色調は外面が茶色～黒褐色、内面は黄白色～黄褐色をなす。II-10037、口縁は外反し如意形をなす。口唇部は平坦に仕上げ、下端にヘラ状工具により等間隔の規則的な刻目を施文する。口縁部の内外面はヨコナデ調整、外面は斜位の細かい刷毛目調整、内面はナデ調整である。色調は外面ともに黄褐色～黒褐色をなす。II-11066、2条突帯の菱形土器である。突帯はいずれも貼り付け突帯である。高さが高く、端部にヘラ状工具により深く的確な刻目を施文する。内外面ともにヨコナデ調整である。内面には指圧痕が並列して残っている。色調は内外面ともに黄赤色～黄土色である。II-7906、16点が接合し、ほぼ全形を知ることができる。底部は安定した平底、胴部は外傾しながら立ち上がり、口縁部近くで緩やかにカーブし、内傾しながら立ち上がる。口縁部は大きく外反し、直線的にのびる。胴の膨らみはほとんどない。口唇部は平坦に作り出され、その下端にヘラ状工具によって刻目が浅く密に施文される。外面は縦～斜方向の刷毛目調整、口縁部はその上にヨコナデを加え、刷毛目を消している。刷毛目の目はやや粗い。内面の口縁部は強いヨコナデ調整である。内底部、胴部中位、口縁部下に3段にわたって指圧痕が並列して残っている。胴部は横方向の板ナデ調整である。色調は内外面ともに橙色～褐色をなす。口径26.1cm、器高28.5cm、底部径7.5cmを測る。II-8402、15点が接合し、ほぼ全形を知ることができるが底部を失っている。底部は安定した平底をなすと考えられる。胴部は外傾しながら直線的に立ち上がり、胴部中位で内傾気味に立ち上がる。口縁部と胴部にそれぞれ1条の貼り付け突帯をめぐらす。突帯の頂部にはヘラ状工具による刻目が施文されている。外面の突帯間はヨコナデ調整、胴部突帯下は器面が薄く剥離している。部分的に残っている器面から見ると縦方向の板ナデ調整と考えられる。内面は横方向の板ナデ調整である。色調は内外面ともに赤褐色をなす。口径27.6cm、器高24.0cm以上を測る。II-10295口縁部は大きく外反する。口唇部には平坦部が作り出され、下端に棒状工具により刻目が密に施文される。内外面ともにヨコナデ調整である。色調は外面が黒褐色、内面が褐色～黒褐色をなす。II-11508、口縁部はわずかに外反する。口唇部は平坦に仕上げ、細かい刷毛目調整が加えられる。口唇部の下端部にはヘラ状工具により小さな刻目が施文される。外面は縦方向の細かい刷毛目調整、内面は斜位の刷毛目調整の上にヨコナデを加えて刷毛目を消している。色調は外面が褐色、内面が黄白色～黄赤色をなす。II-11523、胴部から直線的に立ち上がり、口縁部は直行する。口唇部は平坦であるがやや丸みを持っている。外面側の端部に棒状工具により刻目を施文する。内外面ともに横方向のヘラナデ調整である。色調は外面が黄土色、内面が黄白色～黄赤色をなす。II-11796、如意形口縁の菱形土器である。口唇部は平坦に仕上げるが、下端にヘラによる刻目を施文するが、間隔が不規則である。内外面はともに横方向のヘラナデ調整である。内面の屈曲部には指頭痕が並列している。色調は外面が黄褐色、内面が黄白色をなす。II-11808、菱形土器の胴部破片。口縁部に粘土帶を貼り付けて肥厚させ、その下端に段が形成される。段の部分に刷毛目原体により刻目が施文されるが刻目は不揃いである。肥厚帯の外面は斜位の刷毛目調整、段の下方は縦方向の刷毛目調整である。内面は横～斜位の刷毛目調整が的確に施される。色調は外面が灰色、内面が黄白色をなす。II-11991、胴部は直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。口唇部は丸くおさめ、下端部にヘラ状工具により小さな刻目が施文される。外面は磨滅し調整は明らかでない。内面は口縁部がヨコナデ調整、胴部はヘラナデ調整で



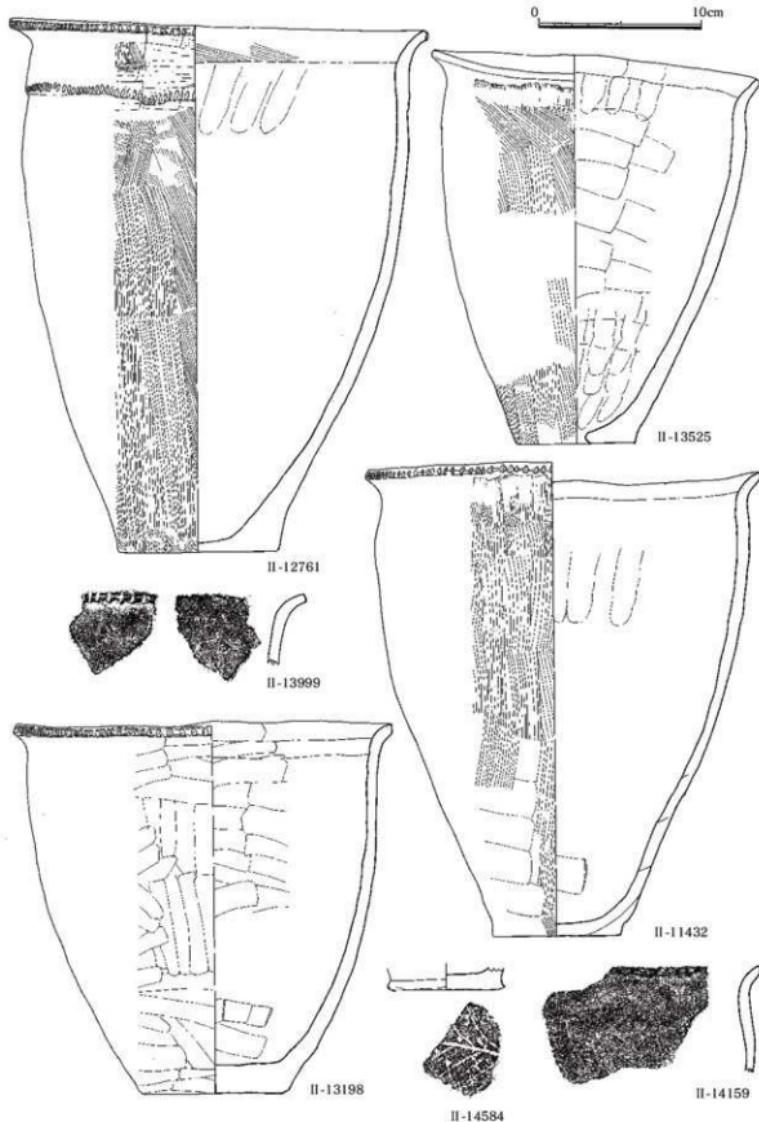
第53図 環濠第2区出土甕形土器実測図V

ある。色調は外面が褐色、内面が黄土色をなす。

第53図II-7804・8910・8911・8970の4点が接合し、甕形土器の上半部の器形が明らかである。胴部は丸みをもって外傾しながら立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。口唇部は平坦に仕上げられ、下端にヘラ状工具によって刻目が施文される。一見突帯状に見える。胴部の突帯は断面三角形をなし、頂部にヘラ状工具で小さな刻目を施文する。外面は継～斜方向の刷毛目調整を施している。胴部突帯の両側にはヨコナデが施され、刷毛目を消している。内面は口縁部が斜方向の刷毛目調整後、ヨコナデを加えて刷毛目を消している。胴部突帯の内側には指圧痕が並列して残り、その上にヘラナデを施している。色調は外面の上半部が黄土色、下半部にスカ付着するために黒褐色をなす。内面はやくすんだ黄土色をなす。II-10301、50点の破片が接合し、ほぼ全形を知ることができる。底部は安定した平底、胴部はあまり外傾せずに立ち上がり、胴部中位からはほぼ垂直に立ち上がり、口縁部近くでわずかに内傾し、口縁は屈曲して外反する。胴の膨らみはほとんどない長胴の甕である。口縁部には幅広い粘土帶を貼り付けて肥厚させ、肥厚帶の下端に段が形成される。段は低く刷毛目調整によって消える部分もある。口唇部は平坦に作り出され、ヨコナデが加えられる、その下端にヘラ状工具によって刻目が密にしっかりと施文される。外面は継～斜方向の刷毛目調整、口縁部はその上にヨコナデを加えているが、刷毛目の消えた部分は少ない。刷毛目の目は粗い。内面の口縁部は横方向の刷毛目調整が加えられる。口縁部近くには指圧痕が並列して残る。胴部は横方向のヘラナデ調整である。色調は内外面ともに橙色へ褐色をなす。外面に黒斑が認められる。口径26.3cm、器高33.6cm、底部径8.4cmを測る。II-1198、口縁部は緩やかに外反、口唇部は丸みを持つが平坦である。下端側に片寄ってヘラ状工具により浅い刻目を施している。外面胴部は継方向のヘラ研磨調整。口縁部外面は横方向のヘラ研磨調整である。胴部内面はヘラナデ調整である。外面にはスカの付着が認められる。色調は外面とともに黄白色～黒灰色をなす。II-12426、胴部はわずかに丸みを持って立ち上がり、口縁部上半で緩やかに外反する。口唇部は丸くおさめる。下端部にヘラ状工具により深い刻目を施文する。外面には斜位の刷毛目調整を施すが部分的にナデ消される。内面は口縁部に横方向の刷毛目調整を加えるが上にヨコナデ調整を加えて、刷毛目を消している。胴部は粗いヘラナデ調整である。口縁下には指圧痕が並列している。色調は外面が褐色、内面が黄土色をなす。II-12500、口縁部は緩やかに外反する。口唇部は丸くおさめる。全面にヘラ状工具により刻目等間隔で施文する。外面はヨコナデ調整。内面は斜位の刷毛目調整を加え、上からヨコナデ調整を加えて消している。色調は外面が褐色、内面が赤褐色をなす。II-12165、口縁部は大きく外反する。口唇部は丸くおさめる。刻目は施文されない。外面はヨコナデ調整を加えている。内面は口縁部に横方向の粗い刷毛目調整を加え、その上にヨコナデ調整を加えて刷毛目を消している。胴部はナデ調整である。色調は内外面ともに黄白色をなす。II-12427も他と同様、如意形口縁をなす。口唇部は丸くおさめ棒状工具によりほぼ全面に刻目を密に施文している。内外面はともに横方向のヘラナデ調整である。色調は内外面ともに黄赤色をなす。II-12715、胴部は直線的に立ち上がり、口縁は緩やかに外反する。口唇部は丸くおさめ、下端に棒状工具による浅い刻目を施文する。外面は横～斜位のヘラナデ調整である。内面は口縁部が横方向の刷毛目調整、上からヨコナデ調整を加え、刷毛目を消している。胴部は継方向のヘラナデ調整である。色調は内外面ともに黄土色をなす。II-12473、口縁部はわずかに外反する。口縁部は平坦に仕上げ、全面に刷毛目原体により的確な刻目を施文する。外面は継～斜方向の刷毛目調整を施す。口縁直下に刷毛目の終点を描えている。また、上にヨコナデ調整を加えて刷毛目を消している。内面も同様に横方向の刷毛目調整を加えた後にヨコナデを加えて刷毛目を消している。色調は外面が黒褐色、内面が黄土色である。II-12732、胴部は内傾気味に立ち上がり、口縁部は強く屈曲する。口唇部は平坦に仕上げ、下端部にヘラ

状工具により浅い刻目を施文しているが、極めて識別が困難である。内外面ともに横方向のヘラナデ調整である。色調は外面が黄赤色、内面が黄土色である。II-13156、口縁部は如意形をなす。口唇部は丸くおさめ、下端にヘラによる刻目を密に施文する。口縁部の内外面はともに横方向のヘラナデ調整、外面は縦方向のヘラナデ調整である。破片の下端に小さな段か観察できるが、口縁部を肥厚させてできた段か、あるいはヘラナデの終点によってできた段かの区別はできない。内面はナデ調整である。全体に器壁が厚く1cm前後を測る。色調は外面が黄土色～黒褐色、内面が黄赤色をなす。II-12798、24点の破片が接合し、ほぼ全形を知ることができる。底部は安定した平底、胴部は外傾しながら立ち上がり、口縁部に近い上部ではほぼ垂直に立ち上がる。口縁はくの字に屈曲して直線的にのびる。胴の膨らみはほとんどない。口唇部は平坦面を有するが、全体的に丸くおさめる。刻目は施文されていない。外面は縦～斜方向の刷毛目調整、口縁部はその上にヨコナデを加えて、刷毛目を消そうとしている。下半部においても横方向のヘラナデ調整を加えて部分的に刷毛目を消している。内面の口縁部は丁寧なヨコナデ調整である。胴部は横方向のヘラナデ調整を加えている。色調は外面が橙色～黄白色、内面が橙色をなす。底部より10cm前後のところが黒く変色している。口径23.5cm、器高28.5cm、底部径9.6cmを測る。

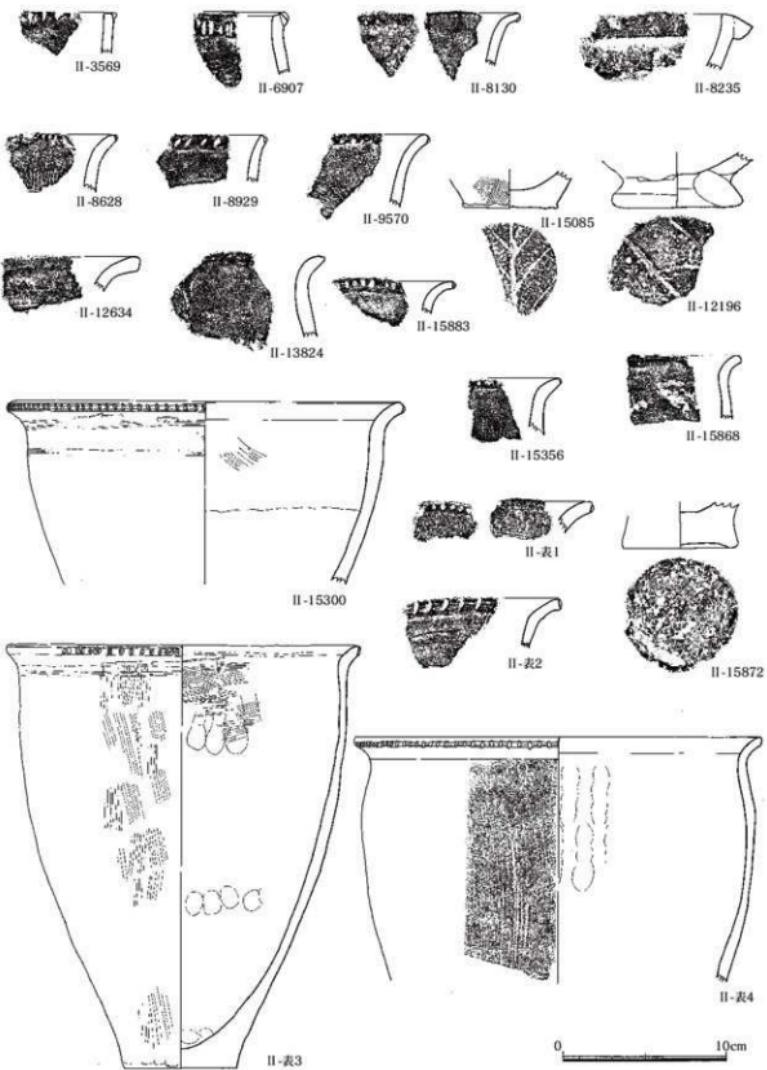
第54図II-12761、8点の破片が接合し、ほぼ完形になる。底部は安定した平底、胴部は外傾しながら立ち上がり、中位で変換し上部はほぼ垂直に立ち上がる。下部はわずかに内傾する。口縁部は緩やかに外反する。胴の膨らみはほとんどない。口縁部外面に粘土帶を貼り付けて肥厚させる。肥厚帯の幅は第53図のII-1031よりも狭くなり、明瞭である。下端には段が形成される。段は比較的高く、明瞭である。口唇部は平坦面を有するが、全体的に丸くおさめる。下端にヘラ状工具により刻目が密にしっかりと施文される。肥厚帯の下端にも同様にヘラ状工具により刻目が密に施文されるが、口縁部の刻目には比較して雑である。外面の調整は口縁から胴部突端の間は縦方向の刷毛目調整を施した後にヨコナデ調整を加えて刷毛目を消している。胴部は縦～斜方向の刷毛目調整、内面の口縁部には斜方向の刷毛目調整を加えた後に、さらにヨコナデ調整を施して刷毛目を部分的に消している。口縁下に指圧痕が並列して残っている。その上に横方向のヘラナデ調整を加えている。色調は外面が薄い橙色～黄灰色、内面が薄い橙色～灰黄色をなす。胴下半部から底部にかけては黒く変色している。焦げ付きの痕跡か。口径25.5cm、器高32.7cm、底部径9.8cmを測る。II-13525、21点の破片が接合し、ほぼ全形を知ることができる。底部は安定した平底であるが、焼成後の両面から打撃を加え穿孔している。孔は不整形であるが径1cm前後である。胴部は外傾しながら立ち上がり、口縁部に近い上部ではほぼ垂直に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。胴の膨らみはほとんどない。口唇部は平坦面を有するが、全体的に丸くおさめる。刻目は施文されていない。外面は口縁部直下に縦方向、その下は縦～斜方向の刷毛目調整、口縁部は刷毛目の上にヨコナデを加えて、刷毛目を消そうとしている。下半部においても横方向のヘラナデ調整を加えて部分的に刷毛目を消している。内面は内底部とその上の胴部、口縁部から胴部にかけてのところに指圧痕が並列して残っている。その上に横方向のヘラナデ調整を加えている。色調は外面が橙色、内面が暗橙色をなす。全体に器壁が厚く、重い土器である。口径21.5cm、器高26.0cm、底部径7.8cmを測る。II-13999、口縁部は緩やかに外反する。口唇部は平坦に仕上げる。全面に刷毛目原体による刻目を施文する。間隔は不規則である。口縁部外面はヨコナデ調整、その下は細かい縦方向の刷毛目調整である。内面は口縁部が横方向の刷毛目調整、上からヨコナデが加えられ、刷毛目を消している。胴部はヘラナデ調整である。口縁下には指頭痕が並列している。色調は内外面ともに黄土色をしている。II-13198、29点の破片が接合し、完形に復元できる。底部は大きく安定した平底である。胴部はほとんど外傾せず、やや丸みをもって立ち上がる。胴部の中位より上はほぼ垂直に立ち上がる。口縁は短く、緩やかに外反する。いわゆる如意形口縁である。胴の



第54図 環濠第2区出土甕形土器実測図VI

膨らみはほとんどない。口唇部は平坦面は有するが、全体的に丸くおさめている。刻目は口唇部のほぼ全面にヘラ状工具により施文されている。外面は縦、横、斜の不定方向のヘラナデ調整である。内面は横方向のヘラナデ調整である。色調は外面が灰黄色～黄白色、内面が橙色～黄白色をなす。口径24.6cm、器高24.5cm、底部径8.8cmを測る。II-11432、24点の破片が接合し、完形に復元できる。底部は安定した平底、胴部は外傾しながら立ち上がり、口縁部に近い上部ではほぼ垂直に立ち上がる。口縁は緩やかに外反する。胴の膨らみはほとんどない。口唇部はヘラナデにより平坦に作り出され、その下端にヘラ状工具により浅い刻目が施文される。外面は縦方向の刷毛目調整、口縁部は刷毛目の上にヨコナデ調整を加えて、刷毛目を消そうとしている。下半部においても横方向のヘラナデ調整を加えて部分的に刷毛目を消している。内面の口縁部は強いナデ調整を加え、横方向の条線が多数走る。胴部上半には指圧痕が並列して残っている。その上に横方向のヘラナデ調整を加えている。色調は外面が黄白色～灰黄色、内面が橙色をなす。口縁部より約15cm前後のところが黒く帯状に変色し、焦げ付きの跡と考えられる。口径23.7cm、器高29.0cm、底部径8.9cmを測る。II-14584は底部破片。底部復元径7.2cmを測る。外底部に木葉痕が明晰に残る。底部端がわずかに張り出す。壺の底部の可能性もある。外底部は褐色、他は黄赤色をなす。II-14159、如意形の口縁をもった壺形土器である。口縁部は緩やかに外反する。口唇部は丸くおさめ、下端に片寄って棒状工具で押されたような浅い刻目が施文されるあまり目立たない。全体に磨滅している。外面は縦方向の刷毛目調整、口縁部にはその上にヨコナデ調整が加えられる。内面は口縁部に横方向の刷毛目調整を加え、その上にヨコナデ調整を加えている。頭部とその下の胴部には指頭痕が並列している。色調は外面が黄土色～褐色、内面が黄白色をなす。

第55図 II-3560、口縁部は直行する。口唇部は平坦に仕上げる。外側の端部にヘラ状工具により刻目を施文、刻目は深く的確である。内外面は横方向のヘラナデ調整である。色調は内外面ともに黄土色である。II-6907、刻目突帯文土器である。突帯の貼り付け方はCである。突帯には棒状工具により刻目が施文されるかやや粗雑である。外面は横方向の貝殻条痕調整の上にヨコナデ調整を加えて、条痕を消している。内面は斜位の貝殻条痕調整を施し、その上にヘラナデ調整を施し、条痕を消している。色調は内外面ともに黄白色、外面には赤色顔料が付着している。II-8030、胴部は直線的に立ち上がり、口縁部の上部が彎曲する。口唇部は平坦に仕上げ、下端にヘラ状工具により小さな刻目が施文される。表面の保存状態が悪い。内外面ともにヨコナデ調整である。色調は内外面ともに黒褐色をなす。II-8235、口縁部に太い粘土紐を貼り付けている。粘土紐は断面三角形に整形され、口縁部を形成している。一部器面が剥落して調整の観察ができない部分があるが、内外面ともにヨコナデ調整である。内面には指頭痕が並列している。色調は外面が黄白色、内面が黄土色である。II-8628、口縁部は緩やかに外反する。口唇部は丸くおさめ、口唇部全面にヘラ状工具により刻目が施文される。口縁部の内外面はヨコナデ調整である。胴部外面は縦方向の刷毛目調整、胴部内面は横方向のヘラナデ調整である。色調は外面が黒褐色、内面が黄褐色をなす。II-8929、口縁部はほとんど外反しない。口唇部は平坦に仕上げている。口唇部下端にヘラ状工具により刻目が施文される。口縁部の内外面はヨコナデ調整である。色調は外面が黒褐色、内面が黄褐色をなす。II-9570、胴部は直線的に立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。口唇部は平坦に仕上げ、下端部にヘラ状工具により小さな刻目が施文される。外面は斜位の刷毛目調整、口縫下はヘラナデによって刷毛目が消される。部分的にスカ付着する。内面は口縁部がヨコナデ調整、胴部は斜位のヘラナデ調整である。色調は外面が黒褐色、内面が褐色をなす。II-12634、口縁部は大きく外反する。口唇部は肥厚気味に丸くおさめる。口唇部には刻目は施文されない。口縁部の外面は横方向の刷毛目調整を施した後、ヨコナデ調整を加えている。内面は横～斜方向の刷毛目調整、刷毛目の目はやや粗い。色調

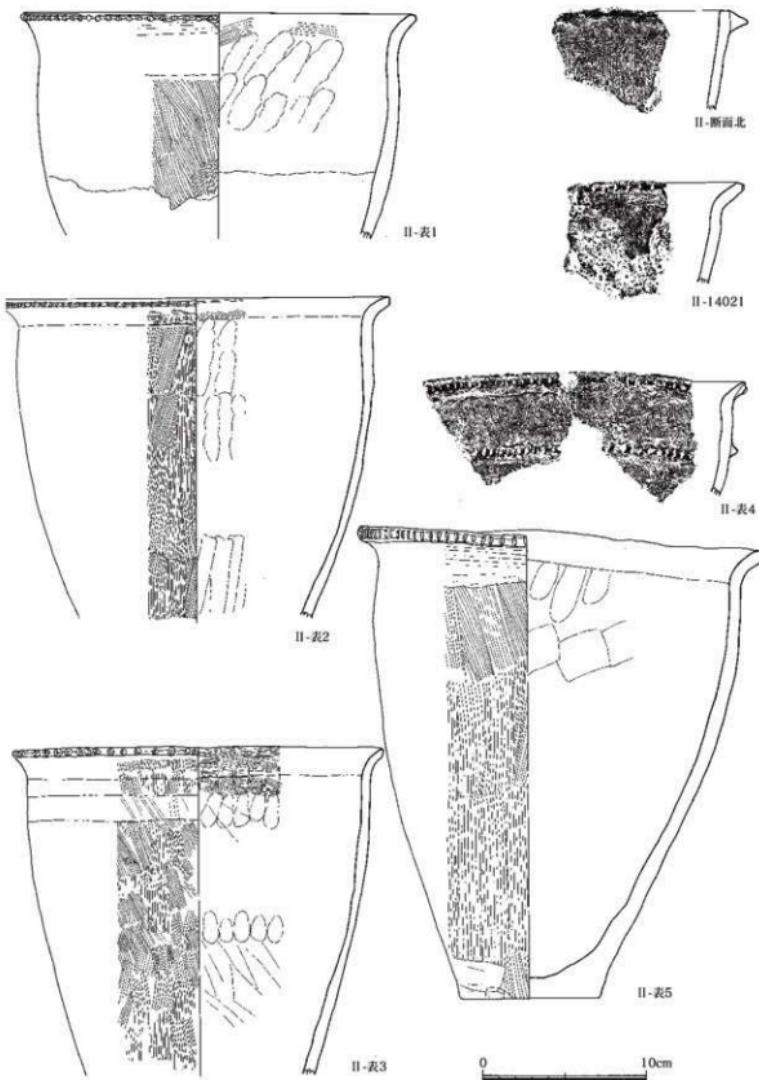


第55図 環濠第2区出土甕形土器実測図VII

は外面が黄赤色、内面が黒灰色をなす。II-13824、壺形土器の破片。ミスでここに掲載した。頸部は内傾しながら直線的に立ち上がる。口縁部は緩やかに外反する。口唇部は丸くおさめる。内外面は横方向のヘラナデ調整である。色調は外面が黄赤色、内面が黄土色をなす。II-15833、口縁部は緩やかに外反する。口唇部は丸くおさめ、ヘラ状工具により刻目が施文されるが、保存状態が悪い。調整は不明。色調は内外面ともに黄土色をなす。II-15085、壺形土器の底部と考えられる破片。底部端が外に張り出す。外面は斜方向の刷毛目調整。内面はヘラナデ調整である。外底部には木葉痕がついている。胎土は精製され良質である。底部復元径5.8cmである。II-12196、壺形土器の底部と考えられる破片。底部は高く、底部端は大きく外に張り出す。外面は斜方向の粗いヘラナデ調整。内面は外面に比較してやや丁寧なヘラナデ調整である。外底部には木葉痕がついている。胎土は精製され良質である。底部復元径8.0cmである。II-15300、作図復元によって上半部の器形を知ることができる。下半部と底部を失う。胴部上半はわずかに外傾しながら丸みを持って立ち上がり、口縁部は緩やかに外反し、如意形をなす。口唇部は丸くおさめられる。口唇部の下端にヘラ状工具によって刻目が施文される。刻みの間隔は一定していない。外面は縦方向の刷毛目調整を施した後に、口縁部にヨコナデ調整が加えられ、刷毛目が消されている。口縁部直下に刷毛目原体の始点（終点？）が残っている。ヨコナデの下端にはわずかに稜線ができる。下は横方向のヘラナデ調整である。胴部下半にススの付着が顕著である。内面は口縁部がヨコナデ調整である。胴部には斜方向の刷毛目調整を施すが、その上に横方向のヘラナデ調整を加えて刷毛目を消している。色調は外面が白黄色をなし、ススのため黒ずんでいる。内面が黄白色をなす。口径24.4cmを測る。II-15353、口縁部は緩やかに外反する。口唇部は丸くおさめる。全面にヘラによる刻目を施文するが詳細は不明。外面の口縁下に細沈線1条がめぐり、口縁と胴部の境にしている。細沈線より上部はヨコナデ調整、下には縦方向の刷毛目調整である。内面は口縁部がヨコナデ調整、胴部がヘラナデ調整である。口縁下に指圧痕が残る。色調は外面が黒色、内面が黄白色をなす。II-表1、口縁部は外反する。口唇部はまるく仕上げられ、下端部に棒状工具により的確に刻目が施文される。外面は斜方向の刷毛目調整を施し、その上にヨコナデ調整を加え刷毛目を消している。内面は横方向の刷毛目調整である。色調は外面が黄赤色～黄灰色、内面が黄赤色をなす。II-表2、口縁部は屈曲するように外反する。口唇部は平坦に仕上げられる。ヘラ状工具により的確に刻目が施文される。口縁下約1.5cmのところにヘラで削り取られた段があり、口縁部肥厚帯を作り出している。内外面はヨコナデ調整である。色調は内外面ともに黄白色をなす。2-15868、鉢形土器の破片と考えられる。ミスでここに掲載した。胴部は丸みを持ち、口縁部の下は内傾しながら立ち上がる。口縁部は屈曲して外反する。口唇部は丸くおさめる。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。色調は外面が黄褐色、内面が黒色をなす。II-15872は壺形土器の底部である。円筒状に高い。端部がわずかに外に張り出す。外底部はヘラ状工具によってケズリが加えられ、わずかに上底状をなす。側面はヘラナデ調整、胴部には斜方向の貝殻条痕調整を施している。底部径7.2cmである。II-表2、ほぼ完形に復元できる。第2区出土品であるが、出土層位等が不明になったものである。底部は安定した平底、胴部は外傾しながら立ち上がり、胴部の中位より上部ではほぼ垂直に立ち上がる。口縁は緩やかに外反し、如意形をなす。胴の膨らみはほとんどない。口唇部は丸くおさめられ、その全面に刷毛目原体により刻目が施文される。刻目の間隔は一定していない。外面は縦～斜方向の刷毛目調整、口縁部は刷毛目の上にヨコナデ調整を加えて、刷毛目を消そうとしている。下半部においても縦方向のヘラナデ調整を加えて部分的に刷毛目を消している。胴部中位は二次的な被熱によって器面部分的に剥離している。底部の側面は指圧痕がみられる。内面の口縁部はヨコナデ調整を加えている。胴部上半と中位よりやや下部に指圧痕が並列して残っている。その上に上半部では横～斜方向方向の刷毛目調整を加えている。下半

部は縦方向のヘラナデ調整である。な底部も器面が剥離している。色調は外面が黄赤色～灰褐色、内面が橙色をなす。外面には黒斑か2か所にみられる。口径21.6cm、器高25.9cm、底部径6.9cmを測る。II-表3、作図復元によって上半部の器形を知ることができる。下半部と底部を失う。胴部上半はわずかに外傾しながら丸みを持って立ち上がり、口縁部近くは内傾して立ち上がる。口縁部は緩やかにカーブを描いて外反する。いわゆる如意形をなす。口唇部は平坦面を作り出している。口唇部の下端にヘラ状工具によって刻目が施文される。刻みの間隔は一定していない。口縁部の内外面はヨコナデ調整である。外面は縦方向の目の粗い刷毛目調整を施している。内面は口縁部にヨコナデ調整を加えている。口縁直下には指圧痕が二段に並列して残っている。胴部内面は横方向のヘラナデ調整である。色調は外面が黄褐色～黒灰色をなし、一部に黒斑がみられる。内面が明黄褐色をなす。口径25.2cmを測る。

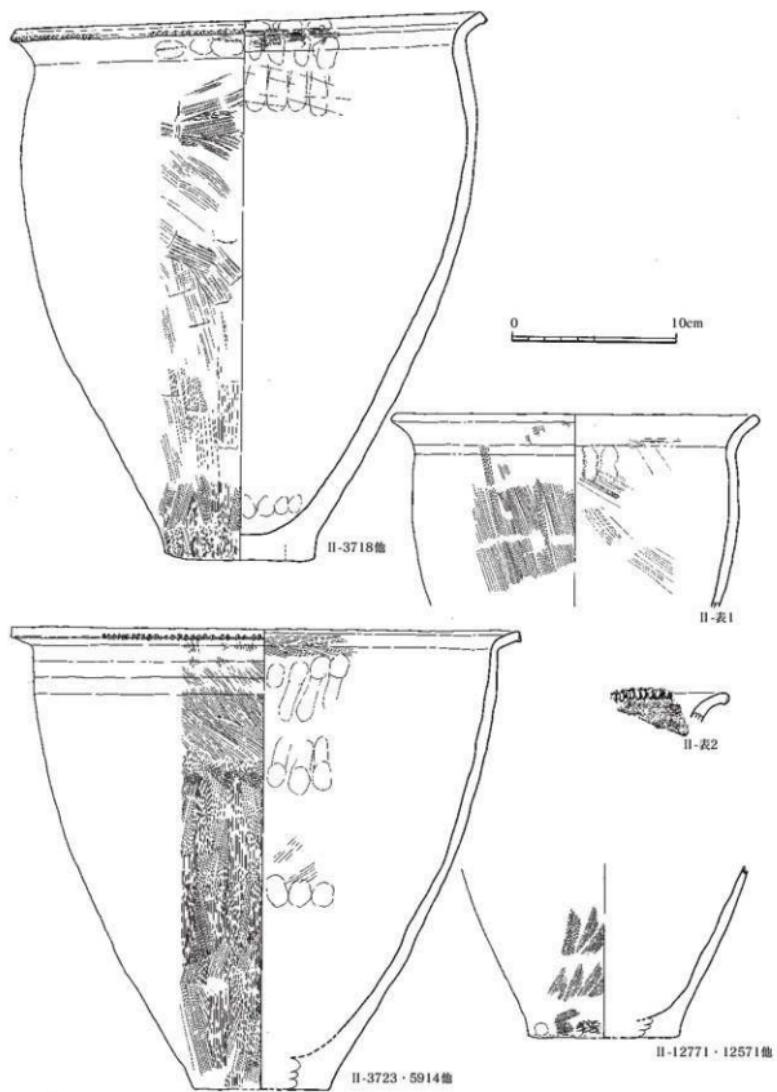
第56図II-表1、復元によって上半部の器形を知ることができる。胴部下半と底部を失う。胴部上半はわずかに外傾しながら丸みを持って立ち上がり、口縁部は緩やかにカーブを描いてわずかに外反する。胴部はあまり膨らまない。口唇部は平坦面を作り出している。口唇部の下端にヘラ状工具によって刻目が施文される。刻みの間隔は一定していない。刻目の上部には浅く細い沈線がめぐらされ、刻みの施された部分は一見突帯状に見える。外面は縦～斜方向の目の粗い刷毛目調整を施している。口縁部からその下位にかけては丁寧なヨコナデ調整が加えられ、刷毛目を消している。口縁部から胴部にかけてはススの付着が顯著で黒ずんでいる。胴部下半は二次的に火を受け表面が剥離し、赤黄色に変色している。内面は口縁部に横～斜方向の刷毛目調整が施され、その上にヨコナデ調整を加えて刷毛目を消している。口縁直下には指圧痕が二段に並列して残っていて、凹凸が著しい。胴部内面は横方向のヘラナデ調整である。胴部下半は焦げ付きのためか黒く変色している。色調は外面が黒褐色、内面が黄褐色をなし、下半部は黒褐色をなす。口径24.4cmを測る。II-表2、復元によって胴部下半から口縁部までの上器形を知ることができる。底部と胴部下半の一部を失う。胴部はわずかに外傾しながら立ち上がり、口縁部は屈曲するように外反して短く伸びる。胴部の膨らみはほとんどない。いわゆる如意形をなす。口唇部は平坦面を作り出している。口唇部の下端にヘラ状工具によって小ぶりの刻目が施文される。刻みの間隔は一定していない。外面は縦～斜方向の刷毛目調整を施している。口縁部にはヨコナデ調整が施され刷毛目を消している。口縁直下に刷毛目の終点（始点？）が残っている。内面は口縁部に横方向の刷毛目調整が施され、その上にヨコナデ調整を加えて刷毛目を一部消している。口縁直下と胴部中位には指圧痕が並列して残っている。胴部内面は横方向のヘラナデ調整である。外面は被熱のため器面の剥離がみられ、ススの付着が著しい。色調は外面が黄褐色～黒褐色をなし、内面が赤褐色をなす。口径21.0cmを測る。II-表3、作図復元によって胴部下半から口縁部までの器形を知ることができる。底部と胴部下半の一部を失う。胴部はわずかに外傾しながら立ち上がり、胴部中位からはほぼ垂直に立ち上がる。口縁部は緩やかにカーブを描いて外反する。いわゆる如意形をなす。口唇部は平坦面を作り出している。口唇部の全面にヘラ状工具によって刻目が施文される。刻みの間隔は一定していない。外面は縦～斜方向の刷毛目調整を施し、口縁部はヨコナデ調整を加えて部分的に刷毛目を消している。内面は口縁下に指圧痕が二段に並列して残り、さらに胴部中位にも指頭痕が並列して残っている。その後、口縁部には横～斜方向の刷毛目調整を施し、胴部内面は縦～斜方向のヘラナデ調整を加えている。色調は内外面ともに褐色～淡褐色をなす。口径22.8cmを測る。II-断面北、口縁部は断面三角形のやや大きい突帯を貼り付けて形成される。口縁部の内外面はヨコナデ調整である。胴部外面には縦方向の刷毛目調整を施している。内面はヘラナデ調整である。色調は内外面ともに黄土色をなす。II-14021、全体に磨滅している。胴部はわずかに外傾しながら立ち上がり、口縁部はくの字に屈曲して直線的にのびる。口唇部は丸くおさめ、下端にヘラ状工具による刻目を施文する。刻目



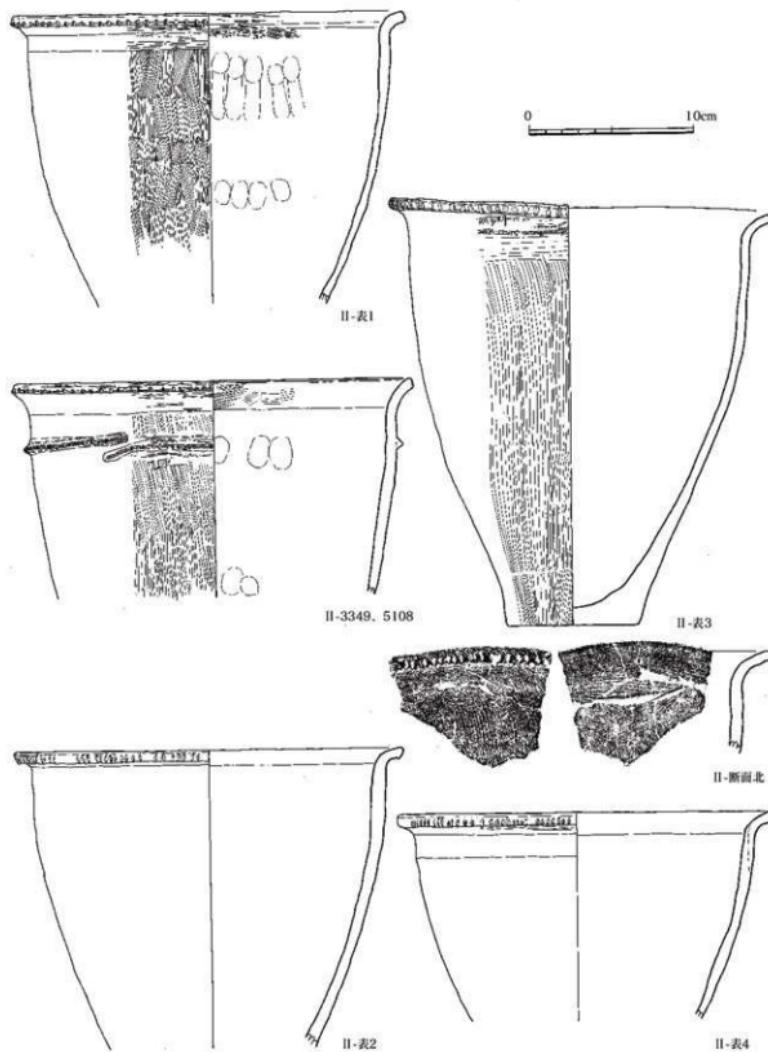
第56図 環濠第2区出土甕形土器実測図Ⅷ

の間隔は一定していない。外面の調整は器面が磨滅しているので詳細は不明。色調は外面が黄褐色、内面が黄白色をなす。II-表4、脣部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部はくの字に屈曲して、短く直線的にのびる。口唇部は平坦に仕上げられる。下端にヘラ状工具により細い刻目が施文される。刻目の間隔は一定していない。口縁下の脣部上位にも断面三角形の突帯1条がめぐらされる。突帯にもヘラ状工具により刻目が施文される。刻目は口縁部の刻目に比較すると深く、より的確である。外面の刷毛目調整は突帯を貼り付けた後につけられたものである。刷毛目は縦方向で丁寧に施されているが、刷毛目によって生じた薄い粘土が口縁直下にたまっている。突帯の下方の刷毛目も縦方向に施されるが、刷毛目の終点は突帯の裾を切っている。内面は口縁部に横～斜方向の刷毛目を施した後に、ヨコナデ調整を加えて刷毛目を消している。口縁下には指頭痕が二段に並列して残っている。その上に横方向のヘラナデ調整を施している。色調は外面とともに黄土色をなす。II-表5、ほぼ完形に復元できる。第2区出土品であるが、出土層位等が不明になったものである。底部は安定した平底、脣部下半は外傾しながら直線的に立ち上がり、脣部の上位、三分の一ぐらいのところからほぼ垂直に立ち上がる。口縁は緩やかに外反し、如意形をなす。脣の膨らみはほとんどない。口唇部は丸くおさめられ、その全面にヘラ状工具により刻目が施文される。刻目は浅いが密にしっかりとつけられている。外面は縦～斜方向の刷毛目調整、口縁部は刷毛目の上に強いヨコナデ調整を加えていて、刷毛目は完全に消えている。脣部も刷毛目調整の上に横方向のヘラナデ調整を加えているが、刷毛目調整の痕跡は消えずに残っている。脣部中位は二次的な被熱によって器面が部分的に剥離している。内面の口縁部はヨコナデ調整を加えている。口縁部下に指圧痕が並列して残っている。その上に横方向のヘラナデ調整を加えてなめらかに仕上げている。色調は外面が橙色、内面が明るい橙色をなす。外面の上半部に黒斑がみられる。また、脣部上半はススが付着してくすんでいる。口径24.5cm、器高28.9cm、底部径8.4cmを測る。

第57図II-3718他、多くの破片が接合し完形に復元できたものである。やや大型の甌形土器である。底部は安定した平底、脣部は外傾しながら立ち上がり、脣部の上位で反転してわずかに内傾しながら立ち上がる。口縁は緩やかに外反し、如意形をなす。脣の膨らみは上位にみられる。口唇部は平坦に仕上げられ、その下端にヘラ状工具により刻目が施文される。刻目は密に的確に入れられる。口縁部外面に指頭痕が並列し、内面に指圧痕が4本単位で並列しているのが観察できるが、これは口縁部を外反させるときの手の動きが反映していると考えることができる。外面は縦～斜方向の刷毛目調整、上部が斜方向、下部が縦方向となっている。口縁部は刷毛目の上にヨコナデ調整を加えて、刷毛目を消している。下半部においては縦方向のヘラナデが加えられている。底部の側面は指圧痕がみられる。外面の上半部にはススが付着している。内面の口縁部はヨコナデ調整を加えている。脣部上半の指圧痕については前述したとおりであるが、内底部にも指頭痕が残り、凹凸がある。色調は内外面ともに淡褐色をなす。口径28.7cm、器高33.0cm、底部径9.2cmを測る。II-3723・5914他、接合によってかなり復元でき、作図復元によってほぼ全形を知ることができる。底部は安定した平底、脣部は外傾しながらわずかに丸みをもって口縁部は屈曲して大きく外反する。脣の膨らみはほとんどない。口唇部は平坦に仕上げられ、その下端に刷毛目原体により刻目が施文される。刻目は密にしっかりとつけられている。外面は縦～斜方向の刷毛目調整、口縁部は刷毛目の上にヨコナデ調整を加えているために、刷毛目はほとんど消えている。内面の口縁部は横～斜方向の刷毛目調整を施した後にヨコナデ調整を加えている。脣部上半と中位よりやや下部に三段にわたって指圧痕が並列して残っている。その上にヘラナデ調整が加えられる。色調は内外面ともに淡褐色をなす。口径31.0cm、器高28.1cm、底部径8.4cmを測る。II-表1、作図復元によって上半部の器形を知ることができる。下半部と底部を失う。脣部上半はわずかに丸みを持って立ち上がる。口縁部は緩やかにカーブを



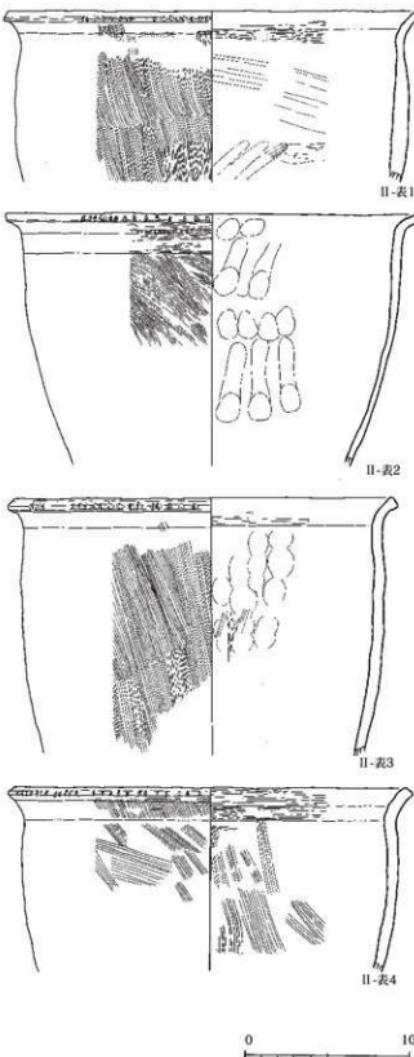
第57図 環濠第2区出土寰形土器実測図IX



第58図 環濠第2区出土甕形土器実測図 X

描いて外反する。口唇部は丸くおさめる。外面は縦～斜方向の刷毛目調整を施している。口縁部はその上からヨコナデ調整を加え、刷毛目はほとんど消えている。内面は横～斜方向の刷毛目調整後、ヨコナデ調整を施し刷毛目を消している。口縁部下に指圧痕が並列して残り、胴部中位にも部分的に指圧痕が残っている。その上に斜方向のヘラナデ調整を加えている。色調は外面が鈍い赤褐色、内面が赤褐色である。復元口径22.5cmを測る。II-表2、如意形口縁をなす。口縁部は外反し、口唇部は丸くおさめる。口唇部全面にヘラによる刻目を密に的確に施している。外面はヨコナデ調整、内面は横方向の刷毛目調整後、ヨコナデ調整を施している。色調は内外面ともに黄褐色をなす。II-12771・12571他、壺形土器の底部である。全体に磨滅している。底部の下端には指頭痕が並列して残っている。外面には縦方向の刷毛目調整痕が部分的に残っている。内面は器面の剥離が顕著で調整痕は明らかでない。色調は外面が黄土色、内面が黄赤色をなす。

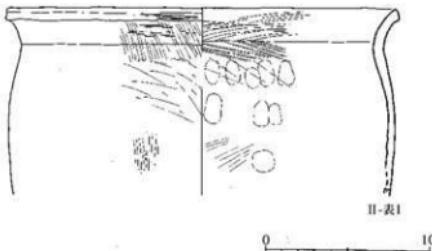
第58図II-表1、復元によって上半部の器形を知ることができる。胴部下半の一部と底部を失う。胴部はわずかに丸みを持って外傾しながら立ち上がる。口縁部は上部が彎曲して、短く外反する。口唇部は平坦に仕上げ、下端にヘラ状工具によって小ぶりの刻目を的確に施す。外面は縦～斜方向の刷毛目調整を施している。口縁部はその上からヨコナデ調整を加え、刷毛目はほとんど消えている。内面の口縁部は横～斜方向の刷毛目調整後、ヨコナデ調整を施し刷毛目を消しているが、口縁部下には刷毛目が部分的に残っている。口縁部下には指圧痕が並列して残り、胴部中位にも部分的に指圧痕が残っている。それらの上には斜方向のヘラナデ調整が加えられている。色調は外面が鈍い赤褐色、内面が赤褐色である。復元口径22.5cmを測る。II-3349・5108他、作図復元によって上半部の器形を知ることができる。胴部下半から底部を失う。胴部はわずかに外傾しながら立ち上がる。口縁部は緩やかにカーブを描いて外反する。口唇部は平坦に作り出される。口唇部の下端にはヘラ状工具により、刻目が施される。刻目の間隔は一定していない。口縁下約3cmの所に貼り付け突帯1条があげぐる。突帯は連結されず部分的に2条になる。突帯は断面三角形で頂部にヘラ状工具により刻目が施されるが、口唇部の刻目に比較し密で深い。外面は縦方向の刷毛目調整を施している。口縁部と突帯の両側には、さらにヨコナデ調整を加え刷毛目を消している。内面の口縁部は横方向の刷毛目調整後、ヨコナデ調整を施し刷毛目を消している。口縁部下に指圧痕が並列して残り、胴部中位にも部分的に指圧痕が残っている。その上に斜方向のヘラナデ調整を加えている。色調は内外面ともに暗褐色である。復元口径24.5cmを測る。II-表2、作図復元によって上半部の器形を知ることができる。胴部下半から底部の形態が不明である。胴部は外傾しながら直線的に立ち上がり、口縁部近くはほぼ垂直に立ち上がる。口縁部は上部で屈曲し短く外反する。口唇部は平坦面を作り出す。口唇部全面にヘラ状工具によって刻目が施される。刻目の間隔は一定せず、密な部分と間隔が開いた部分がある。外面は縦～斜方向の刷毛目調整を施しヨコナデが加えられ、刷毛目を消している。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を加え、刷毛目を消している。内面は横～斜方向の刷毛目調整後、ヨコナデ調整を施し刷毛目を消している。胴部中位にも部分的に指圧痕が残っている。その上に斜方向のヘラナデ調整を加えている。色調は外面が淡茶褐色～淡橙色、鈍い赤褐色をなす。復元口径23.2cmを測る。II-表3、多くの破片が接合し完形に復元できたものである。底部は安定した平底、胴部は外傾しながら直線的に立ち上がり、胴部の上位で外傾の角度が緩くなり、垂直に近い立ち上がりを見せる。口縁は緩やかに外反し、如意形をなす。胴の膨らみはほとんどない。口唇部は平坦に仕上げられ、その全面にヘラ状工具により刻目が施される。刻目は浅く密に入れられる。外面は縦方向の刷毛目調整、口縁部は刷毛目の上にヨコナデ調整を加えて、刷毛目を消しているが、口縁直下に刷毛目の終点が横に連続して残っている。外面の上半部にはスカが付着している。内面の口縁部はヨコナデ調整を加えている。胴部は横方向の



第59図 環濠第2区出土壺形土器実測図XI

ヘラナデ調整である。色調は内外面とも橙色。外面に黒斑がある。内面の脣下部は黒ずんでいる。コケの跡か。口径28.7cm、器高33.0cm、底部径9.2cmを測る。II-1断面北、壺形土器の破片。胴部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。口唇部は丸くおさめる。下端部にヘラ状工具で刻目を密に施している。外面は縦方向の刷毛目調整を施している。口縁部はさらにその上にヨコナデ調整を加え、刷毛目はほとんど消えている。内面の口縁部は横方向の刷毛目調整後、ヨコナデ調整を施し刷毛目を消している。胴部には縦方向のヘラナデ調整を加えている。色調は外面が鈍い赤褐色、内面が赤褐色である。II-2表4、作図復元によって上半部の器形を知ることができる。胴部下半と底部の形態は不明。胴部上半は外傾しながらわずかに丸みを持って立ち上がる。口縁部は屈曲して短く外反する。口唇部は平坦面を作り出している。口唇部の下端に片寄ってヘラ状工具によって刻目が施されられる。刻目の間隔は一定せず、密な部分と疎な部分がある。また、刻目が口唇部全面に及ぶところもある。外面は不定方向のナデ調整である。口縁部の内外面にはヨコナデ調整が施される。内面は不定方向のナデ調整を施している。色調は外面が赤褐色～暗茶褐色、内面が赤橙色～橙色である。復元口径24.0cmを測る。

第59図 II-1表1、作図復元によって上半部の器形を知ることができる。胴部下半と底部の形態は不明。胴部上半はほとんど垂直に立ち上がる。口縁部は緩やかに外反する。口唇部は平坦面を作り出している。口唇部の下端にヘラ状工具によって刻目が施される。刻目の間隔は一定せず、密な部分と疎な部分がある。外面は縦～斜方向の刷毛目調整、口縁部は刷毛目の上にヨコナデ調整を加えて刷毛目を消しているが、部分的に残っている。内面の口縁部は横方向の刷毛目調整を施し、



第60図 環濠第2区出土壺形土器実測図

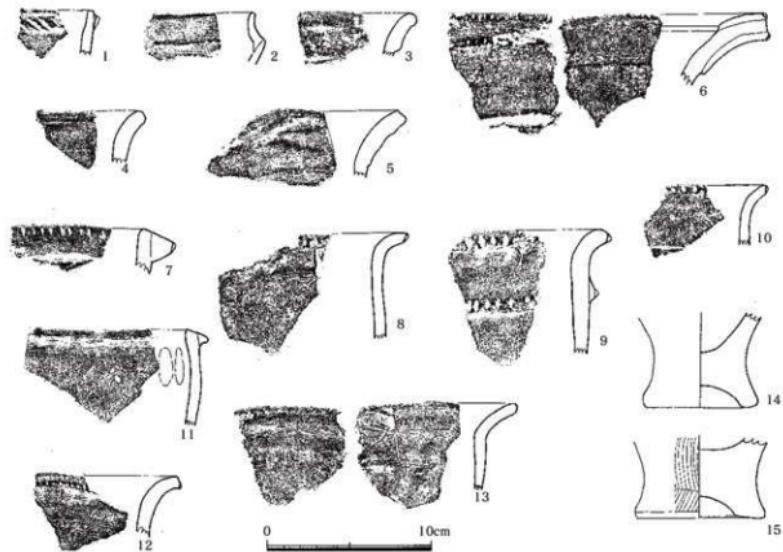
によって刻目が施文される。刻目の間隔は一定せず、粗密がある。外面は縦～斜方向の刷毛目調整で、口縁部にはさらにヨコナデ調整が加えられ、刷毛目調整を消しているが、口縁直下には刷毛目の終点が線的に並んで残る。内面は指圧痕が二段に残っている。外面にはススカ付着し、内面には焦げ付きがみられる。色調は外側ともに淡褐色をなす。外面に黒斑か認められる。復元口径25.2cmを測る。II-表3、作図復元によって上半部の器形を知ることができる。胸部下半と底部の形態は不明。胸部はわずかに丸みを持って、ほぼ垂直に立ち上がる。口縁部は緩やかにカーブして外反する。口唇部は平坦面を作り出している。口唇部の下端に片寄ってヘラ状工具によって刻目が施文される。刻目の間隔は一定せず、粗密がある。外面は縦～斜方向の刷毛目調整、口縁部にはさらにヨコナデ調整が加えられ、刷毛目を消している。内面の口縁部には横方向の刷毛目調整を施し、その上にさらにヨコナデ調整が加えられ、刷毛目を消している。胸部には二段にわたって指圧痕があり、その上に縦方向のヘラナデ調整を施している。色調は外側が赤褐色～茶褐色、内面が赤橙色～橙色である。復元口径22.0cmを測る。II-表4、作図復元によって上半部の器形を知ることができる。胸部下半と底部の形態は不明。胸部上半はわずかに丸みを持って垂直に立ち上がる。口縁部は緩やかにカーブを描いて外反する。口唇部は平坦面を作り出している。口唇部の下端にヘラ状工具によって刻目が施文される。刻目は小さく、間隔は一定せず、粗密がある。外面は縦～斜方向の刷毛目調整。刷毛目の目は細かい。胸部下半は刷毛目調整の上に横方向のヘラナデ調整を施し、刷毛目を消している。内面は口縁部がヨコナデ調整。胸部が縦～横方向の刷毛目調整であるが、不明瞭である。色調は外側が暗茶褐色、内面が明橙色をなす。復元口径23.6cmを測る。

第60図 II-表1、復元によって上半部の器形を知ることができる。胸部下半と底部の形態は不明。胸部上半は内傾しながらわずかに丸みを持って立ち上がる。口縁部は緩やかにカーブを描いて外反する。口唇部は平坦面を作り出している。口唇部には刻目は施文されない。外面は縦～斜方向の刷毛目調整、胸部上半はその上に横～斜位方向のヘラナデ調整を加えている。内面は口縁部がヨコナデ調整、胸部には三段にわたって指圧痕が残っている。その上に不定方向のナデ調整を施している。色調は外側が淡橙色をなすが、外面にはススカ付着している。復元口径23.8cmを測る。

(11) 明治大学第10区トレンチ出土土器

前述したように環濠第1区と環濠第2区の間には明治大学第10区トレンチが存在する。整理の都合を考

上にヨコナデを加え、刷毛目を消している。胸部は横～斜方向の刷毛目調整を施し、その上に横方向のヘラナデを加えている。胸部下半は斜方向のヘラナデである。色調は外側が灰色を帯びた橙色、内面が橙色である。復元口径25.0cmを測る。II-表2、作図復元によって上半部の器形を知ることができる。胸部下半と底部の形態は不明。胸部上半は外傾しながらわずかに丸みを持つて立ち上がり、口縁部に近い胸部はほとんど垂直に立ち上がる。口縁部は屈曲して短く外反する。口唇部は平坦面を作り出している。口唇部の下端に片寄って刷毛目原体



第61図 明治大学第10区トレンチ出土土器実測図

え、明治大学第10区トレンチの土層断面図を作成するために清掃を行った。その時出土した土器を第61図に示した。

第61図1は刻目突帯文土器である。突帯はA、棒状の工具でふかくきざむ。口唇部はとがり気味に丸くおさめる。外面は横方向の貝殻条痕の上に横方向のヘラナデ調整を施す。内面は横方向のヘラナデ調整である。色調は外面が黄土色、内面が黄白色をなす。2は浅鉢形土器。胴部上半で屈曲するか粘土接合部で剥離している。接合は内傾接合である。口縁部はそりかえる。口唇部は丸くおさめる。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。口縁部の内外面に赤色顔料が付着している。色調は内外面ともに黄土色をなす。3は中型壺の口縁部破片。外面に粘土帶を貼り付けて肥厚させる。下端に段が形成される。段は明瞭である。口唇部は平坦に形成される。色調は内外面ともに黄土色をなす。4は大型壺の口縁部小破片。口唇部は丸くおさめるが、中央部に粘土接合部が凹線状に残る。口縁部下に細沈線1条をめぐらす。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整。外面に赤色顔料が付着する。色調は外面が黄白色～黒色、内面が黒色をなす。5は大型壺の口縁部破片。外面に粘土帶を貼り付けて肥厚させる。下端の段は不明瞭である。口唇部は平面を形成するが、中央部に粘土接合部が凹線状に残っている。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整であるが、外面は粗雑で凹凸が著しい。色調は外面が褐色、内面が黄褐色をなす。6は大型壺の口縁部破片。内外面に粘土帶を貼り付けて肥厚させる。外面の段は低いが明瞭である。内面の肥厚帯は外面に比較して幅は狭いか段が高い。口唇部は平坦に形成され、ヨコナデを施す。両端部にヘラ状工具により小さな刻目が施文される。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整を施す。色調は内外面ともに黄赤色をなす。7は口縁部に大きな突帯を貼り付ける。突帯は断面三角形で頂部にヘラ状工具により小さな刻目を施文する。内外面ともにヨコナデ調整である。色調は内外面ともに黄白色をなす。8は甕形土器の口縁部破片。胴部はわずかに内傾しながら立ち上がり、口縁部は大きく外反する。口唇部は丸くおさめ、下端にヘラ状工具

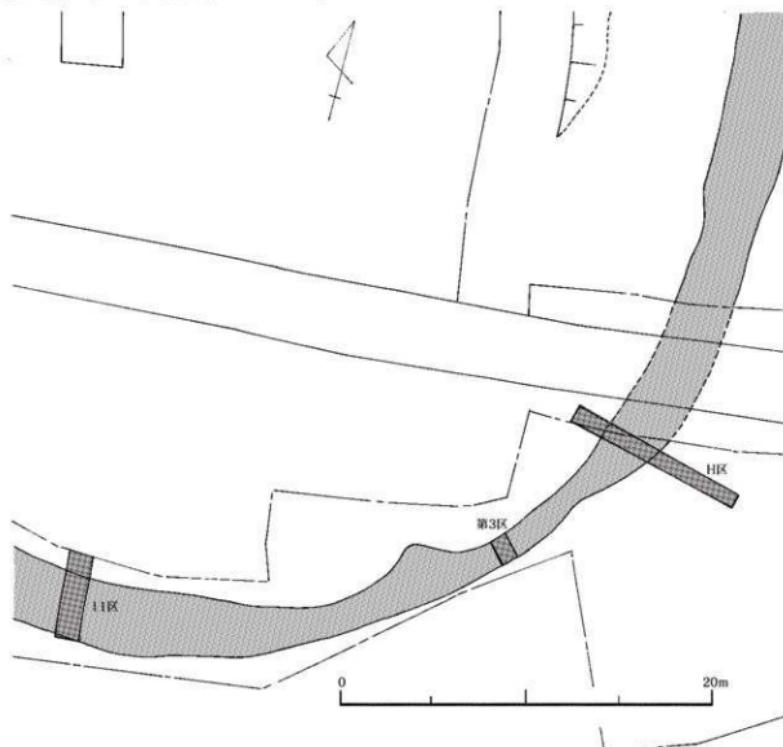
により小さな刻目を施文する。外面は縦～斜方向の刷毛目調整、口縁部にはヨコナデ調整が加えられ刷毛目を消している。内面は口縁部がヨコナデ調整、脣部は指圧痕が二段に残り、上に横方向のヘラナデ調整が加えられる。色調は外面が灰褐色、内面が黄土色をなす。9は甕形土器の口縁部破片。脣部は垂直に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。口唇部は丸くおさめ、全面にヘラ状工具により深くの確な刻目が施文される。口縁部下には断面三角形の突帯1条が貼り付けられ、頂部にヘラ状工具により刻目が施文される。刻目は間隔に粗密があり、口縁部の刻みほど深くない。外面には縦方向の刷毛目調整が施され、貼り付け突帯以下は縦方向のヘラナデ調整が加えられる。内面は器面が荒れていて調整は明らかにできない。色調は外面が黒ずんだ黄灰色、内面が黄白色をなす。10は甕形土器の口縁部破片。口縁部は緩やかにカーブを描いて外反する。口唇部は丸くおさめ、下端にヘラ状工具により小さな刻目を施文する。刻目の間隔は一定である。口縁部下には沈線1条がめぐらされる。外面には縦方向の刷毛目調整が施され、その上にヨコナデ調整が加えられる。色調は外面が黄土色、内面が黄白色～黒色をなす。11は甕形土器の口縁部破片。脣部は内傾しながら立ち上がり口縁に粘土を貼り付け張り出させ、口縁は平坦である。外面には縦～斜方向の刷毛目調整を施す口縁部の内外面にはヨコナデ調整を加える。内面には指圧痕が並列し、上に横方向のヘラナデ調整が加えられる。色調は外面が黄白灰色～褐色、内面が白灰色である。12は甕形土器の口縁部破片。口縁部は緩やかにカーブを描いて外反する。口唇部は平坦に作り出され、ヨコナデ調整が加えられる。下端部にヘラ状工具により小さな刻目を施文する。刻目は密であるか間隔は一定していない。外面には横、斜方向の刷毛目調整を施し、口縁部はその上にヨコナデ調整を加え、刷毛目を消している。ヨコナデの下は横方向のヘラ研磨調整を加え、刷毛目を消している。内面は口縁部が横～斜方向の刷毛目調整、上にヨコナデ調整を加え、刷毛目調整を消そうとしている。口縁部下には指圧痕がみられる。色調は外面が黄白色、内面は黒灰色をなす。13は鉢形土器の口縁部破片。脣部は丸みをもって立ち上がる。口縁部は緩やかにカーブを描いて外反しながら伸びる。口唇部は丸くおさめる。外面は縦方向の刷毛目調整を施した後に、横方向のヘラ研磨調整を加えている。内面は横方向の刷毛目調整を施した後に横方向のヘラ研磨調整を加えているが、やや粗雑である。色調は外面が黄土色、内面が黄白色～黄土色をなす。一部に黒斑がみられる。14、15は甕形土器の底部である。いずれも上げ底になり、脚台状をなす。14は外面は縦方向のヘラナデ調整である。色調は外面が灰褐色、内面が灰褐色をなす。15は外面は縦方向の粗い刷毛目調整、内面はナデ調整である。色調は外面が黄土色、内面が黒灰色をなす。

第5章 環濠第3区の調査

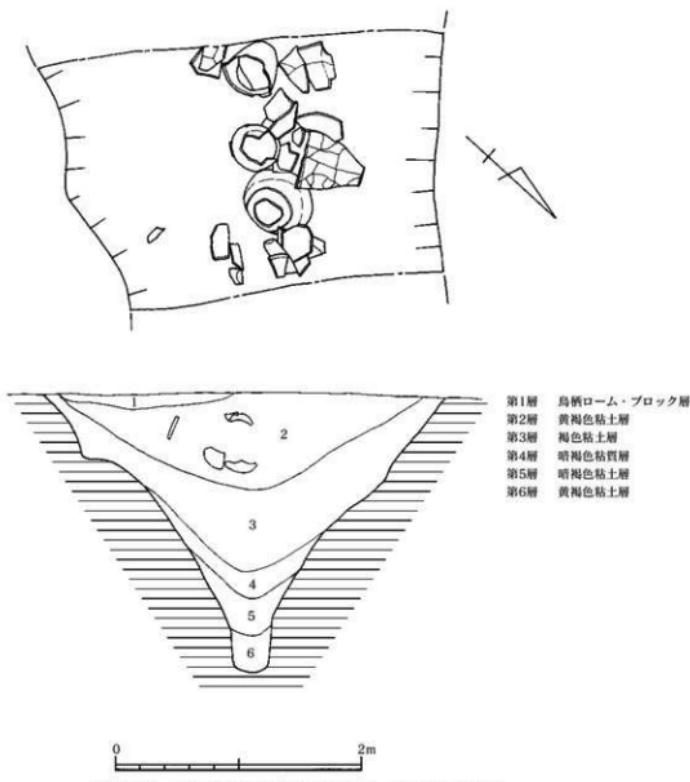
1. 遺構

(1) 環濠

第3区の設定は、環濠の全体の状況を知るために、最も状況がわかつてない環濠の南端部にトレーナーを設定する必要があったこと。また、環濠は検出面において幅に大きな違いがある。場所、場所により削平の度合いが異なるため、幅の違いがあるのは当たり前のであるが、それを加味しても環濠南端部の約20mの範囲は極端に幅が狭くなることは注目されるところである。この地域は他と比較して極端に標高が低いわけではない。この20mの範囲の中でも中央部の一ヶ所が突き出したように濠幅が広がり、その両側が狭くなる平面形が確認できる。この突出部が他の遺構との重複によって生じたものか、否かの検討を現場で行ったが、結果的に重複は確認できず、濠本来の平面形と考えた。この部分が環濠の中でどのような意味をもつのか、その解明のために調査の必要があったことから、突出部の東側に存在する最も幅が狭い部分にトレーナーを設定することにした。



第62図 環濠第3区の位置



第63図 環濠第3区遺物出土状況と土層断面実測図

(2) 東壁の土層

今回発掘した環濠の中では最も幅が狭く、深い。幅は1.8mで環濠の中では最も狭い部分である。断面はY字形をなす。濠底が頗る一段深く掘られる特徴がある。深さは1.15mを測り、他の地区よりもかなり浅くなっている。台地中央部よりも一段下かつた所に位置しているが、かなりの削平が考えられる。土層堆積は以下のようになっている。

土層はいずれもレンズ状の堆積をしている。第1層は西側に片寄って堆積した土層である。土層の幅は約70cm、厚さ5cm、黄色の鳥栖ロームのブロック層である。第2層は濠の中央部に最も厚く堆積した土層である。厚さは中央部で40cmを測る。鳥栖ロームの塊を混入した黄褐色粘土層である。この層の下面には平面図に示したように多量の遺物が集中して出土している。第3層は鳥栖ロームの粒子と炭を含んだ褐色粘土層である。中央部で厚さ34cmを測る。第4層は鳥栖ロームの粒子を含んだ暗褐色粘質土層である。西壁に沿って堆積していて、西側から主に流入した土層と考えられる。厚さ10cm前後。第5・6層は一段深く掘り込まれた狭い部分に堆積した土層である。第5層は暗褐色粘土層で厚さは15cm前後である。

第6層は鳥栖ロームの粒子を若干含んだ黄褐色粘土層である。厚さは15cm前後である。環濠の掘削は鳥栖ローム層の中で終わり、八女粘土層まで達していない。

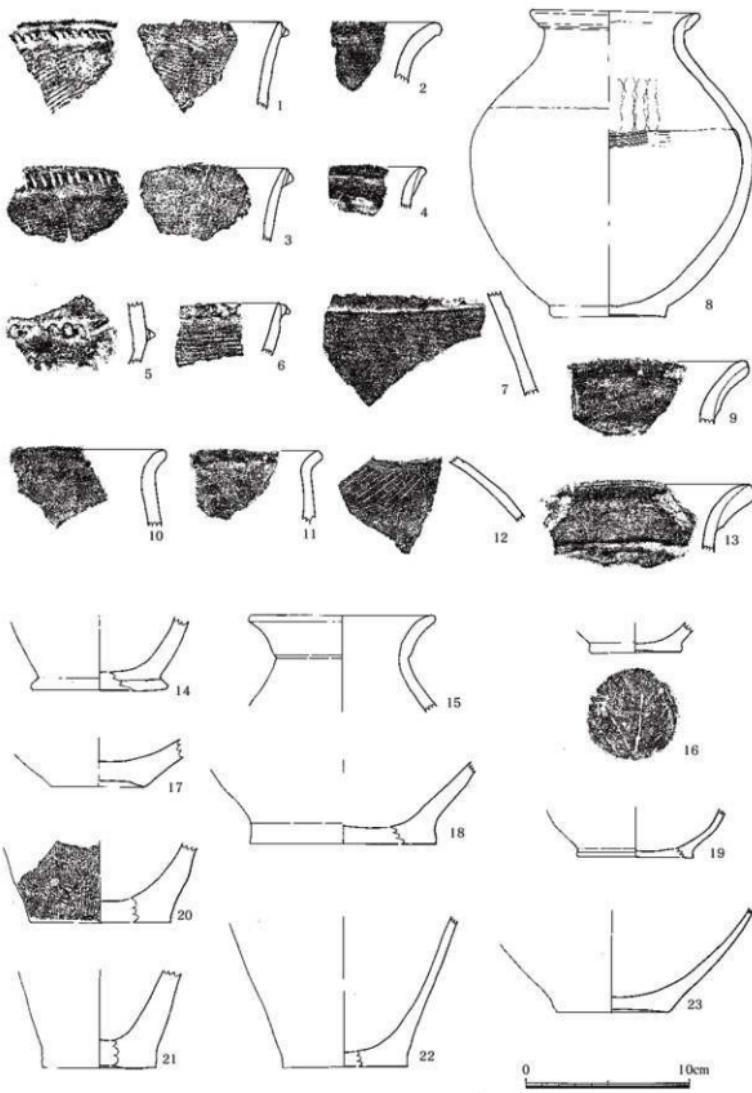
2. 出土遺物

(1) 遺物出土状況

遺物出土状況は第63図に示した。前述したように第2層の下面に集中して多量の土器が出土している。出土した土器は図に見るようにほとんど完形に近く、破片も大きく復元できるものがほとんどである。中には甕形土器の中に完形に近い小型の壺が入れ子になっている。出土した土器は甕形土器と壺形土器に限られているが、量的にはどちらかといえば甕形土器の方が多い。日常生活の構成に近い構成を示していると考えている。このような出土状況は何を意味しているのであろうか。環濠の第1区や第2区でも甕形土器や壺形土器が完形、あるいは完形に近い状態で出土しているが、集中の度合いには大きな差がある。環濠が浅く（環濠の底が八女粘土層に達していないことは、この場所が相対的に環濠の深さが浅いことを示している）、幅が狭いこと、環濠の南側には貯蔵穴が集中して分布し、日常的な生活の場所となっていたことが考えられることと無関係ではないと考えている。

(2) 出土遺物

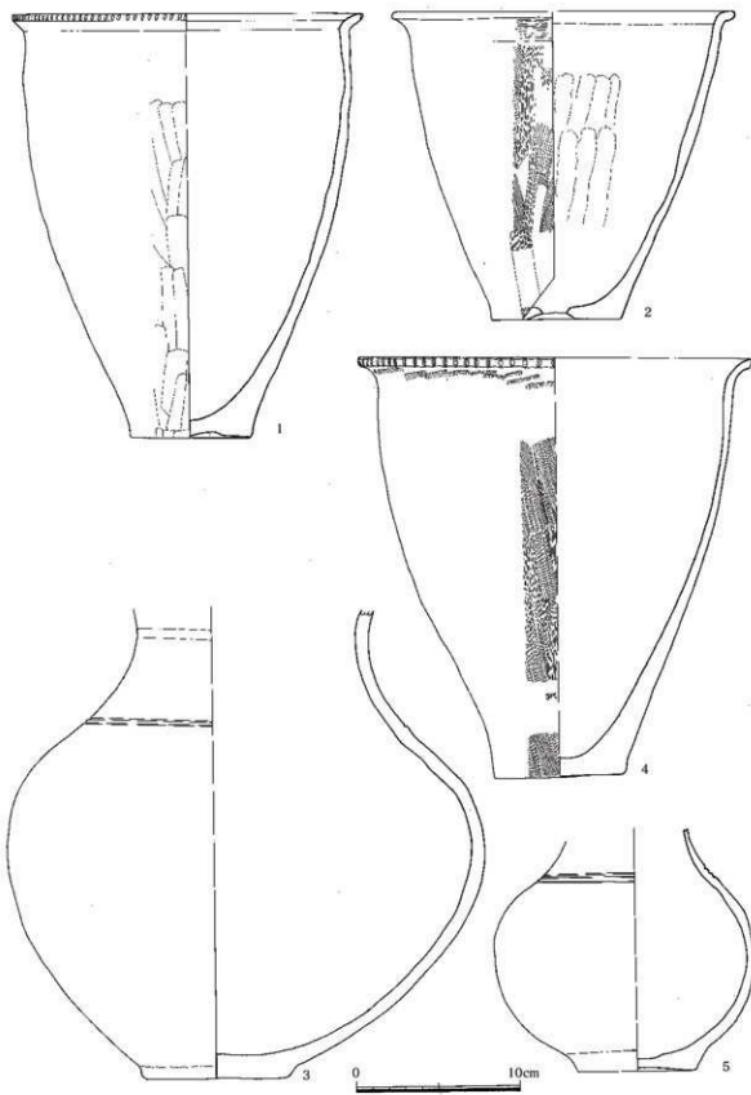
第66図1、3、5、6は刻目突帯文土器である。1は突帯の貼り付けはA、棒状工具によって刻目を施ししている。外面に斜位の貝殻条痕を施す。口唇部はとがり気味に平坦におさめる。内面は横方向のヘラナデ調整である。色調は外面が褐色、内面は黄赤色をなす。3は突帯の貼り付けはB、外面に横方向の刷毛目調整を施す。内面も同様の横方向の刷毛目調整を施し、上にヨコナデを加えて刷毛目を消している。色調は外面が褐色、内面が黄白色をなす。5は胸部の屈曲部の破片。屈曲部に突帯が貼り付けられている。刻目は棒状工具によるものである。外面は横方向の粗いヘラナデ調整である。内面も同様の調整である。色調は外面が突帯より上は黄土色、下は褐色、内面は黄土色～黄赤色である。6、突帯はB、ヘラ状工具によって刻目が施文される。外面は横方向の貝殻条痕、突帯の直下はヨコナデ調整である。内面は横方向のヘラナデ調整である。色調は外面が黄白色～褐色、内面は黄白色である。2、4は中型壺の口縁部破片。2は口唇部を丸くおさめる。内外面ともに丹塗りで横方向のヘラ研磨調整を加える。色調は内外面ともに赤色をなす。4は外面に粘土帶を貼り付け肥厚させる。下端の段は不明瞭。口唇部は丸くおさめる。内外面ともに横方向の刷毛目、上に横方向のヘラ研磨調整を加えている。色調は内外面ともに黄白色をなす。7は大型壺の胸部破片。頸部との境に段が形成される。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横方向のヘラナデ調整である。色調は外面が黄白色～赤色、内面は黄土色をなす。8は小型壺。頸部と口縁部の一部を失うがほぼ全形を知ることができる。底部は円盤貼り付け状になる。胸部は外傾しながら丸みをもって立ち上がり、球形をなすが胸部最大径は上部にある。頸部は内傾しながら直線的に立ち上がるが、胸部と頸部の境は不明瞭である。口縁部は屈曲して大きく外反するが、短い。口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面には粘土帶を貼り付け肥厚させる。肥厚帶の下端には段が形成され明瞭である。外面は横～斜方向のヘラ研磨調整である。外面黒斑か？が所認められる。器面が剥離している部分がある。内面の口縁部は横方向のヘラ研磨調整、頸部の下半には指圧痕か並列して残っている。その上に横方向のヘラナデ調整が加えられる。頸部と胸部の粘土接合部には段ができる、その段を横方向の貝殻条痕で削り落そうとしている。そして、その上に横方向のヘラナデ調整を加えている。胸部は横方向のヘラナデ調整である。色調は外面が



第64図 環濠第3区出土土器実測図 I

黄土色、黄土色～白灰色、内面が黄白色～灰色である。口縁部径10.5cm、胴部最大径17.4cm、底部径7.1cm、器高7.8cmを測る。9は大型壺の口縁部破片。外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。下端に段が形成されるが凹痕でない。口唇部は丸くおさめる。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整。色調は内外面ともに黄土色をなす。10は中型壺の口縁部破片。口縁部は短く外反する。口唇部は丸くおさめる。外面と口縁部内面は横方向のヘラ研磨調整、頸部内面には指圧痕が残る。色調は内外面ともに黄白色をなす。11は鉢形土器である。胴部は丸みを持ち、口縁は短く外反する。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。色調は外面が黄白色、内面が褐色をなす。12は中型壺の胴部破片。頸部との境に細沈線2条をめぐらし、下位に左下がりの8条の細沈線を施している。外面は丁寧な横方向のヘラ研磨調整、内面には指圧痕が残り、上に横方向の刷毛目調整を施している。色調は外面が黄褐色、内面が黄白色をなす。大型壺の口縁部破片。外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。肥厚帯の下端に段が形成され、明瞭である。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横方向の刷毛目調整を施した後に横方向のヘラ研磨調整を加えている。外面と内面の口縁部に帯状に丹塗り施される。15は小型壺の頸部から口縁部にかけての破片。口縁部外面には粘土帯を貼り付けて肥厚させる。肥厚帯の下端の段は不明瞭である。口唇部は丸くおさめる。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整を加えている。色調は内外面ともに黄白色をなす。胎土は精製され極めて良質である。口縁部径11.4cmを測る。14、16～23は底部破片である。14は小型壺の底部。底部端が外に張り出す。胴部は丸みをもって立ち上がる。外底部から胴部にかけては横方向のヘラ研磨調整、内面は多方向のヘラナデ調整である。色調は内外面ともに黄赤色をなし、外面には黒斑がある。底部径8.4cmを測る。16は小型壺の底部。部分的に円盤貼り付け状をなすが、少しひずんでいる。全体に磨滅している。外底部に木葉痕がある。外面はヘラ研磨調整であるが詳細は明らかでない。胎土は前者と同様である。色調は内外面ともに黄白色をなす。底部径5.8cmを測る。17は中型壺の底部。上げ底状をなす。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面はヘラナデ調整である。色調は外面が黄白色、内面が黄土色をなす。底部径5.8cmを測る。18は大型壺の底部。底部が筒状になる。磨滅し詳細は明らかでない。色調は黒灰色、内面が黄土色をなす。底部復元径11.4cmを測る。19は小型壺の底部。胴部は丸みをもって立ち上がる。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横方向のヘラナデ調整である。色調は外面が黒色、内面が黄土色をなす。底部復元径7.2cmを測る。20は甕形土器の底部。外面は縱方向の刷毛目調整を施している。内面は指圧痕が凹凸がある。色調は外面が黄白色、内面は黄灰色をなす。底部復元径8.7cmを測る。21は甕形土器の底部。磨滅して詳細は明らかでない。色調は外面が黄赤色、内面が黒灰色をなす。底部復元径7.0cmを測る。22は甕形土器の底部。胴部は外傾しながら直線的に立ち上がる。内外面ともに縱方向のヘラナデ調整である。色調は内外面ともに黄土色をなす。底部復元径7.6cmを測る。23は中型壺の底部。胴部は丸みをもって立ち上がる。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は器面の剥離が著しく、詳細は明らかでない。色調は内外面ともに白灰色をなす。底部径6.8cmを測る。

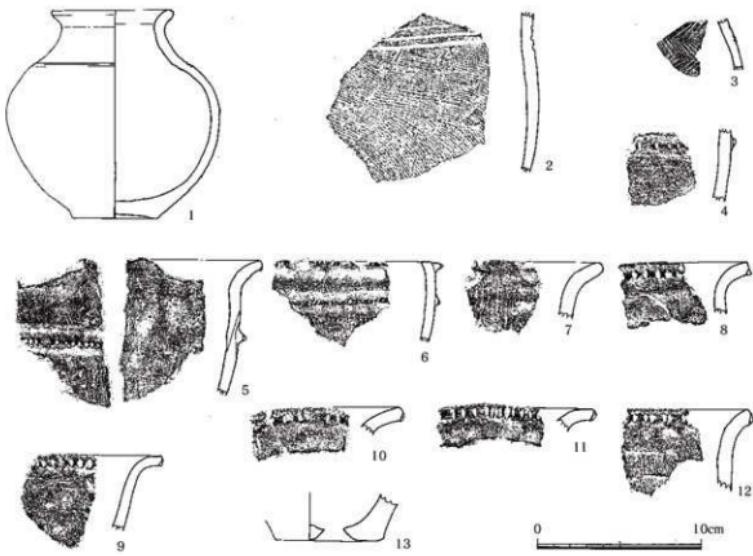
第67図、1は甕形土器。多くの破片が接合し完形に復元できたものである。底部は安定した平底、胴部は外傾しながら直線的に立ち上がり、胴部の上位で外傾の角度が緩くなり、垂直に近い立ち上がりを見せる。口縁はくの字に屈曲して直線的に短く伸びる。胴の膨らみはほとんどない。口唇部は丸くおさめ、全面にヘラ状工具により刻目を施文する。刻目は比較的浅く、間隔は一定していない。外面は縦～斜方向のヘラナデ調整である。口縁部はヨコナデ調整を加えている。外面の上半部にはスカカ付着している。内面の口縁部はヨコナデ調整を加えている。胴部は横方向のヘラナデ調整である。色調は内外面とも橙色。外面に黒斑がある。内面の胴部下半は黒ずんでいる。コゲの跡か。口径21.7cm、器高25.8cm、底部径7.4cmを測る。2は甕形土器。どちらかといふと鉢形土器に近い。幅広い安定した平底、胴部は外傾しな



第65図 環濠第3区出土土器実測図II

から直線的に立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は屈曲して短く外反する。胴の膨らみはない。口唇部はヨコナデによって丸く仕上げる。面は縦～斜方向の刷毛目調整である。刷毛目の目は極めて細かい。刷毛目の間には稜線ができている。口縁部はヨコナデ調整を加えている。外面の上半部にはススカ付着している。器面が剥離している部分もある。内面の口縁部はヨコナデ調整を加えている。胴部は指圧痕が並列して4段に残っている。上に横方向のヘラナデ調整を加え、口縁部に近い部分は指圧痕が不明瞭になっている。胴部下半は黒ずんでいる。色調は外面が黄土色～黄赤色、内面の胴部下半は黒ずんでいる。コケの跡か。内面は黄白色～黄褐色である。口径22.7cm、器高15.2cm、底部径8.5cmを測る。3は大型壺である。口縁部を欠損するかほとんど完形である。底部は円盤貼り付け状に円筒状にたちあがる。胴部は外傾しながら丸みをもって立ち上がり球状をなすかやや扁平である。胴部最大径は上部にある。胴部と頸部の境は不明瞭であるが細沈線2条をめぐらしている。頸部は内傾しながら反り返るように立ち上がり、口縁部近くではほぼ垂直になる。口縁部は外反すると考えられる。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、胴部下半は斜位のヘラ研磨になる。器面の剥離が吻所にみられる。内面は頸部に指圧痕が並列して残るが不明瞭、上に横方向のヘラナデ調整が施される。胴部も丁寧な横方向のヘラナデ調整である。色調は外面が黄土色～赤褐色、内面が黄土色をなす。底部径9.5cm、胴部最大径27.1cm、頸部径19.9cm、器高28.8cm以上を測る。4は壺形土器。出土時は完形で押しつぶされた状態で出土した。底部は口縁部に比較してやや小さい平底である。胴部は外傾しながら直線的に立ち上がり、胴部の上位で外傾の角度が緩くなり、垂直に近い立ち上がりを見せる。下半で反り返るよう立ち上がる部分もある。口縁はゆるやかに外反する。胴の膨らみはない。口唇部は丸くおさめ、全面にヘラ状工具により刻目を施文する。刻目は比較的深く的確である。間隔は一定していないが密に施されている。外面は縦方向の目の細かい刷毛目調整を施し、口縁部下には刷毛目の終点が線状に並んで残っている。口縁部約2cmの範囲にはヨコナデ調整が施される。外面の上半部にはススカ付着している。内面の口縁部は横方向の刷毛目調整を施した後にヨコナデ調整を加えて刷毛目を消している。胴部の整形のための指圧痕は、横方向のヘラナデ調整できれいに消されている。色調は外面の底部付近が火を受けなくて黄土色、上部は火を受け褐色～黒褐色になっている。内面は胴部下半が黒ずんでいる。コケの跡か。他は黒ずんだ黄土色をしている。口径24.1cm、器高26.0cm、底部径8.2cmを測る。5、小型壺である。壺の中に入れ子状態で出土した。約半分を失うが口縁部を除いてほぼ全形を知ることができる。底部は安定した平底で胴部は外傾しながら丸みをもって立ち上がり、球形をなす。頸部と胴部の境は不明瞭、境に細沈線3条がめぐる。頸部は内傾しながらそり気味に立ち上がる。外面は横方向のヘラ研磨調整であるが、器面が荒れている。内面は横方向のヘラナデ調整である。胴部上半に指圧痕が並列して残っている。底部径7.2cm、胴部最大径胴部中位にあり13.9cm、器高は14.7cm以上である。

第68図、1は小型壺。口縁部の大部分を欠損するが全形はわかる。底部は安定した平底である。ヘラ研磨によって上げ底に整形される。胴部は大きく外傾しながら立ち上がり、球形をなす。胴部と頸部の境には不明瞭な段ができる、細沈線2条をめぐらしている。頸部は内傾しながら直線的に短く立ち上がる。口縁部は屈曲して外反する。口唇部は丸くおさめる。外面は横方向のヘラ研磨調整。口縁部の内外面はヨコナデ調整である。内面は観察できないがヘラナデ調整とみられる。復元口径7.0cm、胴部最大径13.1cm、底部径5.2cm、器高12.7cmを測る。2は壺形土器の胴部破片。胴部は丸みをもって垂直に立ち上がる。口縁部は外反するが欠損する。口縁下に3条の平行沈線をめぐらす。外面は横～斜方向の刷毛目調整、内面は上部に横方向の刷毛目調整を施し、その上に横方向のヘラナデ調整を加える。下位に指圧痕が残る。色調は外面が黄土色～黄白色、内面は黄土色をなす。板付遺跡には口縁下に複数の平行沈線をめ



第66図 環濠第3区出土土器実測図III

ぐらす例はなく、瀬戸内地地方からの搬入品と考えられる。胎土も若干ことなるようである。3、小型壺の胴部小破片。ヘラ書きの無軸羽状文が施文される。外面は丁寧な横方向のヘラ研磨調整、内面はヘラナデ調整である。色調は内外面ともに黄白色をなす。4は甕形土器の胴部破片と考えられる。低い断面三角形の貼り付け突帯1条をめぐらしている。頂部にヘラ状工具により浅い刻目が施文されている。突帶の上下はヨコナデ調整。外面は横方向のヘラナデ調整、内面も横方向のヘラナデ調整である。二次的に被熱し変色している。色調は外面が黄白色～黒灰色、内面は黄白色をなす。5は甕形土器の口縁部から胴部にかけての破片。胴部はわずかに外傾しながら立ち上がる。口縁部は緩やかに外反する。口唇部は平坦になる。下端にヘラ状工具により小さな刻目を施文する。口縁部の下には断面三角形の貼り付け突帯1条をめぐらしている。突帶にはヘラ状工具により刻目を施文している。刻目は間隔は一定していないか密に施文される。外面は綫方向の刷毛目調整、口縁部と突帶の上下はヨコナデ調整である。内面の口縁部は横方向の刷毛目調整後、ヨコナデ調整を加えている。口縁下と突帶の下にあたる部分には二段にわたって指圧痕が並列して残っている。その上にヘラナデ調整が加えられている。色調は外面の突帶より上が黄土色、下が褐色をなす。内面は黄白色～黄土色をなす。6も甕形土器の口縁部破片である。口縁部とその下に突帯2条が貼り付けられる。突帶にはヘラ状工具により刻目が施文される。刻目は浅く、間隔は一定していないか密に刻まれている。外面は綫方向の刷毛目調整、その上に横方向のヘラナデ調整を加えている。内面は横方向のヘラナデ調整である。色調は内外面ともに黄白色をなす。7も甕形土器の口縁部破片

である。口縁部は大きく外反する。口唇部は丸くおさめる。刻目は施文されない。外面には縦方向の刷毛目調整、口縁部はヨコナデ調整が加えられ刷毛目を消している。口縁部は目の粗い刷毛目調整が横～斜方向で入れられる。その後横方向のヘラナデ調整が加えられる。色調は外面が黄土色、内面が黄白色をなす。8も甕形土器の口縁部破片である。口縁部は緩やかに外反する。口唇部は平坦に仕上げられる。平坦面にはヨコナデ調整が加えられる。下端部にヘラ状工具により刻目が施文される。刻目は深く的確に刻まれるが、間隔は一定していない。口縁部の内外面はヨコナデ調整である。胴部は外面ともヘラナデ調整である。色調は外面が褐色、内面が黄白色をなす。10は甕形土器の口縁部破片である。口縁部は大きく外反する。口唇部は丸くおさめる。下端にヘラ状工具により刻目が施文される。刻目は浅く、間隔は一定していない。器面が磨滅しているので調整は明らかにできない。色調は外面が黄白色、内面は黄桃色をなす。11も同様の甕形土器の口縁部破片である。口縁部は大きく外反する。口唇部は丸くおさめ、口唇部の下端に片寄って、ヘラ状工具により刻目が施文される。刻目は深く的確に刻まれるが、間隔は一定せず粗密がある。口縁部の内外面はヨコナデ調整である。色調は外面が褐色、内面が黄土色をなす。12も同様の甕形土器の口縁部破片である。胴部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。口唇部は丸くおさめる。口唇部の下端に片寄って、ヘラ状工具により刻目が施文される。刻目は深く的確に刻まれるが、間隔は一定せず粗密がある。口縁部の外面には縦方向の刷毛目調整が施される。口縁部はさらにヨコナデ調整が施されている。また、刷毛目の終点か2か所にみられる。内面は横方向の刷毛目調整を施し上からヨコナデ調整を施す。その下には指圧痕が並列して残る。指圧痕の上には横方向のヘラナデが施される。色調は外面が黄白色～黄土色、内面が黄白色をなす。13は甕形土器の底部である。安定した平底で胴部は外傾しながら立ち上がる。底部近くはヘラ調整、上部に縦方向の刷毛目調整を施す。底部には中央部をやや外れて内外面から打撃を加えて穿孔される。孔は径1.1cm前後である。色調は外面が黄赤色、内面は灰白色をなす。

第6章 弦状濠の調査

1. 遺構

(1) 弦状濠

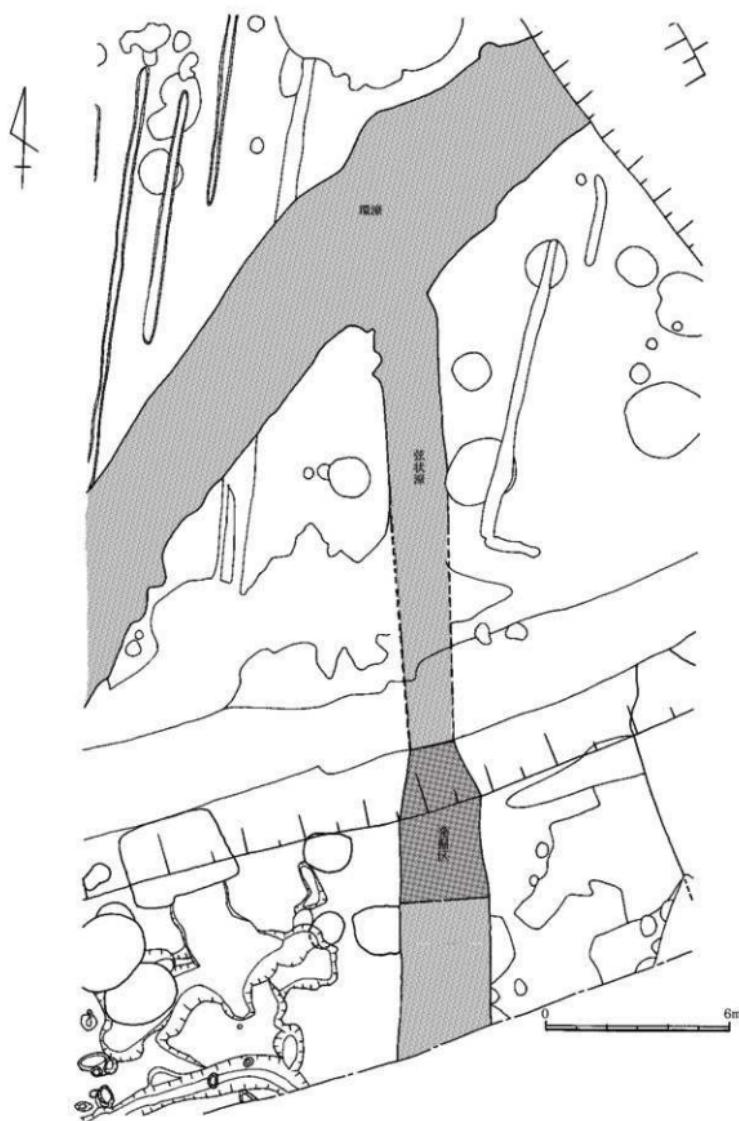
弦状濠は環濠の北側の中央部よりやや西側に片寄ったところから派生して南に向かって直線的に延びる。日本考古学協会・明治大学・九州大学を中心とする発掘調査で確認され、環濠と組み合わせて弓の弦にあたる部分に掘り込まれているために弦状溝（濠）と呼ばれている。以下、弦状濠という呼称を踏襲することにする。

日本考古学協会、明治大学、九州大学を中心とする調査で環濠と弦状濠の分岐点、弦状濠の先端部については発掘調査が実施され、終了している。弦状濠の未発掘部分はその間に挟まれた約20mの範囲である。今回は弦状濠と環濠の時間関係を把握するため弦状濠の一部を発掘することにした。調査区は段落ち部分からその上の南側5mに設定して発掘調査を実施した。調査は時間の関係から、環濠東側、第1・2区のように出土遺物1点1点の記録はやめて、層位による取り上げを行った。

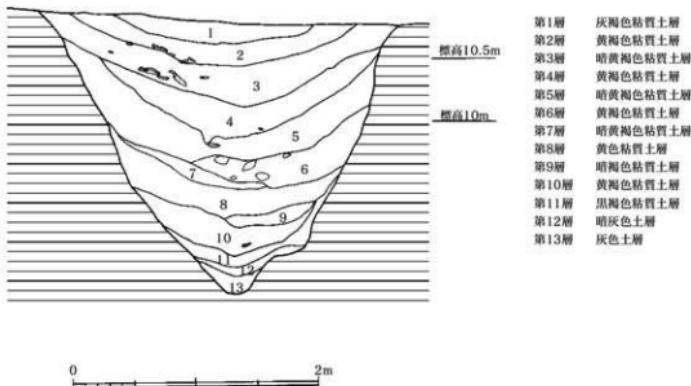
(2) 南壁の土層

弦状濠は環濠に比較して遺存状態は良好である。濠の断面形はV字形をなす。濠の検出面は西側が10.78m、東側が10.92mと環濠と比較してかなり高い位置にある。鳥栖ロームと八女粘土層の境は西壁側で9.06m、東壁側で9.01mである。弦状濠の深さは現状で2.3mを測る。

第1層、第2層、第3層は層の上部が削平されている。どれくらい削平されているかは明らかでないが、弦状濠はまだ深さがあったとかんがえられる。第1層は幅165cm、厚さは中央部で19cmを測り、東西に徐々に薄くなる。第2層は幅236cm、厚さは一定していて19cm前後を測る。第3層は濠の一面に厚く堆積する。中心部が最も厚く33cmを測り、東西に向かって徐々に薄くなる。この層の下面で濠の東西壁の掘削角度が大きく変化する。また、この層、上位の第2層には多量の土器が出土していることを考慮すると、この層の下面で弦状濠の再掘削があった可能性がある。第1～3層は濠の東西から土が流れ込んで形成された土層である。第4層は西壁から東壁に向かって堆積するが、層の先端部は東壁に達していない。レンズ状に堆積した土層で、最も厚いのは中央部で30cmを測る。第5層は東西から土が流れ込んで形成された層である。層が厚いのは東西壁に沿ったところで、中央部が最も薄い。中央部で厚さ16cm前後、西壁側で35cm、東側で46cmを測る。第6層は西壁側から流れ込んだ土層堆積で、東の土層端は濠の中央部をわずかに越える程度である。この層で最も厚いのは壁際で厚さ28cm前後である。この層には鳥栖ロームのブロックを多量に含んでいる。第7層は東側から流れ込んだ土層である。この層の西端は濠の中央部をわずかに出るにすぎない。厚さは15cm、東壁近くに片寄っている。層の両端に向かって薄くなる。第8層は濠の全面を覆い、厚い層である。東壁側が厚く、西側に向かって薄くなる。もっとも厚いのは東壁際で、厚さ32cmを測る。西壁際では16cm前後の厚さである。より多くの土砂が東側から流れ込んだと考えられる。第9層は西側のみに堆積する土層である。幅78cm、厚さ12cmのブロックである。第10層は東側から流れ込んだ土層と考えられ、層の西端は西壁まで達していない。東壁側が厚く、厚さ30cm。西側に薄くなる。第11層は濠底近くに堆積する土層であるが、壁に沿って薄く堆積している様に見えるが、壁に沿った堆積の頂部は西壁で標高9.62m、東壁で9.2m、濠の中央部で8.9mを測り、その差は0.72mもあり普通の堆積を考えた場合、やや不自然である。第11層の上面で濠の再掘削があつたことが推測される。



第67図 弦状灘調査区の位置



第68図 弦状濠土層断面実測図

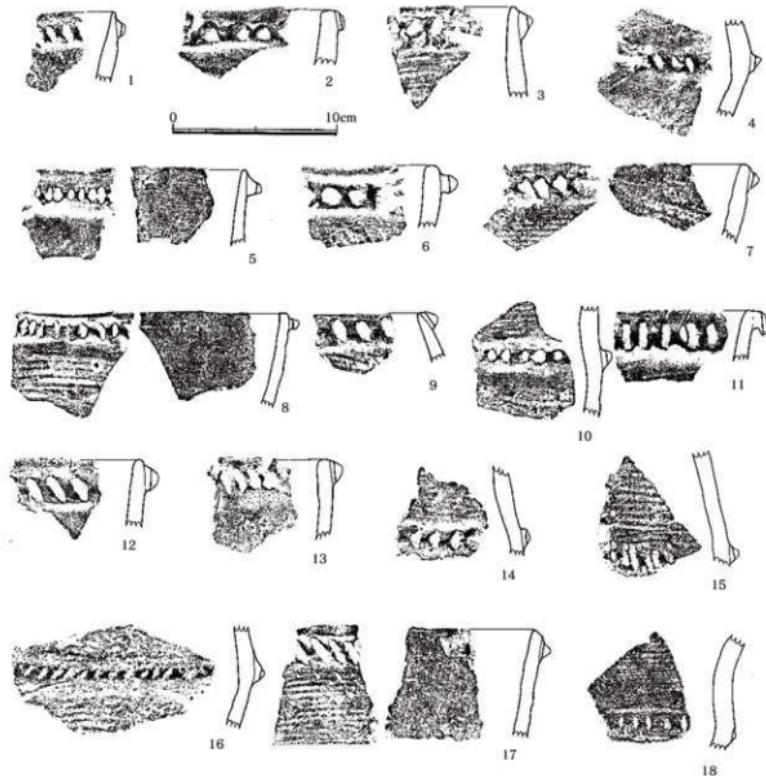
第11層の厚さは10cm前後、壁に沿った部分が薄くなる。第12層は厚さ8cm前後、薄く堆積している。
第13層は厚さ15cm。八女粘土層のブロックを含んだ灰色土層である。

2. 出土遺物

(1) 刻目突帶文土器

弦状濠から出土した刻目突帶文土器の量は少ない。第69図に代表的な土器を示した。刻目突帶文土器は各層から出土している。各土器の出土層位は、1~4が第1層、5~10が第2層、11が下層、12~16が第7層、17、18が第8層からの出土である。

1は口縁部小破片。突帶の貼り付けはB、刻目はヘラによるものである。内外面はナデ調整。色調は外面が赤色～黒色、内面は黄赤色である。2も口縁部小破片。突帶はC、刻目は棒状工具による。内外面ともヨコナデ調整。色調は外面が灰赤色、内面が灰色をなす。3、口縁部小破片。傾きから2条突帶になる可能性もある。突帶はB、刻目は棒状工具による。内外面ともに横方向の貝殻条痕調整、内面はその上にヘラナデを加える。外面は褐色、内面は黄赤色をなす。4は屈曲部の破片。屈曲部の突帶は断面三角形、刻目は棒状工具による。内外面は横方向のヘラナデ調整、色調は外面の突帶より上は赤褐色、下が褐色、内面は黄褐色である。5は突帶かA、刻目はヘラ状工具によって突帶頂部に浅く、密に刻まれる。内外面は横～斜位のヘラナデ調整である。色調は内外面ともに黄土色をなす。6の突帶はA、紐状の粘土帶を貼り付け高い。刻目は棒状工具による。外面は横方向の刷毛目調整、内面はヘラナデ調整である。色調は外面ともに黄土色をなす。7は突帶かB、刻目は条痕原体による。外面は横方向、内面は斜位の貝殻条痕、内面にはヘラナデが加えられる。色調は黄赤色をなす。8は突帶かA、刻目はヘラ状工具による。外面は横方向の貝殻条痕調整、内面は丁寧なヘラナデ調整である。色調は内外面ともに黄土色をなす。9は突帶



第69図 弦状漆出土土器実測図 I

がB、刻目は棒状工具による。外面は斜位の貝殻条痕調整、内面はヘラナテ調整である。内外面ともに褐色をなす。10は2条突帯の胸部破片。突帯部分はほとんど屈曲していない。突帯は断面台形で、刻目は棒状工具による。外面は横方向のヘラナテ調整、内面は横方向の貝殻条痕調整の上にナテ調整を加えている。色調は内外面ともに黄白色をなす。11の突帯はC、突帯は折り曲げたような状態になっている。刻目は棒状工具による。内外面ともにナテ調整である。色調は外面が黄褐色、内面が黄赤色をなす。12は突帯がA、刻目は棒状工具による。内外面ともにヘラナテ調整である。色調は外面が黒色、内面が黄白色をなす。13の突帯はB、刻目は棒状工具による。内外面ともに横方向のヘラナテ調整である。色調は外面が黄白色、内面が褐色をなす。14は2条突帯の胸部破片。刻目はヘラ状工具による。内外面ともに横方向の貝殻条痕調整の上にナテ調整を加える。色調は外面が黄白色、内面が褐色をなす。15も2条突帯の胸部破片。突帯の刻目は棒状工具による。外面は横方向の貝殻条痕調整、内面はナテ調整である。色調は外面が黄褐色、内

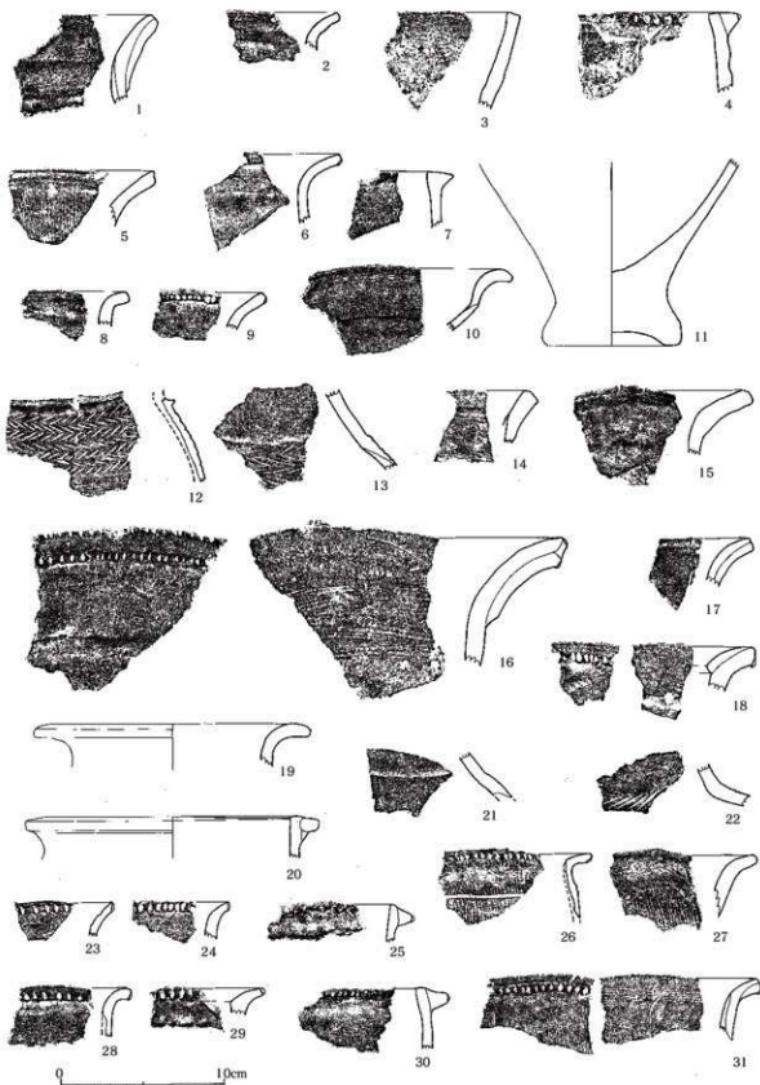
面は褐色をなす。16は2条突帯の甕形土器の脣部破片。緩やかに屈曲する。突帯は断面三角形、ヘラによる小さい刻目がつけられる。内外面ともに横方向の貝殻条痕調整、内面はナデが加えられる。色調は内外面ともに黄褐色であるが、内面の下半には焦げ付きがみられ、黒変している。17の突帯はB、刻目は棒状工具による。突帯の下には棒状工具の先端で刺突が並んでいる。外面は横方向の貝殻条痕調整、内面は横方向の丁寧なヘラナデ調整である。色調は内外面ともに黄白色をなす。18は口縁部が外反するが先端を欠いている。脣部は突帯状をしているか肥厚部の下端の段に刻みをいたれた可能性が強い。外面はヘラナデ調整、内面はナデ調整である。色調は内外面ともに黄土色をなす。

(2) 第1層の土器

第70図1、大型壺の口縁部破片。外面に粘土帶を貼り付け肥厚させるが下端の段は不明瞭である。内外面は横方向のヘラ研磨調整。黄褐色をなす。2、中型壺の口縁部破片。口唇部は丸くおさめる。内外面は横方向のやや雑なヘラ研磨調整である。外面が黄赤色、内面が黄白色をなす。3、鉢形土器の口縁部破片、口唇部は平坦に仕上げている。内外面ともにナデ調整であるが、外面は器面の剥離が著しく、詳細は不明。胎土には石英、長石、金雲母の砂粒を多量に混入している。焼成は良く、外面は黄白色、内面は赤黄色をなす。4、甕形土器の口縁部破片。口縁部は断面三角形の粘土帶を貼り付け、刻目を施文している。外面は横方向の刷毛目調整、器面が荒れていって詳細は不明。内面は横方向のヘラナデ調整が加えられる。黄赤色をなす。5、口唇部は平坦、外面に縱方向の刷毛目調整がある。内面は横方向のヘラ研磨調整である。内外面ともに黄赤色をなす。6、甕形土器の口縁部破片。口縁部が大きく外反する。口唇部の外面は下端に刻目が入れられる。内面は横方向の刷毛目調整の後にヘラナデ調整が加えられる。内外面とも黄土色をなす。7、口縁部に断面三角形の粘土帶を貼り付けている。内外面は横方向のヘラナデ調整。色調は茶褐色をなす。8、甕形土器の口縁部小破片。如意形をなす。口唇部は平坦であるが、刻目はない。外面の屈曲部に指圧痕が並列する。内外はヨコナデ調整。色調は黄白色をなす。9、甕形土器の口縁部破片。口縁は大きく外反する。口唇部は平坦で下端部に棒状工具による刻目を施文する。口縁部内外面はヨコナデ調整、外面の脣部には縦方向の刷毛目調整が施される。内外面とも赤褐色をなす。10、浅鉢あるいは高杯の杯部と考えられる破片である。脣上半部で屈曲し、口縁部は大きく外反する。口唇部は丸くおさめる。内外面ともに横方向のヘラ研磨である。11、甕形土器の底部。底部端が張り出していて、安定感がある。上げ底になる。底部径8.5cm。器面調整は不明。胎土には石英、長石等の砂粒を多量に混入する。焼成は良好、黄赤色をなすが、二次加熱のため部分的に桃色をなす。12、中型壺の脣部上半の破片。頸部と脣部の境に断面三角形の突帯1条をめぐらす。さらに脣中位に細沈線1条をめぐらし、文様帶を区画している。文様帶にはヘラ書きの無軸の羽状文を3段にわたって施文している。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。突帯には丹塗りの痕跡がある。内面は器面が剥離しているため不明である。

(3) 第2層の土器

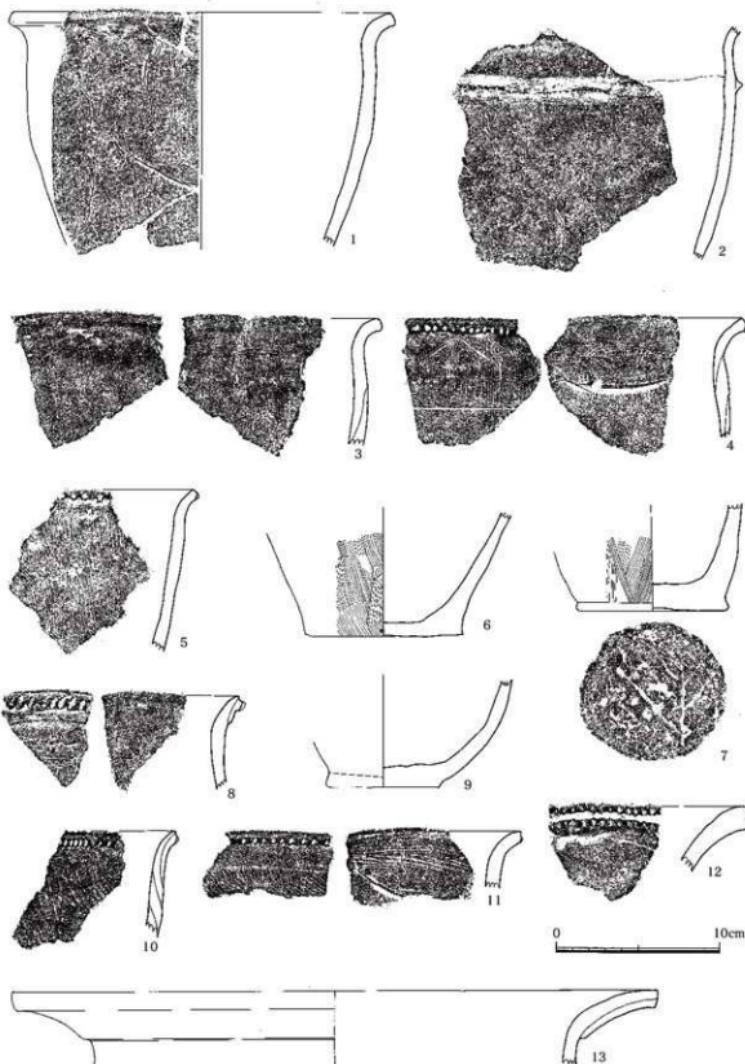
第70図13、大型の壺形土器の頸部から脣部にかけての破片。頸部と脣部の境に段が形成される。同上半部にはヘラ書きの無軸の羽状文が二段に施文されている。内外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整黄灰色をなす。14、大型壺の口縁部破片。外面に粘土帶を貼り付けて肥厚させる。下端の段は不明瞭である。口唇部は平坦、内外面は横方向のヘラ研磨調整である。外面は黄赤色、内面は黄土色をなす。15、大型の壺形土器の口縁部破片である。大きく外反する。口縁部には粘土帶を貼り付け肥厚させるが下端の段は不明瞭である。口唇部は平坦、粘土接合部が線状に残る。内外面は横方向の刷毛目調整の上に横方向のヘ



第70図 弦状濠出土土器実測図II

ラ研磨調整を加えている。内外面は黄赤色をなす。16、大型の壺形土器の口縁部である。口縁部外面に粘土帯を貼り付け肥厚させている。肥厚帯の下端には段が形成される。口唇部はやや中くぼみで上下端にヘラによる刻目をめぐらす。外面は横方向の刷毛目調整後、ヨコナデ調整である。内面は粗い横方向の刷毛目を施した後に板ナデを加えている。口縁部外面に黒斑がある。17~20は壺形土器の口縁部である。17は口縁部が緩やかに外反する。口唇部は平坦で粘土接合部が凹部として部分的に残っている。内外面は横方向のヘラ研磨調整、丹塗りされている。18、口縁部内側に粘土帯を貼り付けた肥厚させている。下端には高い段が形成される。口唇部は平坦で肩に棒状工具による刻目が施される。内外面ともに横方向のやや雑なヘラ研磨調整が加えられる。黄白色をなす。19は口縁が大きく外反する。口縁端部は丸く収める。外面はヨコナデ調整である。内面は横方向のヘラ研磨である。復元口径17.0cm、20は口縁が平坦で、逆L字形をなす。頭部は直立し、短い。口縁部の作り方は特徴的で、丸い粘土紐を貼り付け成形している。内外面ともにヨコナデ調整である。21、中型壺の頭部から胴部にかけての破片。頭部と胴部の境に段を形成する。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横方向のヘラナデ調整である。胎土は精製され良質である。色調は外面が黄赤色、内面が黄白色である。22、中型の壺形土器の頭部から胴部にかけての破片。頭部と胴部の境に沈線をめぐらすが、沈線のやや上部で屈曲して胴部に移行している。沈線の下方にはヘラ書きの無軸の羽状文が施される。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横方向のヘラナデ調整である。色調は黄白色をなす。23、甕形土器の口縁部、如意形口縁をなす。口唇部に条痕原体による刻目を入れる。外面はヨコナデ調整である。内面は剥離して不明。24、甕形土器の口縁部、如意形口縁をなす。口唇部にヘラ状工具により刻目を入れる。刻目は密に入れられる。内外面ともにヨコナデ調整である。25、甕形土器の口縁部。口縁に断面三角形の粘土帯を貼り付けている。口縁は平坦で、端部に刻目を付ける。内外面はヨコナデ調整。外面が褐色、内面が黄白色をなす。26、甕形土器の口縁部、口縁は二字形に曲がる。口唇部下端に刷毛目原体による小さな刻目を入れる。外面は縦方向の刷毛目調整、口縁部にはヨコナデを加える。口縁下に断面V字形の沈線一条を巡らす。屈曲部には指頭痕が並列して残る。口縁内側は横方向の刷毛目の上にナデ調整を加えるが、他は剥離して不明。27、甕形土器の口縁部破片。口縁部は如意形をなす。胴部外面に縦方向の刷毛目調整を施す。内面は横方向の刷毛目調整の後にヘラナデ調整が加えられる。黄赤色をなす。28、口縁は如意形をなす。口唇部はやや丸みを持ち、下端にヘラによる刻目をめぐらす。口縁部の内外面はヨコナデ調整、外面は縦方向の刷毛目調整。内面はヨコナデ調整である。口唇部から口縁部内側にかけて丹塗りされる。29、甕形土器の口縁部。口縁部は二字形に大きく屈曲する。口唇部には刷毛目原体による刻目が施される。屈曲部外面には指頭痕が並列している。内外面はヨコナデ調整。黄褐色をなす。30、甕形土器の口縁部。断面三角形の粘土帯を貼り付けている口縁は平坦で、端部に刻目を入れる。内外面はヨコナデ調整。黄白色をなす。31、口縁は如意形をなす。口唇部は平坦でその下端にヘラによる刻目がめぐらされる。また、刻目のすぐ上位には細く浅い沈線がめぐらされる。外面は縦方向の刷毛目調整、内面は口縁部に横~斜方向の刷毛目調整、その下位はヘラナデ調整である。

第71図、1~8、10、11は甕形土器。1、復元口径23.8cm。口縁は如意形をなす。口唇部は平坦に仕上げる。外面には縦方向の細かい刷毛目が施されるが、口縁部にはあまり及んでいない。下半にはスカ付着する。内面は横方向の刷毛目調整を加えた上にヘラ研磨を加えているが、下半部は不明瞭。2、甕形土器の口縁から胴部にかけての破片。口縁は如意形をなすと考えられるが、欠失する。口縁下に断面三角形の突帯を貼り付ける。刻目は棒状工具によるが浅く小さく刻まれる。外面は縦方向の刷毛目調整が施されるが、突帯下2cmより上部はヨコナデ調整によって消されている。内面は多方向のナデによって調整され

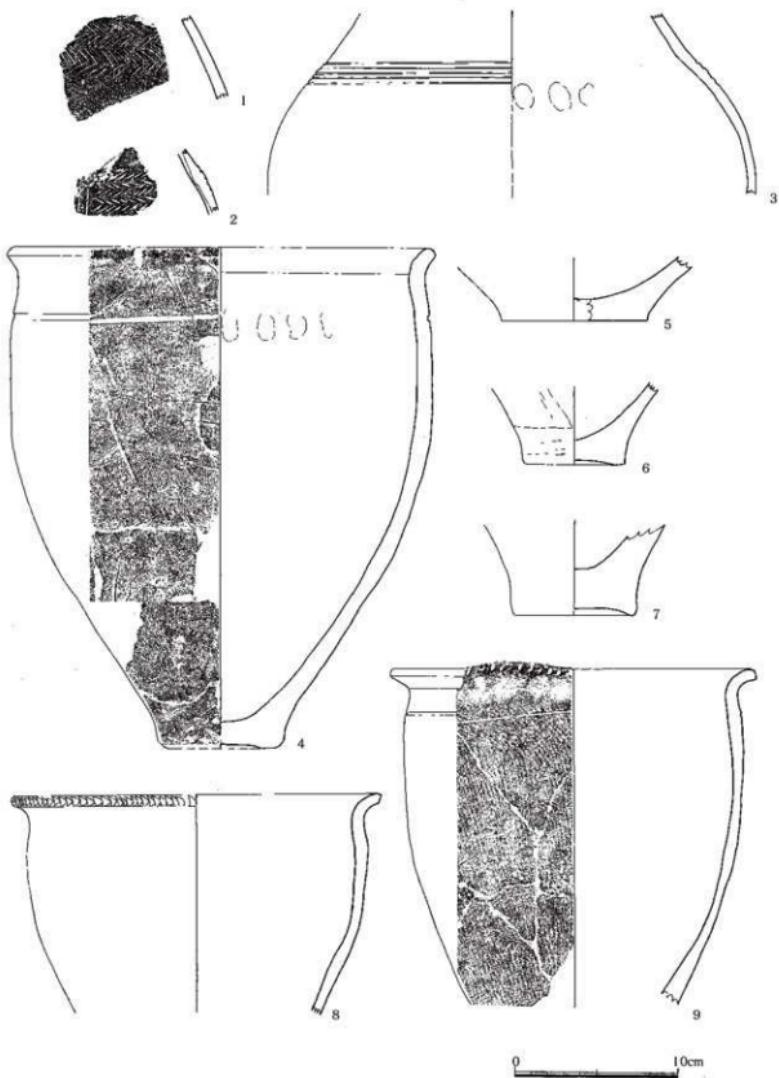


第71図 弦状窯出土土器実測図Ⅲ

る。3、口縁は如意形をなす。口唇部は平坦ある。外面は縦方向の刷毛目、内面は口縁に横方向の刷毛目を施した後に、横方向のヘラ研磨を施す。4、口縁は如意形をなす。口唇部は平坦で下端にヘラによる刻目をめぐらす。口縁下に断面V字形の沈線1条をめぐらす。外面は縦～斜方向の刷毛目調整である。内面は横方向の刷毛目を施し、胸部上半から口縁にかけて指圧痕が残る。5、胸部は外傾しながらほぼ直線的に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。口唇部は丸くおさめ、下半に棒状工具による刻目が施される。外面は縦～斜位の刷毛目調整、ススの付着がみられる。胸部内面には指圧痕が2段にわたって並列する。口縁部はヨコナデ調整である。内外面ともに黄褐色をなす。6、甕形土器の底部である。安定した平底、胸部はわずかに外傾しながら立ち上がる。外面には比較的丁寧な縦～斜位の刷毛目調整が加えられている。7、甕形土器の底部。胸部はあまり外傾せず立ち上がる。外底部には木葉痕がある。外面は縦方向の刷毛目調整、内面は横方向の板ナデ調整である。底部径9.4cm。8、口縁は如意形をなす。口唇部は平坦に仕上げられ、下端部に刷毛目原体による刻目をめぐらす。外面は刻目のすぐ下から縦の刷毛目調整を施す約1cmに強いケズリ状の横方向の刷毛目を入れて段を作り出している。内面は口縁部から斜位～横方向の刷毛目調整を加えた後に口縁部に横方向のヘラ研磨調整を加え、一部は口唇部にまでおよび、口唇部に凹線をめぐらしたようになり、刻目は貼り付けの突帯のように見える。9は小型壺の胸下半から底部にかけての破片。底部は元来、底部端が張り出しが、胸部が大きくなりずんでいたために変形している。底部径7.0cm。胸部は丸みを持って立ち上がる。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横方向のヘラナデ調整であるが、共に器面が荒れている。10、口縁は如意形をなす。口唇部の下端にヘラによる刻目をめぐらす。口唇部の上端部はヘラによって平坦に削られる。外面は粗い縦方向の刷毛目調整。内面は横方向のヘラナデ調整である。11、口縁は如意形をなす。口唇部は平坦で下端にヘラによる刻目をめぐらす。外面は斜方向の刷毛目、口縁部はヨコナデ調整、内面は口縁部に横～斜方向の刷毛目調整を加える。12、大型の壺形土器の口縁部である。口唇部に凹線1条をめぐらし、凹線の両側にヘラによる刻目を入れる。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。13は大型壺の口縁部である。復元口径39.8cm。口縁部は大きく外反する。口縁部外面には幅広い粘土帯を貼り付けて肥厚させている。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整。

(4) 第3層の土器

第72図1、中型壺の胸部上半の破片。上位に細沈線1条をめぐらし下位に貝殻復縫による無軸の羽状文を2段に施している。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。内面はナデ調整である。2、中型壺の頸部から胸部にかけての破片である。頸部と胸部の境にわずかに段が形成される。胸部上半は縦の平行線2条で区画しその間にヘラ書きの無軸の羽状文を2段に施している。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。内面は剥離し不明。3、中型壺の頸部から胸部にかけての破片。頸部復元径22.6cm、胸部最大径30cmを測る。頸部と胸部の境から下位に5条の平行した細沈線をめぐらす。頸部と胸部の境の段は不明瞭である。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面はナデ調整である。胸部上半に指頭痕が並列する。4、ほぼ全形がわかる甕形土器である。平底の底部から胸部は外傾しながら立ち上がり、胸部最大径は上位にある。胸部上位はわずかに内傾し、口縁は外反し、如意形をなす。器壁は全体に厚い。底部は周縁部を残し刷毛目調整具で削られ、その上に粗いヘラ研磨を加え、わずかであるが上げ底状をなす。胸部外面には縦～斜位の刷毛目調整が加えられる。胸中位にはわずかであるがススが付着している。口縁下2.5cmのところにはやや幅広の凹線1条がめぐらされる。口縁部はナデ調整である。口唇部は丸く收めている。内面は不定方向の刷毛目で調整して上にナデを加えている。胸部上半には二段にわたって指頭痕

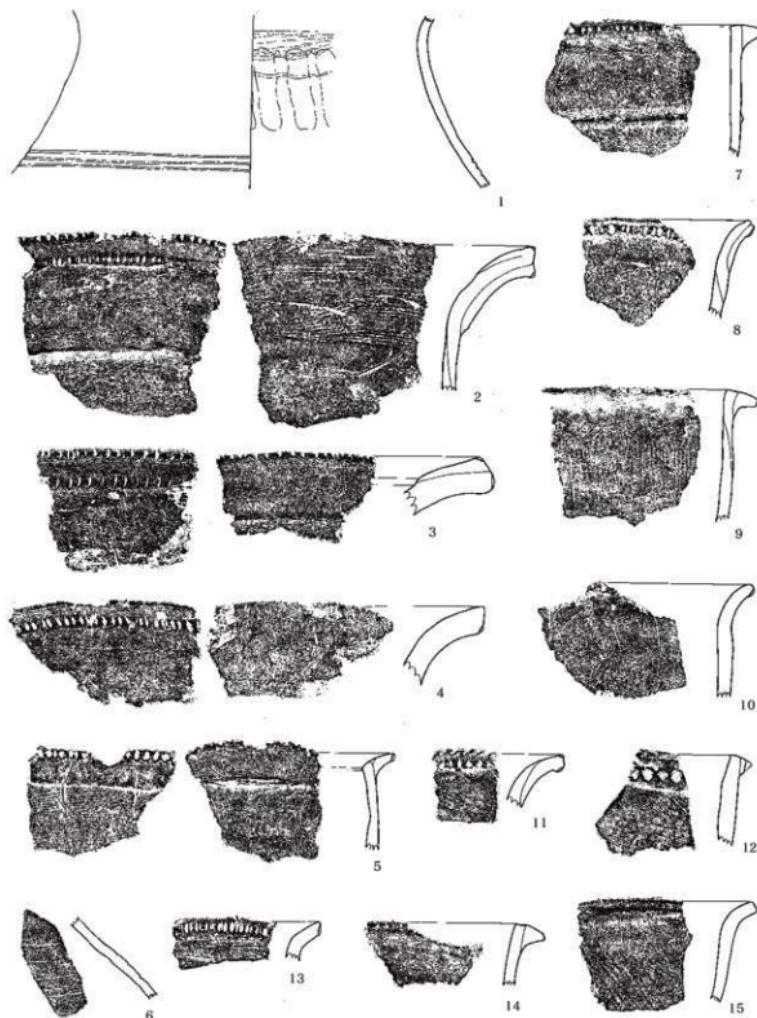


第72図 弦状漆出土土器実測図IV

がみられる。復元口径26.4cm、胸部最大径25.0cm、底部径6.9cm、器高30.6cmを測る。5、壺形土器の底部。平底で胸部は大きく外傾しながら立ち上がる。外面は横方向のヘラ研磨調整である。内面はナデ調整である。復元底部径は9.0cmを測る。6、壺形土器の底部。底部径6.3cm、外底部は中心に向かってヘラケズリが加えられる、その上にヘラ研磨が加えられる。やや上げ底状をなす。胸部は外傾しながら立ち上がるが、張りは少ない。底部の外周にはヘラによるケズリがみられる。外面は縦～斜位の丁寧なヘラ研磨調整である。内面は横方向のヘラ研磨調整である。7、壺形土器の底部。やや上げ底になる。器壁が厚く安定している。底部径7.7cmを測る。器面があれでいて調整は不明。8、如意形口縁の壺形土器である。胸部下半から底部を欠いているため全形は不明。底部から大きく外傾しながら立ち上がると考えられ、胸中位で屈曲しながら垂直に近い立ち上がりを見せる。胸部最大径は口縁部直下にあり、20.9cmを測る。口縁部は大きく外反し、如意形をなす。口唇部全面にヘラによる刻目が施文される。外面は口縁部がヨコナデ調整、胸下部が縦方向のヘラナデ調整である。内面は口縁部がヨコナデ調整、胸部は不定方向のナデ調整である。復元口径22.4cmを測る。9、底部を欠いているからほぼ全形はわかる。胸部は底部から外傾しながら立ち上がり、胸部上半はほぼまっすぐに立ち上がる。口縁部は大きく外反し、如意形をなす。口唇部は丸く收める。口縁部直下に断面V字形の沈線1条をめぐらす。口唇部の頂部にヘラによる刻目が施文される。外面は縦～斜位の粗い刷毛目調整が加えられる。胸中位は黒く変色し、ススが付着する。頸部には指頭痕が並列して残る。内面は口縁部が横方向の刷毛目調整後、ヨコナデ調整、胸部は横方向のヘラ研磨調整である。復元口径22.6cm、胸部最大径は沈線よりわずか下方にあり、20.9cmを測る。

(5) 第4層の土器

第73図1、大型の壺形土器の頸部破片。頸部と胸部の境に細い沈線3条をめぐらしている。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨、内面の口縁部に近い部分は横方向のヘラ研磨、頸部には2段にわたって指圧痕がみられる。頸部復元径27.3cm。2、大型壺の口縁部である。口縁部外面には幅約6cmの粘土帯を貼り付け肥厚させている。肥厚帯の下端に段ができるが、ヘラによる雑な仕上げである。口唇部は平坦で上下端にヘラによる小さな刻目をめぐらしている。外面は横方向の刷毛目を施した後に、横方向のヘラ研磨を加えているがやや雑である。口唇部はヨコナデ調整。口縁部内面は粗い横方向の刷毛目調整。頸部は縦方向のケズリ状の調整後、横方向の雑な研磨調整である。口縁部の内外に丹塗りの痕跡が残る。3、大型の壺形土器の口縁部である。口唇部は幅広で、1.6cmを測り、下端部は丸みをもつ。口唇部の上下端にはヘラによる刻目をめぐらす。口唇部には横方向刷毛目を施し、上にナデを加えている。外面は横方向のヘラ研磨であるがやや雑。内面は粘土帯を貼り付け肥厚させ、下端に段を作り出している。丁寧なヨコナデ調整が加えられる。4、前者同様に大型の壺形土器の口縁部である。口唇部は平坦で、下端に刷毛目原体による刻目が入れられる。外面はヨコナデ調整、内面は横方向の刷毛目調整である。5、7～10、12～15は壺形土器、5、口縁は「く」の字形をなす。口縁は胸部に粘土帯を外傾接合で貼り付けた特異な例である。粘土帯は接合のための指圧痕で凹凸が著しい。接合部下端には段ができるが、意識したものではない。口唇部全面に刷毛目原体による刻目をめぐらす。口縁部の内外面はヨコナデ調整、胸部外面は横方向の刷毛目調整、ススが付着する。内面は胸部と口縁部の境がわずかに張り出す。胸部内面は横方向の板ナデ調整である。6、は中型の壺形土器の胸部破片。頸部と胸部の境に段が形成されるが明瞭ではない。内面にも段ができているが外面同様に明瞭ではない。外面には段のところから胸部上半にかけて4条の細かい平行沈線が施文されている。彩文は観察できないが、細沈線と彩文を組み合わせた文様が施文されていたと考えられる。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。内面はヨコナデ調整である。外面の一部に黒色に塗られた。



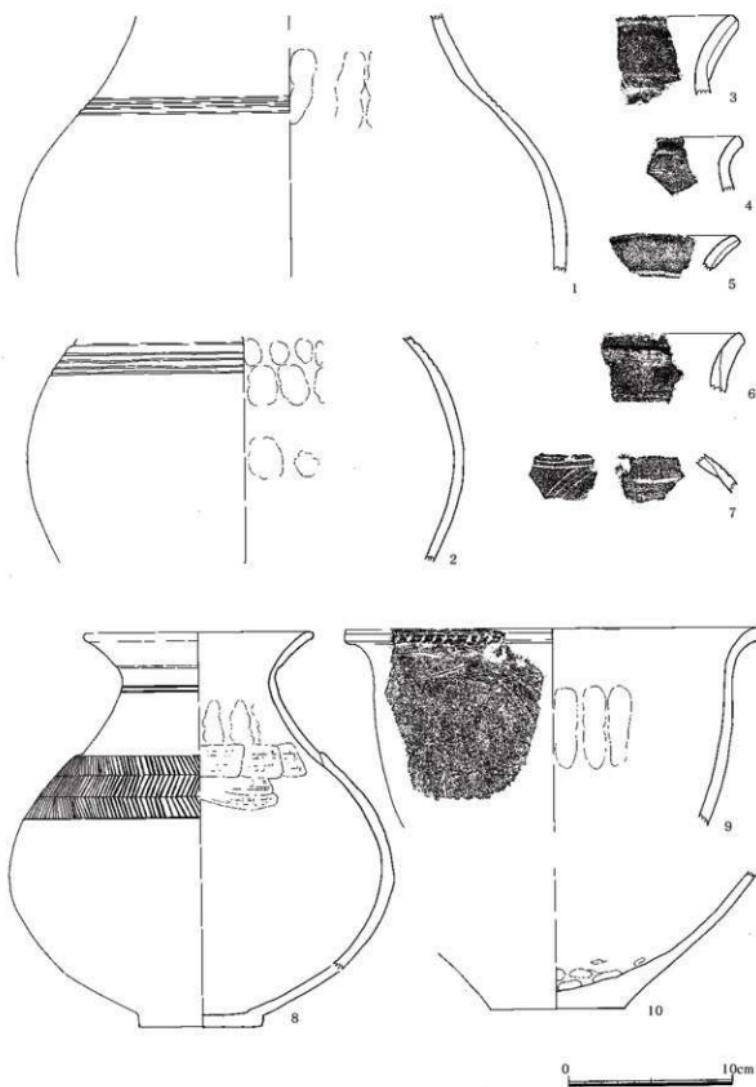
0 10cm

第73図 弦状漆出土土器実測図V

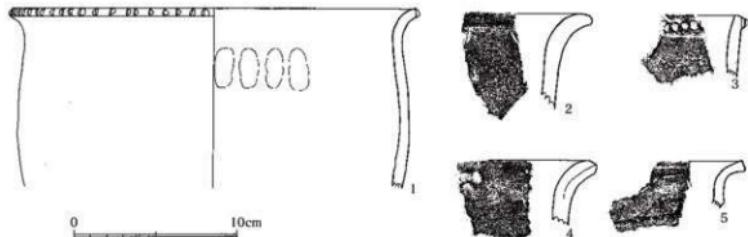
れた痕跡がある。胎土は精製され極めて良質である。内外面ともに黄白色をなす。7、口縁部は逆L字形をなす。口唇部にヘラによる刻目をめぐらし、口縁部下に低い断面三角形の突帯を貼り付ける。外面は斜方向の板ナデ調整である。8、口縁は如意形をなす。口唇部下端にヘラによる刻目をめぐらす。刻目の上位に凹線1条をめぐらし、刻目の部分を突帯のように見せている。外面は縦方向の刷毛目調整後、口縁下はヨコナデ、その下は斜方向のナデを加えている。ナデの境に刷毛目原体の刺突が施される。内面は口縁部に粗い横方向の刷毛目を施した後にヨコナデを加えている。9、口縁部は逆L字形をなす。断面三角形の粘土紐を貼り付けている。外面は縦方向の粗い刷毛目を施し、口縁下にはヨコナデを施している。内面は粗い斜方向の刷毛目を施し、他はナデ調整である。上半部に指圧痕がある。10、口縁は如意形をなす。口唇部下端にヘラによる刻目をめぐらす。外面の口縁下は横方向の刷毛目を施した後、縦方向の板ナデ、その下は斜方向の板ナデ調整である。ナデの方向の境には細かく浅い沈線1条をめぐらし、口縁と沈線の間を区分するように縦の浅くて細い沈線を等間隔に施している。口縁内側はヨコナデ調整、その下位に指圧痕がある。11、壺形土器の口縁部、口唇部は平坦で上下端にヘラによる刻目をめぐらす。口唇部はヨコナデ調整、外面は斜方向の粗い刷毛目を施した後にヨコナデを加えている。内面は粗い横方向の刷毛目を施した後にヨコナデを加えている。12、中型壺の頸部から胴部にかけての破片。頸部と胴部の境に細沈線をめぐらし、小さな段が形成される。段の下には等間隔で細沈線3条がめぐらされている。この細沈線の間に彩文で文様が施されたと考えられるが、彩文は消えている。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面はヘラナデ調整である。胴部の内側には粘土帶の幅で段ができる。内外面ともに黄白色をなす。13、口縁は如意形をなす。口唇部全面にヘラによる刻目をめぐらし、上端部にヘラケズリがある。外面は横方向の細かい条痕を施した後にヨコナデを加えている。内面は細かい横方向の刷毛目を加えている。14、口縁は逆L字形をなす。口唇部にヘラによる刻目をめぐらす。外面は縦方向の板ナデ調整、内面はナデ調整である。15、口縁は如意形をなす。口唇部は平坦、ヨコナデ調整。外面は縦方向の刷毛目を施した後、斜方向のヘラ研磨が施される。内面は口縁部に横方向の刷毛目を施した後、ヨコナデ調整が加えられる。

(6) 第5層以下の土器

第74図1、大型の壺形土器の頸部から胴部にかけての破片である。頸部の復元径24.2cm、胴部最大径は33.8cmを測る。頸部と胴部の境にわずかな段ができる。段から下位に4条の平行した細沈線をめぐらす。外面は横方向の刷毛目調整を加えた後に横方向の丁寧なヘラ研磨調整を加えている。内面は胴部が不定方向のヘラ研磨調整である。胴部上半から頸部にかけて縦方向の指圧痕が並列して残る。2、中型壺の胴部破片。頸部復元径21.0cm、胴部最大径26.8cmを測る。頸部と胴部の境から下位にかけての破片。頸部と胴部の境から下位にかけて5条の平行細沈線をめぐらす。外面は横～斜位の丁寧なヘラ研磨調整、内面はナデ調整で、3段に指頭圧痕がみられる。3、大型壺の口縁部破片。外面に粘土帶を貼り付け肥厚させる。下端に小さな段ができる。口唇部は平坦で粘土の接合部が凹線状に残る。内外面は横方向のヘラ研磨調整。黄土色をなす。4、中型壺の口縁部破片。口唇部は丸くおさめる。内外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。黒色をなす。5、中型壺の口縁部。外面に粘土帶を貼り付け肥厚させる。下端の段は明瞭である。肥厚帶の幅は狭い。口唇部は平坦。内外面は横方向のヘラ研磨調整。黄土色をなす。6、大型壺の口縁部破片。口縁外面には粘土帶を貼り付け肥厚させる。下端の段は明瞭である。内外面は横方向のやや雑なヘラ研磨調整。黄褐色をなす。7、中型壺の胴部破片。頸部との境に3条の平行沈線をめぐらす。その下に左下がりの3条単位の弧状の平行沈線を施文する。弧状八字形文になると考えられる。外面は横方向の丁寧なヘ



第74図 弦状漆出土土器実測図VI



第75図 弦状縫出土土器実測図VII

ラ研磨調整、内面は粘土接合部が明瞭に残りやや雑な横方向のヘラ研磨を施す。色調は外面が黄赤色、内面が黄白色をなす。8、中型の壺形土器である。胴下半部と底部を失うから全体形を知ることができる。底部は円盤貼り付け状の底部になると推測され、胴部は大きく張り出し、球状よりやや扁平である。胴部最大径は胴中位にあり、24.6cmを測る。胴部と頸部の境には明瞭な段が形成され、段はシャープである。頸部は内傾しながら立ち上がり。口縁部は緩やかに外傾し、直線的に伸びる。口縁部はわずかに肥厚し、頸部との境に緩やかな段が形成される。内外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。頸部内面には指圧痕が残る。内面の頸部と胴部の接合によってできる段は横方向の丁寧なヘラケズリによって削り取られている。小壺の場合は段が明瞭に残るが、本例の場合は手首が壺の内部に入るために行われたものであろう。外面と口縁部の内面は全面が顕料で黒塗りされ、その上に赤色顔料によって彩文文様が施文される。彩文文様は口縁部内側に縦の短い平行線をめぐらし、外面の口縁部と頸部の境よりやや下に2条の平行線をめぐらし、頸部と胴部の境から胴上半部に3段の有輪羽状文を施文している。胎土は精製され極めて良質である。9、壺形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。胴部はわずかに外傾しながら丸みをもって立ち上がる。口縁部は緩やかにカーブを描いて大きく外反する。口唇部は平坦に仕上げられ、口唇部の下端にヘラ状工具により刻目が施文される。刻目はほぼ等間隔に的確に刻まれ、外面は縦～斜方向のヘラナナデ調整、口縁部にヨコナナデ調整を施す。内面の口縁部はヨコナナデ調整。胴部に指圧痕が並列して残っている。胴部内面はヘラナナデ調整である。色調は外面が黒褐色、内面は黄土色～褐色をなす。外面にススカ付着する。復元口径25.8cmを測る。10は大型壺の底部である。安定した平底、胴部は大きく外傾して立ち上がる。外面は横方向のヘラ研磨調整、内底部には指頭痕が顕著に残っている。底部径8.3cmを測る。色調は外面が褐色、内面が黄白色～褐色をなす。

第75図1、壺形土器の口縁部から胴部にかけての破片。土部は膨らみ、口縁部は緩やかに外反する。口唇部は丸くおさめ、全面にヘラによる刻目を施文している。外面は磨滅し調整痕は明らかでない。内面は胴部に指圧痕が並列して残っている。2、壺形土器の口縁部である。口縁は大きく外反する。口唇部は丸くおさめる。外面は横方向のヘラ研磨、内面は口縁部横方向のヘラ研磨、頸部は斜方向の刷毛目調整後研磨を加えている。外面と口縁部の内側は丹塗りされている。3、は刻目突帯文土器である。突帯はB、刻目は刷毛目原体で施文している。外面には斜方向の刷毛目調整が施される。4、大型の壺形土器の口縁部である。口唇部は丸くおさめる。外面は横方向のヘラ研磨、内面は斜方向の刷毛目を施した後に、口縁部に横方向のヘラ研磨を加える。内外面ともに丹塗りである。5は浅鉢形土器。胴部上半で屈曲し、その上はほぼ垂直に立ち上がり口縁部は大きく外反する。口唇部は平坦で沈線1条がめぐる。沈線内に赤色顔料が残る。内外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整であるが、器面が荒れて遺存状態が悪い。内外面は褐色をなす。

第7章 土製品、その他

1. 土製品

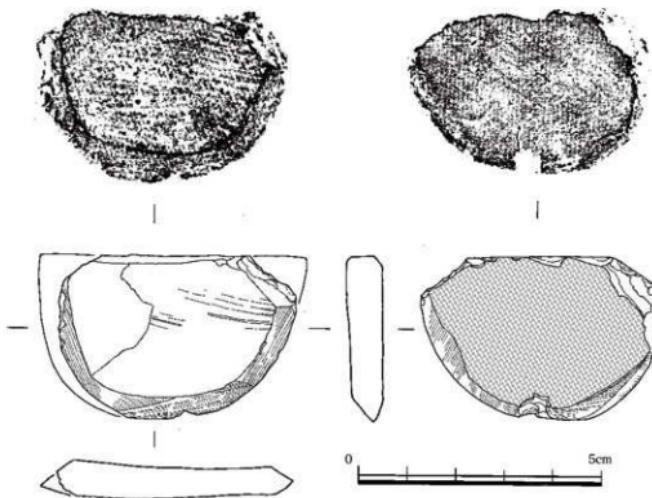
(1) 土器片利用の刃器

(第76図) 土器は外面が丹塗り研磨され、内面は斜位の刷毛目で調製され縦方向に2条の指圧痕がみられる。また、一部に赤色顔料が滴り落ちた痕跡が認められる。以上からこの破片は夜臼式の壺形土器の頸部破片と見られる。破片を加工した再加工品である。全体形は半月形をなすとみられるが、使用による磨滅と破損によりやや変形している。現存長4.8cm(復元長5.5cm)、幅3.3cm、厚さ0.6~0.7cmの小型品である。背の部分は一部に割れ口が残るもの、平坦に研磨されている。他の部分は両面からの研磨によって刃部が形成されているが、刃部形成の研磨は土器の内面側からがより強く刃部は結果的に偏り刃をなす。

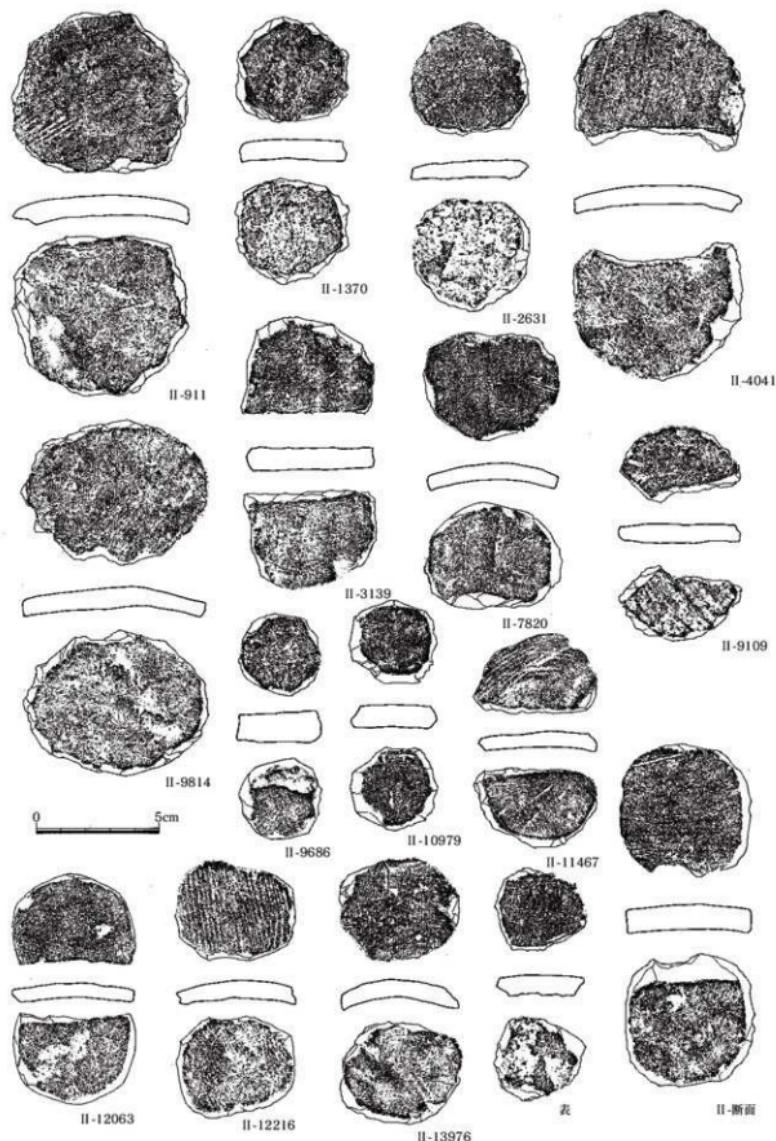
(2) 円盤形土製品

土器片を利用して円形に整形したものである。以下、それぞれについて説明を加える。

II-911は大型の壺形土器の胴部破片を利用している。周縁に打削を加えて不整の円形に整形している。土器の外面は刷毛目調整を加えた後にやや粗いヘラ研磨を施している。内面は不定方向のヘラナデ調整である。全体に湾曲している。長さ7.1cm×幅6.5cm、厚さ0.9cm、重さ49.96gである。II-1370は中型の壺形土器の胴部破片を利用している。周縁にやや粗い打削を加えて整形している。土器は外面がヘラ研磨調整、内面はヘラナデ調整である。胎土には石英、長石、

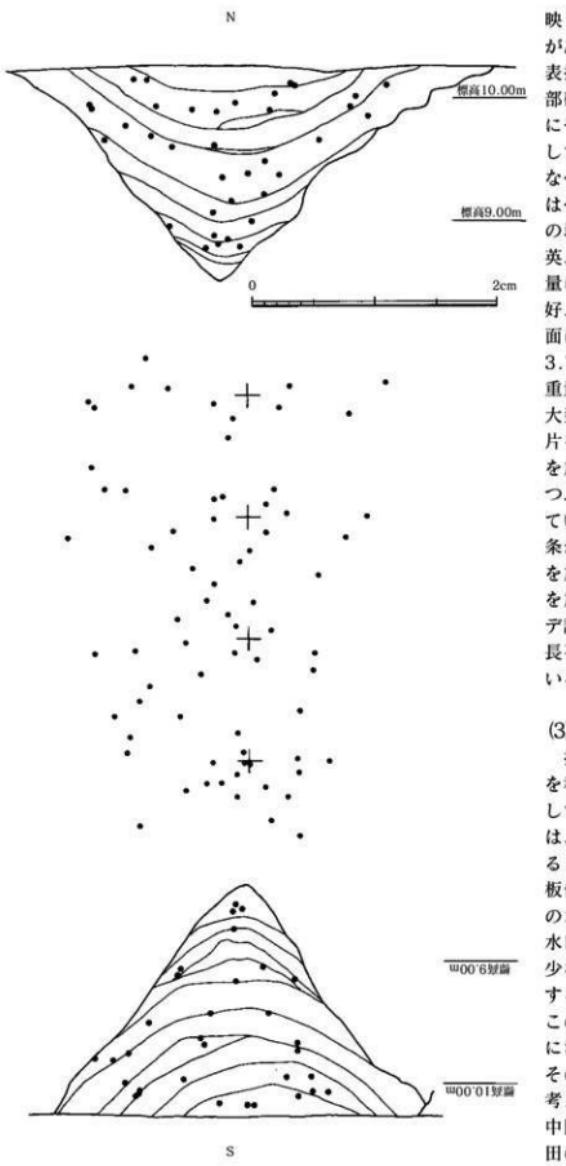


第76図 土製品実測図 I



第77図 土製品実測図 II

金雲母の砂粒を多量に混入している。焼成は良く、色調は黄白色をなす。大きさは4.7cm×4.4cm、厚さ0.85cm、重量20.00gである。II-2631は中型の壺形土器の胸部破片を利用。周縁に細かい打削を加え、形を整えている。土器の外面は丁寧なヘラ研磨を加えている。内面は器面が剥離しているために不明。胎土には石英、長石の砂粒を多量に混入している。焼成は良好、色調は赤褐色をなす。大きさは4.9cm×4.4cm、厚さ0.7cm、重量18.37gである。II-3139は中型の壺形土器の胸部破片を利用している。周縁にやや粗い打削を加えて整形している。半分を残すのみである。土器は内外面ともにヘラナデ調整である。胎土には石英、長石の砂粒を多量に混入している。焼成は良く、色調は外面が黄赤色、内面が灰白色をなす。大きさは5.3cm×4.0cm、厚さ0.95cm、重量22.14gである。II-4041は大型の壺形土器の胸部破片を利用。周縁に細かい打削を加え、形を整えているが一部欠失している。全体に湾曲している。外面は丁寧なヘラ研磨を加えている。内面はナデ調整である。胎土には石英、長石の砂粒を混入しているが良質である。焼成は良好、色調は黄褐色。大きさは5.2cm×4.9cm、厚さ0.8cm、重量36.21gである。II-7820は中型の壺形土器の胸部を利用している。周縁に細かい打削を加え、形を整えている。全体が湾曲している。土器は内外面ともに丁寧なヘラ研磨を加えている。胎土は精製され極めて良質。焼成は良く、色調は外面が黄褐色、内面が灰褐色である。大きさは5.5cm×4.4cm、厚さ0.65cm、重量19.76gである。II-9686は小型の壺形土器の底部を利用したと考えられる。周縁部に細かい打削を加えて整形している。土製円盤としては小型品である。土器の内外面は丁寧なヘラ研磨調整と考えられるが、詳細は不明である。胎土は精製され極めて良質である。焼成は良く、色調は白灰色である。大きさは3.3cm×3.2cm、厚さ1.35cm、重量13.80gである。II-9814は大型の壺形土器の胸部破片を利用。周縁に細かい打削を加え、梢円形に整形している。土器の外面はヘラ研磨調整、内面は刷毛目調整を加えた後にヘラナデ調整を加えている。胎土には石英、長石、金雲母の砂粒を多量に混入している。焼成は良好、色調は黄白色をなす。長さ7.6cm×幅5.9cm、厚さ0.85cm、重量46.58gである。II-9109は甕形土器の胸部を利用。周縁に細かい打削を加え形を整えているが、約半分を失う。土器は外面が丁寧なヘラナデ調整である。内面は貝殻条痕が施されている。胎土には石英、長石の砂粒を多量に混入している。焼成は良く、色調は外面が褐色、内面が赤褐色をなす。大きさは4.9cm×2.9cm、厚さ0.75cm、重量11.47gである。II-10979は大型の壺形土器の胸部破片を利用している。周縁に細かい打削を加えて整形している。外面はヘラ研磨調整、内面はヘラナデ調整である。胎土には石英、長石、金雲母の砂粒を多量に混入している。大きさは3.6cm×3.15cm、厚さ0.9cm、重量14.67gである。II-11467は中型の壺形土器の胸部を利用。周縁に細かい打削を加え、形を整えているが、約半分を失う。土器は外面に刷毛目調整を加え、上にヘラ研磨を加えているが不明瞭である。内面は丁寧なヘラナデ調整である。胎土は精製され極めて良質。焼成は良く、色調は内外面とともに黄白色をなす。大きさは5.1cm×3.2cm、厚さ0.65cm、重量10.64gである。II-12063は中型の壺形土器の胸部破片を利用している。周縁に打削を加えた後にさらに研磨して形を整えている。ただし、割れて三分の一を失う。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整を加えている。内面は丁寧なナデ調整である。胎土は精製され極めて良質である。焼成は良好で色調は黄白色である。大きさは5.1cm×3.6cm、厚さ0.6cm、重さ14.68gである。II-12216は甕形土器の胸部破片である。周縁に細かい打削を加え、形を整え部分的に研磨を加えている。全形は梢円形をなす。土器は外面に刷毛目調整、内面に不定方向の刷毛目調整を加えている。胎土には石英、長石、金雲母の砂粒を多量に混入しているが良質。焼成はやや甘い。色調は外面が黒褐色、内面は赤褐色をなす。大きさは4.95cm×4.1cm、厚さ0.75cm、重量18.96gである。II-13976は小型の壺形土器の胴下半部の破片を利用している。周縁に細かい打削を加えて整形している。土器自体の持つ湾曲が著しい。土器は外面が刷毛目調整後にやや粗いヘラ研磨調整、内面はナデ調整であるが凹凸が著しい。胎土には石英、長石、金雲母の細かい砂粒を多量に混入しているが比較的良質である。焼成は良好、色調は外面が黒褐色、内面が灰褐色である。大きさは4.95cm×4.1cm、厚さは土器を反

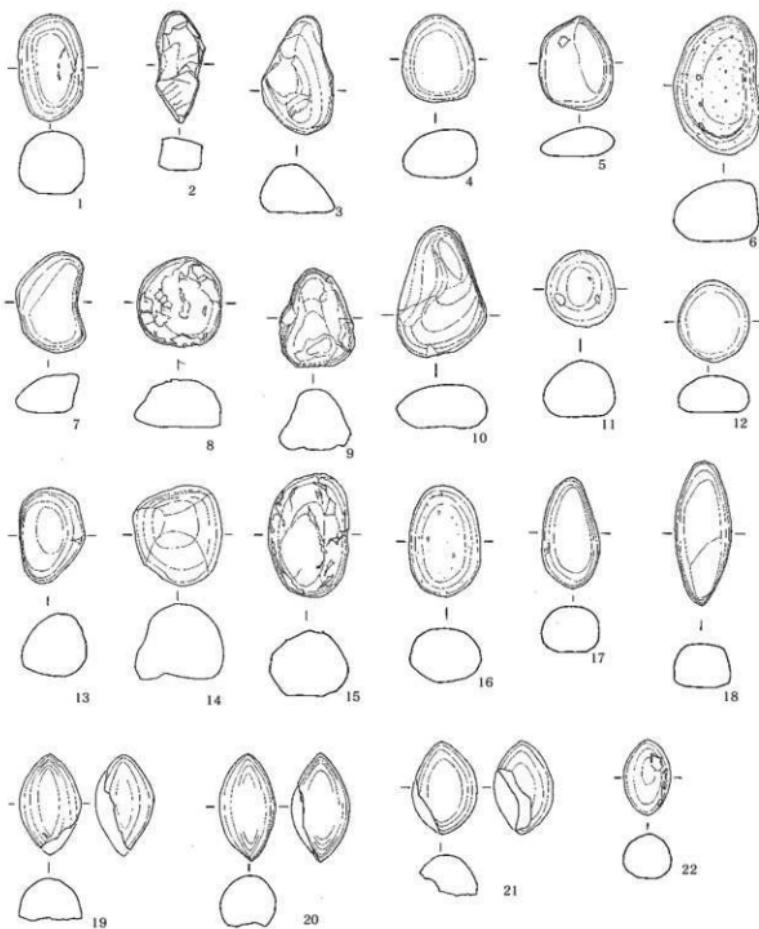


第78図 環濠第2区投弾出土状況

映し0.6cm～0.8cmと大きな差がある。重量16.22gである。表採品、中型の壺形土器の胴部破片を利用している。周縁にやや粗い打削を加えて整形している。土器の外面は丁寧なヘラ研磨調整である。内面はヘラナデ調整であるが表面の剥離が著しい。胎土には石英、長石、金雲母の砂粒を多量に混入している。焼成は良好、色調は外面が赤黄色、内面は白黄色をなす。大きさは3.7cm×3.4cm、厚さ0.8cm、重量9.46gである。II-断面、大型の壺形土器の胴部上半破片を利用。周縁に細かい打削を加え整形し、打削の稜線をつぶすように粗い研磨を加えている。土器の外面は細沈線1条が施文される。刷毛目調整を加えた後に、粗いヘラ研磨を加えている。内面はヘラナデ調整である。胎土には石英、長石の砂粒を多量に混入している。

(3) 投弾

投弾には土製投弾と自然石を利用した投弾の2種類が出土している。自然石利用の投弾は、これまであまり注意されることはない。しかし、板付遺跡G-7a・7b調査区の水田遺構の調査において、水口を中心に小さな自然石が少なからず水田耕土から出土することに気づいた。自然にこのような自然石が耕作土中に混入するとは考えられず、その理由を考えた。いろいろ考えた結果、思いついたのが中国の画像石の絵である。水田の中から鳥に向かって弓を射ている絵である。鳥害から



0 5cm

第79図 投弾実測図

投擲(自然石)一覧

NO	遺物番号	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石材・その他	備考
1	II-1439	54.4	30.1	23.0	66	砂岩	叩石
2	II-1580	50.4	34.4	33.8	88	花崗岩	
3	II-2143	43.4	32.5	28.6	59	花崗岩	
4	II-5161	56.4	34.0	24.1	68	安山岩	
5	II-2110	45.8	37.1	28.1	62	花崗岩	
6	II-1715	50.9	32.8	24.2	51	花崗岩	叩石
7	I-17	43.0	26.2	24.3	40	花崗岩	
8	II-2076	38.8	29.1	20.4	34	花崗岩	
9	II-1744	45.9	36.6	32.9	72	花崗岩	
10	II-1370	35.5	34.1	19.0	28	花崗岩	
11	II-2148	42.0	26.6	20.7	33	花崗岩	
12	II-1265	42.8	22.9	22.1	35	花崗岩	
13	II-2180	45.0	29.1	20.8	31	安山岩	
14	II-2170	42.2	27.4	23.9	37	礫岩	
15	I-37	36.1	26.6	26.5	34	花崗岩	
16	I-21	30.7	23.6	18.0	20	花崗岩	
17	II-1891	39.0	35.7	29.9	50	礫岩	
18	I-751	31.6+α	35.1	21.4	28+α	砂岩	
19	II-1842	50.8	34.1	23.1	53	砂岩	
20	?	46.7	38.7	24.2	50	砂岩	
21	II-12130	41.9	37.2	25.8	52	花崗岩	
22	II-7218	39.1	30.9	28.0	41	花崗岩	
23	I-83	50.4	25.3	26.6	49	花崗岩	叩石
24	弦VI	58.7	23.0	16.7	34	砂岩	
25	?	37.6	33.5	28.3	45	花崗岩	
26	II-21667	42.6	25.8	14.3	18	頁岩	
27	II-1548	59.0	33.7	31.1	74	花崗岩	
28	II-1532	40.3	26.5	25.3	37	花崗岩	
29	II-819	36.7	24.0	15.7	18	花崗岩	
30	II-1084	37.5	29.7	10.9	18	砂岩	
31	?	32.0	26.4	24.5	30	花崗岩	
32	II-1006	41.9	31.5	20.6	34	砂岩	
33	II-1665	30.8	28.3	22.7	27	安山岩	
34	II-174	29.3	28.9	14.4	19	安山岩?	
35	?	49.0	30.9	26.3	39	花崗岩	
36	?	33.9	23.9	19.5	19	安山岩	
37	II-2170	46.6	23.5	15.1	25	花崗岩	

38	II-2037	52.6	28.0	22.6	42	花崗岩	
39	II-2198	35.4	26.7	15.4	22	砂岩	
40	?	42.2	32.9	20.5	36	花崗岩	
41	?	59.3	33.0	31.4	75	礫岩	
42	II-1931	36.0	25.9	21.2	23	安山岩	
43	II-1826	40.3	25.7	22.9	36	花崗岩	
44	?	36.3	23.6	21.1	26	花崗岩	
45	II-1742	50.7	31.8	23.3	46	花崗岩	
46	?	49.0	32.2	22.8	44	花崗岩	
47	II-564	34.4	25.0	18.7	25	頁岩	
48	II-2058	50.0	26.9	18.7	33	安山岩	
49	II-785	37.6	28.1	12.5	20	花崗岩	
50	II-295	33.3	26.3	14.4	16	安山岩	
51	?	35.8	25.2	16.2	18	砂岩	
52	II-7065	48.3	29.7	25.4	46	花崗岩	
53	?	43.5	32.2	18.3	31	花崗岩	
54	II-12102	40.3	28.4	26.5	45	花崗岩	
55	II-2083	28.8	25.6	9.1	8	砂岩	
56	?	41.6	19.8	16.1	19	花崗岩	
57	II-2175	34.4	24.2	23.7	25	花崗岩	
58	II-1118	38.5	29.3	19.8	32	花崗岩	
59	II-1753	37.9	26.7	24.5	31	砂岩	
60	?	50.3	38.1	26.8	72	花崗岩	
61	II-2160	46.8	34.5	21.5	38	花崗岩	
62	?	32.9	26.8	20.2	24	花崗岩	
63	II-2011	49.2	31.3	27.6	53	花崗岩	
64	II-1661	53.2	36.1	17.0	51		
65	I-51	45.4	18.3	13.9	17		
66	II-1183	38.7	28.2	19.4	32	砂岩	
67	II-915	38.4	18.2	11.5	13	安山岩	
68	II-2128	34.4	28.0	16.6	17	花崗岩	
69	II-2044	43.1	27.0	25.7	36	花崗岩	
70	II-16817	40.7	31.1	27.5	43	花崗岩	
71	II-1592	46.3	23.4	15.7	18	砂岩	
72	II-7004	33.4	26.4	24.5	22	花崗岩	
73	II-1135	40.9	26.8	16.1	21	安山岩	
74	II-3310	44.8	23.4	20.5	29	砂岩	
75	II-796	47.8	29.2	18.8	31	砂岩	
76	II-779	35.4	30.7	19.1	25	安山岩	

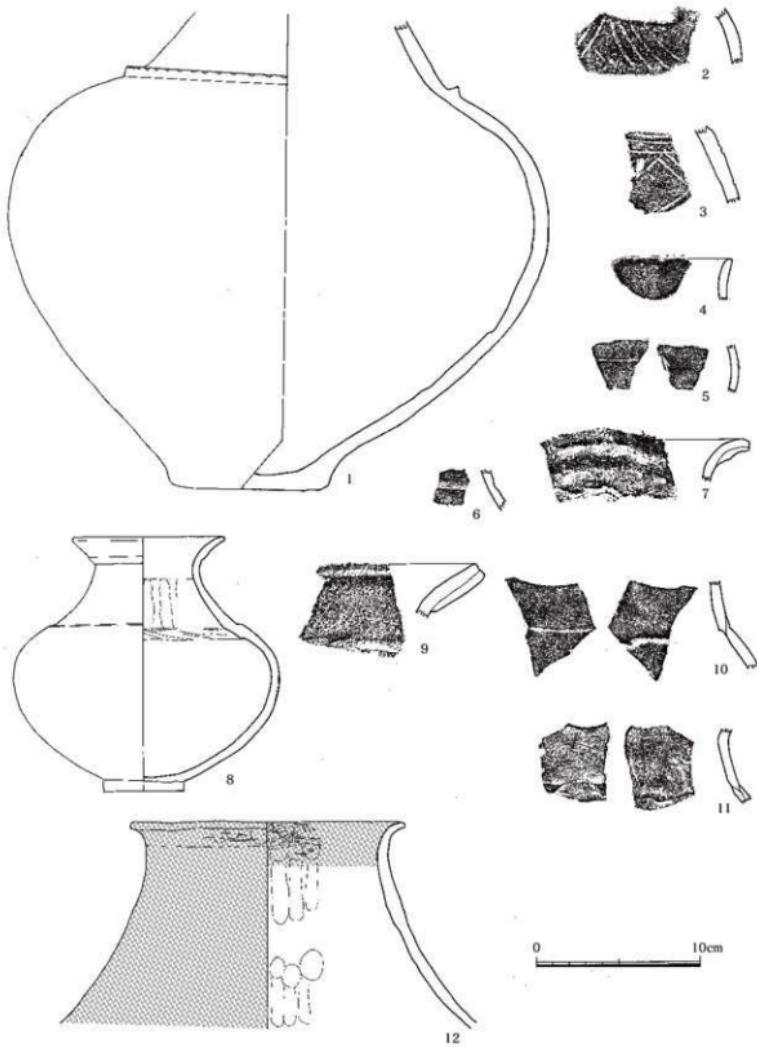
77	SC-15 NO845	35.6	20.9	15.6	16	砂岩	
78	II-362	34.5	21.4	18.2	17	花崗岩	
79	II-8180	37.5	21.6	12.8	17	砂岩	
80	II-1384	31.8	28.4	21.8	21	頁岩	
81	?	37.7	27.8	11.4	15	頁岩	
82	II-1181	31.3	29.6	15.3	19	花崗岩	
83	II-1743	33.2	28.9	14.0	19	頁岩	
84	?	35.9	29.7	18.1	23	花崗岩	
85	II?	32.9	27.7	23.0	26	花崗岩	
86	II-1301	33.3	20.9	19.5	17	花崗岩	
87	I-45	37.2+ α	25.9	16.6	25+ α	砂岩	
88	II-1992	28.1	20.6	18.0	16	砂岩	
89	II-1590	30.0	18.1	9.7	7	安山岩	
90	?	30.9	34.0	11.0	15	砂岩	
91	?	30.4	29.9	9.5	14	安山岩	
92	II	30.4	20.8	11.2	11	花崗岩	
93	SC-15 NO887	30.1	25.9	17.5	16	花崗岩	
94	II-1936	30.5	22.3	16.3	15	頁岩	
95	?	28.3	21.0	15.7	12	花崗岩	
96	II-1888	28.9	19.0	13.9	10	安山岩	
97	II-891	34.2	21.5	15.9	18	頁岩	
98	II-391	20.8	18.3	9.7	6	砂岩	
99	II-13881	29.9	19.2	18.5	10	土製投弾	

作物を守っている状況を示している。弥生時代においても鳥害から作物を守るのは重要な仕事である。特に弥生時代開始期は稲作農耕の定着期であることを考慮すると、その重要性は大きなものであったと考えられる。あえて、水田に石を投げ込むのは、次の耕作を考えると害をなす行為である。それまでして鳥害から作物を守った弥生人の苦労が偲ばれる。水田耕作土から出土する自然石を投弾を考えるのは、合理的な解釈と考えている。水田から出土する自然石と大きさ、形状、重量が全く同じものが環濠からも多量に出土している。出土状況は第78図に示した。出土量は発掘の精度にも関係し、最も細心の注意を傾けて調査した第2区が量的に多く、他の調査区では極端にその数を減じる。出土状況は第2区の状況である。平面的には特に集中する所はない、全面に均一な分布を示している。層位的にも一つの層に集中することはない。投弾は鳥追いだけでなく、武器としての使用が主であったことは、他国の例や民族例から知ることができる。環濠内にどのような状況で入り込んだかは、いろいろと考えられるが、その存在は重要である。次報告で石器も含めて検討することにする。

2. その他の遺物

遺構確認のために表土層を除去した調査区内から採集した遺物で、環濠に関係した遺物を紹介しておくこととする。採集したのは主にこれまで調査された地区で、壁の崩落などで表面に出てきたものである。第80図に図示した。

1は大型壺である。底部から頸部までの破片があり、作団復元でほぼ全形を知ることができるが、口縁部を欠いている。底部は安定した平底であるが、使用による磨滅がみられる。胸部下半は大きく外傾しながら立ち上がり、胸部最大径は上位にある。頸部との境目に断面三角形の貼り付け突帯1条をめぐらす。頸部は内傾しながら直線的に立ち上がる。外面は頸部から胸部中位までは横方向のヘラ研磨調整、胸部下半は斜方向のヘラ研磨調整である。ヘラ研磨はやや粗雑である。内面は胸部下半が縱方向、上半が斜方向、頸部が横方向のヘラナデ調整である。色調は外面が黄褐色～黒褐色、黒斑がある。内面は黄土色である。底部径9.7cm、頸部径20.5cm、胸部最大径33.2cmを測る。2は小型壺の胸部上半の破片。4条の平行沈線からなる弧状文が施文されているが文様構成は明らかでない。外面は横方向のヘラ研磨調整。内面は横方向のヘラナデ調整である。胎土は精製され良質である。色調は内外面ともに黄土色である。3は小型壺の胸部上半の破片。頸部との境に小さな段が形成される。その下に2条の平行細沈線をめぐらす。約1.5cmの間隔を置いてさらに1条の細沈線をめぐらす。細沈線に限られた空間には2条の平行細沈線で山形文が施文される。さらに下に細沈線が斜めに施文されるが、全体の文様構成は明らかでない。色調は外面が黄灰色、内面が黄白色をなす。4は中型壺の口縁部破片。わずかに外反する。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整。色調は外面が褐色～黒褐色、内面は黒褐色をなす。5は小型壺の胸部中位の破片。細沈線1条をめぐらす。文様帶の下の区画線と思われる。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面は横方向の丁寧なヘラナデ調整である。色調は内外面ともに黄土色をなす。6は中型壺の胸部破片。頸部と胸部の境に段が形成される。中に細沈線1条をめぐらされる。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面はヘラナデ調整である。色調は外面が褐色、内面が黄灰色である。7は中型壺の口縁部破片。口縁部は端部で屈曲して外反する。外面には粘土帶を貼り付けて肥厚させる。下端に段が形成されるがやや不明瞭である。口唇部は平坦に仕上げている。全体に雑な作りである。外面は横方向のヘラ研磨調整である。色調は内外面ともに褐色をなす。8は小型壺である。底部と胸部の一部を失うがほぼ全形を知ることができる。底部は貼り付け部分で外れているので、円盤貼り付けであることがわかる。胸部は外傾しながら立ち上がり、胸部最大径は上位にある。胸部と頸部の境明瞭な段が形成されている。頸部は内傾しながら直線的にのび、口縁部は屈曲して外反する。口縁部外面には粘土帶を貼り付けて肥厚させる。下端に段が形成されるが明瞭ではない。口唇部は丸くおさめている。外面と口縁部の内面は丁寧な横方向のヘラ研磨調整である。頸部内面には指圧痕が並列して残り上に横方向のヘラナデ調整を施し、平滑にしている。胸部と頸部の粘土接合部は明瞭な段として残っている。接合の仕方は胸部の器壁を頸部が挟み込むような形になる。胸部内面は横方向のヘラナデ調整である。胎土は精製され良質である。色調は黄赤色、内面は黄土色である。口径9.3cm、頸部径11.2cm、胸部最大径16.2cm、器高19cm以上である。9は大型壺の口縁部破片。外面に粘土帶を貼り付けて肥厚させる。肥厚帶の下端に段が形成され、比較的明瞭に残っている。口唇部は平坦に作り出される。平坦面中央部には粘土接合部が凹線状に残っている。外面は横～斜方向のヘラナデ調整、内面は横方向のヘラ研磨調整である。色調は外面が黄白色、内面が灰白色をなす。10は小型壺の頸部から胸部にかけての破片。頸部と胸部の境に沈線1条をめぐらし段が形成される。内面の頸部と胸部の粘土接合部は段ができるで明瞭に残っている。内外面は丁寧な横方向のヘラ研磨調整である。胎土は精製されて極めて良質である。色調は外面が黄土色～黄赤色、内面が黄赤色をなす。11は頸部破片。口縁部は緩やかに外反すると考えられる。境は不明瞭である。頸部と胸部の境の粘土接合部は頸部を内傾に接合した後に、外面に粘土帶を貼り付けるが、接合面には縱方向



第80図 その他の遺物実測図

細かい刷毛目調整を施し、接合を良くする工夫を行っている。内面には接合部の痕跡が低い段として残っている。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。内面は口縁部が横方向のヘラ研磨調整である。頸部には指圧痕が並列して残り、上に横方向のヘラナデ調整を施している。外面は茶色、内面は黄赤色をなす。12はわゆる夜白式土器の大型壺の口縁部から頸部にかけての破片である。頸部は内傾しながら立ち上がり、口縁部は緩やかにカーブを描きながら反転するが口縁部はわずかに外反する。口唇部は丸くおさめる。外面と口縁部内側の幅4cmの範囲を帯状に丹塗りし、丹塗りの範囲に丁寧な横方向のヘラ研磨を施している。頸部には頸部整形のための指圧痕や指頭痕が大きく二段に残っている。その上に斜方向の貝殻条痕調整を施し、さらにその上に不定方向のヘラナデ調整を加えている。色調は外面が丹色、素地は黄白色をなす。

第8章 板付遺跡をめぐる諸問題

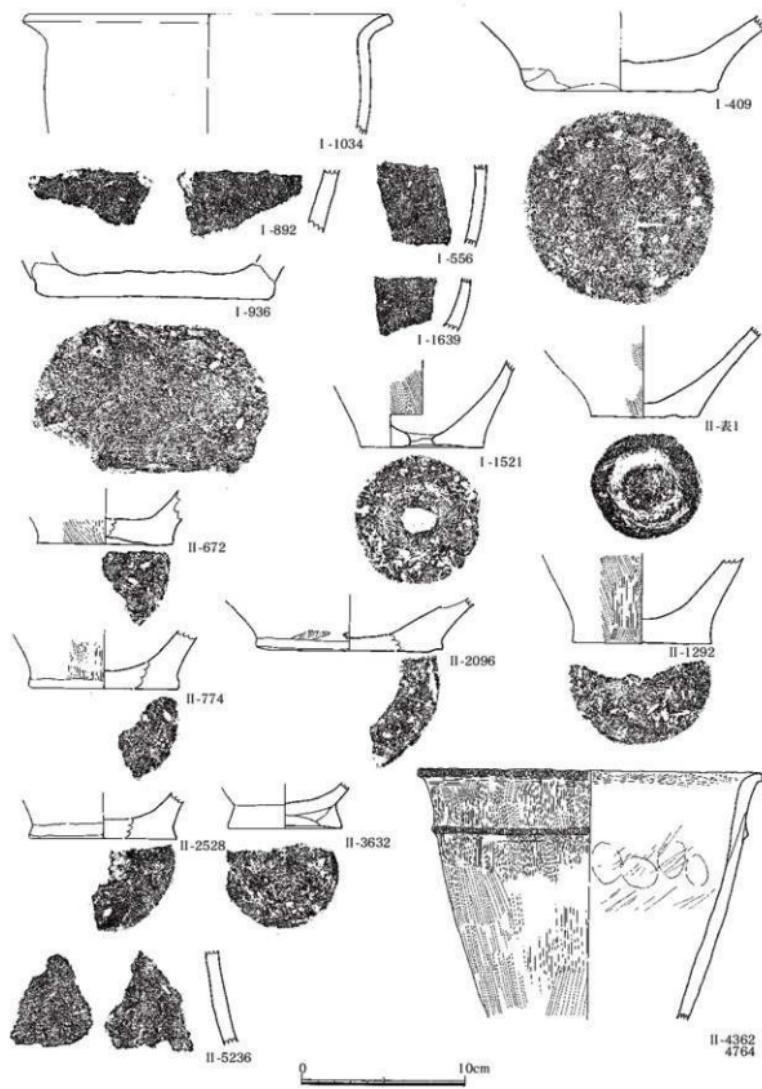
1. 土器圧痕について

板付遺跡において土器にモミ圧痕がついていることは、最初の学術的発掘調査である日本考古学協会を中心とする調査でも注意され、日本における稻作農耕の開始問題にも大きい貢献をしたことは記憶に新しいことである。今回の環濠の調査においてもモミ圧痕をはじめとする圧痕を検出することができた。

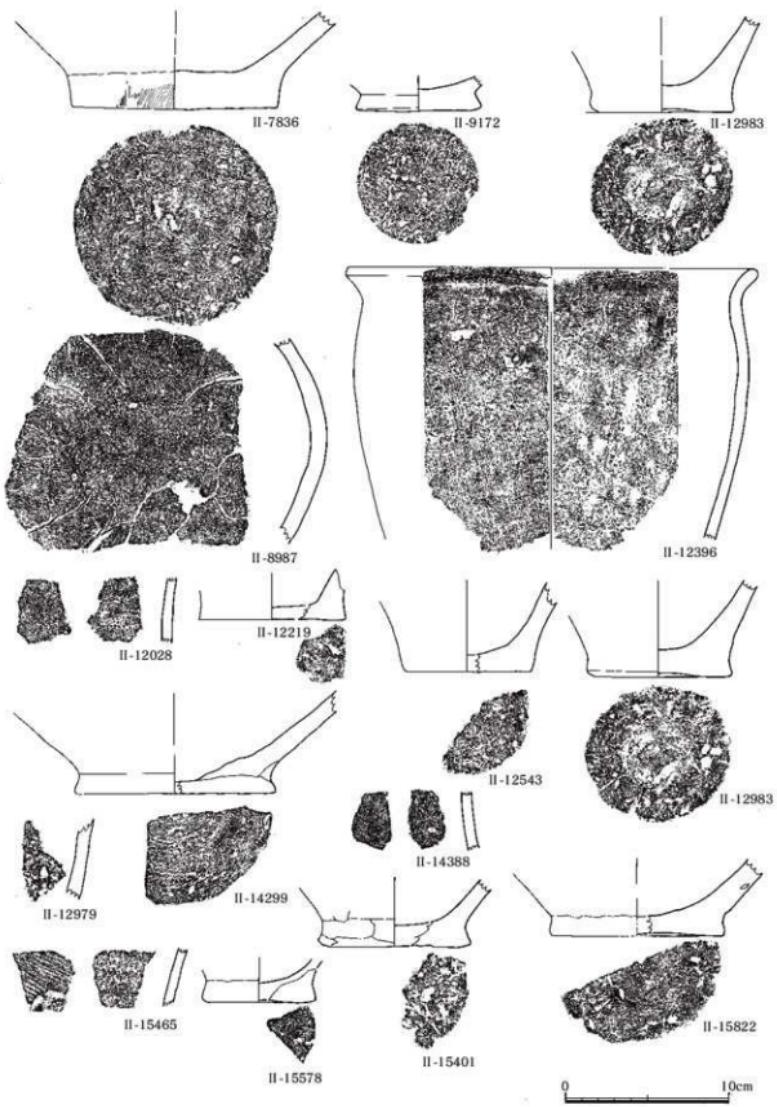
圧痕の検証は出土した土器、土製品すべてについて行い。以下の土器に圧痕を見出すことができた。土器と圧痕の諸例について紹介し、若干の考察を加えることにする。なお、圧痕資料すべてについて走査型電子顕微鏡（SEM）の写真をとっていないので、今回はSEM写真は省略した。次報告において正式な報告を行い、今回はその予報とする。

（1）圧痕の諸例

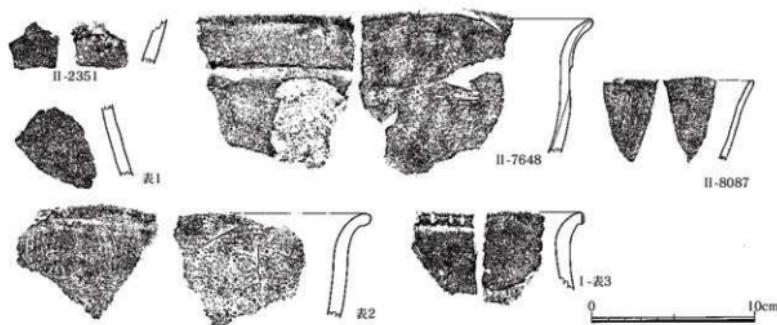
(1) I-409は大型の壺形土器の底部。底部径11.9cm。胸部は大きく外傾しながら立ち上がる。外面はやや粗雑な横方向のヘラ研磨調整である。全面丹塗りである。内面は丁寧なヘラナデ調整である。色調は外面が黄白色で赤色顔料が部分的にみられる。内面は黄灰色である。圧痕は底部の周縁近くの2ヶ所に確認できる。圧痕の一つは豆類と考えられ、他の一つはモミ圧痕と考えられるが、脇の存在や顆粒状突起列の存在がなく決め手を欠く。(2) I-556は甕形土器の胸部破片である。外面は縦方向の丁寧なヘラナデ調整、黄赤色をなすが一部にススが付着する。内面は板ナデ調整である。黄褐色であるが黒く変色している。圧痕は外面にある。圧痕には等間隔に筋がみられるので昆虫の幼虫とみられる。(3) I-892は大型壺の胸部破片。外面は刷毛目調整の上にヘラ研磨を加えている。内面はヘラナデ調整である。色調は内外面ともに黄赤色である。圧痕は内面にある。小さな木の葉状をなすが種の同定はできない。形状はワラビの羽片に似ている。(4) I-936は大型の壺形土器の底部。底部径14.5cm以上。胸部は欠失している。外底部はナデ調整、内底部は指頭による調整のため凹凸が著しい。色調は内外面ともに黄白色をなす。圧痕は底部の周縁近くに2ヶ所確認できる。圧痕はいずれもモミ圧痕。圧痕内部の一部に顆粒状突起列を確認することができる。(5) I-1034は甕形土器の口縁部の破片である。復元口径22.7cm。胸部がわずかに膨らみ、口縁部は大きく外反し、如意形をなす。口唇部は丸く取める。外面は縦方向のヘラナデ調整である黄褐色をなす。内面はナデ調整で、白黄色をなす。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整である。圧痕は内面の口縁部の口唇部近くに確認した。円形の小さな種子であるが、何であるかは同定できない。(6) I-1521は甕形土器の底部。胸部は外傾しながら立ち上がる。底部径8.5cm。底部は中央部がわずかにくぼみ輪状をなす。外面は縦～斜位の刷毛目調整、黄赤色をなす。内面はヘラナデ調整であるが、内底部は指圧による調整のため凹凸が著しい。黄褐色をなす。底部中央部に内面から穿孔を行う。孔径1.2cm。圧痕は底部の輪状部分に1ヶ所みられる。モミ圧痕、顆粒状突起列も確認できる。(7) I-1639は小型の壺形土器の胸部下半の破片である。胎土は精製され極めて良質である。外面は保存状態が悪く、調整は明らかでないが、丁寧なヘラ研磨調整と考えられる。赤黄色をなす。内面は丁寧なヘラ研磨調整、黄褐色をなす。圧痕は外面に1ヶ所確認した。状態は極めて良好、ヒエと考えられる。(8) II-表Iは甕形土器の底部。底部径7.7cm。底部には輪状に凹線状のくぼみが巡る。胸部は大きく外傾しながら立ち上がる。外面は縦方向の刷毛目調整、内面は板ナデ調整である。内外面ともに赤褐色をなす。圧痕は底部の凹線条の部分にモミ圧痕が2ヶ所確認できる。モミ圧痕には顆粒状突起列が明確である。(9) II-672は甕形土器の底部破片。復元底部径8.4cm。胸部はあまり外傾せず立ち上がる。外面は縦～斜位の刷毛目調整、内面は横方向のヘラナデ調整である。内外面は赤褐色をなす。底部の周縁近くにモミ圧痕が2ヶ所に確認できる。モミ圧痕は明瞭に残り、共に顆粒状突起列も確認できる。(10) II-774は甕形土器の底部破片である。底部端がわずかに外



第81図 庄痕土器実測図Ⅰ



第82図 圧痕土器実測図Ⅱ



第83図 圧痕土器実測図III

に張り出す。底部復元径9.2cm。胸部はあまり外傾せず立ち上がる。外面には縦方向の刷毛目調整を加え、その後に横方向のヘラナデ調整を加えている。内面は器面が剥離して不明瞭である。内外面ともに褐色をなす。圧痕は底部の周縁部に1ヶ所確認できる。モミ圧痕で明瞭に残るが顆粒状突起は確認できない。(11) II-1292は甕形土器の底部。底部復元径8.6cm、胸部はあまり傾きをもたず直線的に立ち上がる。外面には縦～斜方向の刷毛目調整を施す。黄褐色をなす。内面はナデ調整である。黄赤色をなす。圧痕は底部の周縁近くに1点確認した。豆類かと考えられる圧痕であるが同定できない。(12) II-2096は大型の壺形土器の底部。底部復元径11.4cm。胸部は大きく外傾しながら立ち上がる。外面は縦の刷毛目調整を加え、その上に横方向のヘラ研磨調整を施している。外面は丹塗りである。内面は剥離しているために不明。圧痕は周縁近くに1ヶ所確認できる。圧痕はモミ圧痕であることは間違いないが、顆粒状突起は不明。(13) II-2528は甕形土器の底部。復元底部径9.0cm。胸部はあまり外傾せず立ち上がる。外面は縦のヘラナデ調整、赤褐色をなす。内面は横方向のヘラナデ調整である。黄灰色をなす。圧痕は底部の周縁に1ヶ所のモミ圧痕を確認できる。圧痕は明瞭で、顆粒状突起もきれいに残っている。(14) II-3632甕形土器の底部破片である。底部径7.0cm、底部端は大きく外側に張り出し台形状をなす。胸部は外傾しながら立ち上がる。外底部はヘラ削りによって調整している。外面はヘラナデ調整、内面はナデ調整である。内底部は凹凸が著しい。圧痕は底部の周縁にある。大型の種子であるが同定できない。(15) II-4764、5009ほかは、甕形土器の口縁部から胸部にかけての破片である。復元口径21.0cm。胸部はあまり膨らまず直線的に立ち上がる。口縁部はわずかに外反し、如意形をなす。口唇部に刷毛状工具による刻目が施文される。口縁下にも1条の貼り付け突帯をめぐらし、同様の刻目を施文している。外面には縦方向のやや粗い刷毛目調整を加える。内面はナデ調整である。頸部には稜線ができる。内外面ともに黄白色をなすが、外面にススがつく。圧痕は内面の口縁部近くに1ヶ所確認した。小さな種子の圧痕である。(16) II-5236は大型壺の頸部破片。外面は斜位のヘラ研磨調整。内面はナデ調整である。内外面ともに黄土色をなす。圧痕は内面に1ヶ所確認した。細長い種子で中に1条の筋が通る。一見豆類のへそとも見えるが同定できない。(17) II-7836は大型の壺形土器の底部。底部径12.6cm。胸部は大きく外

傾しながら立ち上がる。外底部は横方向のヘラナデ調整である。胴部外面は細かい縦方向の刷毛目調整を加えた後に横～斜位のヘラ研磨調整を加えている。内外面ともに黄褐色～灰褐色をなす。圧痕は外底部の中央部に2ヶ所に、周縁部に1ヶ所の計3ヶ所がある。いずれもモミ圧痕であるが、圧痕の状態が悪く、顆粒状突起列は観察できない。(18) II-8987は大型の壺形土器の胴部破片。外面は丁寧なヘラ研磨調整、赤褐色をなす。内面は縦位～横位のヘラナデ調整。黄褐色をなす。圧痕は外面に1ヶ所確認した。モミ圧痕で極めて明瞭に残っている。顆粒状突起列も全面に残っている。(19) II-9172は中型壺の底部である。底部端は大きく外に張り出す。底部径7.7cm。底部側面はナデ調整、内面は丁寧なヘラ研磨調整。胎土は精製され極めて良質である。外面は赤褐色、内面は灰褐色をなす。圧痕は内底部にある。縦線が入っているが種子であるかどうかは判定できない。外底部のくぼみ数か所も圧痕の可能性があるが保存状態が悪い。(20) II-11779は土製品。扁平な梢円形の土製品で片側は指で押さえている。特別意味のある土製品ではない。片側の面に2ヶ所の圧痕がある。やや多きい圧痕と小さい圧痕であるが、両方も種子であることは間違いない。小さい圧痕はアワの可能性がある。(21) II-12028は壺形土器の胴部破片である。外面は斜位の刷毛目調整、内面はヨコナデ調整である。内外面も赤色をなす。圧痕は内面に1ヶ所ある。紡錘形をした圧痕で種子と考えられるが、同定できない。(22) II-12219は壺形土器の底部破片である。底部復元径9.0cm。底部は筒状をなしている。胴部はあまり外傾せず、立ち上がる。外面はヘラナデ調整、黄赤色をなす。内面は指頭による調整である。黄褐色をなす。胴部は粘土接合部で剥離していて、接合は外頃接合である。圧痕は底部の周縁部に1ヶ所確認した。モミ圧痕で一部に顆粒状突起列が確認できる。(23) II-12396は壺形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。復元口径25.4cm。胴部がわずかに膨らみ頸部はわずかに内傾する。口縁部は外反し、如意形をなす。外面は縦方向の刷毛目調整、口縁部から頸部にかけてはヨコナデ調整である。赤褐色～褐色をなす。内面は口縁部が横～斜位の刷毛目調整、胴部はナデ調整、胴上半部に縦に長い指圧痕が並列する。赤褐色をなす。圧痕は内面の胴中位にある。小さな種子である。ヒエとみられるが同定できない。(24) II-12543は壺形土器の底部。復元底部径7.8cm。胴部はあまり外傾せず立ち上がる。外面は縦のヘラナデ調整。赤褐色をなす。内面は縦のヘラナデ調整である。黒褐色をなす。圧痕は底部の周縁にモミ圧痕が1ヶ所確認できる。顆粒状突起列も明確である。(25) II-12979は壺形土器の胴部破片である。外面はヘラナデ調整である。褐色をなす。内面はナデ調整。黄土色をなす。圧痕は外面に1ヶ所確認した。ドングリ等の堅果類の果皮の圧痕である。(26) II-12983は壺形土器の底部。底部は中央部が円形にへこむ。底部径8.9cm。胴部はやや外傾しながら立ち上がる。外面は縦のヘラナデ調整である。黄赤色をなす。内面は斜位のヘラナデ調整、凹凸が著しい。黄褐色をなす。圧痕は底部の周縁部についている。モミ圧痕が6ヶ所にみられる。モミ圧痕にはすべて顆粒状の突起列が確認できる。(27) II-14299は大型の壺形土器の底部。復元底部径12.4cm。底部端は若干外に張り出す。底部と胴部の境は明確である。胴部は大きく外傾しながら立ち上がる。外面は縦の丁寧なヘラ研磨調整である。内面はヘラナデ調整であるが、内底部は指頭による調整のため凹凸が著しい。内外面ともに黄白色をなす。周縁に近く1ヶ所の圧痕が確認できる。圧痕はモミ圧痕で明瞭である。圧痕内部には顆粒状突起列も確認できる。(28) II-14388は小型の壺形土器の頸部破片。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。丹塗りであるが、顔料が落ちている。黄褐色をなし、部分的に赤色をなす。内面はヨコナデ調整、黄白色をなす。圧痕は内側に1ヶ所確認した。モミ圧痕で不鮮明であるが、顆粒状突起列も確認できる。(29) II-15401は大型の壺形土器の底部。復元底部径9.4cm。底部端は外側に若干張り出しが整形は粗雑である。胴部は大きく外傾しながら立ち上がる。外面は横方向の難なヘラ研磨調整である。黄赤色をなす。内面は器表の保存が悪く不明。黄白色をなす。圧痕は底部の周縁に1ヶ所確認できる。種子であることは疑いないが種の同定はできない。(30) II-15465は壺形土器の胴部破片である。外面は横方向の貝殻条痕調整、黒褐色をなす。内面はヨコナデ調整、黄褐色をなす。夜臼式土器の胴部破片であ

る。内面に圧痕が確認できる。小さな種子の圧痕であるか同定できない。(31) II-15578は壺形土器の底部破片。底部復元径7.0cm。底部は筒形で側面はナデ調整、黒褐色をなす。内面は器面が剥離していて不明。圧痕は底部の中央部近くに1ヶ所確認した。圧痕は小さな種子である。乳頭状の突起が観察でき、アワと考えられる。(32) II-15822も大型の壺形土器の底部である。復元底部径10.8cm。底部は筒状に延びる。胴部は大きく外傾しながら立ち上がる。外底部は中央部にヘラナデが加えられ、わずかにくぼむ。底部側面には調整のための指頭痕が残っている。外面は横方向のヘラ研磨調整、褐色で黒斑がある。内面は不定方向のヘラナデ調整、黄褐色をなす。圧痕は底部の周縁部に3ヶ所、胴部の割れ口に1ヶ所の計4ヶ所に確認できる。いずれもモミ圧痕である。いずれの圧痕にも顆粒状突起が確認できる。(33) II-2351は中型の壺形土器の胴部破片、外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、丹塗りされ赤色をなす。内面は丁寧なヨコナデ調整、二次的な加熱のため桃色をなす。圧痕は内面に1ヶ所確認した。遺存状態は良好、突起も観察できる。エノコログサと考えられる。(34) II-5684は壺形土器の頸部破片。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、黄灰色をなす。内面は丁寧なヨコナデ調整で、黄白色をなす。圧痕は外面に1ヶ所確認した。遺存状態は良好、乳頭状の突起も観察でき、アワと考えられる。(35) II-7648は鉢形土器の口縁部から胴部にかけての破片。口縁部は緩やかに外反し如意形をなす。口縁部外面には粘土帯を貼り付け肥厚させている。肥厚帯の下端には段が形成される。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面は横～斜位のヘラ研磨調整であるが、指圧痕がくぼみとして残っている。内外面ともに黒褐色をなす。圧痕は内面の口縁部に1ヶ所確認した。遺存状態は良好である。やや大きい圧痕で全体は細長い。等間隔で節が観察できるので昆虫の幼虫と考えられる。(36) II-8087は小型の鉢形土器の破片。外面は縱方向のヘラ削りを施した上に丁寧な横方向のヘラ研磨調整を加えている。黒褐色をなす。内面は丁寧なヨコナデ調整、黄土色をなす。極めて薄い土器で気泡の厚さは4mm前後である。圧痕は内側の口縁部下にある。遺存状態は良好である。エノコログサと同定できる。(37) 表2は壺形土器の口縁部破片。口縁部は緩やかに外反し如意形をなす。口唇部は丸く収める。外面には縦方向の刷毛目調整を加え、上にヨコナデを加えている。内面は横方向の刷毛目調整を加えているが表面の保存状態が悪く、詳細は不明。二次的に熱を受け変色している。圧痕は内面の口縁部に1ヶ所確認した。丸い小さな種子である。(38) I-表3は壺形土器の口縁部破片。口縁部は外反し如意形をなす。口唇部にヘラによる刻目を施す。口縁部の内外面はヨコナデ調整、外面の胴部は多方向の細かい刷毛目調整、内面は横方向の刷毛目調整を施した後にナデ調整を加えている。内外面ともに黄赤色をなす。圧痕は内面の胴部に1ヶ所確認した。ドングリ等の堅果類の果皮の圧痕である。

(2) 若干の検討

圧痕を検出した土器の器種は壺形土器、壺形土器、鉢形土器の3種類である。内訳は壺形土器が19個体、壺形土器が16個体、鉢形土器2個体、土製品1点となっている。壺形土器には大型、中型、小型の3種類がある。

圧痕のある部位は壺形土器の場合、口縁部の内面にあるのが3個体、外面には確認していない。頸部の内面にあるのが1個体、外面には確認していない。胴部の内面にあるのが3個体、外面にあるのが2個体、計5個体に確認した。底部の内面には確認していない。外面では10個体に確認した。壺形土器の場合、口縁部の内外には圧痕は認められない。頸部の内面にあるのが2個体、外面にあるのが1個体の計3個体に確認した。胴部の内面にあるのが2個体、外面にあるのが3個体の計5個体に確認した。底部の内面にあるのが1個体、外面にあるのが8個体、計9個体に確認した。鉢形土器の場合は口縁部の内面にあるのが2個体である。

検出した圧痕はいずれも携帯顕微鏡で確認したもので、一部をSEMで観察しただけであり、残りの圧痕は実態顕微鏡による観察である。同定できた、あるいはその可能性ある植物にはイネ、

アワ(?)、ヒエ(?)、エノコログサ、ワラビ(?)、マメ類、ドングリ類等がある。数量的にはイネ29点、アワ(?)3点、ヒエ(?)2点、エノコログサ2点、ワラビ(?)1点、マメ類(?)2点、ドングリ類2点、昆虫の幼虫類(?)2点、不明10点がある。イネは圧痕のすべてがモミの状態であり、形態は勿論のことほとんどに顆粒状突起列が確認できることからイネであることは間違いない。検出した圧痕総数54点中29点、54.72%が存在する。圧痕の過半数を超えている。アワ(?)は3点、5.66%を占め、続いてヒエ(?)、エノコログサ、マメ類(?)ドングリ類、昆虫の幼虫類が各2点で、3.77%を占め、ワラビ(?)が1点、1.89%を占め、不明は10点、18.87%を占める。この圧痕の構成は植物質食料の一つの目安になる。この中で栽培植物はイネ、アワ、ヒエ、マメ類の4種類で、計37点、67.92%を占め、食用植物としてはドングリ類、ワラビがあり、昆虫の幼虫はドングリ類に依存するものが主体であるので、一応、ドングリ類の中に含めると、計5点、9.43%を占める。すなわち、圧痕を見る限りにおいて、これまで縄文時代に主体を占めたドングリ類や食用植物が1割弱に減少し、栽培植物が7割弱を占めていることになり、弥生時代に食料獲得の大きな変革のあったことが想定できる。次に、栽培植物に限ってみると、栽培植物はイネ、アワ、ヒエ、マメ類の圧痕があり、計36点がある。このうち、イネは29点、80.56%を占め、アワは3点、8.33%、ヒエは2点、5.56%、マメ類は2点、5.56%を占めている。このうちアワ、ヒエ、マメ類はまだSEMによる観察をしていないので、今後変更する可能性があり、その構成率はさらに下がる可能性がある。圧痕から見た生産活動は水稻農耕を中心としたものであることがうかがえる。遺跡でも西側沖積地に初期水田が開田されたことは無関係ではない。一方、畑作農耕については考古学的には根拠が薄い。地形的にみても板付遺跡における主たる生産は水田に依拠していたと考えられる。

土器圧痕については、今後SEM観察、写真を終了した段階で改めて再論する。

2. 貝層について

環濠東側において過去の調査で貝層が確認されているが、今回の確認調査に於いても過去に確認された貝層近くの北側にブロック貝層を確認した。ブロック貝層は環濠の中北部に堆積したもので、表土層を除去した段階で確認した。この部分は通津寺と民家の境界線上にあたり、東に向かってかなりの削平がみられ環濠もの削平も著しいために、環濠の中位に堆積しているにもかかわらず顔を出したものである。貝層の採取のためにこの部分にトレンチを設定した。貝層は思った以上に薄く厚さ5cmを測るに過ぎない。平面的な広がりは30cm×20cmの楕円形を示している。

このような遺構中に投棄されたブロック貝層は弥生時代の遺跡では度々認められる。これらの貝層はどのようなことを意味しているのであろうか。幸いに、同様な資料が手元にあるので、それらも加えて予察を加えてみたい。手元の弥生時代のブロック貝層のサンプルは、板付遺跡環濠内出土資料・比恵遺跡第30次調査区第20号貯蔵穴出土資料・姪浜遺跡第3次調査区ピット内出土資料である。なおこれらのブロック貝層には貝類の他に、獸骨・鳥骨・魚骨など他の資料も含まれている。今後、それらの同定も含めて再論することにする。

①板付遺跡環濠内出土資料

ブロック貝層から検出した自然遺物には貝類、魚骨、植物遺存体、その他がある。また、環濠の調査において散発的に獸骨も出土しているので、それらも合わせて示す。

貝類

貝類の保存状態は悪く、全形を保つ資料は少ない。以下に示す腹足綱3種、斧足綱3種の計6種を確認した。

腹足綱

- 1、ウミニナ 2、ツメタガイ 3、イボニシ

斧足綱

- 4、サルボウ 5、マガキ 6、アサリ

次に貝類の構成についてみてみよう。なお、個体数の算出にあたっては殻頂部で左右殻に別け、数の多い方を個体数とした。

個体数は保存状態が悪いために、貝殻数に比較し、その個体数は以外に少ない。総個体数は145個体である。その内訳はウミニナが45個体、31.03%、ツメタガイが2個体、1.38%、イボニシが1個体、0.69%、サルボウが1個体、0.69%、マガキが28個体、19.31%、アサリが67個体、46.21%である。いずれも内湾砂泥性の貝類によって占められている。アサリが最も多く、それにウミニナ、マガキが続く、採取地は砂分が多く、淡水が流れ込む環境が考えられる。

その他の海洋生物遺存体

注目される海洋生物の遺存体として触手動物のコケムシや環形動物のカンザシゴカイ科の棲息管がある。これらの生物は海草・海藻に付着するものである。出土量はコケムシが0.07g、カンザシゴカイ科が0.20gと極めて少ない。ただし、これらの遺存体は藻塙焼き製塩に関連するものとして注目される。後で検討する。

魚類

水洗選別により小魚類の脊椎骨を主とした魚骨が確認されている。

獣類

獣骨は貝層と分離した状態で環濠内に存在するが、保存状態が悪いために種を同定することは困難を極める。

植物遺存体

炭化した植物遺存体が少量確認されている。

②比恵跡第30次調査区第5号貯蔵穴内出土資料

貯蔵穴の中央部、床面よりやや浮いた状態でブロック貝層が検出された。ブロック貝層は30×30cm、厚さ20cm。貝層およびその周辺の水洗選別によって得られた自然遺物には貝類、獣骨、魚骨、植物遺存体、その他がある。

貝類

貝類の保存状態は悪く、全形を保つ資料は少ない。以下に示す腹足綱7種、斧足綱4種の計11種を確認した。種類は以下のとおりである。

腹足綱

- 1、スガイ 2、カワニナ 3、ヘナタリ 4、フトヘナタリ 5、ウミニナ 6、ツメタガイ 7、アカニシ

斧足綱

- 8、マガキ 9、ヤマトシジミ 10、アサリ 11、オキシジミ

次に貝類の構成についてみてみよう。

保存状態が悪いために、貝殻数に比較し、その個体数は以外に少ない。総個体数は626個体である。その内訳はスガイが14個体、2.24%、カワニナが1個体、0.16%、ヘナタリが19個体、3.04%、フトヘナタリが74個体、11.82%、ウミニナが141個体、22.52%、ツメタガイが1個体、0.16%、アカニシが1個体、0.16%、マガキが102個体、16.29%、ヤマトシジミが53個体、8.47%、アサリが217個体、34.66%、オキシジミが3個体、0.48%である。内湾砂泥性の貝類が主体を占めるが、フトヘナタリやヤマトシジミのような汽水性の貝類やカワニナのような淡水性の貝類も混じっている。アサリが最も多く、それにウミニナ、マガキが続き、構成は板付遺跡と極めて類似している。採取地は板付遺跡の採取地と似て砂分が多いが、より淡水が流れ

込む環境、すなわち、河口周縁部が考えられる。

その他の海洋生物遺存体

注目される海洋生物の遺存体として板付遺跡同様に触手動物のコケムシや環形動物のカンザシゴカイ科の棲息管がある。さらにこれらに加えて、環形動物のウズマキゴカイや微小貝、海草の種子がある。出土量はコケムシが3,950g、カンザシゴカイ科が0.476g、微小貝が1,206g、ウズマキゴカイ3点と極めて少ない。注目されるのはこれらの大部分が2次的に焼けて灰黒色に変色していることである。また、海草のアマモの種子1点が出土している。アマモの種子ができるのは7月ごろであるので、貝類採集の時期も推定することができる。これらの遺存体は藻塙焼き製塩に関連するものとして注目される。後で検討する。

魚類

水洗選別により小魚類の脊椎骨を主とした魚骨が確認されている。

獸類

少量であるが獸骨類も出土している。シカ、イノシシがある。

植物遺存帶

炭化した植物遺存体が少量確認されている。

③姪浜遺跡第3次調査区出土資料

包含層、土坑095、096、097、098等から貝類をはじめとする自然遺物が出土している。遺跡は博多湾に面した砂丘上に立地している。自然遺物には貝類、獸骨、魚骨、その他がある。

貝類

貝類の保存状態は良好、殆どの資料が全形を保っている。以下に示す腹足綱22種、斧足綱15種の計37種を確認した。

腹足綱

1、アワビ類 2、コシダカガニガラ 3、クボガイ 4、ヘソアキクボガイ 5、クマノコガイ 6、イシダタミ 7、サザエ 8、スガイ 9、ヤマタニシ 10、タニシ類 11、カワアイ 12、ヘナタリ 13、フトヘナタリ 14、ウミニナ 15、マガキガイ 16、ツメタガイ 17、アカニシ 18、レイシ 19、イボニシ 20、ナガニシ 21、コナガニシ 22、マイマイ類

斧足綱

23、バカガイ 24、ハイガイ 25、サルボウ 26、アカガイ 27、イタボガキ 28、マガキ 29、ヤマトシジミ 30、アサリ 31、オキシジミ 32、カガミガイ 33、ハマグリ 34、オニアサリ 35、ヌノメアサリ 36、バカガイ

次に貝類の構成についてみてみよう。

総個体数は147個体である。その内訳はアワビ類が2個体、1.36%、コシダカガニガラが1個体、0.68%、クボガイが1個体、0.68%、ヘソアキクボガイが10個体、6.80%、クマノコガイが1個体、0.68%、イシダタミが2個体、1.36%、サザエが6個体、4.08%、スガイが12個体、8.16%、ヤマタニシが1個体、0.68%、タニシ類が3個体、2.04%、カワアイが5個体、3.40%、ヘナタリが3個体、2.04%、フトヘナタリが1個体、0.68%、ウミニナが22個体、14.97%、マガキガイが1個体、0.68%、ツメタガイが13個体、8.84%、アカニシが3個体、2.04%、レイシが3個体、2.04%、イボニシ1個体、0.68%、ナガニシが1個体、0.68%、コナガニシが1個体、0.68%、マイマイ類が3個体、2.04%、ハイガイが1個体、0.68%、サルボウが1個体、0.68%、アカガイが1個体、0.68%、イガイが5個体、3.40%、イタボガキが4個体、2.72%、マガキが1個体、0.68%、ヤマトシジミが3個体、2.04%、アサリが15個体、10.20%、オキシジミが9個体、6.12%、カガミガイが1個体、0.68%、ハマグリが5個体、3.40%、オニアサリが2個体、1.36%、ヌノメアサリが2個体、1.36%、バカガイが1個体、0.68%である。岩礁性貝類が主体を占めるが、カワアイ、フトヘナタリやヤマトシジミのような汽水性の貝類やハイガ

イ、サルボウ、アカガイ、アサリ、ハマグリ等の内湾砂泥性貝類も見られる。特定の貝種が主体をなすことなく、種類も多い。出土状況も板付遺跡や比恵遺跡のようにブロック貝層をなすこともなく数個の貝類がまとまって出土するなどの違いがある。必要に応じて採集され、処理後に貝類が投棄されたものと見られる。遺跡立地の違いと貝類採集の目的の違いが看取できる。

魚類

水洗選別を行なっていないので魚骨の量は極めて少ない。

獸類

少量であるが獸骨類も出土している。

植物遺存体

炭化した植物遺存体が少量確認されている。

若干の検討

板付遺跡・比恵遺跡・姪浜遺跡における自然遺物を概観した。いずれもブロック貝層として遺跡内に存在したものである。弥生時代になると大規模な貝塚形成は影をひそめ、二、三の例外を除いて貝塚は極端に小規模になる。多くの場合は上記の例のように遺跡内にブロック貝層として存在する。これらの現象は、食生活に変化が生じた事を意味している。ではどのような変化が生じたのであろうか。

ここで問題になるのが、板付遺跡や比恵遺跡にみられる、その他の海洋生物の遺存体である。板付遺跡では触手動物のコケムシ、環形動物のカンザシゴカイの棲息管が確認され、比恵遺跡では触手動物のコケムシ、環形動物のカンザシゴカイ、ウズマキゴカイ、海草のアマモの種子、海草（藻）につく微小貝が出土している。これらはいずれも二的に火を受けて変色し、あるいは炭化している。カンザシゴカイ、ウズマキゴカイ、コケムシ、微小貝は海藻・海草に付着していて、それらが被熱していることは海藻を燃やしたことを見出している。アマモの種子の存在は直接的にそれを証明するものである。福岡市海の中道遺跡ではこれら海藻に由来する生物遺存体の存在から藻塩焼き製塙法を実証することができた。板付遺跡や比恵遺跡の海藻に由来する遺存体はまさに藻塩焼き製塙法が弥生時代前期に存在していたことを証明するものである。食料が植物質食料に変化することで、塩分需要が増加することは、これまで指摘してきた。弥生時代における製塙の問題は多岐にわたるので、改めて論じることにしたい。

3. 板付遺跡出土の焼成失敗品からみた弥生時代初頭の土器生産

田崎博之

北部九州は、日本列島で最初期に水利システムを伴う水田稻作農耕文化が伝播し受容された地域である。福岡市板付遺跡や那珂遺跡では弥生時代初頭（板付Ⅰ式期）の大規模な環壕集落が発見され、伝播した農耕文化が着実に定着していることを物語る。本稿では、そうした水田稻作農耕文化が伝播した最初期における土器生産の様態を、板付遺跡から出土した焼成失敗品から考える。

1. 土器焼成失敗品の類型

弥生土器の焼成失敗品には、焼成不完全（生焼け）品、焼成破裂痕をもつ土器（焼成破裂痕土器）と焼成破裂土器片、焼成時破損土器がある（田崎2002、2005、2007）。土器の焼成過程において、焼成温度が500~600°Cに達すると、粘土中に含まれる構造水分が消失し、粘土の可塑性が失われる。焼成温度が上がらず、部分的に構造水分が残存したものが「焼成不完全（生焼け）品」である。焼成が不完全な実験品を野外に放置しておくと、器壁に水分がしみ込み小さな土塊や土粒となって崩れていく。出土品では、底部付近か小さな土塊となって崩れる例が多い。

また、粘土中の構造水分が消失する前後は、最も土器が破損しやすい。とくに、器面の一部が弾け飛ぶことがある。その破損痕跡は、(a) 平面形が不整な円形もしくは梢円形、(b) クレーター状に中央が窪み周縁が次第に浅く、(c) 破損面も器表面と同じ色調に焼き上がり、(d) 器体の外面に焼成破裂痕が生じることが一般的であるといった特徴をもつ。中でも (b)・(c) のような特徴は、打撃や加圧による破損では決してみられない。こうした特徴的な破損が「焼成破裂」であり、その痕跡をもつ土器が「焼成破裂痕土器」である。

一方、焼成破裂で弾け飛んだ破片が「焼成破裂土器片」である。焼成破裂痕とネガとポジの関係にあり、(a) 平面形は不整な円形もしくは梢円形で、(b) 焼成破裂面の中央が凸レンズのように膨らみ縁辺が薄く尖り、(c) 焼成破裂面も器表面と同じ色調に焼き上がる。(d) 径3~5cm、厚さが2~5mmほどのものが多く、(e) 土器の外表面が弾け飛んだ破片が多い。

焼成破裂以外にも焼成中に器体に亀裂（ヒビ）が生じたり成形時の粘土接合面で剥離したりする破損が生じるが、打撃や加圧で生じる破損痕跡と明確に区分することは難しい。しかし、焼成中に土器に生じる変化や焼成破裂痕の残存状況に着目し、以下の焼成中に破損したと判断できる事例を抽出できる。それらが「焼成時破損土器」で、Ⅰ種とⅡ種に大別できる。Ⅰ種は、黒化層・黒変部・黒斑が生じたり消失したりするタイミングが焼成過程で微妙にずれていることに着目して、焼成時に器体が破損して破片ごとに異なる環境で焼き上かったと考えられる事例である。Ⅱ種は、接合できる破片ごとの焼成破裂痕の残存状況に着目し、焼成時に器体が破損したと判断できる事例である。

焼成時破損土器Ⅰ種は、田崎（2002、2005、2007）では、Ⅰ種a～Ⅰ種fに類型化したが、今回再整理しⅠ種A～Ⅰ種Eに分類し直した。

Ⅰ種A：接合する破片の一部だけに器壁の芯部に黒化層が残る事例。

Ⅰ種B：接合する破片の一部だけが黒変したままの事例。

Ⅰ種C：通常の焼き上がりの色調を呈する破片と黒斑が生じた破片が接合する事例。

Ⅰ種D：土器の破損面まで黒斑が生じている事例。

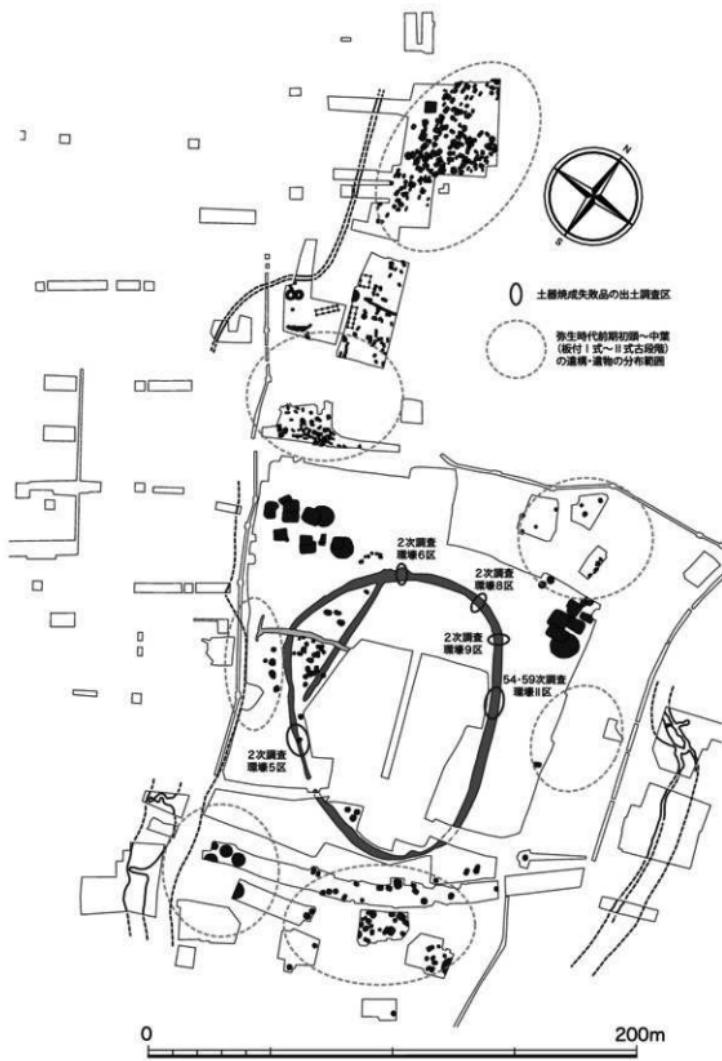


図1 板付遺跡中央・北台地の弥生時代遺構の分布（縮尺1/2,000）

I種E：器壁の芯部分に黒化層が残るにもかかわらず、粘土接合面や破損面が器表面と同じ色調に焼き上がっている事例。

焼成時破損土器II種は、II種aとII種bに細分できる。

II種a：接合する破片間で焼成破裂痕が途切れる事例で、焼成破裂が生じる以前に器体が破損して一部の破片だけに焼成破裂が生じたもの。

II種b：接合する破片間で焼成破裂によって生じた弧状の亀裂が途切れる事例。器体が破損して一部の破片だけに焼成破裂によって亀裂が生じたと考えられるもの。

以上の焼成失敗品の中で、焼成不完全（生焼け）品・焼成破裂痕土器・焼成破裂土器片・焼成時破損土器II種は、形状的な特徴を把握することで、比較的容易に認定できる。しかし、焼成時破損土器I種は、判断基準とした黒化層・黒変部・黒斑が二次的に火熱を受けて消失したり新たに生じたりする。そのため、認定にあたっては、資料が二次的な火熱を受けていないことを確認する必要がある。

また、土器焼成失敗品が出土したからと言って、単純に土器焼成の場を想定することはできない。焼成破裂痕土器は、焼成破裂痕が浅く器体に孔があくほど破損しなかつたならば、焼成に成功した土器として用いられた可能性がある。焼成不完全品も、一見完全に焼き上がっているようにみえるので、同様なことを考えておくべきである。焼成失敗品から焼成の場を特定するためには、焼成中に器体が破損してしまい使用できない資料であるのかを吟味しなければならない。そうした資料として、第一に焼成破裂土器片を上げることができる。焼成破裂土器片は、小さく薄い破片であり、再利用されずに土器焼成の場の周辺近くに廃棄されていると考えてよい。土器焼成の場を特定できる最も有効な資料である。また、焼成時破損土器II種も、焼成破裂が生じる以前に器体が破損したと判断できる資料であり、これも再利用されずに廃棄されていると考えてよい。加えて、焼成破裂痕土器の中でも焼成破裂痕が深く器体に孔があくほど大きく破損した事例も、再利用は考え難い。

このように、確実に使用されず再利用もされない焼成失敗品を、焼成破裂土器片・焼成時破損土器II種、焼成破裂痕が深く器体に孔があくほど破損した焼成破裂痕土器に絞り込むことができる。これらが土器焼成の場を限定できる資料である。

2. 板付遺跡出土の焼成失敗品

板付遺跡では、環濠外の遺構から弥生時代前期初頭～前葉（板付I式古段階～新段階）の土器が出土することは限られている。残存状況も悪く、焼成失敗品は確認できなかった。これに対して、環濠からは多くの遺物が出土し、2次調査と54・59次調査で土器焼成失敗品を確認できた（図1）。

① 2次調査環濠出土資料

明治大学によって行われた2次調査では、第5・6・8・9区で土器焼成失敗品が出土している（杉原1977、写真1、図2）。とくに、環濠南西部の第5区に集中する。写真1-1（図2-1、登録番号R-00227、以下同じ）は、板付I式と共に伴する夜白式系統の深鉢の脚部破片である。外面の荒れが著しいか、わずかに貝殻条痕が残る。もともと径3.5cm前後の略円形の破片で、上半部と下端部が欠損する。最大厚3～3.5mmを測り、剥離面の中央が膨らむ凸レンズ状を呈し、残存した周縁部分は薄く尖る。焼成破裂土器片と判断できる。写真1-2（R-00213）は、板付II式古段階の精製小型壺の口頸部破片。口縁部内面が薄く剥離する。器壁の芯部には淡い灰黒色の黒化層が残るが、口縁部内面の剥離面や頸部の破損面は器壁と同じ色調に焼き上がる。焼成時破損土器I種Eと考えられる。写真1-3（R-00226）は、板付I式の精製小型壺の肩部破片。

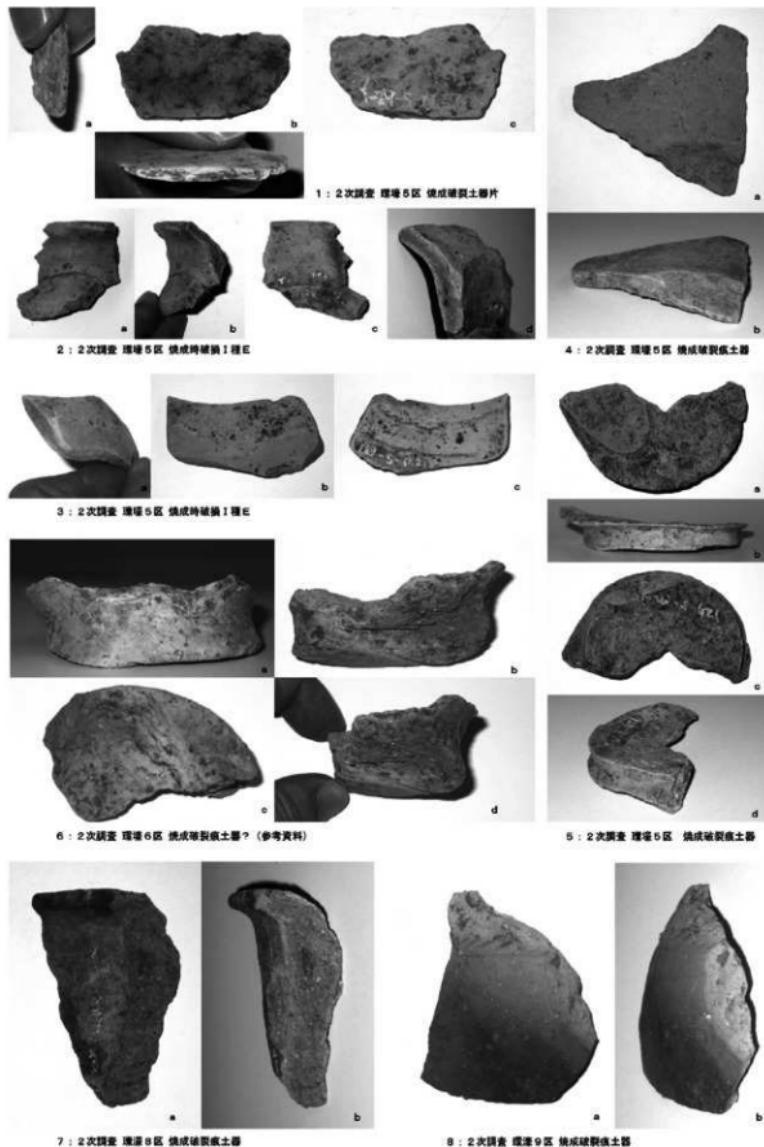


写真1 板付遺跡2次調査出土の土器焼成失敗品

器壁の芯部に淡い黒灰色の黒化層が残るが、肩部と頸部の境の粘土接合面には黒化層が剥き出しにならず、器表面と同じ灰白色に焼き上がる。これも焼成時破損土器Ⅰ種Eに分類できる。写真1-4 (R-00226) は、小型壺の底部近くの胴部破片である。破片の下端に、推定径3~4cm、深さ4~5mmの周縁が弧を描きクレーター状に窪む焼成破裂痕が生じている。写真1-5 (R-00199) は、板付Ⅰ式～板付Ⅱ式古段階の精製小型壺の底部破片。円盤状の底面に、推定径3~4.5cm、深さ7mmの焼成破裂痕が残る。底部は1cmほどの厚さしかなく、焼成破裂によって底部側面に孔があいたものと判断できる。

第5区以外では、第6・8・9区から焼成失敗品が出土している。写真1-6 (R-00325) は、環濠北端の第6区から出土した夜臼式の深鉢の底部破片である。白色～灰白色の焼き上がりで、夜臼式系統でも板付Ⅰ式と共存する段階に比定できる。外底面の一部が底部成形時の粘土の接合面で剥離している。周縁が次第に浅くなる部分もある一方で、折れたように小さな段が生じている部分もある。焼成破裂痕の可能性もあるが、確定できない。参考資料としておく。写真1-7 (R-00594) は、環濠東北隅の第8区から出土した壺の口縁部破片で、板付Ⅰ式新段階に比定できる。破片の側縁部分に焼成破裂が幾重にも重なって生じている。焼成破裂痕は深く、焼成時に器體に孔があくか、破損してしまったものと考えられる。写真1-8 (R-00627) は、環濠東北隅の第8区から南に15mほど離れた地点に設定された第9区の資料である。板付Ⅱ式古段階～中段階の壺の胴部破片。破片の側縁部分に、深さ5mmの深い焼成破裂痕を観察できる。器壁は6mmほどしかないため、焼成破裂で器體に孔があくほど破損したものと言える。

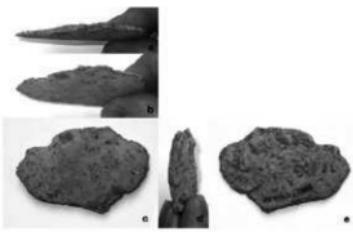
② 54・59次調査環濠第2区出土資料

福岡市教育委員会が実施した54・59次調査では、環濠の全形が明らかにされ、環濠の東側中央付近の環濠第2区の調査が行われている。環濠第2区は、2次調査第5区の対角線上にあり、第8・9区から20～40m離れた地点に位置する。その出土資料の中で、比較的残存状態のよい土器焼成失敗品を確認できた(写真2-3、図2)。

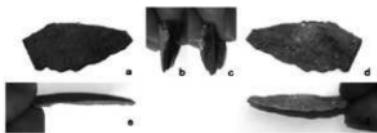
写真2-1～3は焼成破裂土器片である。いずれも細片で、時期の決め手を欠く。しかし、環濠第2区で伴出する土器は板付Ⅰ式～Ⅱ式古段階のもので、当該期の資料と考えてよい。その中で、写真2-1 (図2-2、R-7866) は、器面に部分的に丹塗りの痕跡が残る壺の胴部破片である。周縁の一部が欠損するが、不整な橢円形で、破裂面の中央が凸レンズのように膨らみ、縁辺が薄く尖る。写真2-2 (図2-4) は、外面に刷毛目が残る壺の胴部破片である。破片の上半と左側縁は折れているが、下半部は緩やかな弧状を呈し薄く尖る。裏面が凸レンズ状に厚くなる。写真2-3 (図2-5、R-15935) は、壺の胴部下半の破片である。破片の右上縁は緩やかな弧状で薄く尖る。他は折れているが、全体として凸レンズ状を呈する。

図2-6 (R-5201) は、板付Ⅰ式～Ⅱ式古段階と考えられる壺の胴部破片で、破損している破片の下半部を除き、周縁は薄く尖り、凸レンズ状を呈する。ただし、破裂面が若干暗色で、外表面とは焼き上がりの色調が異なるため、参考資料としておく。写真2-4 (図2-3、R-15353) は、丹塗り磨研壺の胴部破片で、器壁は厚さ6～7mmを測る。破片の上半部は弧状を呈し、他は折れている。裏面には内面の器表面が部分的に残るので、焼成破裂によって器面に弧状の亀裂が生じ、その後破損した可能性も考えられる。参考資料としておきたい。

図2-11 (R-1167) は、壺の底部破片で、破損面の中央が盛り上がり、周縁は鋭く尖る。外底部が弾け飛んだ焼成破裂土器片である。図2-12 (R-1839) も、壺の底部破片で、外底面に焼成破裂痕が幾重にも残る。図2-11・12ともに円盤貼り付けの底部で、板付Ⅰ式新段階に比定できる。図2-15 (R-3683) は、板付Ⅰ式新～板付Ⅱ式古段階の鉢の底部破片である。外底面に焼成破裂痕がみられる。図2-7 (R-15167) は、丹塗り磨研の壺の肩部破片。幅の狭いミガキと胎土や焼き上がりの色調から、夜臼式系統の中型壺と



1 : 54・59次調査 環塁Ⅱ区 焼成破壊土器片



2 : 54・59次調査 環塁Ⅱ区 焼成破壊土器片



3 : 54・59次調査 環塁Ⅱ区 焼成破壊土器片



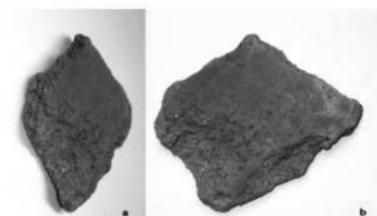
4 : 54・59次調査 環塁Ⅱ区 焼成破壊土器片？（参考資料）



5 : 54・59次調査 環塁Ⅱ区 焼成時破壊Ⅱ種 a



6 : 54・59次調査 環塁Ⅱ区 焼成破壊Ⅰ種 D



7 : 54・59次調査 環塁Ⅱ区 焼成破壊土器片



8 : 54・59次調査 環塁Ⅱ区 接合する破片で焼き上がりの色調が異なる事例

写真2 板付遺跡54・59次調査出土の土器焼成失敗品（1）

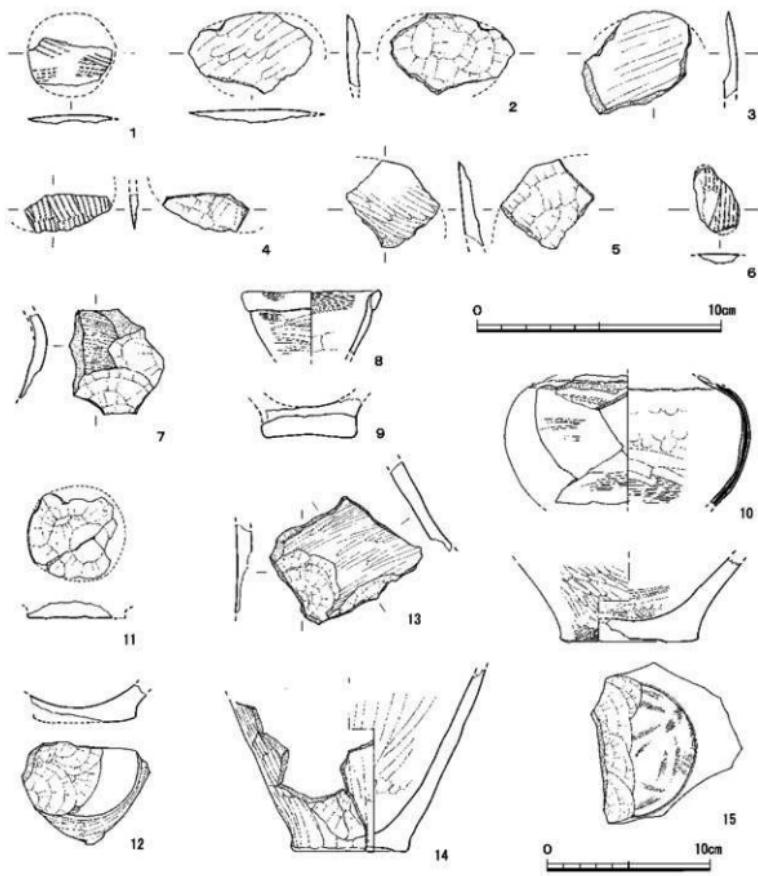
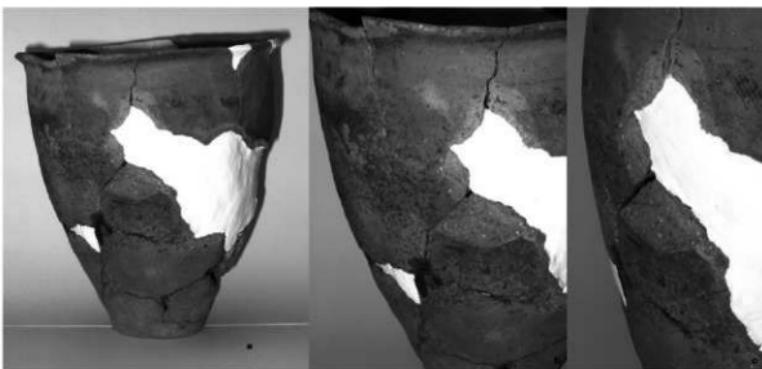


図2 板付遺跡出土の土器焼成失敗品実測図 (1~9は縮尺1/2、10~15は1/3)

考る。外面に焼成破裂痕がみられる。器壁は厚さ4~5mmしかなく、焼成破裂痕の深さから考えれば、焼成破裂によって器体に孔があくか、破損したものと判断できる。写真2-7 (図2-13、R-14552) は、大型壺もしくは鉢の胸部破片で、破片の下半部に焼成破裂痕が生じている。伴出の土器から、板付I式新段階～板付II式古段階に比定できる。

写真2-5 (図2-14、R-4217+5110、以下、+は接合することを示す) は、板付I式新段階～板付II式古段階の甕の底部破片である。2つに大きく割れているが、一方の破片の底部近くに推定径4~4.5cm、深さ



1 : 54・59次調査 環塙Ⅱ区 焼成時破損Ⅱ種6



2 : 54・59次調査 環塙Ⅱ区 焼成次破損Ⅰ種C

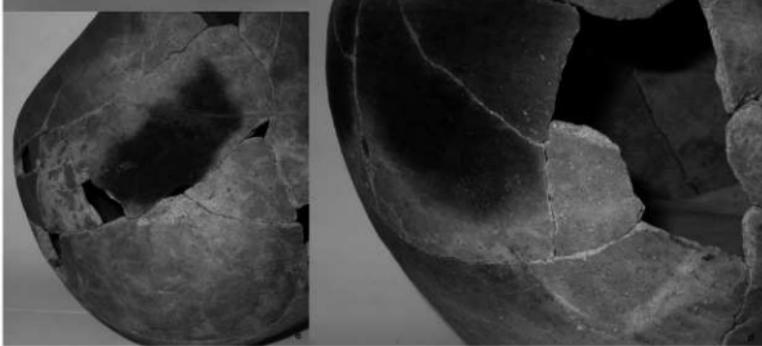


写真3 板付遺跡54・59次調査出土の土器焼成失敗品（2）

4.5mmの弧を描きクレーター状に窪む焼成破裂痕が残る。ところが、これに接合する破片には、焼成破裂痕はみられない。焼成時破損土器II種aの好例である。

写真2-6（図2-9、R-669）は、精製小型壺の円盤状の底部破片である。大きく上下2片に割れている。外底側の破片は中央が膨らみ、これに対応する上部の破片はクレーター状に窪み、その中に小さな淡い黒色の黒斑が生じている。焼成破裂によって外底面が薄く弾き飛んだ焼成破裂土器片であると同時に、焼成破裂面に黒斑が生じた焼成破裂土器I種Dである。また、上下の破片で焼き上がりの色調が異なることも、焼成時に破損したことを示している。同様に、接合する破片で焼き上がりの色調が異なる事例として、写真2-8（図2-8、R-620+2005）がある。小型の鉢で、口縁部に薄い断面梢円形の粘土を貼り付ける。朝鮮無文土器を模倣した疑似無文土器である。

写真3-1（R-13565）は、板付II式古段階の壺である。胴部中央が大きく破損する。破損部は石膏で埋められているが、その周辺に接合する部分の破片には推定径5cm×深さ6mm、推定径5~6cm×深さ5mmの弧を描きクレーター状に窪む剥離面が上下に重なっている。剥離面は器面と異なり、やや白っぽい器壁の芯部が剥き出しがなっている。しかし、剥離の形状的な特徴は、焼成破裂痕と共通するので、焼成中におこった焼成破裂で器面に亀裂があり、その後、亀裂に沿って剥離したものと考えられる。ところが、下方の剥離面は接合する破片で途切れている。焼成時破損土器II種bに分類できる。写真3-2（R-14700）は、板付I式新段階の中型壺であるが、接合する破片間で黒斑が途切れる部分を何ヶ所も確認できる。焼成時破損土器I種Cと判断できる。また、図2-10（R-11994+12675+14807+15612）は、板付I式に比定できる精製小型壺の胴部～肩部の破片である。器壁の芯部に灰色の黒化層が残る。頸部の境界にめぐる段の接合部の外側は、小さくバッチ状に剥離し、黒化層が剥き出しがなっている。ところが、その上部の接合面で剥離した部分は、器壁の芯部分に厚く黒化層が残るにもかかわらず、器表面と同じ色調に焼き上げている。焼成時破損土器I種Eと考える。

3 弥生時代初頭前後の板付遺跡の集落景観

板付遺跡は、福岡平野のほぼ中央、那珂川と支流の諸岡川に挟まれた標高10~12mの段丘面と周辺の沖積面に展開する。段丘面は、花崗岩風化礫層を基盤とし、阿蘇カルデラ起源の火碎流堆積物である八女粘土層や鳥栖ローム層を最上部とする中位段丘面にあたる。東西150~200m、南北700mの広がりをもち、集落や墓地が営まれている。段丘沿いの沖積面は、下部に低位段丘が埋没しており、湿润低地の環境下で水田地として利用されている。

弥生時代前期初頭（板付I式古段階）には、段丘中央に南北径110m、東西径81mの卵形の大規模な環壕が掘削される。環壕の南西部には幅4mの陸橋部分がつくられている。つづく前期前葉（板付I式新段階）～前期中葉（板付II式古段階）には、環壕に土器や石器の破損品や食物残渣が投棄され、本来の機能を次第に失っていく。こうした環壕の内部では、貯蔵穴である袋状豊穴しか出土していない。しかし、袋状豊穴が上半部しか残存していないことから、深度の浅い豊穴式住居跡は削平されているものと考えられる。

弥生時代前期の北部九州では、福岡県の葛川遺跡、光岡長尾遺跡、三沢北中尾遺跡などの径40~60mの小規模環壕と、板付遺跡、福岡市那珂遺跡37次調査の二重環壕や有田遺跡A環壕の径100mをこえる大規模環壕の二者がある。小規模環壕は袋状豊穴群を囲い、内部に住居跡が営まれた痕跡はない。これに対して、径100mをこえる大規模環壕では、有田遺跡の事例から内部に豊穴式住居が営まれていたと考えられている。しかし、板付遺跡を含めて、大規模環壕内の内実を復元できる調査事例はない。ただし、弥生

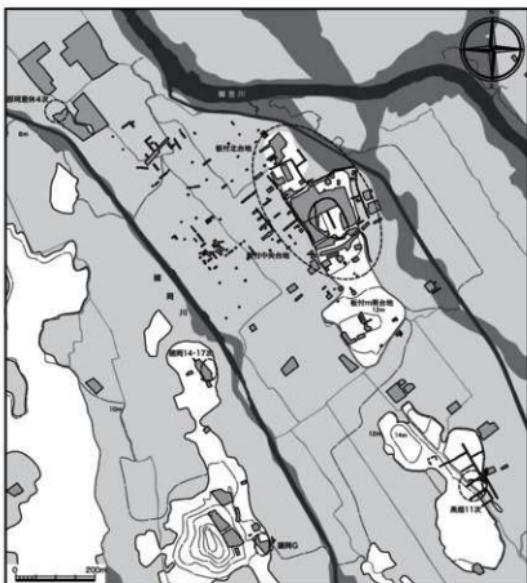


図3 板付遺跡周辺における弥生時代前期初頭前後の遺跡分布
(縮尺1/10,000、白抜き部分は段丘部分)

時代前期末（板付II式新段階）の事例ではあるが、南北約200m、幅30～40mを柵列で囲い内部に柱穴や炉跡の伴う竪穴式住居跡22棟が営まれた小都市一ノ口遺跡I地点を参考事例とすれば、板付遺跡の環壕内に一時期7～9棟の竪穴式住居を推定できる（田崎2008）。

一方、環壕外でも、弥生時代前期初頭～前期中葉の袋状竪穴が点々と出土している。環壕を中心として南北500m、東西160～170m前後に、

- ①環壕に近接する西側区域
- ②環壕南西部の陸橋部を出た地点にあたる18・19次（県道505号線）調査区西端～82次調査（F-7c）調査区西端部
- ③環壕南側の18・19次（県505号線道）調査区東半部・82次（F-7c）調査区東端・27次（F-6a）調査区・42次（F-7f）調査区
- ④環壕から北側へ40mほど離れた14次（G-5a）調査区

⑤さらに北側に40~50m離れた9次調査区（市営住宅第1区）

⑥環壕から30~40m離れた20次（F-5a）調査区

の6ヶ所で袋状竪穴が確認されている。この他、環壕東側の調査区では遺物包含層が調査されている。その中で、比較的広い面積が調査された⑥9次調査区（市営住宅第1区）では、ほぼ径50~70mの範囲に袋状竪穴が営まれている。他の袋状竪穴が調査されている地点でも、その分布は径50m前後の範囲に収まる（図1）。

さらに、弥生時代初頭前後には、板付遺跡の環壕から北西に約700m離れた那珂君体遺跡4次調査で不整形の土壌状の窪みと遺物包含層が確認されている。南南東に700mほど離れた高畠遺跡では、11次調査で袋状竪穴、17次調査で土壤と包含層が調査されている。諸岡川を挟んで南西に450mほど離れた諸岡遺跡14・17次調査地点では貯蔵穴、800mほど離れた諸岡遺跡G区では貯蔵穴、F区では遺物包含層が確認されている。これらの弥生時代初頭前後の遺構・遺物が出土する範囲も、環壕外に隣接する袋状竪穴と同じく、それぞれ径50m前後に収まる。

弥生時代前期の北部九州では、径50mほどの範囲に10数基の袋状竪穴を伴い一時期1~3棟の竪穴式住居か2~3小間にわたって継続して営まれる小規模な住居群が知られている。環壕外の袋状竪穴が分布する①~⑥、環壕東側の遺物包含層が確認されている調査区周辺、そして那珂深ヲサ遺跡、那珂君体遺跡、高畠遺跡、諸岡遺跡でも、出土している袋状竪穴の残存状況から環壕内と同じく深度の浅い竪穴式住居跡は削平されていると考え、一時期1~3棟の竪穴式住居から構成される住居群を推定できる（図3）。

このように、弥生時代初頭前後には、板付遺跡の環壕に囲まれた一時期7~9棟の竪穴式住居から構成される相対的に大きな住居群を中心として、環壕周辺に隣接する7単位、さらに南北1.6km、東西1kmほどの範囲に展開する那珂深ヲサ遺跡・那珂君体遺跡・高畠遺跡・諸岡遺跡に各1単位の一時期1~3棟の竪穴式住居からなる小規模な住居群が散在する遺跡群（集落）の景観を復原できる。

4 板付遺跡における土器生産

前述した弥生時代初頭前後の板付遺跡の集落の中で、土器焼成失敗品は、環壕の南西部（2次調査第5区）と東北部（2次調査第8・9区と54・59次調査環壕第2区）から集中して出土している（図1）。焼成破裂土器片、焼成時破損土器II種、焼成破裂痕が深く器体に孔があくほど破損した焼成破裂痕土器を含む数種類の焼成失敗品があるので、周辺で土器焼成が行われていたことは確実である。その場合、環壕の南西側と東北側には、隣接して小規模な住居群が想定でき、環壕周辺での土器生産も推定できる。しかし、環壕外の住居群では土器焼成失敗品は出土していない。むしろ、環壕内の住居群で土器が生産された可能性を考えるべきである。そうなると、環壕に囲まれた相対的大規模な住居群で集中して土器づくりが行われることになる。また、環壕内から出土した焼成失敗品には中型壺・深鉢・甕などが含まれ、破損した石器や食物残渣などと併出している。したがって、土器生産は、日常生活の延長線上で行われる程度の組織化しか想定できない。日常容器としての土器の供給は、基本的には板付遺跡を中心として南北1.6km、東西1kmほどの範囲に展開する遺跡群内に収まるものと考えられる。

もう一点、環壕から出土した焼成失敗品には、精製小型壺や丹塗り磨研の壺が多い。弥生時代前期初頭～中葉には、壺は出土土器の20~40%を占めることが一般的である。ところが、板付遺跡30・31次（G-7a・7b）調査区では、壺が50%をこえる出土比率を占め、しかも精製小型壺や丹塗り磨研壺が目立つ。30・31次調査区では、当該期の水田が発見され、これに伴う祭祀に用いられたためと考えていた（山崎

1980、田崎1994)。ところが、54・59次調査環境第2区では、精製小型壺や丹塗り磨研の壺の焼成失敗品を多く確認できたため、壺の比率が高い要因として、壺の生産が際立つ多かったことが考えられる。とくに、板付遺跡出土の精製小型壺は、きわめて精良な粘土素地を用い、ほとんど砂粒が混じらない胎土の丁寧なつくりの精製品である。板付遺跡周辺以外で出土する精製小型壺とは一見して区別できる。精製小型壺は、墓の副葬品として出土するので、葬送用の器として板付遺跡で特別に生産されたものと考えられる。特殊で限定された器財（＝精製小型壺）の生産を集中して行う初步的な器種分業を想定できよう。そうした特殊品としての精製小型壺は板付遺跡を中心とする遺跡群外にも供給された可能性が高い。ただし、弥生時代前期中葉（板付II式古段階）になると、板付遺跡から北西に2.5kmほど離れた比恵・那珂遺跡群でも、胎土の精選度が劣るとはいえ、精製小型壺の生産が始まる。初步的な器種分業を読み取れることは言っても、あくまでも萌芽段階のものであり、継続性は読み取れない。

まとめ

板付遺跡から出土している焼成失敗品から、南北1.6km、東西1kmほどに展開する遺跡群の中で、環境に囲まれた相対的に大規模な住居群で集中して土器が生産されていたことを明らかにできた。ただし、日常生活の延長線上で行われる程度の生産の組織化しか想定できず、土器の供給は基本的には板付遺跡を中心とする南北1.6km、東西1kmほど範囲の遺跡群内に収まるものと考えられる。このように、弥生時代初頭には、遺跡群を単位とする土器の生産と供給を行う分業システムが確立していたことになる。一方で、壺、中でも精製小型壺が突出して多いことから、特殊で限定された器財（＝精製小型壺）の生産を集中して行う初步的な器種分業さえも萌芽している。そうした土器生産の様態からは、集団関係を再編し凝集化させる動向を見出すことができる。

この他、板付遺跡の環境では、夜臼式系統の深鉢と板付式系統の甕や壺の焼成失敗品が同時に出土している。加えて、焼成時破損土器1種の可能性が高い疑似無文土器の小型鉢もある。そのため、夜臼式系統と板付式系統の土器を異なる集団の土器と単純には読み替えることはできない。朝鮮半島南部からの渡来人がいたとしても、渡来人のコロニー的な集落であったとも言えない。土器焼成失敗品の分析からは、こうした問題点もみえてくる。別の角度・視点から論議を進めていくべきであり、別稿で検討したく考える。

【引用・参考文献】

- 杉原莊介1977「日本農耕社会の形成」吉川弘文館
田崎博之1994「夜臼式土器から板付式土器へ」「牟田裕二君追悼論集」牟田裕二君追悼論集刊行会（福岡）
田崎博之2002「焼成失敗品からみた弥生土器の生産と供給」『環瀬戸内の考古学－平井勝氏追悼論文集』古代吉備研究会
田崎博之2005「焼成失敗品からみた無文土器の生産形態－寛倉里遺跡B区域における検討を中心として－」『松菊里文化を通じてみた農耕社会の文化体系』書景文化社（ソウル）
田崎博之2007「土器焼成失敗品からみた焼成方法と生産体制」「土器研究の新視点～縄文から弥生時代を中心とした土器生産・焼成と食・調理～」六一書房
田崎博之2008「弥生集落の集団関係と階層性」『考古学研究』第55巻第3号、考古学研究会
山崎純男1980「弥生文化成立期における土器の編年的研究」「鏡山猛先生古稀記念 古文化論叢」（福岡）

第9章 まとめ

1. 環濠について

板付遺跡の環濠はその全貌を明らかにすることができた。後世に地形が大きく変形されているために遺存状態はよくない。遺存状態が良好なところでも1m以上の削平が考えられ、削平の激しいところは2m前後の削平が考えられる。削平を考慮して環濠を復元すると、環濠の幅は最大で6m、深さ4mを測り、最小でも幅4m、深さ3mを測る。また、濠内の土層堆積からは濠の両側に濠の掘削時には堆土を盛り上げて土星が築づかれていたと考えられる。土星は少なくとも1m前後はあったと考えられるので、一見、環濠は中世の城郭を思わせる規模を有している。

今回の遺構確認調査で確認した新たな知見は、環濠の南西部において出入り口の陸橋を確認したことであろう。また、環濠と弦状濠によって区画された地域の性格を把握したことは重要である。

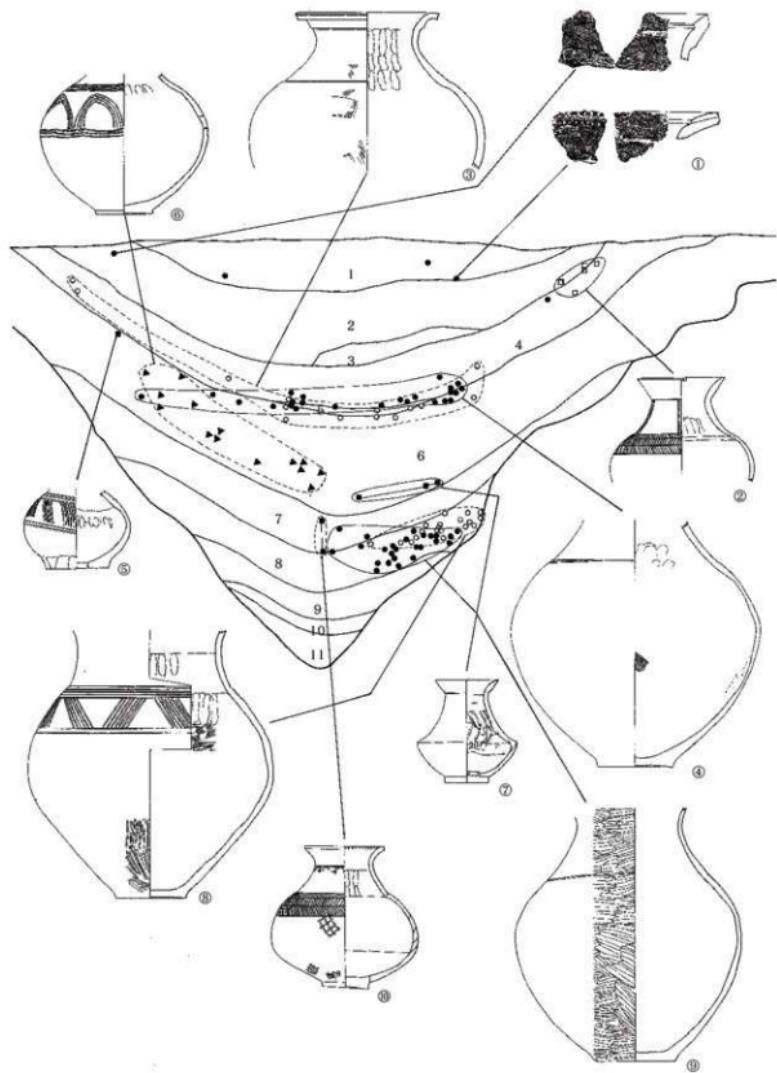
出入り口は幅5m、環濠を掘り残した陸橋となっている。環濠の陸橋部分は垂直に近い急角度で彫り込まれている。陸橋の長さは削平されているために明らかにできないが、濠に対応した長さになる。問題となるのは陸橋に設けられた施設である。当然、ネズミ返しの溝や門柱などがあり立派に作られているとされるが、削平が著しいために、その痕跡も残っていないのが残念である。弦状濠によって区画された地域は従来の調査で、多数の袋状窓穴が確認され調査されている。よって、貯蔵穴を囲む施設であるという意見もあったが判然としないままであった。今回はこの地域の表土を全域にわたって除去し、遺構確認した。その結果、この区画内は攢乱が著しいために個別の貯蔵穴は確認するまでに至らなかったが多数の貯蔵穴が存在していることは分かった。環濠の外側、弦状濠の東側、つまり、環濠内にも貯蔵穴は存在しないことを確認したので、この区画は貯蔵穴を囲む目的で作られたことがわかった。問題はその作られた時期である。日本考古学協会の調査では貯蔵穴と環濠・弦状濠と切りあい関係にあるものが複数例存在する。いずれも環濠・弦状濠に切られている。このような状況から、環濠と弦状濠の間に時間的な差があったとする意見もあるが、現時点では環濠と弦状濠は出土土器から見て同時期と考えられる。ただし、環濠や弦状濠に先行する貯蔵穴が存在するのは事実であるが、貯蔵穴の出土土器からすれば、時間的に大きな差はない。環濠が構築される以前に、この地に先行して集落があったことが想定される。今後検討を加えたい。

2. 環濠・弦状濠出土の弥生土器について

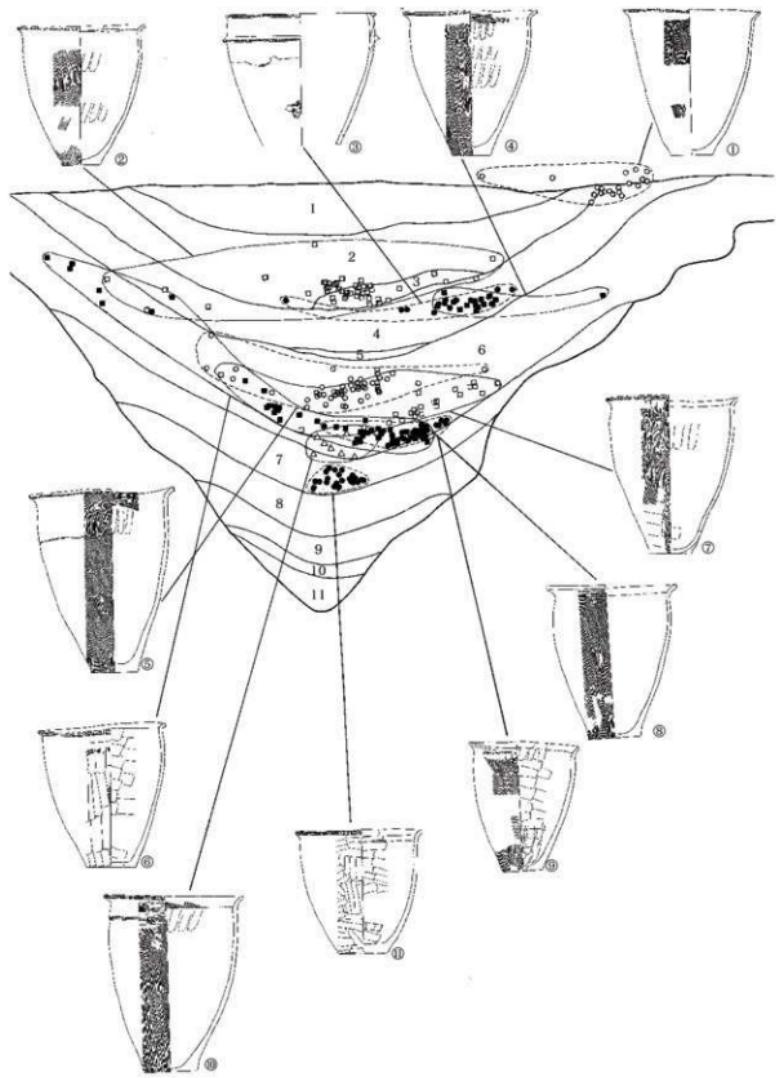
板付遺跡の環濠および弦状濠出土の土器は北部九州における弥生時代前期の土器編年の標準とされてきた。今回、図らずも環濠と弦状濠の一部を再調査することができた。よって、本稿では今回の調査成果をもとに改めて弥生時代前期の土器編年について若干の検討してみたい。

第3章ではあえて型式的な分類は避けて出土状況を中心に報告した。発掘にあたってはそれぞれ発掘の仕方を変えた。弦状濠については日本考古学協会・明治大学の調査方法で実施し、遺物は層位ごとに取り上げた。環濠第1区については主要な遺物はドットを落とし、高さを記録しながら遺物の取り上げを行った。環濠第2区については出土した全ての遺物について位置と高さを記録しながら遺物の取り上げを行った。これらの層位の関係と型式を加味しながら改めて土器編年の検討を行うことにする。なお、破片は濠の掘り直し等による土器の混在を防ぐことができないので、検討の対象はほぼ完形に近く復元できた土器に限った。

第84図は第2区における壺形土器の層位的な分布を示したものである。10個体を対象とした。最も上層から出土したのは第40図に示したII-185、2711、3027、3351、4161、7836の土器群である。この土器は大型品であるが器形がわかる土器がないので破片の分布で示した。第1～3層に出土している。全形がわかる資料はないが口縁部内側が肥厚し、口唇部に刻目を施した土器である。次に出てくる土器は①第43図3456に示した彩文土器である。典型的な板付I式



第84図 環濠第2区出土壺形土器と層位



第85図 環濠第2区出土甕形土器と層位

土器の小型壺である。第2～3層に集中した分布を示す。③は第44図8914に示した土器である。第4層下部～第6層上部に集中して分布する。分布範囲は広く層に沿って広がっている。④は第46図II-8864他に示した土器である。第4層下部～第6層上部に集中して分布する。集中部分は③と④は重なる。⑤は第43図II-7339に示した土器である。第6層の上位から出土している。⑥は第45図II-11342他に示した土器である。第6層に含まれ、層に沿った分布を示している。⑦は第43図II-13065に示した土器である板付I式土器の小型壺である。第6層の下部に出土した。⑧は第45図II-14709に示した土器である。第8層に含まれている。⑨は第45図II-14429に示した土器である。第7層～第8層に含まれている。⑩の土器と集中する部分が重なり合う。相対的には⑨の土器が下位から出土しているが、層間の広がりは⑨の土器が広い。⑪は第45図II-14509に示した土器である。完形で出土した。第7層に含まれる。板付I式土器の典型的な彩文様をもつ小型壺である。

第85図は甕形土器の層的分布を示したものである。上層から下層にかけての出土状況を見ていく。①は第49図II-213に示した土器である。最も上層に含まれる土器である。土層断面図では一部地表に出ているが、これは投影図のためである。第1層～第4層にかけて出土しているが、集中するのは第4層である。板付I式の典型的な甕形土器である。②は第50図にII-5732に示した土器である。第2層下部と第3層に集中して含まれているが第4・6層に点的に分布している。③は第52図II-11066に示した土器である。第2層・第4層に出土しているが、第2層からは1点のみの出土で、他は第4層に集中している。④は第52図II-7906に示した土器である。第4層・第6層に出土しているが、第6層からは1点のみの出土で、他は第4層に集中している。⑤は第53図II-10301に示した土器である。第6層中位に集中して出土している。⑥は第51図II-7145に示した土器である。第4層・第6層・第7層に出土しているが、第4層・第7層からは各1点が出土しているので、他は第6層下部に集中している。層に沿って流れ込んだ状態を示している。⑦は第54図II-11432に示した土器である。第6層下部に集中して出土している。⑧は第53図II-12798に示した土器である。第7層下部に集中して出土している。⑨は第52図II-13198他に示した土器である。⑩の土器と重複して出土している。⑪は第54図II-12761に示した土器である。第6層下部から第7層上部にかけて出土している。⑫は第54図II-13198に示した土器である。第7層中央部に集中して出土している。

以上の壺形土器、甕形土器の出土状況は弥生土器の編年と対比すると層位的に良好な状態を示している。ただし、問題がないわけではない。壺形土器②、甕形土器①はともに板付I式の典型的なものであるが、濠の上部、第4層を中心に集中して出土している。この状況をどう理解するかである。両者は土層断面図でもわかるようにほとんど同じ場所からの出土である。土層断面の中で説明を加えたが、板付の環濠には濠の再掘削が行われた可能性がある。再掘削された排土は土壠上に積み上げられたと理解するのが合理的である。それらが長い年月をかけて再度濠内に流れこんだ時、排土中に含まれていた土器片も同時に流れ込んだと見れば説明できる。表面に出ていなければ土器には磨滅も加わらず、濠内の土器とは区別できない。以上の理由から壺形土器②、甕形土器①を除外して層位的に土器を並べると次のようになる。第8層出土土器は壺形土器⑧、⑨、第7層出土土器は壺形土器⑩、甕形土器⑪、第6層出土土器は壺形土器⑦、⑥、⑤、甕形土器⑤～⑪、第4層出土土器は壺形土器③、④、甕形土器③、④、第2層出土は甕形土器②、第1層出土土器は壺形土器①となる。

環濠第2区における編年は從来の編年観を支持するものである。今後、第3区、弦状濠の資料を含めて検討し、次報告で再論することにする。

報告書抄録

ふりがな	いたづけ							
書名	板付 10							
著者名	環境整備遺構確認調査－環濠の調査－							
卷次	10							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1069集							
編著者名	山崎 純男							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	2010年3月23日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
いたづけいせき 板付遺跡 54次	ふくおかしはかたく 福岡市博多区 いたづけ 板付2丁目	40132	0094	33° 33' 56"	130° 27' 10"	1988.12.1 ～ 1989.3.31	9,300	環境整備
いたづけいせき 板付遺跡 59次	ふくおかしはかたく 福岡市博多区 いたづけ 板付2丁目	40132	0094	33° 33' 56"	130° 27' 10"	1989.4.1 ～ 1989.10.31	9,300	環境整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
板付遺跡 第54・59次	集落	弥生時代	環濠		弥生式土器、石器			

福岡市埋蔵文化財調査報告 第1069集

板付 10

2010年（平成22年）3月23日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印 刷 三栄印刷株式会社